

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(123)

南薩縦貫道(川辺道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)

堂園遺跡B地点
堂園遺跡A地点
(追加調査)

(所在地 南九州市川辺町神殿)

2008年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、主要地方道鹿児島川辺線地域高規格道路南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴って、平成15年から19年度にかけて実施した南九州市（旧川辺町）に所在する堂園遺跡A地点（追加調査分）、堂園遺跡B地点の発掘調査の記録です。

これらの遺跡は、湧水の豊富な鳴野原台地の中央部に位置しています。

堂園遺跡B地点は、縄文時代から中世にかけての長期にわたる遺跡ですが、とりわけ弥生時代から古墳時代にかけての25軒の竪穴住居跡が発見され、当時の集落構成を知るうえに貴重な資料となりました。住居跡の平面形は一般に見られる方形のものと、花弁形といわれる南九州特有のものがありますが、花弁形は今回の発見でこの形態の南への広がりがかかれました。また、A地点では墓が発見されていますが、鹿児島県では同時期の住居と墓がいっしょに発見された例は初めてのことで、その関係が注目されています。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

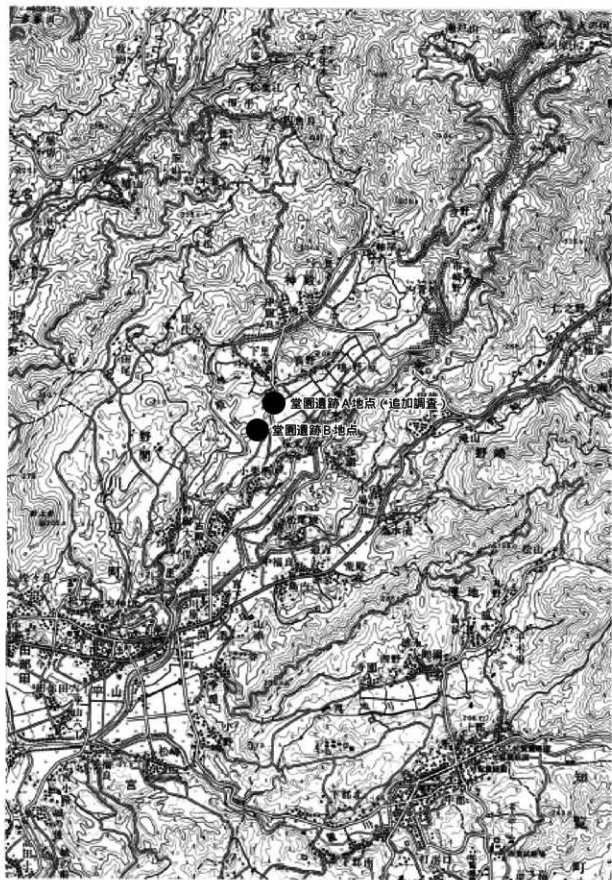
最後に、調査に当たりご協力いただいた南薩地域振興局建設部、南九州市教育委員会、関係各機関及び発掘に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	どうぞのいせきびーちてん, どうぞのいせきえーちてん (ついかちようさ)							
書名	堂園遺跡B地点, 堂園遺跡A地点 (追加調査)							
副書名	南薩縦貫道(川辺道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	II							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	123							
編著者名	八木澤一郎・池畑耕一・吉井秀一郎・馬籠亮道							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原綱文の森2番1号 Tel. 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
堂園遺跡 南九州市 B地点	鹿児島県 南九州市 川辺町 神殿	46223	27-137-0	31° 25' 03"	130° 24' 50"	確認調査 20050203 ～20050226 本調査 20051124 ～20060320 20060522 ～20061127	7,500	南薩縦貫道 (川辺道路) 建設
堂園遺跡 南九州市 A地点	鹿児島県 南九州市 川辺町 神殿	46223	27-137-0	31° 25' 21.2"	130° 24' 58.9"	確認調査 20050203 ～20050226 本調査 20070604 ～20070727	1,000	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
堂園遺跡 B地点	散布地	縄文時代早期 ～晩期		土坑5, 石鏃製作跡 石斧製作跡, 集石遺 構1, 石器集積1基		鏃ノ神A式・貝殻痕尖底・ 船元式・阿高式・南福寺式 ・指宿式・松山式・市来式 ・西平式・丸尾式・黒川式 土器, 石鏃, 石匙, 石錐, 削 器, 尖頭器, スクレイバー, 磨製石斧, 打製石斧, 磨石, 鍛石, くばみ石, 石皿		
	集落跡	弥生時代終末 ～古墳時代初頭		竪穴住居跡25, 掘立 柱建物跡5, 溝状遺 構, 杭痕跡, 柵列状遺 構31, 埋納土器, ビ ット13, 石器製作跡		中津野式土器, 免田式土器, 磨製石鏃, 石庖丁, 砥石, 台石, 小玉(ガラス製, 水晶 製)		
	散布地	古代～中世		古遺跡5, 土坑		土師器, 須恵器, 青磁, 白 磁, 染付, 土師質土器		
堂園遺跡 A地点	散布地	縄文時代晩期				黒川式土器, 石鏃, 打製石 斧		
	散布地	弥生時代中期 ～古墳時代初頭		竪穴住居跡1軒		彩文・吉ヶ崎式・黒髪式土 器		
	散布地	古墳時代				中津野式・成川式土器, 鉄 鏃		
	散布地	古代～中世		遺跡2条		土師器, 須恵器, 青磁		
遺跡 の 概 要	堂園遺跡 の B地点	縄文時代早期から中世までの複合遺跡である。縄文時代は中期の貝殻痕尖底土器, 後期の指宿式土器・市来式土器を主として早期から晩期までの土器・石器が出土し, 土坑・集石などが検出されている。弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては25軒の竪穴住居跡が発見され, 多くの土器・石器が出土している。竪穴住居跡の平面形態は方形が13軒, 花卉形が12軒であるが, 南九州特有の形である花卉形住居は薩摩半島では検出例が少なく当遺跡が分布の南限にあたる。また, 約600m離れたA地点では墓地群が検出されており, 鹿児島県では初めて集落と墓地が近距離の位置で確認されたことになる。変形土器は多くが在地の土器であるが, 丸底のものもあり, 交流のあったことを示している。						
		堂園遺跡 の A地点	弥生時代の竪穴住居跡や, 古代の溝が発見されたが, 土坑墓は見つからず, ここまで墓地群が延びないことがわかった。					



遺跡位置図 (1 : 50,000)

例 言

- 1 本書は、南薩縦貫道（川辺道路）建設に伴う堂園遺跡A地点・堂園遺跡B地点の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南九州市川辺町（旧川辺郡川辺町）神殿に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理事業）は、鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、堂園遺跡B地点が平成17年11月24日から平成18年3月20日までと、平成18年5月22日から11月27日まで、堂園遺跡A地点が平成19年6月4日から平成19年7月27日まで実施した。整理事業・報告書作成は平成19年度に実施した。
- 5 遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、鹿児島県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における実測図の作成、写真の撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじた、平成18年度はスカイサーベイ九州株式会社に委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理事業員の協力を得て八木澤一郎・池畑耕一・吉井秀一郎が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理事業員の協力を得て八木澤・池畑・吉井が行った。
- 11 石器の一部については、実測・トレースを株式会社九州文化財研究所に委託し、監修は長野眞一が行った。その他の石器は整理事業員の協力を得て八木澤・池畑・馬籠が行った。
- 12 遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定・種実同定・樹種同定は株式会社加速器分析研究所に、黒曜石産地推定は有限会社遺物材料研究所に委託した。
- 13 遺物の写真撮影は、西岡勝彦・吉岡康弘が行った。
- 14 本書の執筆・編集は、第I章、第III章、第IV章第1節・第2節・第4節・第6節、第VI章を八木澤が、第II章、第IV章第3節・第5節、第VI章を池畑が、第V章を吉井が第IV章第4節2の一部を馬籠が担当した。
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、堂園遺跡B地点の遺物注記の略号は「ドウB」、堂園遺跡A地点の遺物注記の略号は「ドウA」である。

目 次

巻頭カラー図版

序文

報告書抄録

例言

目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	2
第3節 発掘調査の経過	4
第4節 南篠縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査における民間導人について	6

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 鳴野原台地の発掘調査	11

第Ⅲ章 層位

11

第Ⅳ章 堂岡遺跡B地点の調査

第1節 発掘調査の概要	14
第2節 発掘調査の成果	14
第3節 縄文時代	
1 遺構	15
2 遺物	20
第4節 弥生～古墳時代	
1 遺構	62
2 遺物	163
第5節 古代～中世	
1 遺構	185
2 遺物	186
第6節 分析・同定	190

第V章 堂園遺跡A地点	
第1節 発掘調査の概要と経過	207
第2節 層位	207
第3節 縄文時代	208
第4節 弥生～古墳時代	211
第5節 古代～中世	217
第VI章 調査のまとめ	239

挿 図 目 次

B地点			
第1図 周辺の遺跡分布図	8	第23図 縄文土器 (14)	36
第2図 地層断面図 (1)	12	第24図 縄文土器 (15)	37
第3図 地層断面図 (2)	13	第25図 縄文土器 (16)	39
第4図 縄文時代の遺構配置図	15	第26図 縄文土器 (17)	41
第5図 土坑 (1)	16	第27図 縄文土器 (18)	42
第6図 土坑 (2)	17	第28図 縄文土器 (19)	43
第7図 土坑 (3) 集石・集積遺構	18	第29図 縄文土器 (20)	44
第8図 縄文土器の分布図	19	第30図 石器 (1) 打製石鏃	45
第9図 縄文時代の石器分布図	19	第31図 石器 (2) 打製石鏃	47
第10図 縄文土器 (1)	20	第32図 石器 (3) 打製石鏃	48
第11図 縄文土器 (2)	21	第33図 石器 (4) 石鏃・石匙	49
第12図 縄文土器 (3)	22	第34図 石器 (5) 石匙	50
第13図 縄文土器 (4)	24	第35図 石器 (6) スクレイバー・ 石槍・ピエスエスキュー	51
第14図 縄文土器 (5)	25	第36図 石器 (7) 磨製石斧	52
第15図 縄文土器 (6)	26	第37図 石器 (8) 磨製石斧	53
第16図 縄文土器 (7)	28	第38図 石器 (9) 磨製石斧	54
第17図 縄文土器 (8)	29	第39図 石器 (10) 打製石斧・石核	55
第18図 縄文土器 (9)	31	第40図 石器 (11) 石核・剥片	56
第19図 縄文土器 (10)	32	第41図 石器 (12) 剥片	57
第20図 縄文土器 (11)	33	第42図 石器 (13) 接合資料 (1)	58
第21図 縄文土器 (12)	34	第43図 石器 (14) 接合資料 (2)	59
第22図 縄文土器 (13)	35	第44図 石器 (15) 磨石・蔽石	60

第45図	石器(16)	くほみ石・石皿	61	第75図	8号竪穴住居跡検出・	
第46図	弥生～古墳時代の遺構配置図		62		遺物出土状況	94
第47図	1号竪穴住居跡検出・			第76図	8号竪穴住居跡出土遺物(土器)	95
	遺物出土状況		63	第77図	9号竪穴住居跡遺物出土状況	97
第48図	1号竪穴住居跡出土遺物(土器1)		64	第78図	9号竪穴住居跡出土遺物(土器1)	97
第49図	1号竪穴住居跡出土遺物(土器2)		65	第79図	9号竪穴住居跡検出状況	98
第50図	1号竪穴住居跡出土遺物(土器3)		66	第80図	9号竪穴住居跡出土遺物(土器2)	99
第51図	1号竪穴住居跡出土遺物(土器4)		67	第81図	9号竪穴住居跡出土遺物(石器)	100
第52図	2号竪穴住居跡検出・			第82図	10号竪穴住居跡検出状況	101
	遺物出土状況		69	第83図	10号竪穴住居跡出土遺物(土器)	101
第53図	2号竪穴住居跡出土遺物(土器1)		70	第84図	11号竪穴住居跡検出状況	103
第54図	2号竪穴住居跡出土遺物(土器2)		71	第85図	11号竪穴住居跡出土遺物	
第55図	2号竪穴住居跡出土遺物(土器3)		72		(土器・石器1)	104
第56図	2号竪穴住居跡出土遺物(土器4)		73	第86図	11号竪穴住居跡出土遺物	
第57図	2号竪穴住居跡出土遺物(土器5)		74		(石器2)	105
第58図	2号竪穴住居跡出土遺物(土器6)		75	第87図	12号竪穴住居跡遺物出土状況	107
第59図	2号竪穴住居跡出土遺物(土器7)		76	第88図	12号竪穴住居跡検出状況	108
第60図	2号竪穴住居跡出土遺物(土器8)		77	第89図	12号竪穴住居跡出土遺物	
第61図	3号竪穴住居跡検出・				(土器1)	109
	遺物出土状況		80	第90図	12号竪穴住居跡出土遺物	
第62図	3号竪穴住居跡出土遺物(土器1)		81		(土器2)	110
第63図	3号竪穴住居跡出土遺物(土器2)		82	第91図	12号竪穴住居跡出土遺物	
第64図	3号竪穴住居跡出土遺物(土器3)		83		(土器3・石器)	111
第65図	4号竪穴住居跡検出・			第92図	13号竪穴住居跡検出状況	112
	遺物出土状況		84	第93図	13号竪穴住居跡出土遺物	
第66図	4号竪穴住居跡出土遺物(土器)		85		(土器・石器)	113
第67図	5号竪穴住居跡検出・			第94図	14号竪穴住居跡検出状況	114
	遺物出土状況		87	第95図	14号竪穴住居跡出土遺物(土器)	114
第68図	5号竪穴住居跡出土遺物(土器)		88	第96図	15号竪穴住居跡検出状況	116
第69図	5号竪穴住居跡出土遺物(石器1)		89	第97図	15号竪穴住居跡出土遺物	
第70図	5号竪穴住居跡出土遺物(石器2)		90		(土器・石器)	117
第71図	6号竪穴住居跡検出状況		91	第98図	16号竪穴住居跡検出状況	119
第72図	6号竪穴住居跡出土遺物(土器)		91	第99図	16号竪穴住居跡出土遺物	
第73図	7号竪穴住居跡検出・				(土器・石器)	120
	遺物出土状況		92	第100図	17号竪穴住居跡検出状況	122
第74図	7号竪穴住居跡出土遺物(土器)		93	第101図	17号竪穴住居跡出土遺物(土器)	122

第102図	18号竪穴住居跡検出・ 遺物出土状況	123	第121図	24号竪穴住居跡検出状況	145
第103図	18号竪穴住居跡出土遺物 (土器1)	124	第122図	24号竪穴住居跡出土遺物(土器)	145
第104図	18号竪穴住居跡出土遺物 (土器2)	125	第123図	25号竪穴住居跡検出状況	145
第105図	18号竪穴住居跡出土遺物 (土器3)	127	第124図	25号竪穴住居跡出土遺物(土器)	145
第106図	18号竪穴住居跡出土遺物 (土器4)	128	第125図	掘立柱建物跡位置図	146
第107図	19号竪穴住居跡検出・ 遺物出土状況	130	第126図	掘立柱建物跡検出状況	147
第108図	19号竪穴住居跡出土遺物 (土器1)	131	第127図	埋納ビット遺構配置図	148
第109図	19号竪穴住居跡出土遺物 (土器2)	132	第128図	埋納ビット遺構検出状況・ 埋納土器(1)	149
第110図	19号竪穴住居跡出土遺物 (石器)	133	第129図	埋納ビット遺構検出状況・ 埋納土器(2)	151
第111図	20号竪穴住居跡検出・ 遺物出土状況	135	第130図	埋納ビット遺構検出状況・ 埋納土器(3)	152
第112図	20号竪穴住居跡出土遺物 (土器1)	136	第131図	埋納ビット遺構検出状況・ 埋納土器(4)	154
第113図	20号竪穴住居跡出土遺物 (土器2)	137	第132図	埋納ビット遺構検出状況・ 埋納土器(5)	155
第114図	21号竪穴住居跡検出・ 遺物出土状況	139	第133図	欄列状遺構配置図	156
第115図	21号竪穴住居跡出土遺物 (土器1)	140	第134図	欄列状遺構検出状況	157
第116図	21号竪穴住居跡出土遺物 (土器2)	141	第135図	欄列状遺構小ビット断面状況	158
第117図	22号竪穴住居跡検出状況	142	第136図	溝状遺構配置図	159
第118図	22号竪穴住居跡出土遺物 (土器)	142	第137図	溝状遺構検出状況	161
第119図	23号竪穴住居跡検出状況	143	第138図	溝状遺構出土遺物(土器)	162
第120図	23号竪穴住居跡出土遺物 (土器)	143	第139図	弥生～古墳土器・土製品分布図	163
			第140図	弥生～古墳土器	164
			第141図	弥生～古墳土製品	164
			第142図	弥生～古墳石器・石製品分布図	165
			第143図	弥生～古墳石器(1)	166
			第144図	弥生～古墳石器(2)	167
			第145図	弥生～古墳石器(3)	168
			第146図	弥生～古墳石器(4)	169
			第147図	弥生～古墳石器(5)	170
			第148図	弥生～古墳石器(6)	171
			第149図	弥生～古墳石器(7)	172
			第150図	弥生～古墳石器(8)	173
			第151図	弥生～古墳石器(9)	174

第152図	弥生～古墳石器 (10)	175	第165図	Ⅲ層出土石器実測図・縄文時代	210
第153図	弥生～古墳石器 (11)	176	第166図	Ⅲ層出土石器実測図・縄文時代	210
第154図	弥生～古墳石器 (12)	177	第167図	弥生時代から古墳時代の遺構 配置図及び遺物の出土状況図	211
第155図	弥生～古墳石器 (13)	178	第168図	竪穴住居跡実測図	212
第156図	弥生～古墳石器 (14) ・石製品	181	第169図	住居跡内出土遺物実測図	212
第157図	弥生～古墳鉄製品	183	第170図	Ⅱ層出土遺物実測図・ 弥生～古墳時代(1)	214
第158図	弥生～古墳ガラス・水産製品	184	第171図	Ⅱ層出土遺物実測図・ 弥生～古墳時代(2)	215
第159図	古代以降の遺構配置図	185	第172図	古代以降の遺構配置図	216
第160図	古代の遺構	187	第173図	遺跡実測図	216
第161図	古代・中世の出土遺物	189	第174図	ピット状遺構	216
A 地点			第175図	古代以降の遺物出土状況図	217
第162図	グリッド配置図	208	第176図	古代以降出土遺物	218
第163図	上層断面図	208			
第164図	縄文時代遺物出土状況図 及びコンタ図	209			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡地名表	9	第13表	土器観察表(2)	220
第2表	放射性炭素年代測定結果	192	第14表	土器観察表(3)	221
第3表	暦年較正用年代表	192	第15表	土器観察表(4)	222
第4表	植物遺体同定表	193	第16表	土器観察表(5)	223
第5表	放射性炭素年代測定結果	194	第17表	土器観察表(6)	224
第6表	暦年較正用年代表	195	第18表	土器観察表(7)	225
第7表	各黒曜石の原産地における原石群の 元素比の平均値と標準偏差値	200	第19表	土器観察表(8)	226
第8表	九州西北地域原産地採取原石が各原 石群に同定される割合の百分率	204	第20表	土器観察表(9)	227
第9表	堂園遺跡B地点出土黒曜石製遺物の 元素比組成結果	204	第21表	土器観察表(10)	228
第10表	堂園遺跡B地点出土黒曜石製遺物の 測定結果	204	第22表	土器観察表(11)	229
第11表	堂園遺跡A地点ピット一覧表	217	第23表	土器観察表(12)	230
第12表	土器観察表(1)	219	第24表	土器観察表(13)	231
			第25表	土器観察表(14)	232
			第26表	土器観察表(15)	233
			第27表	土器観察表(16)	234
			第28表	石器観察表(1)	235

第29表 石器観察表(2)	236	第31表 鉄製品・ガラス製品など観察表	238
第30表 石器観察表(3)	237	第32表 石器観察表(4)	238

図 版 目 次

1 地層断面	245	25 埋納土器ピット	269
2 縄文時代の石器分布状況	246	26 欄列状遺構	270
3 縄文時代の土坑	247	27 掘立柱建物	271
4 土器・石器の出土状況	248	28 溝状遺構	272
5 土器・石器の出土状況	249	29 溝状遺構・古道跡	273
6 土器・石器の出土状況	250	30 不定形硬化面	274
7 1号住居跡・2号住居跡	251	31 縄文土器	275
8 3号住居跡・5号住居跡	252	32 縄文土器	276
9 4号住居跡・5号住居跡・6号住居跡	253	33 縄文土器	277
10 6号住居跡・7号住居跡	254	34 縄文土器	278
11 8号住居跡・9号住居跡	255	35 縄文土器	279
12 9号住居跡	256	36 石器	280
13 10号住居跡・11号住居跡・12号住居跡	257	37 石器	281
14 12号住居跡	258	38 弥生～古墳時代の土器	282
15 13号住居跡・14号住居跡・15号住居跡	259	39 弥生～古墳時代の土器	283
16 16号住居跡・17号住居跡	260	40 弥生～古墳時代の土器	284
17 17号住居跡・18号住居跡	261	41 弥生～古墳時代の土器	285
18 18号住居跡・19号住居跡	262	42 弥生～古墳時代の土器	286
19 20号住居跡	263	43 弥生～古墳時代の土器	287
20 21号住居跡・22号住居跡	264	44 弥生～古墳時代の土器	288
21 22号住居跡・23号住居跡	265	45 弥生～古墳時代の石器	289
22 23号住居跡・24号住居跡・25号住居跡	265	46 弥生～古墳時代の石器	290
23 埋納土器ピット	266	47 弥生～古墳時代の石器	291
24 埋納土器ピット	267	48 A地点調査風景・住居跡・古道	292
		49 弥生～古墳時代の土器・石器	293

第 章 発掘調査の経緯

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、県土木部道路建設課（加世田土木事務所）（以下、土木部）は、主要地方道鹿児島川辺線地域高規格道路南薩縦貫道（川辺道路）整備事業で南九州市川辺町（旧川辺郡川辺町）内において計画した事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。これを受けて県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が平成13年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に山神迫遺跡・折戸平遺跡・宮ノ上遺跡・堂園遺跡・鳴野原遺跡・古殿諏訪陣跡・馬場口遺跡が存在することが判明した。遺跡面積は79,600㎡と推定された。

分布調査の結果を受けて、土木部・文化財課・埋文センターの3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当することとした。なお、馬場口遺跡については、町道拡幅工事であるため川辺町教育委員会が確認調査等を担当することとなった。

平成16年2月3日から2月26日まで山神迫遺跡・宮ノ上遺跡・堂園遺跡・鳴野原遺跡・古殿諏訪陣跡において確認調査を実施した結果、宮ノ上遺跡は約2,000㎡の範囲に縄文時代と弥生時代の遺跡が、堂園遺跡は約9,600㎡の範囲に縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺跡が、鳴野原遺跡は約14,000㎡の範囲に縄文時代の遺跡が、古殿諏訪陣跡は約900㎡の範囲に中世の遺跡が残存していることが確認され、山神迫遺跡では包含層の残存が確認できなかった。

そこで土木部・文化財課・埋文センターは再度協議し、現状保存や設計変更が不可能であることから、記録保存のための本調査を実施することになった。

本調査は、平成16年度から埋文センターが担当して開始した。

平成16年度は、平成16年5月6日から平成17年3月18日までの間、宮ノ上遺跡、古殿諏訪陣跡、堂園遺跡A地点、折戸平遺跡、鳴野原遺跡B地点の5遺跡、12,900㎡を対象に調査を実施し、古殿諏訪陣跡・折戸平遺跡については調査を完了した。

平成17年度は、平成17年6月1日から平成18年3月20日までの間、宮ノ上遺跡、堂園遺跡A地点、堂園遺跡B地点、鳴野原遺跡B地点の3遺跡、16,476㎡を対象に調査を実施し、宮ノ上遺跡、堂園遺跡A地点については調査を完了した。

堂園遺跡B地点の本調査は、約7,500㎡を対象に、平成17年11月24日から平成18年3月20日までの間と、平成18年5月22日から平成18年11月27日までの間に実施した。

また、平成19年の6月4日から7月27日まで堂園遺跡A地点の県道付け替えに伴う追加調査を実施した。

第2節 調査の組織

1 平成15年度 確認調査

事業主体	鹿児島県土木部 道路建設課 (加世田土木事務所)		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	木原俊孝
調査企画	県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中文雄
	〃	調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	池畑耕一
	〃	主任文化財主事	中村耕治
調査担当者	〃	主任文化財主事	中村耕治
	〃	文化財主事	元田順子
	〃	文化財主事	岩戸孝夫
	〃	文化財主事	吉岡康弘
	〃	文化財主事	石原田高広
調査事務担当	〃	総務係長	平野浩二
	〃	主事	福山忠一郎

2 平成17年度 緊急発掘調査

事業主体	鹿児島県土木部 道路建設課 (加世田土木事務所)		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	上今常雄
調査企画	県立埋蔵文化財センター	次長	有川昭人
	〃	次長兼調査第一課長	新東晃一
	〃	主任文化財主事	池畑耕一
	〃	兼調査第一課第一調査係長	中村耕治
	〃	主任文化財主事	八木澤一郎
調査担当者	〃	文化財主事	石原田高広
	〃	文化財主事	平野浩二
調査事務担当	〃	主幹兼総務係長	寄井田正秀
	〃	主査	本田道輝
調査指導	鹿児島大学法文学部助教授		

3 平成18年度 緊急発掘調査

事業主体	鹿児島県土木部 道路建設課 (加世田土木事務所)		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	上今常雄

(～H18.7.31)

調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	宮原景信 (H18.8.1～)
調査企画	県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	有川昭人
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東晃
	〃	調査第一課長	池畑耕
	〃	主任文化財主事	
		兼調査第一課第一調査係長	長野真一
調査担当者	〃	文化財主事	八木澤一郎
	〃	文化財主事	久保田昭二
調査事務担当	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主査	蒲地俊一
調査指導	徳島文理大学教授		石野博信

4 平成19年度 緊急発掘調査・報告書作成

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 (南薩地域振興局建設部)		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	県立埋蔵文化財センター	所長	宮原景信
調査企画	県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	平山章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東晃一
	〃	調査第一課長	池畑耕一
	〃	主任文化財主事	
		兼調査第一課第一調査係長	長野真一
調査担当者	〃	第一調査課長	池畑耕一
	〃	文化財主事	八木澤一郎
	〃	文化財主事	吉井秀一郎
	〃	文化財主事	小林晋也
調査事務担当	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主査	蒲地俊一
調査指導	鹿児島大学法文学部准教授		
	愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長		
報告書作成検討委員会	平成19年12月17日		所長 ほか11名
報告書作成指導委員会	平成19年12月13日		新東次長ほか2名
企画担当			久保田 昭二・川口 雅之

第3節 発掘調査の経過

発掘調査の経過は、日誌抄により略述する。

1 平成17年度

11月24日(木) 堂園遺跡B地点発掘調査開始。

11月24日(木)から28日(月)

表土剥ぎ及び環境整備、II層の調査を行う。この間、鳴野原遺跡B地点の調査を併行して行う。

12月1日(木)から27日(火)

古代から中世の古道跡などの調査を行う。弥生時代終末から古墳時代初頭の松木甬式土器、中津野式土器、成川式土器など出土する。この間、鳴野原遺跡B地点の調査を併行して行う。

1月5日(木)から27日(金)

弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡を調査する。この間、鳴野原遺跡B地点の調査を併行して行う。

2月1日(水)から24日(金)

弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡、溝状遺構など検出し、中津野式土器、免田式土器など出土する。縄文時代後期の石器製作跡、土器集中部を検出し、縄文時代後期の指宿式土器、市来式土器、石鏃、フレーク、チップ(鉄石英、黒耀石)など出土する。

2月7日(火) 鹿兒島大学法文学部 木田道輝助教授 現地指導

3月1日(木)から20日(月)

古代から中世の古道跡、及び弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡、溝状遺構などを検出し、中津野式土器、免田式土器など出土する。縄文時代後期の石鏃製作跡及び土器集中部を検出し、指宿式土器、市来式土器、石鏃、フレーク、チップなど出土する。遺構実測委託終了。

3月20日(月) 平成17年度発掘調査終了。

2 平成18年度

5月22日(月) 平成18年度発掘調査開始。

5月22日(月)から26日(金) 環境整備、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡の調査を行う。

6月1日(木)から28日(金)

古代の古道跡を検出する。弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡の調査を行い、溝状遺構、杭痕跡、柵列状遺構、ピットなど検出する。松木甬式土器、中津野式土器、磨製石鏃、鉄製品、鉄鏃等。ガラス製及び水晶製小玉など出土する。

7月3日(月)から28日(金)

弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡の調査を行い、溝状遺構、杭痕跡、ピット、埋納土器ピットを検出し、松木甬式土器、中津野式土器、ガラス製小玉など出土する。縄文時代中期から後期の石斧製作跡、石鏃製作跡を検出し、春日式土器、指宿式土器、松山式土器、市来式土器、石鏃、石匙、磨製石斧、打製石斧、黒耀石フレーク・チップなど出土する。

7月8日(土) 現地説明会開催 参加者数310名。

7月12日(水) 清水小遺跡見学会 参加者数14名。

7月14日(金) 航空写真撮影実施。

8月1日(火)から28日(月)

弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡の調査を行い、ピットを検出し、松木崗式土器、中津野式土器、砥石、ガラス製小玉など出土する。縄文時代中期から後期の土坑、石斧製作跡、集石遺構を検出し、春日式土器、指宿式土器、松山式土器、市来式土器、石鏃、石匙、磨製石斧、打製石斧、黒耀石フレーク・チップなど出土する。

9月4日(月)から27日(水)

弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡の調査を行い、ピット、掘立柱建物跡、埋納土器ピットを検出し、中津野式土器など出土する。縄文時代中期から後期の石鏃製作跡を検出し、深浦式土器、門線文系土器、指宿式土器、市来式土器、石鏃、石匙、磨製石斧、磨石、石皿、石錐、石製品、フレーク、チップなど出土する。

10月2日(月)から27日(金)

弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡の調査を行い、中津野式土器、ガラス製小玉など出土する。縄文時代中期から後期の土坑、落とし穴、集石遺構、石鏃製作跡を検出し、春日式土器、指宿式土器、石鏃、石匙、尖頭器、スクレイパー、磨製石斧、磨石、石皿、叩石、台石、フレーク、チップなど出土する。

11月1日(水)から27日(月)

弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡の調査を行い、中津野式土器、免田式土器など出土する。縄文時代中期から後期の土坑、落とし穴、石鏃製作跡を検出し、石鏃、石匙、黒耀石フレーク・チップなど出土する。この間、鳴野原遺跡B地点の調査及び鳴野原遺跡A地点の表土剥ぎを併行して行う。

11月20日(月)から21日(火) 徳島文理大学 石野博信教授 現地指導。

11月27日(月) 堂園遺跡B地点発掘調査終了。

3 平成19年度

ア 発掘作業

6月4日(月) 堂園遺跡A地点発掘調査開始。表土剥ぎ、駐車場整備。

6月4日(月)から8日(金)

F-11区では住居跡検出面までの埋土を撤去し、F-9区から12区ではⅡ層の調査を行う。また、作業環境の整備と発掘道具を搬入する。

6月11日(月)から15日(金)

F・G-11区から14区では旧道硬化面(現道供用前)を撤去する。ベルトコンベア設置。豪雨のため土砂が流入する。

6月18日(月)から22日(金)、25日(月)から28日(木)

F・G-10区から12区ではⅢ層の調査を行う。F・G-12区から14区ではⅡ、Ⅲ層遺物出土状況の写真撮影、遺物の取り上げを行う。豪雨に備え土砂流入対策を施す。

7月2日(月)から6日(金)

G-8、10区では先行トレンチのⅡ層遺物出土状況の写真撮影、遺物の取り上げを行う。

7月9日(月)から13日(金)、7月17日(火)から20日(金)

F、G-8区から10区、12区から14区ではⅢ層調査を、F-12区では遺物の取り上げ、Ⅱ層遺物出土状況及び住居跡検出状況の写真撮影を行う。G-13、14区ではⅢ層上面遺物出土状況の写

真撮影を、G-8区から10区では先行トレンチのⅢ層上面の出土状況写真撮影を行う。旧道硬化面（現道供用前）を撤去する。

7月23日(月)から27日(金)

F-12・13区では作居跡を完掘し、断面実測及び写真撮影を、F・G-8区から11区及びF・G-13・14区ではⅡ層調査、溝跡の平板実測、Ⅱ層遺物の取り上げを、F、G-11区から13区では検出したピット状遺構の調査を行う。F・G-14区では南朝戦面土層断面図を作成し、F・G-8区から13区ではⅢ層のピット状遺構を調査（平載、写真撮影、実測、完掘）し、コンタ図を作成する。

7月27日(金) 学園遺跡A地点発掘調査終了。

イ 整理・報告書作成作業

平成19年4月9日(月)から平成20年3月31日(月)

学園遺跡B地点及び学園遺跡A地点の2地点について県立埋蔵文化財センター内において整理・報告書作成作業を実施し、平成20年3月末埋蔵文化財発掘調査報告書を発行した。

遺物指導

平成19年11月9日(金) 鹿児島大学法文学部 木田道輝准教授

11月19日(月) 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター 村上恭通センター長

平成20年1月9日(水) 入札

第4節 南薩縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査における民間導入について

平成15年度に実施した確認調査の結果に基づき、平成16年3月に、土木部・文化財課・埋文センターは協議を行った。

その結果、本調査に当たっては、調査期間を短縮し、事業の円滑な実施を図るために、埋文センターと加世田土木事務所との間で覚書を取り交わした上、埋文センターの指導の下、発掘調査作業は委託方式とし、民間業者を活用することとした。

その業務区分は、埋文センターの行う業務としては、機械掘削・プレハブ借上等（レンタルカー賃借、ベルトコンベア等賃借）委託契約の締結、発掘調査についての指導総括及び工程管理ほか4項目について、加世田土木事務所を行う業務としては、労務・労務管理及び測量委託契約の締結ほか5項目について、受託者の行う業務としてはプレハブ借上等（ハウス備品・光熱水費を含む）委託契約の締結、埋蔵文化財の発掘作業業務ほか5項目について行うこととした。

また、埋蔵文化財発掘調査（以下、発掘調査）は、「埋蔵文化財発掘調査作業要領」を定め、実施した。発掘調査体制は、埋文センター所長が選任した「指導員」、加世田土木事務所所長が選任した「監督員」、受託者が定めた主任技術者、調査員、発掘作業員等で構成され、発掘調査の指導業務は指導員が、総括業務は監督員が行うこととし、業務内容の細目、発掘調査の作業要領、発掘調査の進め方について細目を定めた。さらに、測量及び図化等について「トータルステーションについて」を定めた。

以上の項目について、平成16年度、平成17年度及び平成18年度に埋文センターと加世田土木事務所との間で覚書を取り交わした上、加世田土木事務所の入札の下、平成16年度、平成17年度、平成18年度とも新和技術コンサルタント株式会社が落札し、発掘作業業務を受託した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

堂園遺跡は鹿児島県南九州市（旧川辺郡）川辺町大字神殿字堂園堀及び字瀬戸口に所在する。

遺跡の所在する川辺町は、川辺郡の北側中央部に位置し、薩摩半島のほぼ中央部にあたり、南東は南九州市知覧町、南は枕崎市、北西は南さつま市（旧加世田市・日置郡金峰町）、北東は鹿児島市と接している。また、町内を鹿児島市と枕崎市を結ぶ国道225号線が通り、主要地方道が知覧町・南さつま市へと通じている、薩摩半島における交通の要衝である。

川辺地方の地形の特徴としては、四方を400～500m級の山々に囲まれる盆地状の地形を呈し、東側にある南北へ連なる山並みから西側へ緩やかに下降傾斜しながら吹上浜へと続く地形をなしている。また、南薩地方の代表的な一級河川である万之瀬川は、川辺町北部で清水川、野崎川と合流し、さらに神殿川・小野川（麓川）・高田川（永里川）などをあわせて、この盆地の中央を流れ、田代で山を貫いて、吹上浜へ向かって西流し、東シナ海へ注ぎ込んでいる。

また地質的には、薩摩半島全域の基盤をなす四万十層（白亜紀層、この付近では「川辺層群」といわれる）が広く発達し、砂岩や頁岩および砂岩・頁岩互層などを主とし、一部に礫岩や蛇紋岩を挟む地層がみられる。川辺層群の上位に薩摩半島南部、特に旧笠沙町から知覧町南部・頸妹町・指宿市にかけて、「南薩層群」といわれる新第三紀中新世後期に属する地層が発達し、この地域では主に、石英安山岩・輝石安山岩、および凝灰岩・凝灰岩質シルト岩・泥岩などの水成堆積層が広くみられる。また、角閃石安山岩溶岩は点的に分布し、粗粒の角閃石の斑晶がみられ、川辺町小野では、安山岩の崖中から角閃石の結晶がみつけれられている。この「南薩層群」の上部には、溶結凝灰岩からなる阿多火砕流が台地を形成し、この溶結凝灰岩の崖に刻まれたのが「清水磨崖仏」である。その上層には約24,000年前の噴出物であるシラスと呼ばれる始良カルデラの噴出物が厚く堆積し、万之瀬川の本支流により開析されて、現在のような地形となっている。シラスの上には鬼界カルデラの6400年前の噴出物であるアカホヤや、開聞岳噴出物のコラなどが堆積している。

堂園遺跡は、神殿川と万之瀬川に挟まれた標高約110～140mの鳴野原台地中央部北西端に立地する。現在は県道により、宮ノ上遺跡がある丘陵地の南側斜面の裾部付近と、南西側斜面つけ根に二分されている。北側をA地点、南側をB地点と呼称している。西側は神殿川の流れる低地へ急傾斜で降っており、B地点は東側に南へ開口する浅い谷がある。標高は約125mである。

第2節 歴史的環境

先史時代の遺跡は、川辺町内では万之瀬川の周辺台地に点在する。

旧石器時代では当遺跡に隣接する宮ノ上遺跡で、近くにある頁岩を母岩とするナイフ形石器の製作跡が見つかっており、原産地遺跡として注目されている。津フジ・背野平・上桑持野・萩久保遺跡でもナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器などが出土しており、背野平遺跡ではA T直後の礫群が7基発見されている。細石器文化期も宮ノ上遺跡や背野平遺跡、上桑持野遺跡などで細石刃や細石刃核が出土しており、前の時期に比べて広がりを見せている。



第1図 周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	平野上	川辺町神殿平野上	台地	古墳	成川式	
2	山神下	川辺町神殿山神下	台地	古墳	成川式	
3	山神迫	川辺町神殿山神迫	台地	古墳	成川式	
4	上五反田	川辺町神殿上五反田	台地	古墳	成川式	
5	折戸平	川辺町神殿折戸平	台地	縄文	縄文土器	
6	高船	川辺町神殿高船	台地	弥生	弥生土器片散布	旧名「上ノ段中須」 「地ノ目」を併合
7	高船山頂	川辺町神殿高船	山頂緩斜面	縄文(早)	集石・前平式	
8	内青折	川辺町清水内青折	台地	古墳	成川式	
9	萩久保	川辺町神殿萩久保	台地	旧石器・縄文(早)	ナイフ形石器・吉田式・前平式・石坂式	
10	中之平	川辺町清水中之平	台地	古墳	成川式	
11	内青折城跡	川辺町清水池ノ谷	台地	平安～中世		
12	上ノ原	川辺町神殿上ノ原	台地	古墳	成川式	
13	神殿小上	川辺町神殿小学校上	扇状地	古墳	成川式	
14	法師原	川辺町神殿法師原	台地	縄文・弥生	弥生土器	
15	大蔵	川辺町神殿大蔵	山麓	縄文	土器片散布	消失
16	宮ノ上	川辺町神殿宮ノ上	丘陵	旧石器・縄文(早・後)	ナイフ形石器・細石刃核・前平式・指宿式	
17	堂園	川辺町神殿	台地	縄文(中・後・晩)・弥生(中・後)・古墳・古代・中世	集石・集落跡・土坑墓・道跡・深浦式・指宿式・黒川式・山ノ口式・黒髪式・松木園式・中津野式・土師器・鉄器	本報告書 埋せ報 108
18	鳴野原	川辺町神殿鳴野原	台地	縄文(早)	石坂式・塞ノ神式・石磨・磨製石斧・磨石・砥石	埋せ報 47
19	中須	川辺町神殿中須	台地	古墳	成川式	
20	横堀	川辺町神殿横堀	台地	古墳	成川式	
21	馬渡	川辺町清水馬渡	台地	縄文	土器片散布	平成12年 確認調査
22	黒葛木ヶ迫	川辺町清水黒葛木ヶ迫	台地	弥生	土器片散布	
23	尾立	川辺町清水尾立	台地	弥生	弥生土器片散布	
24	田代	川辺町田代小学校上	山麓緩斜面	縄文(早)	前平式	
25	飯集	川辺町清水飯集	山麓傾斜面	縄文・古墳・古代	縄文土器・成川式・須恵器	
26	東ヶ迫	川辺町清水東ヶ迫	台地	縄文・古墳		
27	水場田	川辺町清水水場田	台地	縄文		
28	東依作野	川辺町野崎東依作野	丘陵	縄文(早)	押型文	
29	雲朝寺跡	川辺町清水桜元	低地			
30	桜馬場	川辺町清水桜馬場	低地	古墳～中世(鎌倉)	成川式・青磁・白磁	
31	川辺氏居館跡	川辺町清水小栗栖	低地	中世		
32	宝光寺跡	川辺町清水宇都	山麓緩斜面	中世(鎌倉)～近世	礎石一部残存	(町)昭和33.6
33	北中横	川辺町清水旧北中横	低地	平安～中世(鎌倉)	土師器・青磁・白磁	
34	古殿諏訪陣跡	川辺町古殿内陣	台地	古墳・古代・中世	成川式・土師器・須恵器・青磁・白磁・染付	埋せ報108
35	松尾城跡	川辺町野崎松尾城	丘陵	中世(鎌倉)	空堀・歯輪	
36	野崎陣跡	川辺町野崎陣平	台地	中世		
37	馬場田	川辺町両添	台地	中世		
38	大田尾	川辺町清水大田尾	台地	縄文(後)	市来式	
39	草葉	川辺町野間草葉ほか	台地	縄文～古墳		
40	野間陣之尾城跡	川辺町野間陣之尾	台地	中世		
41	平山城跡	川辺町平山天神	河岸段丘	中世・近世	青磁・染付	町埋文報1
42	厚地城跡	知覧町厚地堀之内	山麓緩斜面	中世	空堀	
43	野石城跡	知覧町厚地野石	山麓緩斜面	中世?	字名	
44	山石城跡	知覧町厚地宮谷山	山頂緩斜面	古代?		

第1表 周辺の遺跡地名表

縄文時代になると、遺跡数やその内容においても共に豊富となり、当時の人びとが積極的に活動していたことが明らかになりつつある。上山田の鷹爪野遺跡では縄文時代草創期の舟形配石や隆帯文土器などが発見され、早期の前平式土器とともに多くの磨製石鏃が出土する8軒の竪穴住居跡が発見されるなど先進的技術をもつ特長ある遺跡である。宮ノ上遺跡、永田の永田西遺跡、清水の小崎遺跡、神殿の荻久保遺跡、上山田の背野平遺跡など縄文時代早期に属する遺跡数は多く、特に小崎遺跡では押形文土器とともに貝殻や獣骨なども発見されていることが注目できる。永田の寺山遺跡では前平式土器などとともに5基の集石や土坑などが発見されており、尾根の端部にある定住集落が想定できる。背野平遺跡でも志風顔式、加栗山式、吉田式、室ノ神式土器などとともに5基の集石が発見されている。荒多・上桑持野・鳴野原B遺跡は室ノ神式土器を主体とする遺跡である。田部田の廻り淵遺跡や、田代の南田代・古市遺跡などでは曾畑式土器や深浦式土器などの縄文時代前・中期に属する遺物が多量に出土しており、南田代遺跡では球状耳飾も出土している。縄文時代後期の指宿式土器や市来式土器などが出土した上山田の田中堀遺跡では、貯蔵穴と考えられる土坑が検出されている。下山田の答石遺跡では縄文時代後期後半の御領式土器が採集されている。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、万之瀬川や殿川・大谷川などの河川流域にあたる台地から発見されており、下山田の堂山遺跡などでは弥生時代前期の土器も採集されている。古市遺跡では弥生時代前期の竪穴住居跡2軒が発見されている。永田の寺山遺跡では多くの土器などが含まれる弥生時代中期前半のV字溝が2条並行して検出されており、万之瀬川を眼前に望む台地端に環壕集落が存在する可能性がある。出土品には丹塗土器など北九州系の土器も多く含まれており、広範囲の交流がうかがえる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのムラや墓が、当報告書で記載されているように堂園遺跡では発見されている。

古墳時代になると遺跡数が増加して、各地に存在している。下山田の塘池周辺では塘池上遺跡・答石遺跡などで調査が行われ、台地上で竪穴住居跡や、V字状の溝状遺構、土器が多く共存する土坑墓などが発見されている。古市遺跡では竪穴住居跡5軒が検出された。

『倭名類聚抄』によると、古代には、「加波乃部」と調じられる河辺郡に属し、稲積・川上の2郷があったとされる。現在の川辺町は、河辺郡川上郷と阿多郡嘉例郷に属していたと考えられている。下山田の上桑持野遺跡では深いV字溝が検出されており、この時期まで集落の区切りをする溝状遺構の存在することがわかっていく。隣の知覧町では歳骨器も発見されており、仏教文化がこのあたりでも広まっていたらしいことがうかがえる。

平安時代末期から鎌倉時代中期にかけて、河辺郡は府領社と公領とからなる。地頭は島津忠久が、府領社下司・公領郡司は河辺氏の子孫である河辺道綱(通綱)が務めている。府領社は現在の宮に鎮座する飯倉神社の前身である。鎌倉時代末期に北条得宗領になったあと、南北朝期には地頭職が再び島津氏に与えられた。

その後、島津忠良が三州統一の基礎をつくり、以後川辺も直轄地となった。このころの山城は平山の平山城を中心として、松尾城・山石城・野間陣之尾城などが周辺にある。平山城では発掘調査によって14世紀末から16世紀頃の建物跡・壕などが発見されている。また、清水にある唐崖仏は崖面に中世から近代にかけての仏像や仏塔・梵字などの彫り物が多く刻まれている。万之瀬川流域は南薩の米どころであり、江戸時代には多くの堰や川水路が造られて水田が開かれた。

第3節 鳴野原台地の発掘調査

鳴野原台地は万之瀬川と神殿川に挟まれた北東から南西方向へ延びる幅500m～600m、長さ3.5kmほどの細長い台地である。北東隅付近は両側から山が迫って狭くなり、南西端は神殿川が万之瀬川へ合流して狭くくびれている。標高は北東から南西へ向かって下降しており、110cmほどから140mほどまでである。基盤は頁岩・溶結凝灰岩で、その上にシラスの乗ったシラス台地である。

鳴野原台地での遺跡は主として台地の西側に集中しており、旧石器時代から中世までいくつかの遺跡が知られている。これまで1988～1990年に川辺ゴルフクラブ造成計画に伴い、萩久保遺跡と宮ノ上遺跡の確認調査が行われ、また、2000年には県道鹿兒島川辺線の改良工事に伴い、鳴野原遺跡が調査された。

萩久保遺跡ではシルト岩・砂岩・頁岩製のナイフ形石器・削器・剥片など旧石器時代の石器や、吉田式・前平式・石板式・塞ノ神式・平楕式・押型文土器などの縄文時代早期の土器が出土している。宮ノ上遺跡では砂岩やシルト岩製の縦長剥片など多くの剥片・チップや石核などの旧石器時代の石器、縄文時代早期・後期の土器などが出土した。鳴野原遺跡では縄文時代早期の石板式土器とともに石鏃・磨製石斧・磨石・砥石などが出土している。

2001年からは川辺道路の建設に伴って宮ノ上・堂園・鳴野原・古殿諏訪跡遺跡などで発掘調査が行われており、随時報告書も刊行されている。

雨宮瑞生・上村純「旧石器時代の遺跡」川辺町郷土史・追補 1997 川辺町

堂込秀人「鳴野原遺跡」〔鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書〕47) 2002

第三章 層位

堂園遺跡における基本層序は、下記の通りである。層位については、南薩地方の層位とはほぼ同様である。

層	灰黒色土
a層	黒色土
b層	黒茶褐色土
c層	茶褐色土
d層	黒褐色土(ハマス含)
層	黄茶褐色火山灰 (アカホヤ火山灰軽石)
層	暗褐色土
層	黒褐色硬質土
層	黄褐色火山灰 (薩摩火山灰)

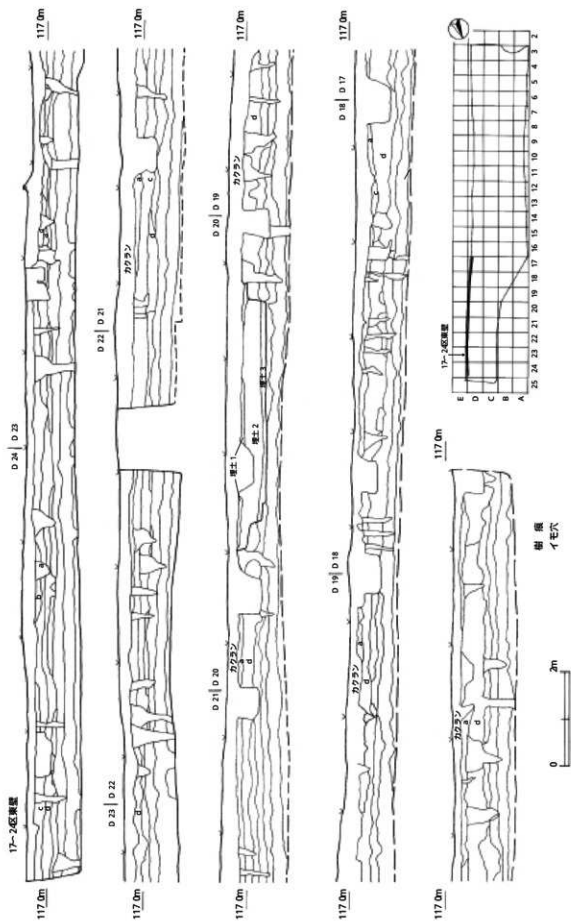
I層：耕作土である。

II層：堂園遺跡B地点ではI層に細分される。IIa層は古代～中世、IIb層は弥生時代～古墳時代、IIc～IId層は縄文時代中期～後期の遺物包含層である。IIb層上面において堅穴住居跡を検出した。

III層：鬼界カルデラ起源の通称「アカホヤ火山灰」である。

IV層・V層：無遺物層である。隣接する台地に所在する鳴野原遺跡A地点では前平式土器が出土した。

VI層：層の下部は軽石である。11,500年前の桜島起源の火山灰で通称「薩摩火山灰」と呼ばれる。



第3図 地層断面図(2)

第Ⅳ章 堂園遺跡B地点の調査

第1節 発掘調査の概要

平成15年度に実施した確認調査では、11本のトレンチを設定して、96㎡について調査した結果、7,500㎡の範囲において縄文時代後期から晩期にかけての遺物包含層、弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層、古代の遺物包含層の、合計3枚の包含層が良好に存在することを確認した。そこで、平成17年度及び平成18年度に行った緊急発掘調査では、公共座標点(X:175070.000, Y:55320.000)を基準(J/K-0/1区)として、地理学系グリッドを270°右回りに回転させて、10m四方のグリッドを設定した。北側から南側に向けて1区から18区と名付け、また東側から西側に向けてA区からK区と名付け、調査を開始した。

第2節 発掘調査の成果

調査の成果としては、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、杭痕跡、欄状遺構、ピット、埋納土器ピットなどの遺構や、中津野式土器や免田式土器等の甕・壺・鉢形土器、砥石や台石等の石器、ガラス製や水晶製の小玉、鉄鏃などの遺物が発見された。また、縄文時代中期から後期の時期の土坑や落とし穴、数多くの石鏃製作跡等の遺構や、深浦式土器や市来式土器等の深鉢、石鏃、磨製石斧、磨石、石皿等の石器などの遺物が発見された。平成19年1月30日に土木部へ引き渡した。

第3節 縄文時代

1 遺構

縄文時代のもものと想定される遺構に土坑5基、集石1基、石器集積1基などがあるが、いずれも土器が出土していないため時期は不明である。

1) 土坑

調査時点ではここに紹介した以外にも土坑の可能性のあるものとしていくつかの番号を記したが、整理作業で検討した結果、はっきりしたものは5基であった。

① 1号 (旧9号)

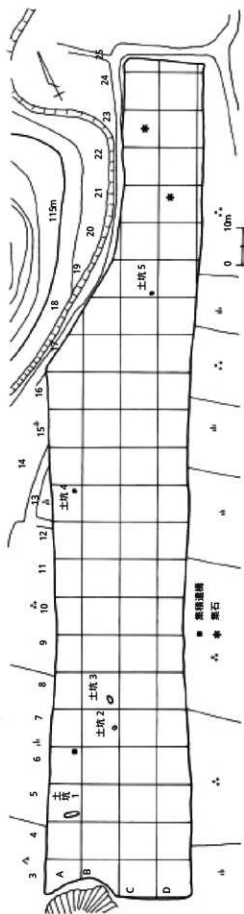
A5区のⅢb層上面で検出した、長さ約4.5m、幅1.5～2mの長方形をした土坑であるが、長軸の中央に高まりがあることから長さ2.4mのものと、2.0mのものの2基が切りあっている可能性がある。2基と考えれば、深さは西側が約80cm、東側が約100cmである。それぞれ断面形は逆台形、あるいはU字形を呈しているが、途中に段をもっており不整形である。周辺に直径が20～40cm、深さが20～80cmの柱穴が20前後あり、この土坑を囲んでいるようにもみえるが、深さ等が不揃いであり、関連は不明である。埋土は粘質土で5層に分かれ、上から暗茶褐色、明黒茶褐色、暗黄茶褐色、暗茶褐色、茶褐色を呈する。それぞれの土には黄色バミスや白色石粒が含まれており、両側から落ちている。

② 2号 (旧6号)

B7区のⅢ層上面で検出した長さ約1.5m、幅0.4～0.6mの長方形をした土坑で、深さは0.55mある。底まで段をもって落ちており、底には長軸に沿って直径が25～30cm、深さが25～50cmある3か所の柱穴状をした落ち込みがある。埋土は両側から落ちて、2層に分かれ、上が暗黒茶褐色、下が暗黄茶褐色シルト質土である。

③ 3号 (旧7号)

B8区のⅢ層上面で検出した長径1.65m、短径0.65mのだ円形をした土坑で、深さは約40cmある。南側に段があり、底面には直径20～30cm、



第4図 縄文時代の遺構配置図

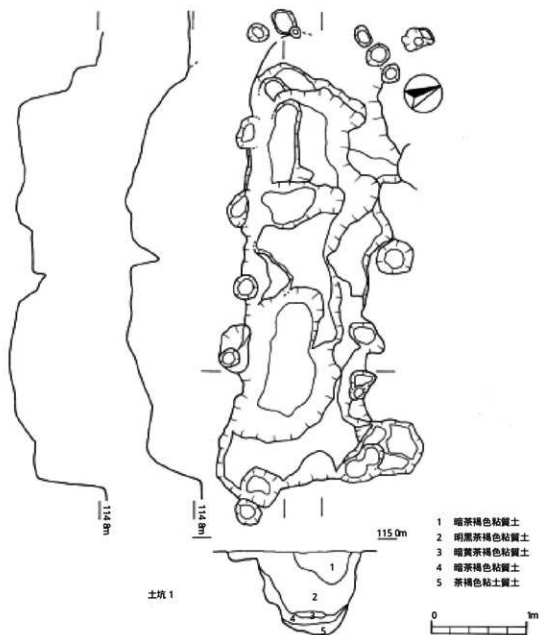
深さ30～60cmの柱穴が5ある。埋土は両側から落ち込んでおり、上から暗茶褐色、暗黄褐色、暗茶褐色、黄褐色のパミスを多く含む粘質土である。

④4号（旧5号）

A13区のⅡd層上面で検出した長径1.7m、短径1.2mの隅丸方形をした土坑で、深さは約60cmある。側面はいくつかの段がある。埋土は下に1～2の浅い埋土があり、その上に黒茶褐色シルト質土が厚く堆積している。下の埋土は上にパミスを含む暗黄茶褐色土、下に黄茶褐色土がある。

⑤5号（旧4号）

C19区のⅡd層上面で検出した直径75～85cmほどの略円形をした土坑で、深さは15cmほどの浅いものである。



第5図 土坑(1)

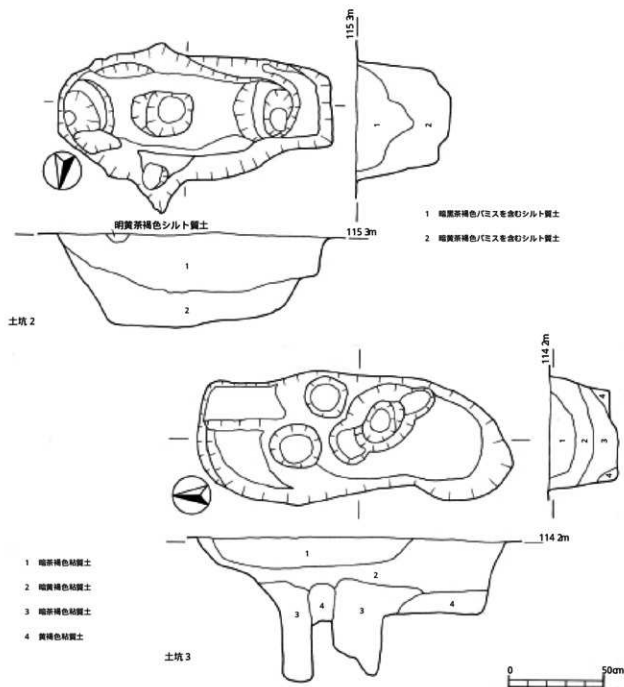
2) 集石

各所で数個の石からなる集石はいくつかみられるが、多くの石からなる集石がC23区のII d層上面で検出された。ほぼ70cm四方に22個の円礫が同一レベルで広がっており、その周辺に2個の礫もある。炉跡の基礎として用いたような大きな石等はなく、集石炉に用いた石の排除場と思われる。

D21区II d層でも長さ70cmの範囲に同一レベル上で9個の砂岩円礫が並んでいる。いずれの礫も顕著に焼けた痕はないが、6個の礫は破砕痕がある。掘り込みや炭化物などはない。

3) 集積遺構

大型剥片が4点まとまっている遺構がA6区のII d層で検出された。2点は重なり、あと1点が

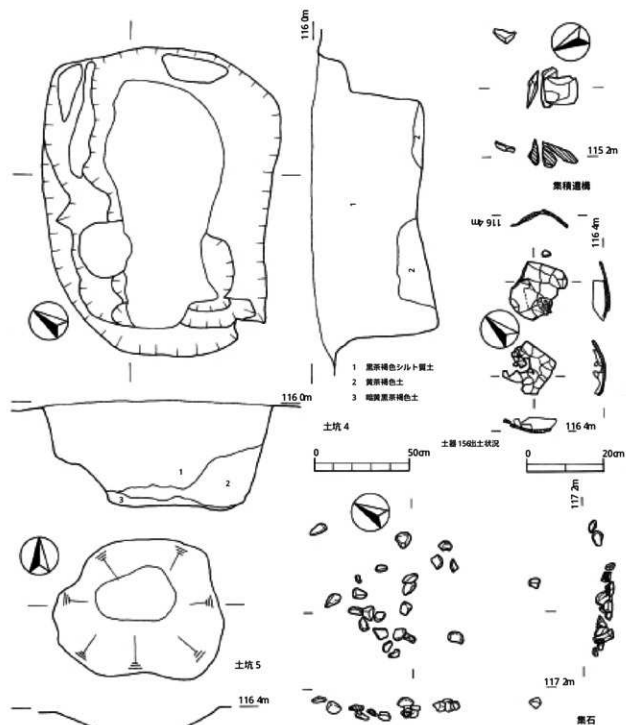


第6図 土坑(2)

隣接し、残り1点も10cmほど離れて同一レベルにある。

4) 土器や石器の出土状況

縄文土器の出土量はそれほど多くないが、同一個体が集中して出土する場がC3区、A6区、C15区、C16区、D18区、D25区などにみられる。また、剥片・チップも広い範囲に散在しているが、B5区、C6区、A6区、B9区、B12区、A14区、B・C16区などでは特に集中して出土している。C11区・C23区などの集中場は磨製石斧製作跡かと思われる。



第7図 土坑(3)・集石・集積遺構

2 遺物

縄文時代の遺物は早期から晩期までの土器・土製品・石器が出土している。

1) 土器

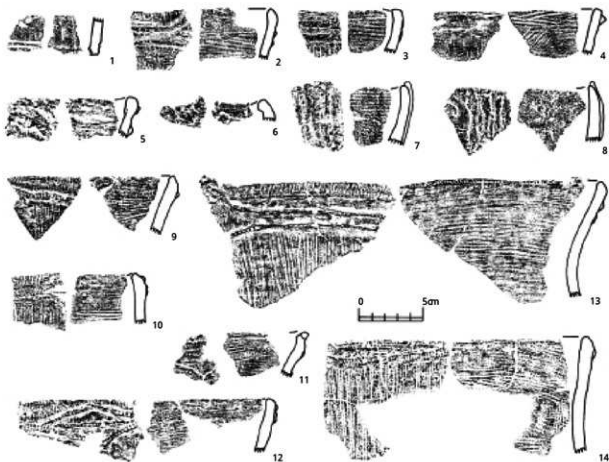
早期・中期・後期・晩期の縄文土器が出土しているが、早期と晩期の土器はほとんどなく、中期・後期のものが多い。これらの土器は形態・文様などから多くの種類に分けられる。ここでは17種に分け、それぞれ1類から17類と仮称する。

① 1類 (第10図1, 早期: 寒ノ神A式土器)

B7区にある6号住居跡内で小破片が1点出土している。円筒形を呈する平底の深鉢で、底近くの外面に二条の凹線がみられる。内外面ともヘラナデで仕上げているが、特に外面・底部はていねいに仕上げている。明茶褐色を呈し、火山ガラス・茶色石などのこまかい石を含む細砂質土を用いている。焼成度は普通である。

② 2類 (第10図～第13図 2～37, 中期: 貝殻条痕尖底土器)

内外とも貝殻条痕あるいはヘラナデで調整し、尖底となる深鉢で、外面に突帯の貼り付くものと、付かないものがある。突帯にはヘラ刻みのもの、刺突文のあるものがある。外面の貝殻条痕は、多くが縦方向に施されている。口縁部はまっすぐ伸びるものと、内反するものがあるが、内反するものの中にはキャリパー形を呈するものもある。10～13区付近で多く出土している。

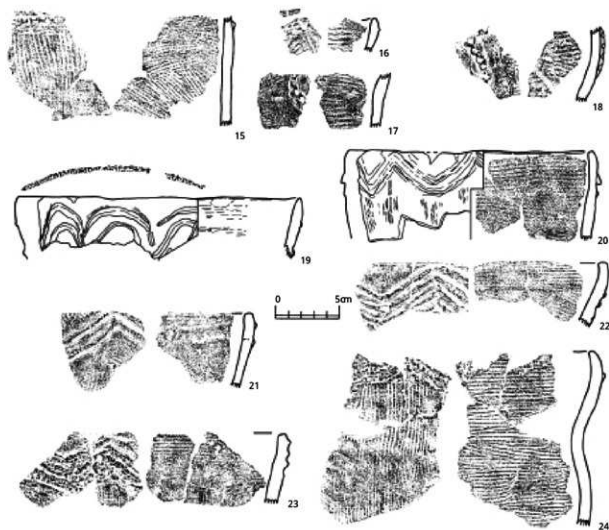


第10図 縄文土器(1)

2～24は三角突帯のあるものである。

2～8は口縁が内反するものが多いが、4・5はほぼまっすぐ伸びている。端部は丸くおさまっているが、3は矩形となっている。波状口縁のものが多い。突帯は三角突帯が多いが、3は低い矩形のものである。一条のものと、二条のものがあるが、7・8は縦方向に施されている。5の口縁端は、内面に粘土を貼り付けて肥厚させている。6は波状の突起部外面に粘土塊を貼り付けて肥厚させている。内外とも貝殻条痕のものが多いが、ヘラナデのものもある。

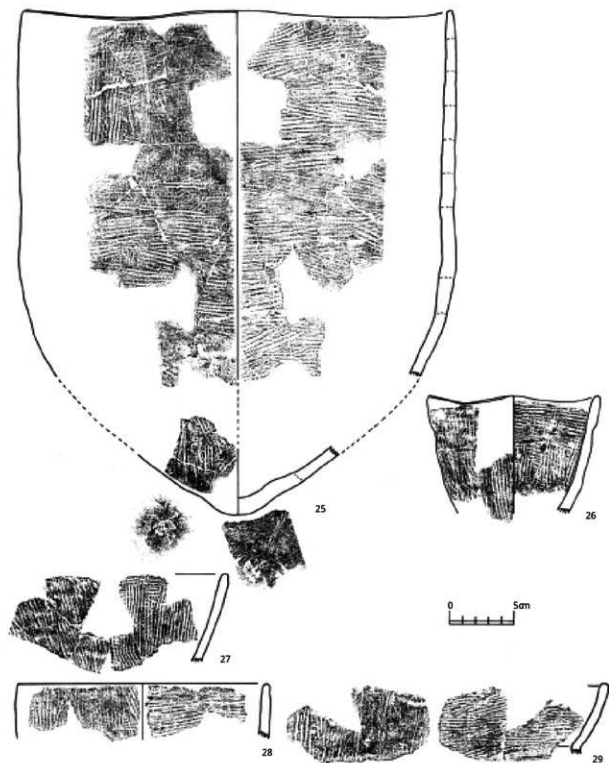
9～15は三角突帯に刻み目のあるものである。これらの外側にある縦方向貝殻条痕は深くはつきりしている。内面の貝殻条痕は横方向、あるいは斜方向である。口縁部はまっすぐ伸びるものが多いが、13はややキャリパー形になっている。9・10は同一個体と思われるが、波状となる口縁で、突起部では一条の突帯が枝状となって二条に分岐している。口縁端にも刻みがある。11の刻みは刺突になっており、突帯は三条になっているが、口縁端の突帯は上へ突出したようになっている。外面剥脱が目立つ。12の突帯も部分的に菱形状に分岐して三条にわかれている。これも外面口縁端にヘラ刻みがある。13は二条の突帯が突起部で広がっているが、外面平坦部に長いヘラ刻み、口唇部に短いヘラ刻みが付されている。



第1図 縄文土器(2)

16～18は貼付突帯の上に太い刺突文の施されるもので、内湾する口縁、外反するもの、キヤリバ一状になるものがある。波状口縁で縦方向の突帯もある。16は口唇部に巻貝の殻頂部による刺突文がある。内外とも貝殻条痕調整だが、外面はあとでヘラナデを施している。

19～24は突帯が山形になるもので、二条突帯のもの（19～22）と四条突帯のもの（23・24）とが



第1図 縄文土器(3)

ある。19は口縁直径が22cmあり、外へまっすぐ伸びる器形をしている。突帯は曲線的になっており、細くなった口唇部にヘラ刻みがある。20の口縁直径は19cmとやや小さく、やや内反きみである。口唇部の一部分にヘラ押圧文があり、外面にはススが付着している。21の突帯には部分的にヘラ押圧文がみられる。22・23の突帯は鋸歯状となり、23の突帯にはヘラ押圧が見られる。24はキャリバー形の口縁をしており、一条の三角突帯が貼り付けられ、その上下に小さな刺突文がみられる。

25～32は突帯のないもので、まっすぐ伸びるもの(25～28)と、キャリバー状になるもの(29～32)とがある。25は口縁直径が33.8cm、高さ約39.7cmで、波状口縁となる。底部は小さな平底風の尖底で、底に木の突の割れたものかと思われる圧痕がみられる。内側の貝殻条痕は上から下まで深い横あるいは斜方向だが、外側は上部が縦方向、下部が横あるいは斜方向になっている。積み上げ痕がよく残っている。B9・10区とC9区周辺に破片となって散らばっているが、完形品と思われる。26は波状口縁となる口縁直径13.5cmほどの小型のもので、口縁部は肥厚している。高さは十数cmと思われる。28は口縁直径が20cmほどと小さい。外面の貝殻条痕は縦方向である。内面は横方向で、口唇部にも部分的に貝殻条痕がみられる。29は波状口縁でキャリバー形を呈しており、頸部内面に稜をもつ。30は口縁直径が31.6cmで、頸部内面に稜をもつ。ややキャリバー形だが、ゆるいカーブである。内外面とも条痕のあとヘラナデがされる。A8区周辺に散らばっていた。31は雑な作りのキャリバー形をしており、波状の突起部は肥厚し、口唇部にヘラ押圧文がみられる。32もキャリバー形で、下部の貝殻条痕は浅くなっている。

33～37は尖底で、幅の広いものと細く立ち上がるものがあり、ヘラナデもあるが、放射状の貝殻条痕が主となる。

③ 3類(第14図 38・39, 中期: 船元式土器)

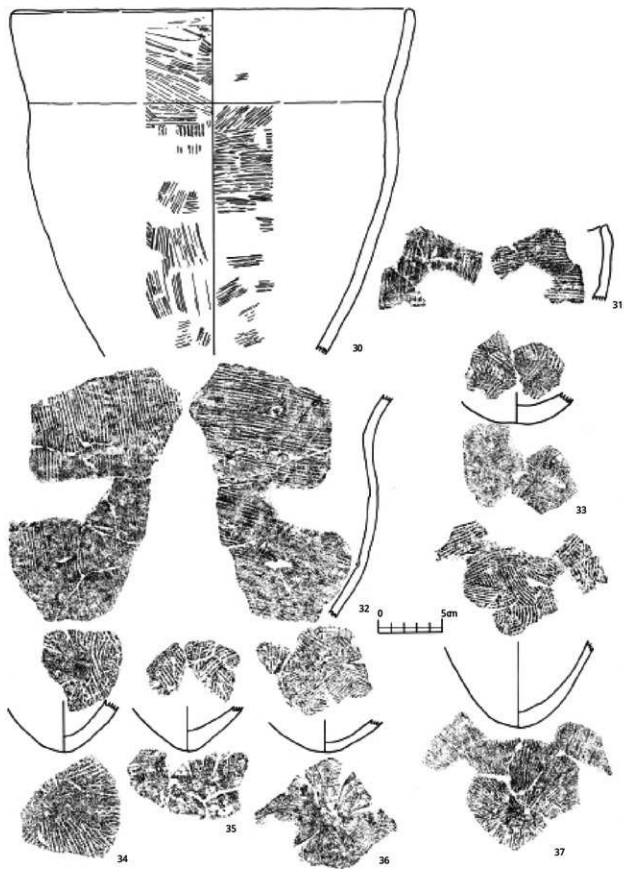
灰色がかった燃糸紋土器で、胴部には三角突帯がみられる。底部は直径が7cmで、上げ底になっているが、端部は平たくなっている。内外ともヘラナデで、外面はその上に縦方向の燃糸紋がみられる。白色石・石英など2～5mm人の細石を多く含む粗砂質土で、在地産土器と胎土が異なる。A3区・B6区などで出土しているが、同一個体と思われる。

④ 4類(第14図 40～43, 中期: 阿高式土器)

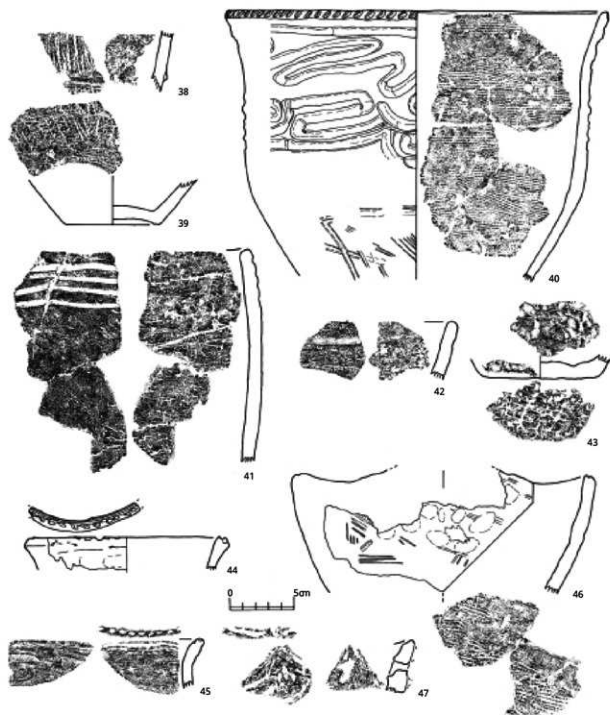
幅広の凹線が施された土器である。40は口縁直径が30cmある深鉢で、外面は粗いヘラナデ、内面は横方向の貝殻条痕で仕上げている。内面は部分的にヘラナデも加えられ、特に下部は貝殻条痕がほとんど残らない。外面は口縁部にヘラ先による刻み目に加えられ、胴部上半にはヘラによる短絡線文様がみられるが、横線とコの字状文となっている。41は波状となる口縁で、上部外面に四条の横線がみられる。42は一条の横線がみられる。43は丸みをもって底に至るもので、外部には、かすかに凹線らしきものがみられる。底には長格子の網代圧痕がみられるが、その後ヘラでナデている。内面もヘラによる押圧ナデである。

⑤ 5類(第14図 44～47, 後期)

口唇部に凹線が巡っているものである。44は口縁部が外反するもので、口縁部直径は16cmと小さい。口縁部が幅広く肥厚しており、口唇部は内面側に細い凹線が巡り、外側に刺突文が並んでいる。内外とも横方向ヘラナデである。45は口縁が強く反るもので、口縁内側に細い凹線が巡っている。口唇部には刺突文がある。46は強く波状となる浅鉢状の器形で、直径は23.8cmほどである。外面は貝殻条痕のあとヘラナデをし、上部には指頭圧痕が顕著に残っている。内面はこまかい貝殻条痕で



第13図 縹文土器(4)



第14図 織文土器(5)

ある。分厚いつくりである。47は波状口縁の突起部で、口唇部にはヘラによる短絡線と押圧文があり、外面には凹線と刺突文がみられる。雑な作りのだ円形の孔が穿たれている。

⑥ 6類(第15図 48~50, 後期)

やや内反ぎみに口縁部へ至る深鉢で、端部近くに凹線がみられる。端部が48・49は方形を呈するのに対して、50は丸みをもっている。48は外面に縦方向の短い凹線があり、口唇部にも斜方向のヘラ押圧文がみられる。49は端部近くに左下がりのヘラ押圧と、その下に凹線がみられる。50は途切

れ途切れに横方向の凹線がみられる。調整はいずれもヘラナデである。

⑦ 7類 (第15図 51, 後期)

やや内反ぎみに端部へ至る土器で、口唇部がやや内側に下がっている。口唇部にはヘラによる押圧文があり、外面には上部に縦方向の二枚貝腹縁による押圧文と、その下に二条のヘラ描き凹線文がある。内外面ともヘラナデ調整である。

⑧ 8類 (第15図 52~55, 後期)

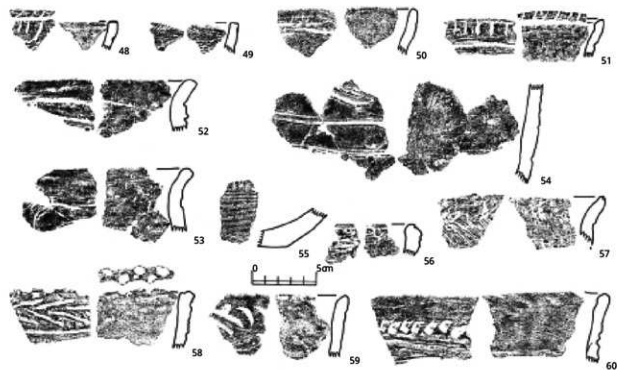
厚さが1cm前後と分厚い土器で、同一個体と思われる。口縁部は端部で外反し、小さな平底となる。上半部には先のとがったすどいヘラによる凹線がみられる。波状となる横線やだ円状文・弧状文からなる。内外ともヘラナデだが、外面がていねいなに対して、内側は粗い部分もある。黒色化した暗茶褐色を早し、7mm大の小石も含まれる火山ガラス・白色石・茶色石などからなる粗い土を用いている。C15区で出土している。

⑨ 9類 (第15図 56~59, 後期: 南福寺式土器)

口縁端がややふくらんで外面に凹線文のある土器である。56は端がやや内反し、外面に三条の凹線文があり、端部内面はやや下がっている。57は雑な作りで、口縁が外反する。ヘラケズリ風のくの字状凹線と、その下に横方向凹線文がある。58は口唇部に内外から押圧文があつくぼんでいる。外面には鋸歯状凹線文と、その下に横方向凹線文がある。59は波状口縁で、三日月形の押圧文が横並びに施されている。

⑩ 10類 (第15図 60, 後期)

外へ開いてまっすぐ伸びる波状口縁の土器で、外面は横並びのコの字状押圧文と、二条の横方向凹線文がみられる。内面は口縁下部に積上げ痕がみられ、横方向の繊維状ハケナデで仕上げている。



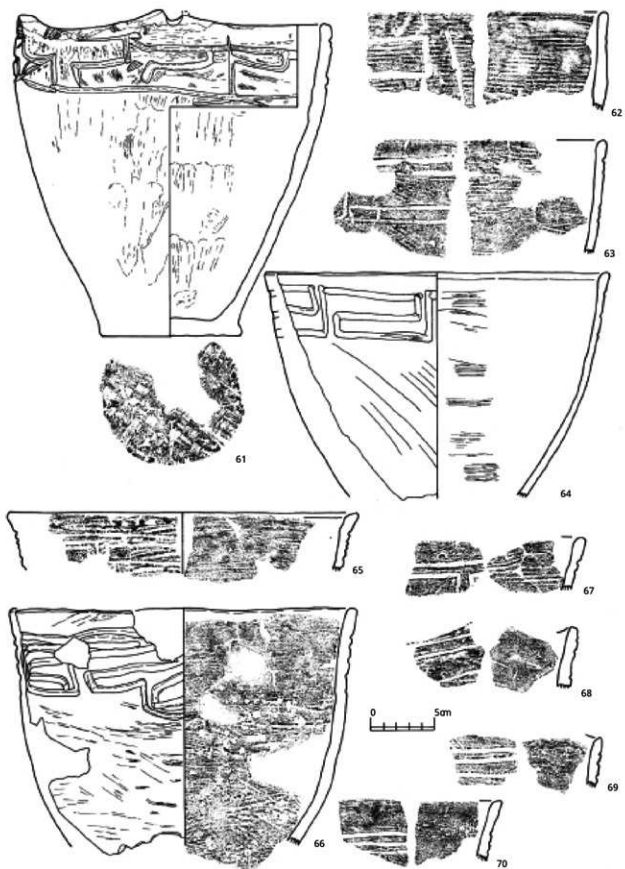
第15図 縄文土器(6)

①11類 (第16図～第24図 61～133, 後期:指宿式土器)

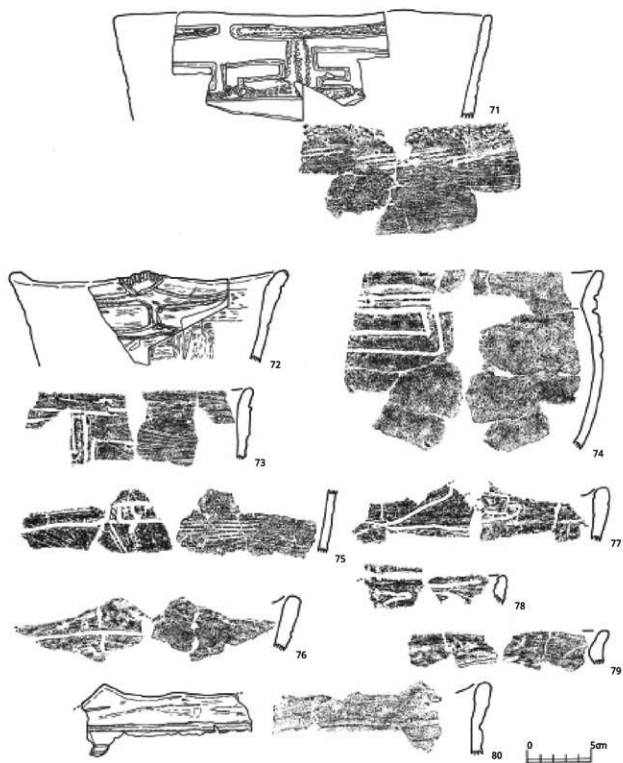
口縁部付近に直線あるいは曲線のヘラ描き文様がある平底の土器である。器種はほとんど深鉢で、台付皿形土器もある。深鉢にはほとんどヘラ描き文様が口縁部付近に施されるが、無文のものもある。有文のものには矩形・鋸歯状のもの・横線などの直線文と、だ円形状などの曲線文とがある。底部はまっすぐ胴部へ伸びるものと、底が外へ張り出すものがあり、底は網代瓦痕や鯨骨瓦痕のあるものとヘラナデのものがある。

61～75が直線の矩形を呈するものである。61は口縁直径が24.5cm、底径が11cm、高さが25cmの波状口縁をした完形品で、C13区で出土している。底から外へ開きながら立ち上がり、口縁部はやや丸みをおびている。口縁端は四か所に山形の稜があり、稜の中央にはヘラによる幅広の押圧文がみられる。口幹部に二枚貝腹縁による一条の押圧文が1か所、ヘラによる二条押圧文が1か所あるが、これは連続性がない。内外とも作りは雑で、表面や口縁端にでこぼこがみられる。内外ともヘラによる縦ナデを主とするが、内面はケズリに近く、内面上部は横方向になっているが、斜方向もある。口縁部にヘラによるし字、横方向・縦方向などの短い凹線がみられ、矩形の文様を呈している。底は網代底で、外へ少し張り出している。62、63は内外とも横方向を主とする貝殻条痕の地文をもつまっすぐ伸びる土器で、その上に62はコの字状と縦方向の凹線が、63は上下二段に矩形文と、それを結ぶ縦線がある。62と同一体と思われる破片はB10区・B11区に集中しているが、A7区・C9区などでも出土している。64は口縁直径が27cmある薄い作りの土器で軽い。口縁端はいくらか厚みを増し、外面はヘラによる斜方向のケズリ、内面は横方向のヘラナデだが、内面の口縁端部ははいねいにナデている。口縁外面には逆し字状・横あるいは縦方向の短絡線で矩形文様が繰り返されている。C14区に集中し、B15区・C15区でも出土している。65は口縁直径が27cmあり、口縁近くで外反している。外面にヘラによる横あるいは縦方向などの凹線で、幅の狭いコの字状文などがくり返されている。66は口縁直径が27cmの丸みをおびた土器で、外面に横あるいは縦方向の凹線によりコの字や桁形などの文様が幅広く描かれている。67～70はまっすぐ伸びる器形をしているが、68・69は波状口縁となる。67は横線とコの字状文、68は細い線で横方向に二本ずつ二段に、69は四条の横線と二条以上の斜線、70は三条の横線と縦線がみられる。71は口縁直径30cmの波状となる直に開く土器である。内面は貝殻条痕のあとヘラにより横方向にナデしており、口縁端に二枚貝腹縁押圧により二段の鋸歯状文がみられる。外面ははいねいな横方向ヘラナデのあと二条の横長だ円状文、横あるいは縦方向の短絡線などによるコの字状文があり、その間に二枚貝腹縁の押圧文がみられる。72は口縁直径21.8cmと小型の波状をした口縁をもつ土器で、突起部に六つのヘラ押圧文とそれを取り囲む弧線がある。内面は横方向ヘラナデのあと、縦方向ヘラケズリであるが、口縁端近くから外面にかけてはいねいなヘラナデである。外面は上下に横方向のヘラ凹線、その間にコの字状あるいは矩形の文様が施される。73は横あるいは縦方向の短絡線で矩形を描く波状口縁の上器である。74は内面がくの字状に折れ、胴部が丸みを持つ波状口縁の上器で、内外とも横方向のヘラナデである。外面の凹線は深く、二重の矩形となる。75は幅の狭い横長の矩形である。

76～80が横方向直線のものだが、小さい破片があるため、あるいは矩形、曲線と組み合わせるものがあるかもしれない。76・77・80は波状となる口縁の頂部で、端が太くなっており、横方向の凹線がみられる。77は内外に凹線があるが、外面は横方向と頂部への短絡線、内面はコの字状とだ円状文が重なっている。頂部近くには直径1.2cmほどの円孔が穿たれている。80は四隅に山形の突起



第16圖 縄文土器(7)

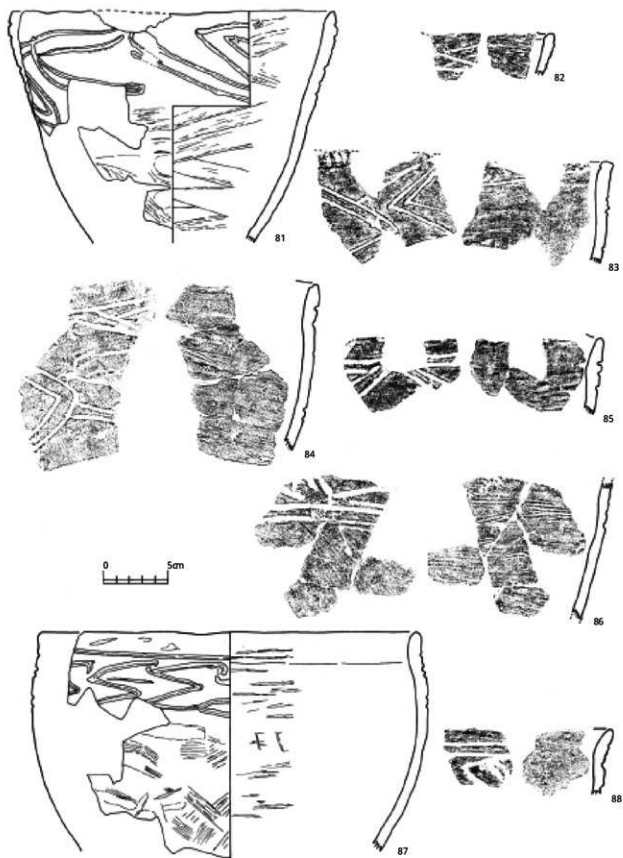


第17図 縄文土器(8)

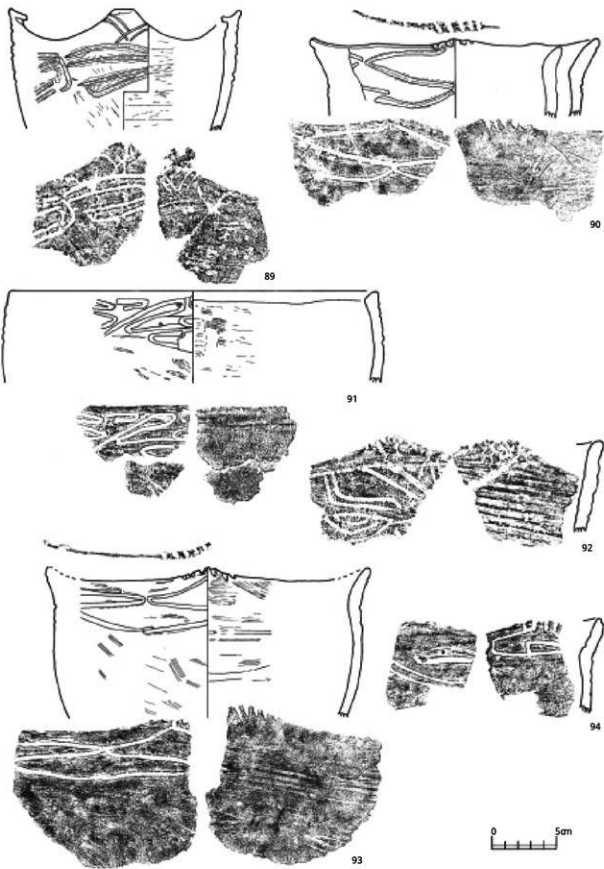
があるもので、外面にやや幅広の二条の凹線がある。78も頂部近くで、内外ともヘラ凹線がみられる。外面は頂部でふくらむだ円状文、内面は横線とだ円状文である。稜付近では内から外へ向かって穿孔（あるいは、深い窪み）がある。頂部口唇部には二条以上のヘラ押圧文がある。79は口縁端近くの内面がくの字状に強く折れる波状口縁の器形で、外面に横線がみられる。

81～88は鋸歯状の直線凹線がみられるものである。81は口縁直径が25.8cmあり、口縁端が尖る土器である。内外ともヘラナデで仕上げ、外面には細いヘラの短絡線で、鋸歯状、だ円形状の文様を施している。82は細い作りの波状口縁で、二条の横あるいは斜方向の短絡線で鋸歯状とする。83は内外に凹線があるが、外面が背中合わせの二条となる鋸歯状凹線、内面が横方向凹線である。口唇部にヘラの押圧文がある。84はやや内反する波状口縁の上器で、外面に二条の鋸歯状文、だ円形文などがみられる。85も波状口縁で、外面に二条の深い鋸歯状凹線文がみられる。86も鋸歯状文と横凹線文がみられる。87は丸みをおびた口縁直径30cmの上器で、左向き二段のやや丸みをおびた鋸歯状文が繰り返され、その上に横線がみられる。88は外反する上器で、外面に二条の凹線と、その下に菱形凹線・右下がり斜線文がみられその上に横線がみられる。

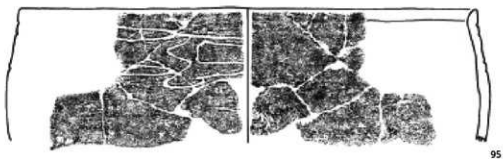
89～105はだ円形状の文様がある。89は口縁直径が18cmしかない小型の波状口縁の土器で、四か所に台形の突起がある。突起部は薄くなっているが、ここに円盤状貼付けがあり、断面は内外へ突出してタツノオトシゴのような形状を呈している。外面は二条一組の凹線で、だ円形状あるいは平行線文が描かれており、突起部は弧状凹線が向かいあっている。突起部は内面にも、外面と同様の文様がある。90は直径22.5cmの波状口縁となる土器だが、四か所の突起と、その中間に低い山状突起がある。大きな突起部の口唇部から口縁内外面にかけては五条のヘラ押圧文がみられる。口縁部近くでくの字状に外反し、先端は尖っているが、突起部はやや幅広い。外面にはだ円形あるいは菱形様の凹線文がみられる。91は口縁直径が29cmある内湾する深鉢で、口縁端が内側へ下がりがり、外面は凹線による曲線文様が描かれている。92は矩形突起のある波状口縁の上器で、突起部には二枚貝腹縁の縦方向押圧文がみられる。外面にはし字状、斜方向、横方向、だ円形状の凹線文がみられる。内面調整は粗い横方向の貝殻条痕である。93は口縁直径25.5cmの波状口縁となる土器で、頂部の口唇部には五か所のヘラ押圧文がみられる。外面はだ円状あるいは菱形の凹線文がみられる。器形・文様など90に似ている。94は口縁端近くでくの字状に外反する器形で、波状口縁となる。この頂部では外面に幅の狭いだ円形文、内面に矩形状の文様があり、口縁端内側には4か所のヘラ押圧文がある。95は口縁直径が36cmの内反する土器で、内面の口縁端近くにゆるやかな段をもつ。外面の凹線は細く、だ円形・鋸歯状・矩形などに描かれている。96は内面の口縁端近くでくの字状に強く屈曲する丸みをおびた口縁直径30cmの上器で、低い波状口縁である。曲線文と矩形文などが外面にみられるが、頂部内面にもだ円状の凹線文がみられる。97は口縁直径が32.6cmと大きく、丸みをおびた胴部から内反ぎみに口縁へ至る。内面はケズりに近い粗いヘラナデだが、口縁端近くはいてぬいなヘラナデになる。外面は鋸歯状の曲線文がみられ、突起部は6段のヘラ押圧文がみられる。98の口縁端は外反して細くなっておわる。凹線で自由に曲線文を描いている。99は胴上半部で、外面には細いわらび手文などの曲線が描かれ、上部は積み上げ痕で剝離している。100・102は口縁端が細くなる波状口縁の土器で、外面に二条の平行曲線文がある。101は分厚い作りの土器で、二条の曲線文が二段にある。103～105は開きながらまっすぐ伸びるものと、内反ぎみのものがあり、いずれも波状口縁である。



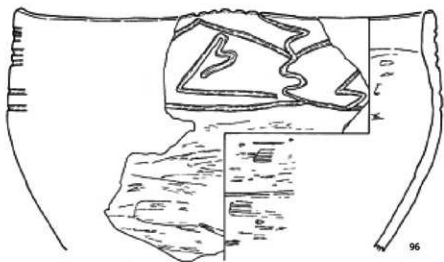
第18図 縄文土器(9)



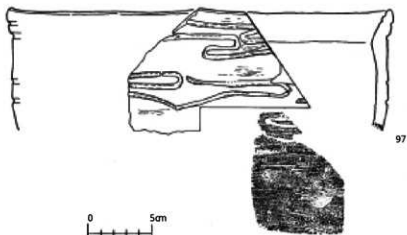
第19図 編文土器(10)



95



96

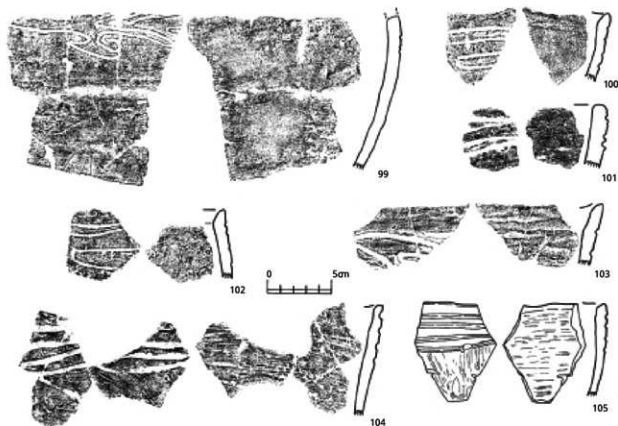


97



98

第 20 図 縷文土器 (11)

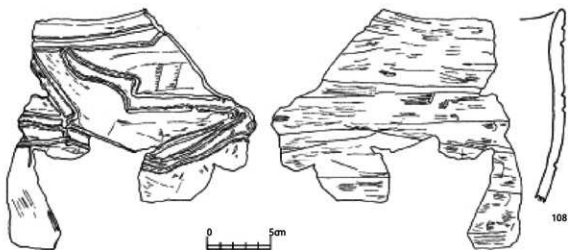
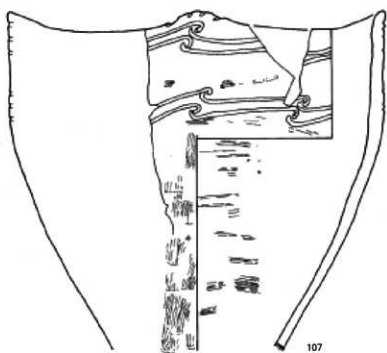
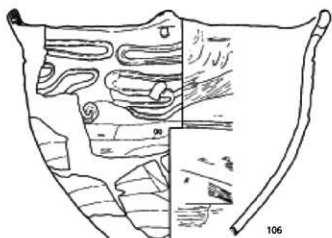


第2図 縄文土器(12)

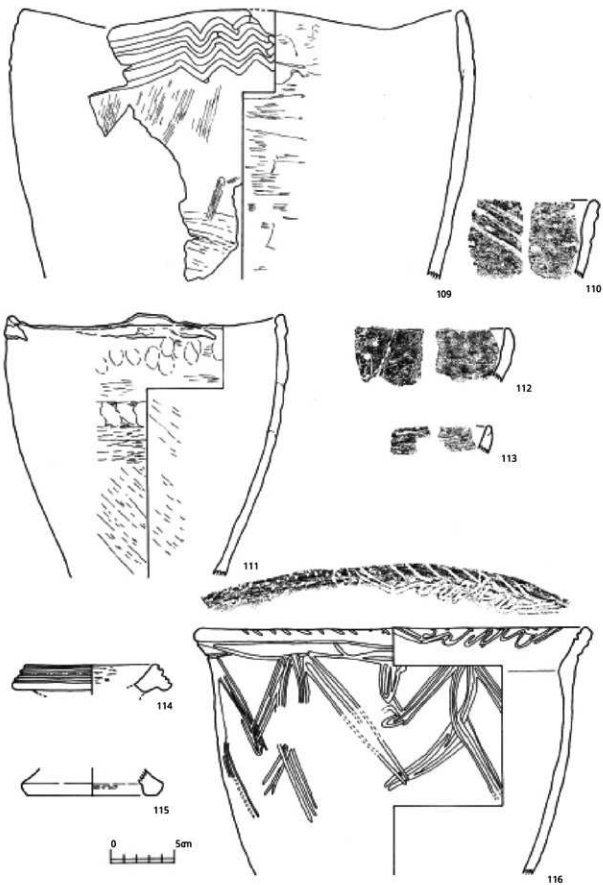
106~110も有文の深鉢である。106は口縁直径が25.5cmあり、4か所に山形突起のある土器である。胴部は丸みをおび、口縁部で外反する器形をし、突起部の口唇部には細いヘラ刺突文があり、その下には凹孔がみられる。外面はミガキ風の粗いヘラナデあるいはヘラケズリで調整し、内面は貝殻条痕後ヘラナデで仕上げている。外面の上部には二条一組の曲線文がみられる。凹線下一か所には二個の刺突状くぼみがある。107は口縁直径が29.5cm、高さが27cm以上の高い深鉢で、四か所に山形突起のある波状口縁となる。頂部には五か所に短いヘラ押し文がある。外面の上部には二段に渡って二条一組の右向きわらび手文がみられる。108も大型の土器で波状口縁となる。外面には二条一組の曲線状凹線文がみられるが、生がわきの状態で引いているために凹線の周辺が高く盛り上がっている。109はゆるやかに波状口縁となる。口縁直径が35cmの深鉢で、口縁が9内反ぎみとなる深鉢である。外面には四条の平行する凹線があるが、頂部では鋸歯状を呈する。途切れ途切れに凹線を引き、凹線のあとヘラナデをしているために、凹線は浅くなっている。110も三条の平行する斜方向凹線文がある。

111~113は口縁部が内反する器形を呈し、無文の土器である。111は直径が21.5cmで、四か所に台形状の突起がみられる。外面は上半部が指頭・ヘラナデで、下部が斜め、あるいは横方向のヘラケズリで仕上げている。112・113はともに内外ともヘラナデで、外面は特にいいいにナデている。

116は丸みをおびた胴部で、口縁近くで強く外反する器形を呈している。口縁直径が30cmあり、四か所に低い波状の高まりがある。外面は右下がりの刻み文と、三条の細い凹線文からなるが、刻み文は一部だけで、一周していない。胴部にある三条の凹線文は鋸歯状文・交叉文・横線文などからなる。内面の口縁部から口唇部にかけては波状となる短絡線がみられる。口唇部にはヘラ刻み口



第22圖 織文土器(13)

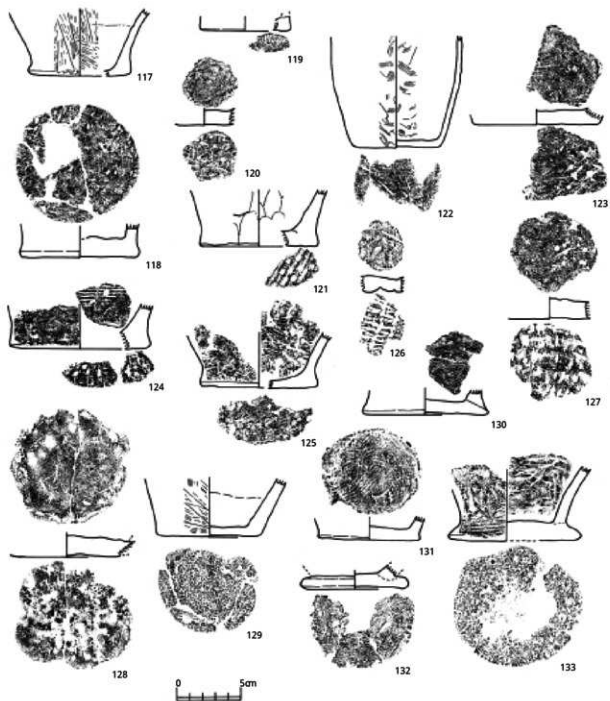


第2図 縄文土器(14)

文と二段のヘラ刺突文がみられる。

117～133は底部であるが、胴部から少しふくらむか、まっすぐ底に移るもの（117～131）と、大きく外へ張り出すもの（132・133）とがある。117・120・131は底をていねいにヘラでナデて仕上げたもので、底の直径は8cmある。117は底近くの内面を深くケズって薄くし、胴下部内面の一部には段もある。120は小さい底で、外面には白い粉が付いている。周辺は指でナデている可能性がある。131の内面は貝殻条痕のあとヘラナデで仕上げている。

118・128は鯨骨を敷いて作っているものである。118は直径が9.3cmで、ややふくらんで直に近く



第24図 縄文土器（15）

立ち上がっている。周辺に痕跡が良く残っている。128は中央に残っている。119は直径が7cmと小さく、底を貝殻条痕で仕上げ、ややあげ底となっている。底と胴部は貼り付けて仕上げている。

121・123～127・130は網代底である。121は直径が9.3cmで、底の作りは円盤状のものに、胴部を乗せている。123は丸みをもって立ち上がる器形で、ヘラでナデで仕上げている。125は直径9.2cmで、ややくぼんで立ち上がる。薄い作りである。126は網代痕跡が深く残っており、周辺は薄くなっている。127は内面に細いヘラの刺突痕があり、外面には白粉が付いている。130は外へ強く張り出して、内面は貝殻条痕仕上げである。

122・129は外面に繊維状圧痕のあるものである。122は底径が7cmほどで、丸みをもって立ち上がる筒状を早する薄い作りの小型深鉢である。内面はていねいなヘラ横ナデ、外面は横あるいは斜方向のヘラナデで仕上げ、底に繊維状圧痕がみられる。129は直径8cmで、丸みをもって立ち上がる。ややいびつな作りで、底は円盤状に作り、そこに胴部を積み上げている。底はでこぼこしている。周辺はヘラナデで仕上げているが、内側に布目と思われる圧痕が付着している。

132・133は円盤状底部のやや内側に胴部を貼り付けているため、底が外側へ張り出しているものである。132は直径が8.4cmあり、ていねいなヘラナデ仕上げだが、ややあげ底となっている。133は直径が10.4cmと大きい、胴部は薄い。内外とも幅広い貝殻条痕のあとヘラナデで仕上げているが、底に繊維状圧痕が残っている。

114・115は小型の台付皿である。皿部は口縁直径が10cmあり、外下がりの口縁部で、肥厚した口唇部に四条の凹線があり、凹線内には丹が塗られている。内面はヘラケズリで仕上げ、皿部には穿孔がある。台部は壺付部近くが分厚くなっており、壺付部には白粉が付着している。台の直径は10cmである。火山ガラス・黄白色石・茶色石などの小石を含む砂質土を用いている。

⑫12類 (第25図 134～138, 後期:松山式土器)

口縁部が肥厚し、そこに凹線の施される土器である。17・18区周辺で出土している。

134は口縁直径が19cmあり、丸みをおびた胴部からやや外反して口縁部へ向かっている。口縁部はやや欠けているが、短く肥厚して2条の平行凹線が施されている。内面はヘラケズリ、外面は横方向のヘラナデで仕上げている。135と137は内面に段があり、135は肥厚部に三条の横方向凹線と二条の左下がり斜方向凹線が施され、137は二条の横と右下がり斜方向凹線が施されている。136は外面に段をもつ肥厚した口縁部で、波状となり、肥厚部には二枚貝腹縁による押圧文がみられる。135～137は内外とも貝殻条痕で仕上げているが、135の内面下部はヘラナデ仕上げである。138は分厚い突起部分で、肥厚部外面に三条のカーブする平行凹線があり、突起部には縦方向凹線が見られる。口唇部には一条の横方向矩絡線があり、突起部には三条の縦凹線がある。突起部には外面から内面に向かって二か所に突き刺し孔がある。

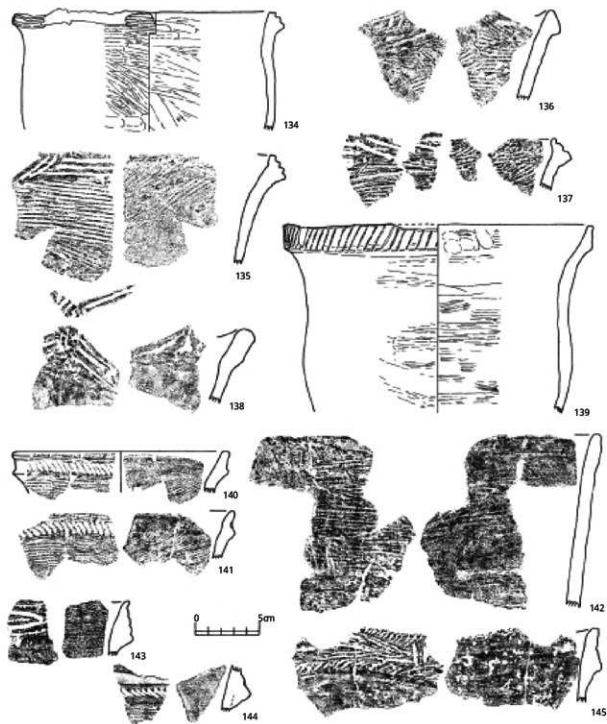
⑬13類 (第25図～第28図 139～168, 後期:市来式土器)

口縁部が幅広く肥厚し、そこに凹線文様・押圧文等のみられる緑帯文土器である。

139は口縁直径が24cmあり、外反し、端近くで直立する口縁部と丸みをおびた胴部から成る。緑帯部にはていねいなナデ整形のあと二枚貝腹縁によって左下がりの押圧文が施される。140～142は口縁部近くの緑帯部が短いもので、140と141の緑帯部にはヘラ押圧文がみられる。140・142の口唇部はヘラミガキである。140は口縁直径が17cmと小型である。140は肥厚度が弱い。143～145は幅広い緑帯にヘラや二枚貝腹縁による文様がみられる。143は上下に二枚貝腹縁による横方向の押圧文

があり、その間にはヘラのだ円形凹線文に囲まれた二枚貝押圧文がみられる。144は上部を欠いているが、下に右下がりヘラ押圧文、中央に太いヘラ凹線がみられる。145は上下にヘラや二枚貝腹縁による押圧文があり、その間にはヘラによる横凹線と二条の縦方向ヘラ押圧文がくり返される。

146～150は上下に斜め方向のヘラ押圧文があり、その間に凹線のある幅広の縁帯文土器である。146は口縁直径が22cmと小さく、口縁が直に近く立ち上がっている。147は上下にこまかい押圧文が



第25図 縄文土器(16)

あり、中央は2列2段の深いヘラ押圧と2条の太い横方向ヘラ凹線が繰り返される。148は波状口縁で、ヘラ押圧間の中央にはヘラ凹線がある。150も同様だが、細い作りで中央には縦方向のヘラ押圧文があり、突起部の内側には斜方向のヘラ押圧文がみられる。151と153・155は上下にヘラの斜方向押圧文があり、その間に二枚貝腹縁の押圧がみられる。151の口縁直径は31cmあり、口縁部の外反度は弱い。内外面とも貝殻条痕のあと、ヘラでナデられている。152は口縁上部を欠いているが、貼付によって肥厚した部分に二段以上のヘラ押圧文がみられる。153は薄手の作りだが大型である。154は口縁直径が27cmあり、縁帯部にはヘラによる斜方向押圧文がみられる。155の外側はヘラ押圧文と貝殻腹縁押圧文がある。156は直径の大きい大型土器で、内外とも貝殻条痕で仕上げている。157は小さな波状口縁で、上にヘラ押圧文、その下にヘラ凹線文がみられる。158は薄い作りの深鉢で、口縁上部と、口縁端から口唇部にかけて突帯を貼り付けて肥厚帯を作っている。口縁外面の上下に左下がりのヘラ押圧文があり、その間にはヘラによる横あるいは縦方向の凹線文がみられる。159は口縁端を欠いており、下部にヘラの押圧文がみられる。160は口縁直径が18cmと小型で、浅めの深鉢である。口縁部はでこぼこしており、肥厚部外面は上下にこまかいヘラ押圧文があり、その間に一条のヘラによる凹線が横方向に回っている。内外とも貝殻条痕で仕上げているが、外面の胴部上半は指頭圧痕のあと、ヘラナデ仕上げをしている。

161・162は文様が縁帯部だけでなく、胴部まで達しているものである。161は口縁上部を欠いているが、口縁部と胴部に右下がりの二枚貝腹縁による押圧文が二段以上に施されている。162は口縁直径23.5cm、底部直径9cm、高さ26.5cmの四か所に突起のある波状口縁となる完形品である。安定した平底からふくらみをもった胴中央部へ立ち上がり、頭部でくびれ、外反しながら肥厚口縁へ至る。平坦となった口縁部は剥離が目立つが、縦方向の二枚貝腹縁の押圧が並び、頭部の上にも二枚貝腹縁の押圧文がみられる。頭部の押圧文は部分的に途切れている。底はヘラナデで仕上げているが、白粉が付着している。内外とも横方向のヘラナデ仕上げだが、粗いため、でこぼこしている。

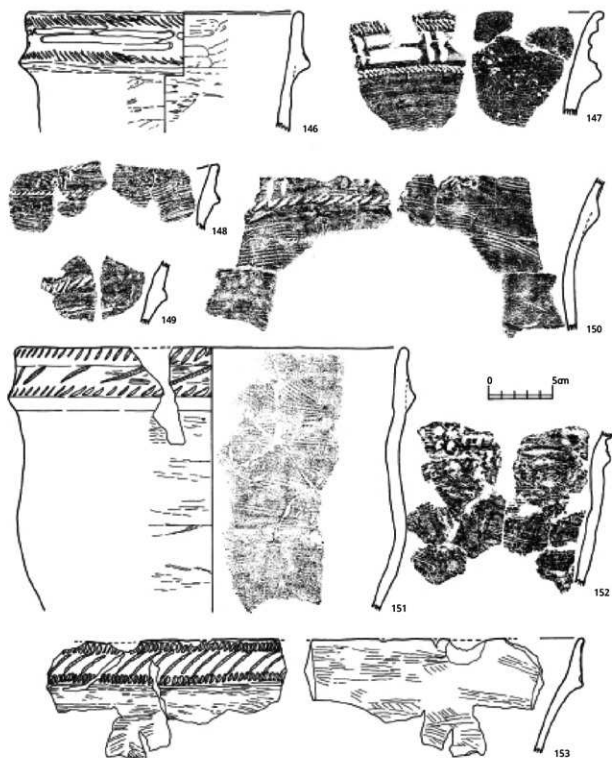
163～166は13類だが口縁部が肥厚しない土器である。163は口縁直径18cm、底部直径8.5cm、高さ17.5cmのやや波状となっている完形品である。ややあげ底となる底部からはほまっすぐ開きながら口縁へ伸び、端部はとがっている。積み上げ痕跡がよく残っており、外面は縦方向、内面は横方向の粗いヘラナデ仕上げである。底も粗いヘラナデで白粉が付着している。C15・16区を中心に出土している。164は四か所に突起のある波状口縁の土器で、内外とも粗いヘラナデ調整である。165は波状口縁の突起部で、口唇部に一条のヘラ押圧文がみられる。166は肥厚が少ない口縁で、口縁上部を欠いているが、二条の横方向ヘラ凹線と、下の凹線間に二枚貝腹縁の押圧文がみられる。薄い作りである。

167は台付皿の坏部で、四か所に稜が想定される。稜部分の内面には四条のヘラ沈線があり、口唇部にヘラキザミがみられる。内外とも横方向のヘラナデで仕上げているが、内面は剥離が目立つ。

168は胴部最大径が9cmしかない薄くて小型の深鉢胴部で、内外ともこまかく貝殻条痕で仕上げているが、外面は条痕のあとヘラでナデている。薄い作りである。

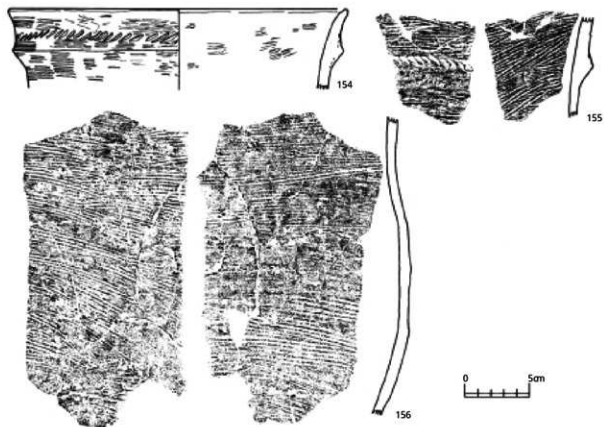
㊦14類（第29図 170・171、後期：北久根山式土器）

胴部から外反し、口縁端近くが内反ぎみに直立する土器で、直立する口縁端部に凹線が引かれる。170は口縁直径が28cmで、口唇部は平らとなる。内外ともいねいなヘラ様横ナデで仕上げているが、外面は口縁部に三条の沈線があり、その間にヘラ刺突文がある。口縁端には細かいヘラ押圧文



第26図 縄文土器(17)

がみられる。頭部には二条のヘラ沈線とヘラ刺突文がある。171も同じような器形をしており、同一個体の可能性がある。口縁には三条の沈線とヘラ刺突文がある。頭部にはヘラ沈線とヘラ刺突文があり、その下に横長だ目文風のものが見られる。B12区で出土している。



第27図 縄文土器(18)

⑮15類(第29図 172, 後期:西平式土器)

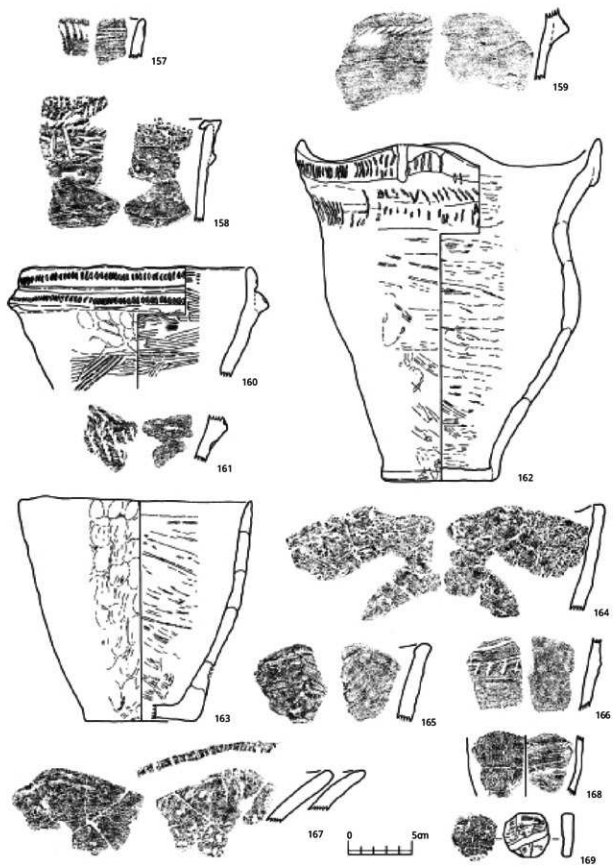
底径が4cmある小さなあげ底の深鉢である。底の中央は分厚く、立ち上がり部分は深くくぼんでいる。内外面ともヘラナデだが、外面は特にいねいである。茶褐色を呈し、焼成は良い。火山ガラス・白色石などのこまかい石を含んでいる。B8区で出土している。

⑯16類(第29図 173~179, 後期:丸尾式土器)

外反する口縁部に二枚貝押圧文、ヘラ押圧文、ヘラ凹線文などの描かれている土器である。胎土が白色石・茶色石・火山ガラス・金雲母など3~4mm大の細石を多く含む粗砂土であるという特徴もある。173と174は同一個体の可能性があるが、外面の口縁下部は肥厚させている。上部に左下がりの二枚貝押圧文があり、その下にはヘラによる三条の横短絡線と三条の右下がり斜め沈線がある。さらにその下には二枚貝腹縁による鋸歯状押圧文が施されている。175・176はやや薄い作りで、波状口縁となる。口縁部に斜方向の押圧文が施されるが、175はヘラ、176は二枚貝腹縁による押圧で、突起部ではともに二段になっている。176は外面にスス、内面にコゲが付着している。178・179も波状口縁で、ともに右下がりの二枚貝押圧文がみられるが、突起部では二段になる。179は突起部で、外面の口縁端部に浅い凹線がみられる。177は安定した平底で、立ち上がり部は丸みをおびている。底はといねいなヘラナデで剥脱が目立つ。

⑰17類(第29図 180~182, 晩期:黒川式土器)

浅鉢と深鉢がある。180は丸底から胴部で内側へ屈曲し、頸部で強く外反している浅鉢である。肩部は短く、屈曲部はともに丸みをおびている。胴部に比べて、口縁部はやや分厚い。内外とも横

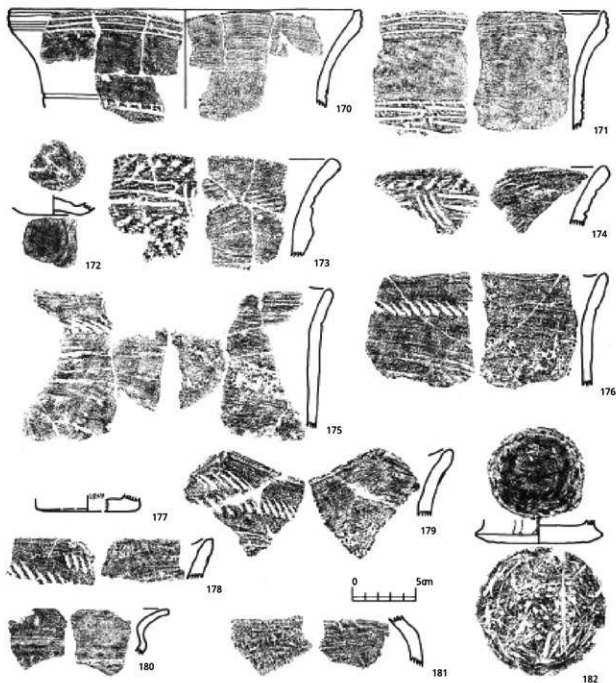


第28図 織文土器(19)

方向のヘラナデだが、内面のナデはていねいである。火山ガラス・黄白色石などの細石を含むこまかい土を用いて、茶褐色を呈した土器である。181は深鉢の肩部で、ゆるやかに曲がっている。内外ともヘラナデだが、外面はていねいである。182は深鉢の底部で、直径は10cmある。底の立ち上がり部分は外へ張り出し、外面には籠状をした敷き物の圧痕がみられる。内外ともヘラナデで仕上げている。深鉢は黄色っぽい明茶褐色を呈している。

2) 土製品 (第28図 169)

破損した土器片を打ち欠いて略円形にした円盤形土製品である。直径が3.5cm、厚さが0.9cmある。内外ともヘラナデで仕上げた市来式土器深鉢の破片を利用している。



第29図 縄文土器 (20)

3) 石器

多種の石器がⅠ層あるいはⅡ層から出土しているが、これらの石器を分層して扱うことは不可能なため、時期設定は困難であり、ここでは縄文時代の石器として取り上げるが、弥生時代以降のものも含まれている可能性もある。石器の種類には打製石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・石槍・ビエスエスキュー・磨製石斧・打製石斧・磨石・蔽石・くぼみ石・石皿等があり、この他に接合資料・石核・剥片がある。

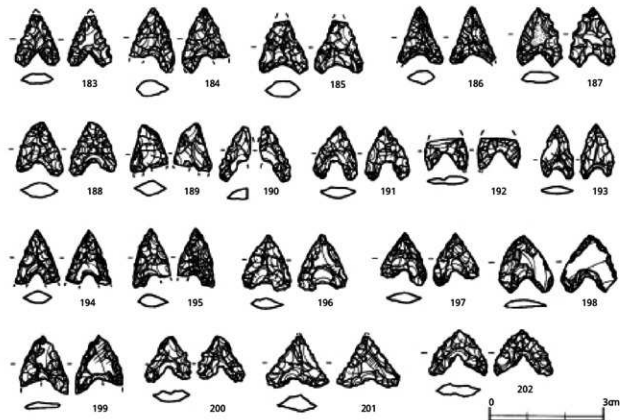
①打製石鏃 (第30図～第32図 183～250)

77点の打製石鏃が出土している。大きさ・全体の形状・基部の形態などから7種に分けた。Ⅰ類～Ⅵ類がえぐりのあるもの、Ⅶ類が基部が平らなものである。

Ⅰ類 (183～202) は長さが1.5cm前後の小型鏃である。いずれも基部は浅いえぐりがある。基部が中心軸に対し直交するもの (195・196) や、するどく尖がるもの (192・198・199) がある。全体形は二等辺三角形のものが多いが、200～202は正三角形に近い。198や199のように表裏面に大剥離面を残しているものもあるが、多くはこまかい剥離を施している。202はえぐりが深く、鋤先状を呈している。

Ⅱ類 (203～205) は二等辺三角形をし、縁辺が丸みをもったものである。203は先端を欠いているが、基部は両側とも鋭くとがっている。204は浅いえぐりがあり、内外とも大剥離面を残している。205は先端がとがって七角形を呈している。

Ⅲ類 (206・207) は先端が鋭くとがる二等辺三角形をしている。206は片脚を欠いているが細長く、先端の加工は稚である。207は先端が鋭く、片面に大剥離面を残している。基部はどっしり



第30図 石器 (1) 打製石鏃

した作りで、五角形を呈している。

Ⅳ類(208~215)は正三角形をしているもので、いずれもえぐりがあるが、浅いものと深いもの、直線的なものと丸みをもったものなどがある。208・209は基部端外側がやや直になっている。212は両面とも大剥離面を残し、周辺のみを調整しており、えぐり部は浅い。213は両脚が欠けているが、丸みをもったえぐりである。214は先端・基部とも尖がっているが、丸みをもった作りである。215は片脚を欠いているが、基部が直となる箴形鎌である。

Ⅴ類(216~245)は二等辺三角形をしたもので、いずれもえぐりがある。ほぼ2cm前後だが、幅の狭いものと広いもの、基部が直となったものと丸みをもったものなどがある。216~221はていねいな作りで基部端は丸い。222の角はいずれもすどい。223~234は細い二等辺三角形をしたもので、先端は鋭いものが多く、227は表裏とも大剥離面を残している。230は幅が広く、基部近くで外へ張り出している。231~233はえぐりの浅い、深いはあるが、先端・基部端とも鋭い。235~237は側縁が丸みをもっており、236は表裏面とも大剥離面を残している。238・239は剥片を利用して、片面は大剥離面を広く残しているため側縁はでこぼこしている。241~245は基部や半面などが欠けているが、調整はていねいである。

Ⅵ類(246~254)は長さ2.5cm以上ある大型の鎌である。基部は246~251が丸く、252~254は直になっている。基部端は矩形となるものと、尖がるものがある。

Ⅶ類(255~259)は基部が平らなものである。255~258は二等辺三角形をしており、255・256は先端が、258は基部の一部が欠けている。256の片面は大剥離面を広く残しているが、他は両面ともていねいに打ち欠いている。259は正三角形に近く、やや基部がくぼんでいる。周辺からていねいに打ち欠いているが、中央部は一次剥離面を残している。

②石鎌(第33図 260~263)

逆三角形状を呈するものと菱形状を呈するものがあり、いずれも分厚い。260・261は小さい鎌部を呈するものである。262はほとんど加工していない石核状の石材を用い、鎌部は小さい。263は長い剥片の周辺をていねいに加工し、縦軸先端を鎌部としている。

③石匙(第33図 264~277)

横長のもの(Ⅰ類~Ⅲ類)と縦長のもの(Ⅳ類)の14点が出土している。横長のものは、普通のもののほかに刃部の幅が狭いもの、長さが短いものなど3種に分かれる。

Ⅰ類(264~273)の刃部は丸く外弯し、全体的にだ円形となる。いずれも周辺からていねいに打ち欠きざされ、つまみはほぼ中心にあるが、いくらか片富ったものもある。刃部とつまみの間はいくぐりの深いものが多いが、272・273などはえぐりがなく、まっすぐ伸びている。

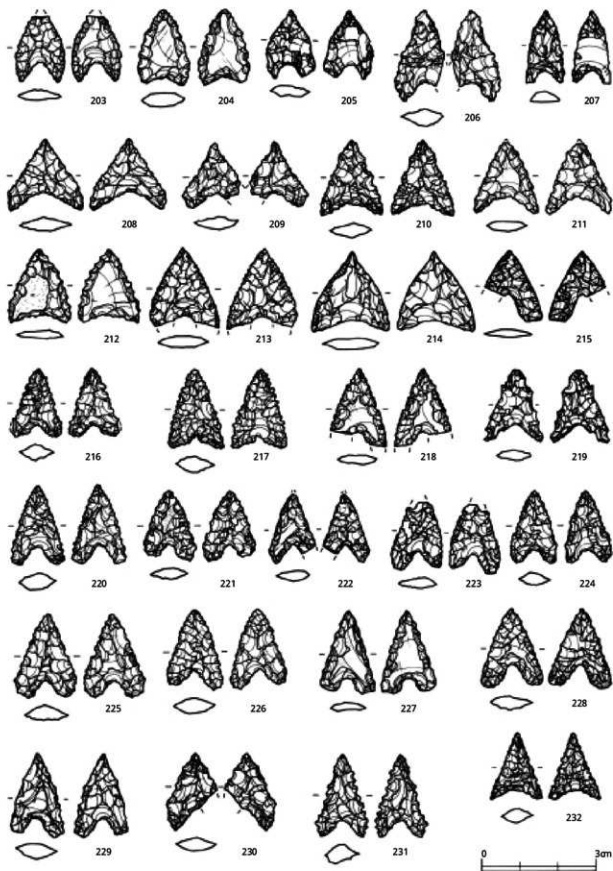
Ⅱ類(274)は刃部の長さ・幅とも狭く、つまみとその大きさは変わらない。分厚い作りである。

Ⅲ類(276・277)は刃部の幅が狭いもので、刃部は外反している。

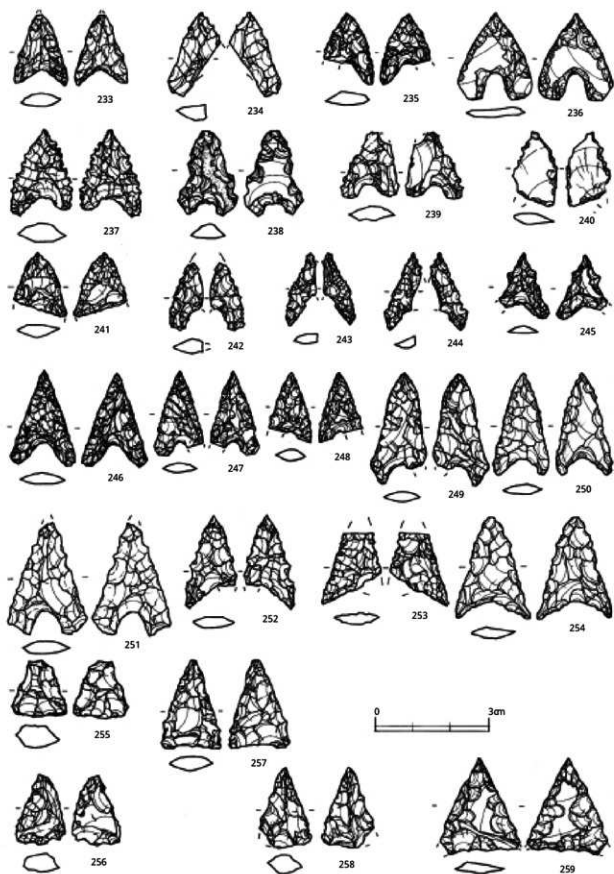
Ⅳ類(275)は横長剥片を用いた縦長のもので、表裏とも側縁のみを加工し大剥離面を残している。刃部とつまみの境はえぐりとなる。主軸はやや傾いている。

④スクレイパー(第35図 278・279)

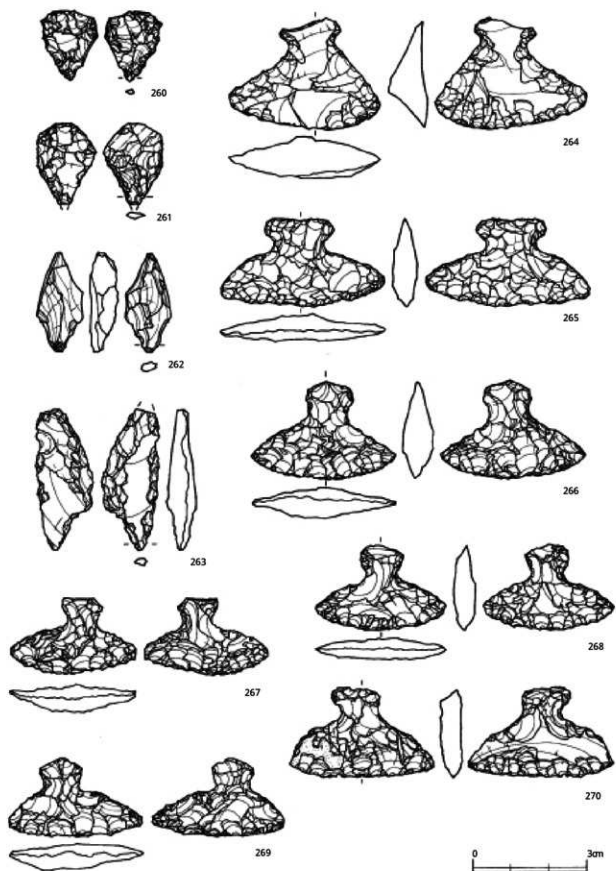
278は横長の縦剥き剥片長軸の片方に両面から加工して刃部としたサイドスクレイパーで、片面には広く大剥離面を残している。短軸の一方には自然面を残し、片方には形状調整の加工をしている。279は半円形の分厚い剥片の周辺を両面からこまかく打ち欠いている、分厚い作りのラウンド



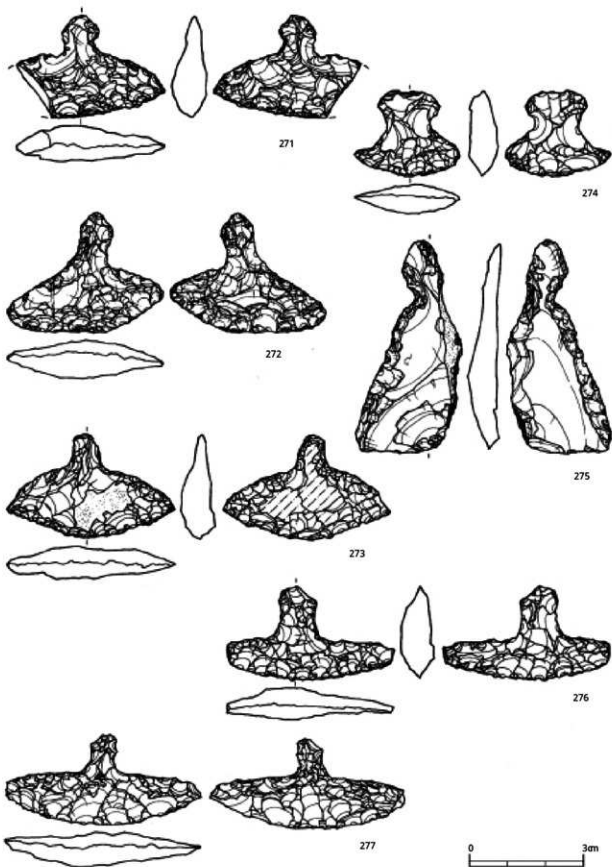
第3圖 石器(2) 打製石鏃



第32圖 石器(3)打製石鏃



第3圖 石器(4)石錐・石匙



第34圖 石器(5) 石匙

スクレイパーである。

⑤ 石槍 (第35図 280)

長さ3.5cm、幅2.1cmの二等辺三角形をした分厚い両面加工の石槍である。基部は直とならず丸みをおびていることから、エンドスクレイパーの可能性もある。

⑥ ビエス・エスキュー (第35図 281)

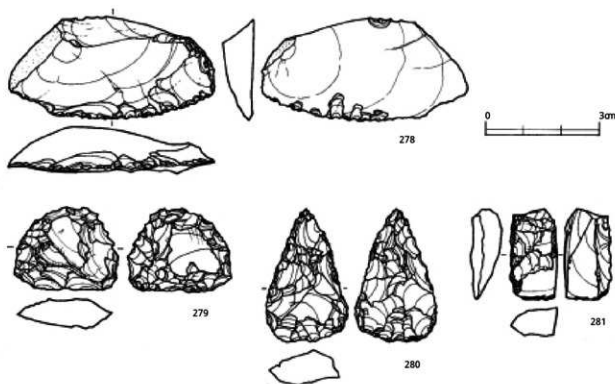
長さ2.3cm、幅1.3cmの長方形をした剥片の側辺を一部加工し、その短い一辺に使用痕のある分厚い石器である。

⑦ 磨製石斧 (第36図～第38図 282～295)

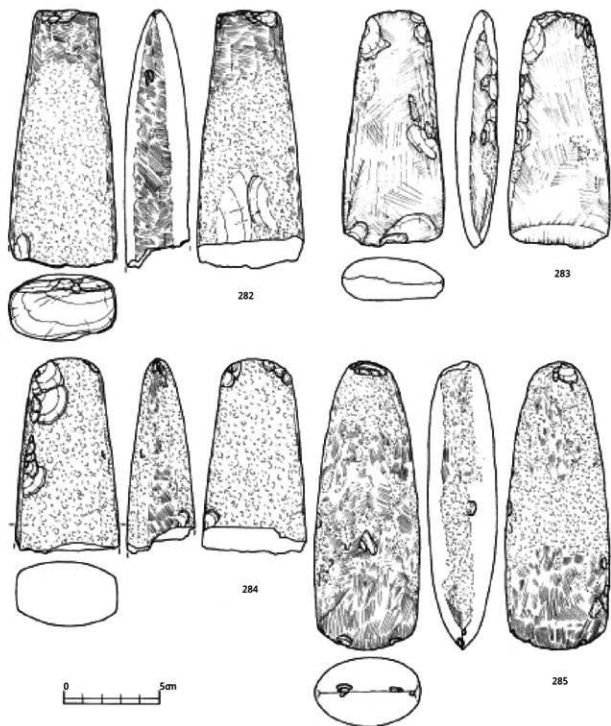
バチ形のもの、小型のもの、ノミ形のものがある。

282～292はバチ形の石斧である。敲打によって形を整え、刃部をていねいに両面から磨いている。刃部は太い蛤刃となっている。282・283・286の頭部はやや矩形となっており、磨きがみられる。敲打痕を広く残したものと、面をていねいに磨いたものがある。287は片面と頂部が欠けている。289は刃部近くの破片だが、刃部を欠き、片面も欠けている。290・292は蛤刃を呈する刃部で、両面からていねいに打ち欠いて形を整えたあと、ていねいに磨いているが、刃部に欠損部がみられる。

293と294は小型の両刃石斧である。293は刃部を欠いているが、自然円礫を利用した磨製石斧の基部である。頂部の一部も打ち欠いている。294は長さ6.7cm、幅4.0cmの両刃石斧で、両側面に打痕跡がみられるが、両面ともていねいに磨いた蛤歯である。



第35図 石器 (6) スクレイパー・石槍・ビエスエスキュー

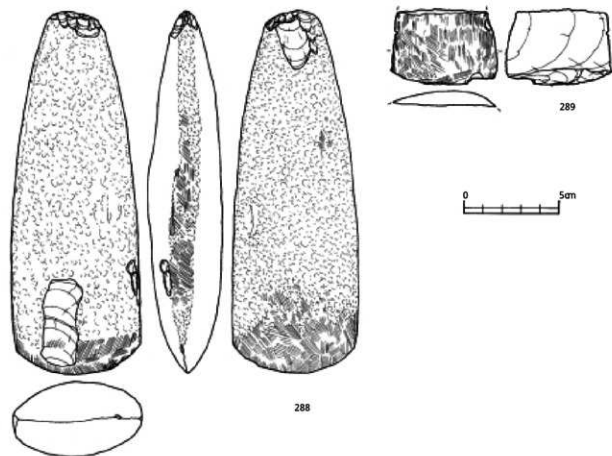
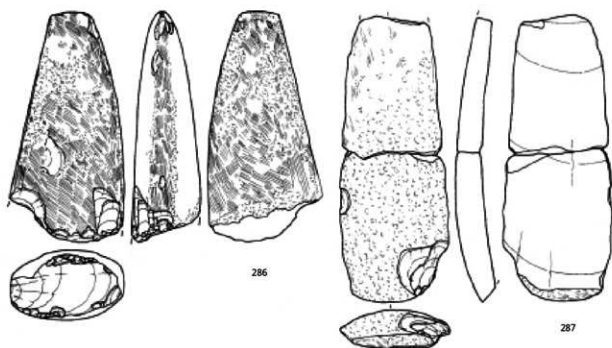


第36図 石器(7)磨製石斧

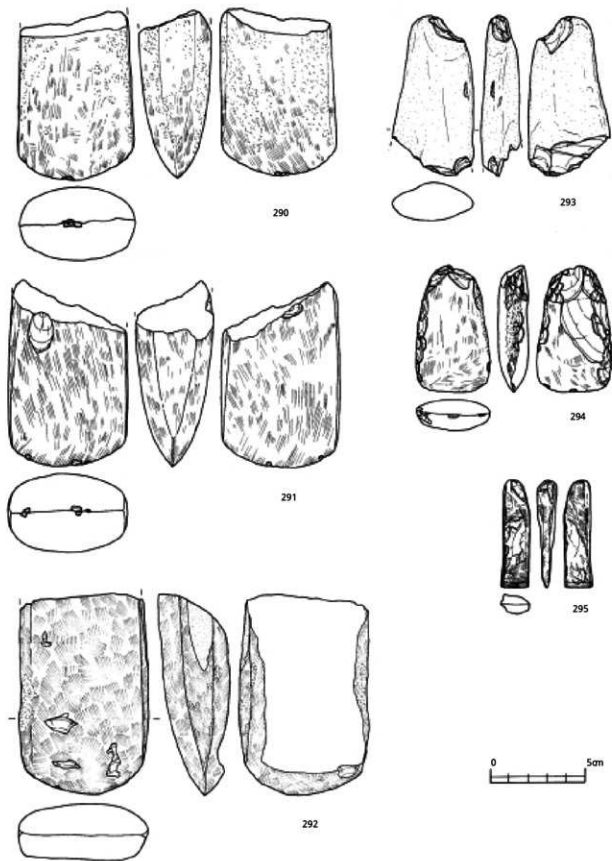
295は長さ5.7cm、幅1.5cm、厚さ0.9cmの小さいノミ形石斧で、両面から打ち欠き、刃部・側面ともていねいに磨いている。

⑧打製石斧(第39図 296・297)

刃部の欠けたえぐり入り打製石斧の基部が出土している。周辺は粗い剥離だが、えぐり部分は両面からこまかく調整されている。296は左右対称であるのに対して、297は一方に傾いている。



第3圖 石器(8)磨製石斧



第38圖 石器(9)磨製石斧

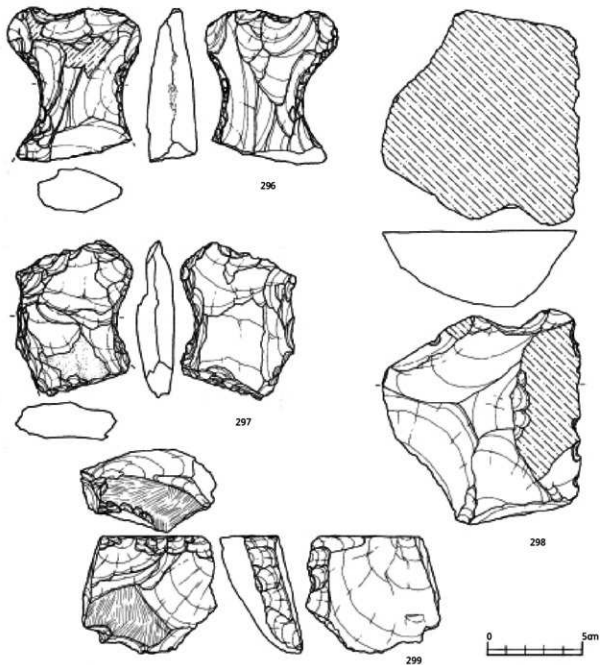
⑨石核 (第39図・第40図 298～303)

あらゆる角度・方向から剥片を打ち欠いた石核が多く出土している。中には300・302のように表皮面を広く残しているものもある。298は平坦な上面から粗く打ち欠いており、301は二次加工の痕跡がみられる。

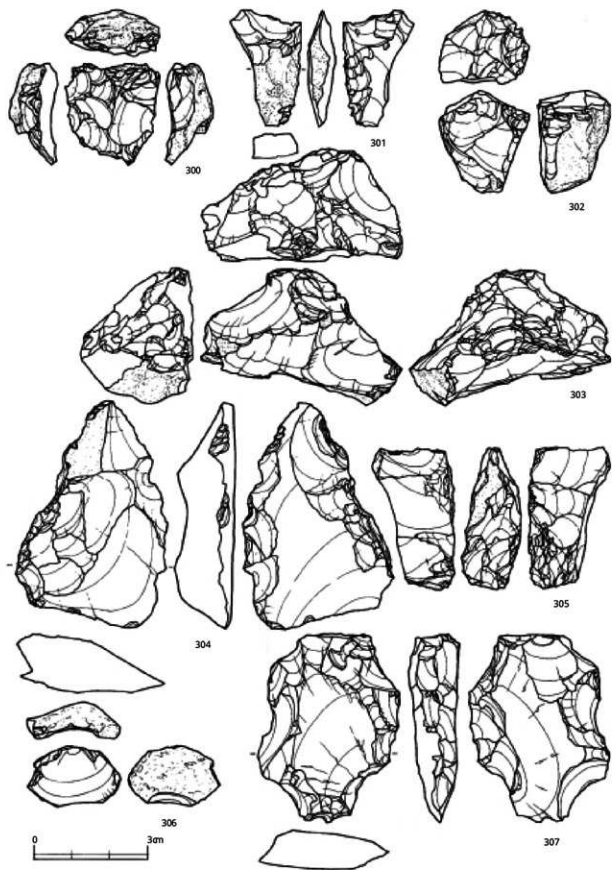
⑩剥片 (第40図・第41図 304～313)

多量の剥片が出土しているが、この中には加工の施されているもの、使用痕のあるものなどがある。306は片面に表皮を広く残しているものである。307・309は周辺から二次加工がされ、製品を作ろうとしているが、途中でやめている。311も折損部の片面にこまかい剥離を加えている。

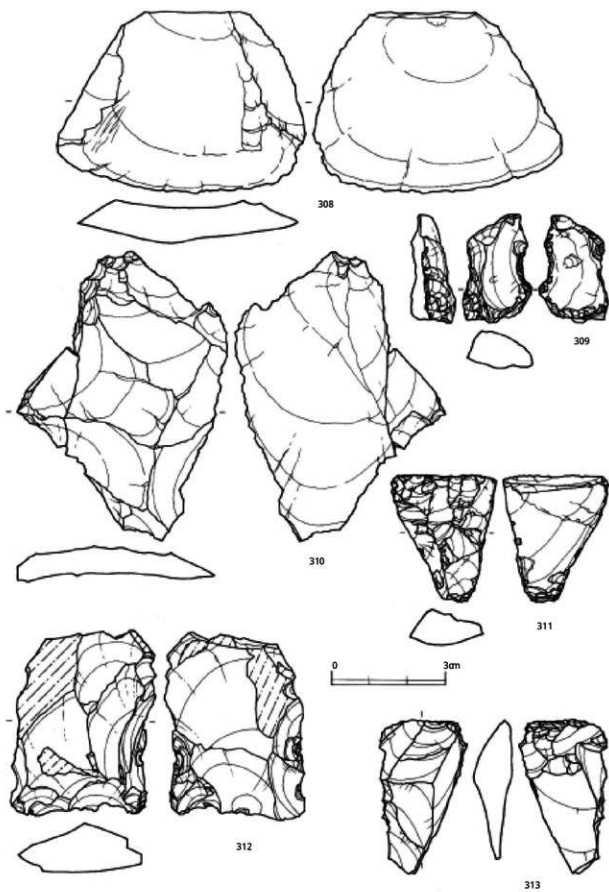
⑪接合資料 (第42図・第43図 314)



第39図 石器 (10) 打製石斧・石核



第40圖 石器(11)石核・剥片

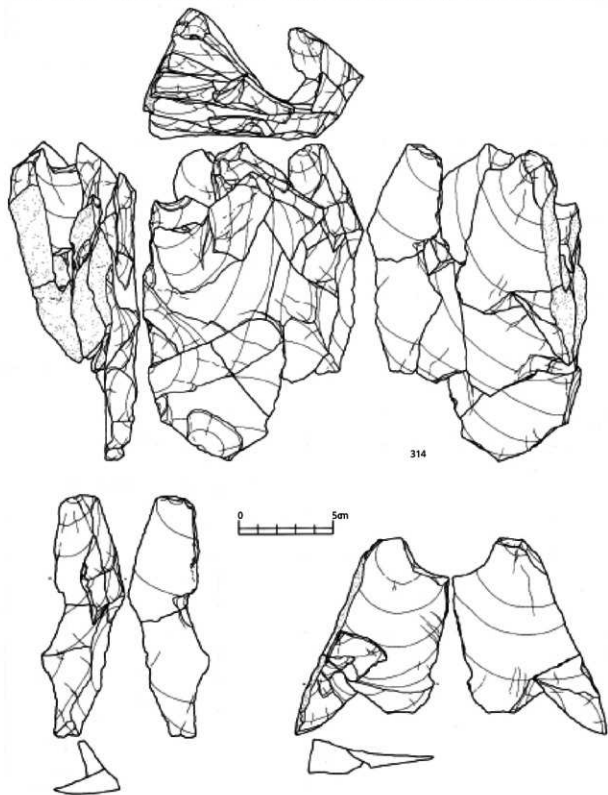


第4圖 石器(12)剥片

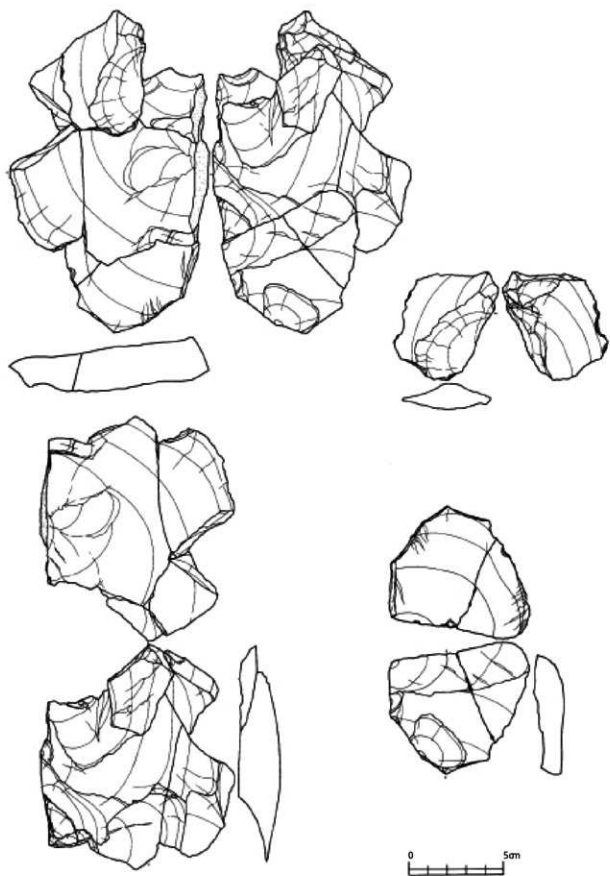
剥片どおしが接合できた資料が数点ある。314は17cm×11cmほどの大剥片であるが、それを8つの剥片に分けている。二次的加工はない。

②磨石（第44図 315～323）

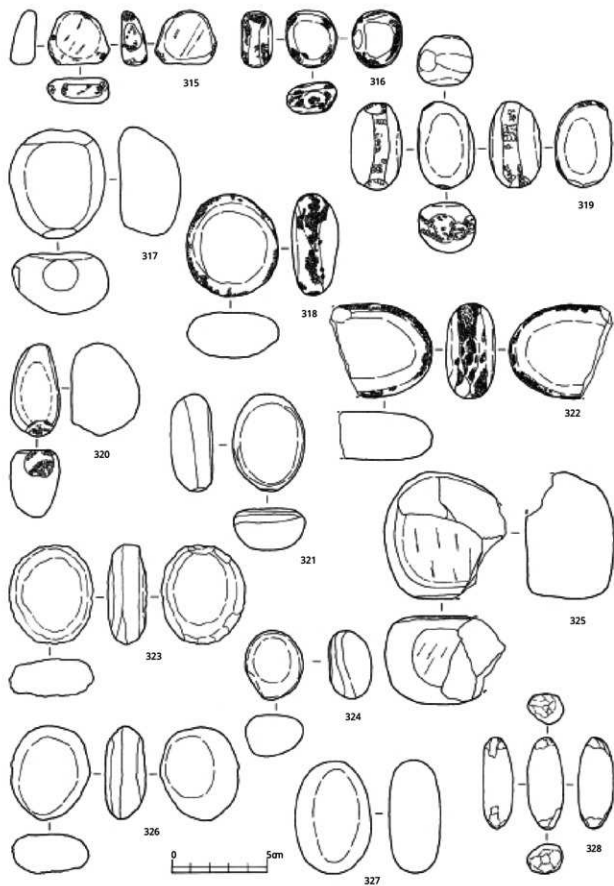
砂岩・安山岩・花崗岩を利用し、だ円形・円形などをした磨石である。この中には315～320のよ



第42図 石器(13)接合資料(1)



第4図 石器(14)接合資料(2)



第4図 石器 (15) 磨石・敲石

うに敲石を兼用したものもあり、使用痕が顕著でないものも多い。また、扁平なものもあるが、分厚いものも目立つ。315は丸みをおびた台形状のもので、角部分には敲打痕がみられる。集石に使われたためか、火を受け、焼けた痕跡がみられる。317・321は片面がふくらみ、あと一方はややくぼんでいる。317は両短側面のみに使用した痕跡がみられる。315・318・319・321は両面・側面とも使用しているが、318の使用痕跡は少ない。320は半分ほどを使用しており、短側面の一端は敲石として使用している。322・323はだ円形をした扁平なもので、周辺をていねいに使用しているが、323は花崗岩のため破損も目立つ。

⑬敲石（第44図 324～328）

安山岩・砂岩を用いたもので、円形・だ円形をしたものと、棒状を呈するものがある。325は一面に磨った痕跡があり、石皿としても用いられているが、周辺が広く欠けている。328は棒状のもので、両側の短側面の使用痕が顕著である。

⑭くぼみ石（第45図 329）

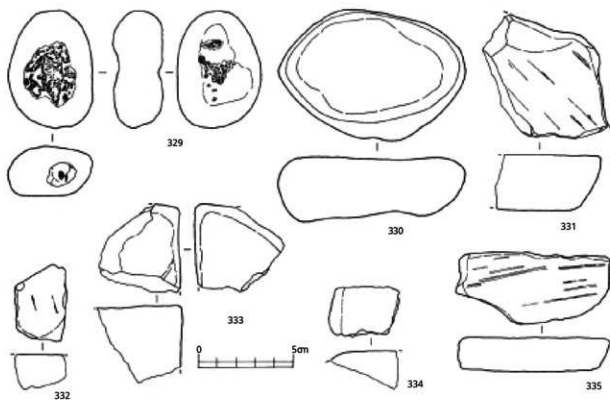
厚さ5cmほどのだ円形をした砂岩円縁の両面を台にして使用している。使用痕が顕著で、両面とも深くくぼんでいる。また、短側面の一端には敲石として使用した痕跡がみられる。

⑮石皿（第45図 330～334）

一面を使用した砂岩製の小型石皿で、いずれも深くはくぼまず平坦に近い。完成品は330だけで、他は小さな破片となっている。

⑯砥石（第45図 335）

平面形が丸みをおびた長方形に近い形をした厚さ3.5cmほどの扁平な砂岩盤を使用し、使用面は平坦である。縦方向に筋状となる使用痕がみられる。



第45図 石器(16)くぼみ石・石皿

第4節 弥生～古墳時代

1 遺構

弥生～古墳時代の遺構には、竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡1軒、埋納ピット14基、ピット70基、棚列状遺構31条、溝状遺構4条などがある。堂岡遺跡B地点の地形では、A～C区は平地地で東側に広がる舌状台地で、1～3区南西側は急傾斜の谷部に、D区は西側への緩傾斜地となる。

遺構群は概ね平坦部で発見され、遺跡南側からA～C-3～8区では竪穴住居跡群が、B・C-9～11区では棚列状遺構群や溝状遺構が検出された。また、A-10・11区、A～C-12～14区、D-22区で竪穴住居跡群が、A-15区とD-15区では溝状遺構が検出された。

(1) 竪穴住居跡

堂岡遺跡B地点では25軒の竪穴住居跡が検出された。いずれの住居跡もⅡb層上面で土色に変化した際に検出が可能となった。竪穴の深さは約20cmから60cmほどであった。埋土堆積状況からも実際の生活面は高かったものと考えられる。

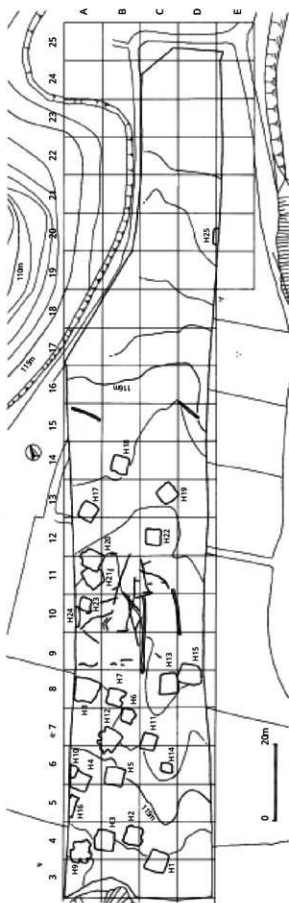
住居群は、A～C-3～8区の範囲と、A-10・11区及びA～C-12～14区の範囲の大きく2群に分かれて検出された。

ア 1号竪穴住居跡 (SH-01)

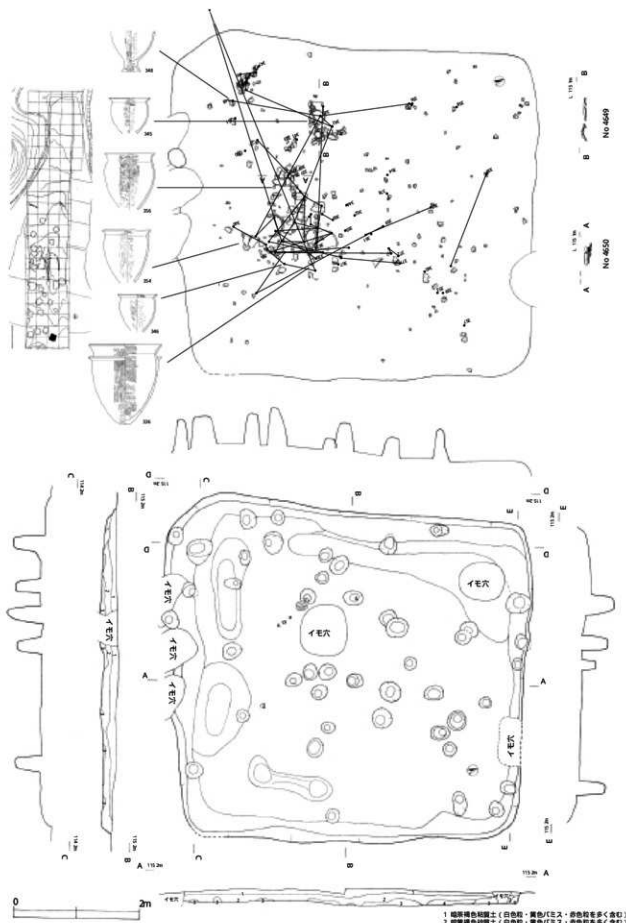
(第47図～第51図, 図版7)

(7) 住居跡構造

C-3・4区で検出され、上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約580cm×短辺約540cmである。検出面から床面までの深さは約20cmである。張り出し及び中央掘り込みなどの付帯施設は確認できなかった。床面には48基のピットを検出した。いずれのピットも深さがほぼ同じで、支柱と支柱の区別ができない。また、住居跡周辺には数多くのピットが検出され、いずれのピットも竪穴住居跡の埋土状況と同様のため、同時期のものと判断できた。したがって、住居跡内で検出した柱穴が、住居に伴うものなのかも判断できない。

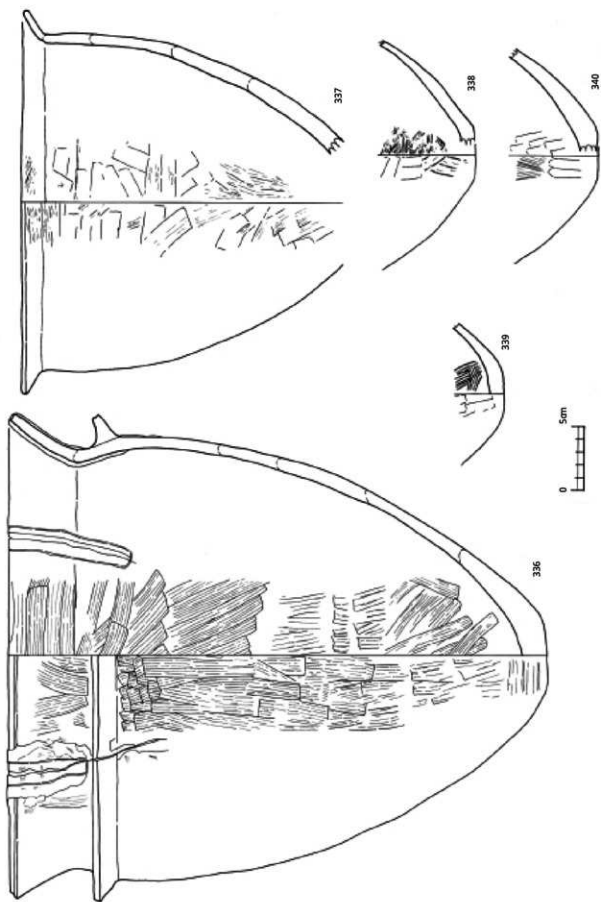


第46図 弥生～古墳時代の遺構配置図

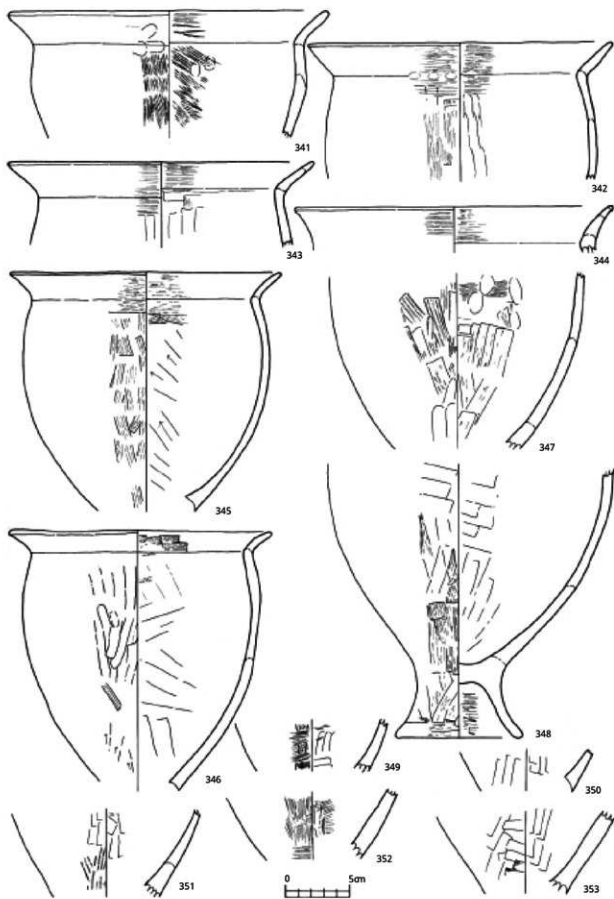


第4図 1号壑穴住居跡検出・遺物出土状況

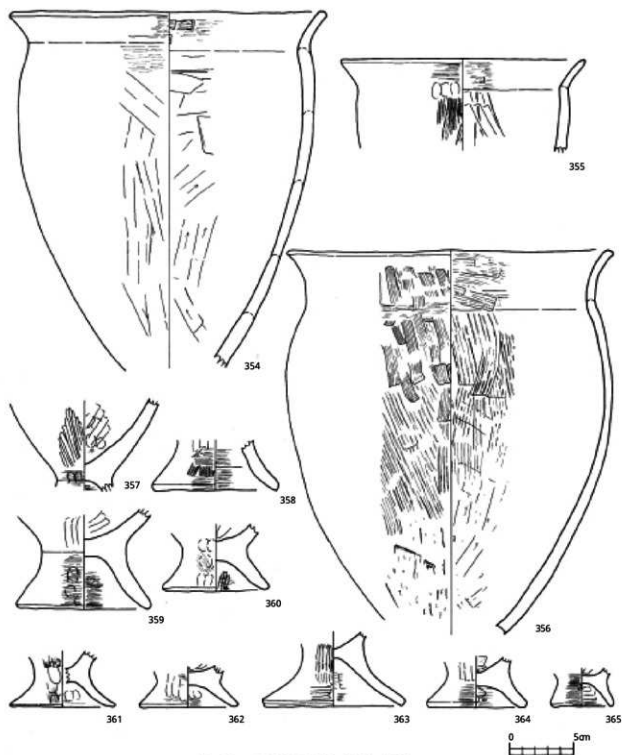
- 1 褐色褐色粘土（白色砂、黄色「瓦」・赤色砂を多く含む）
- 2 褐色褐色砂質土（白色砂、黄色「瓦」、赤色砂を多く含む）
- 3 褐色褐色粘土（褐色褐色土を含む）
- 4 褐色褐色粘土（褐色褐色土を含む）
- 5 褐色褐色粘土（褐色褐色土を含む）



第48圖 鴨野穴住居跡出土遺物 土器 1



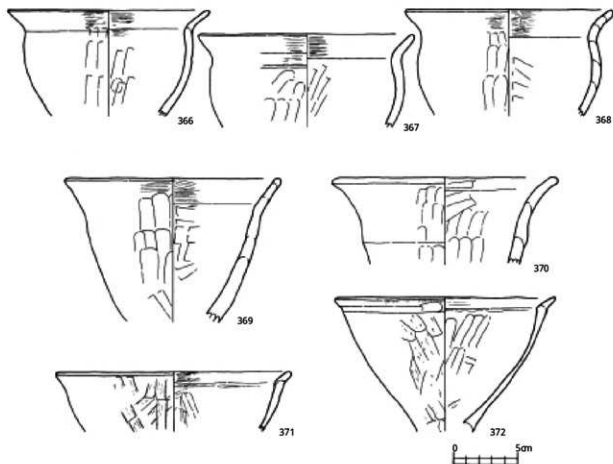
第49圖 1号豎穴住居跡出土遺物 土器 2



第50図 1号竪穴住居跡出土遺物 土器3

(イ) 住居跡内出土遺物

埋土は概ね2層に分かれ、多くの遺物は埋土上層の埋土1や埋土2から出土した。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3の出土遺物は5点出土したが、うち3点は埋土1の出土遺物と接合関係にあり、埋土内の上下動の激しさを示す。また、埋土内出土土器には完形に復元できたものが多く、住居廃絶後の一括廃棄と考えられる。なお、埋土1出土土器345は9号竪穴住居跡埋土2の出土土器と接合関係が認められ、埋土1出土土器378は2号竪穴住居跡埋土1の出土土器と接合



第5図 鴨野穴住居跡出土遺物 土器4

関係が認められる。

出土土器は、甕形土器、鉢形土器で構成される。

甕形土器（第48図～第51図 336～368）

336は口縁直径38cm、高さ42.4cmの大きさの二重口縁甕である。口縁部は長めに外反し、長い鈎がつく。底部は径約4cmの小さな平底である。口縁部内面と胴部の境界に明瞭な稜線が観察できる。口縁外面には部分的に掻き上げ調整を、胴部外面では幅が細めのハケメ調整を行う。口縁部内面から口唇、外面には、焼成前に幅約2cm、厚さ2～3mmの補修のため粘土をかぶせている。胎土の質や発色などは土器本体と同様である。337～365は甕形土器である。338～340は径約4cmの小さな平底である。337、341～346は口縁部が「く」の字状に長めに外反する土器である。調整は、口縁部内外面にはヨコ調整を、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整の後タテ方向のヘラナデ調整を、底部から胴部下端部ではタテズリ調整を行う。354、355、356では口縁部は短めで外反の度合いが弱い。354、355では口縁部外面はヨコ調整を行う。356では口縁部外面には掻き上げ調整が施され、口縁部内面と胴部の境界は不明瞭である。357～365は底部である。359では脚が高く、361、362、364では脚が低く、363では脚が広がる。366～368は小振りの甕形土器で、口径は16～18cmである。口縁部は「く」の字状に長めに外反し、胴部が張るのが特徴である。

鉢形土器（第51図 369～372）

371、372では器壁の厚さが特に薄く、胴部内外面のタテズリ調整が明瞭に残り、口縁部内面と胴部の境界には明瞭な稜線が観察できる。

イ 2号竪穴住居跡 (SH-02) (第52図～第60図, 図版7)

(7) 住居跡構造

B・C-4区で検出された2号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約480cm×短辺約470cmを測る。検出面から床面までの深さは約20cmである。住居西側に長辺約100cm×短辺約60cmを測る小規模な張り出しと、約120cmの1辺のみが残る中央掘り込みなどの不明瞭な付帯施設を確認した。床面には50基のピットを検出した。しかし、2本柱あるいは4本柱など規格性のある構造を認められず、また壁から約60cmから約120cmはなれて壁に沿って柱穴の列状配置を確認した。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね2層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1から出土した。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3の出土遺物は少なく、いずれも碎片である。特に、住居南側からは多量の土器が出土し、完形に復元できたものが非常に多く、住居廃絶後に一括廃棄されたものである。なお、378は1号竪穴住居跡と、埋土1出土土器の2点は3号竪穴住居跡埋土1の出土土器と、埋土1出土土器407は5号竪穴住居跡埋土2の出土土器と接合関係が認められる。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、小型土器で構成される。

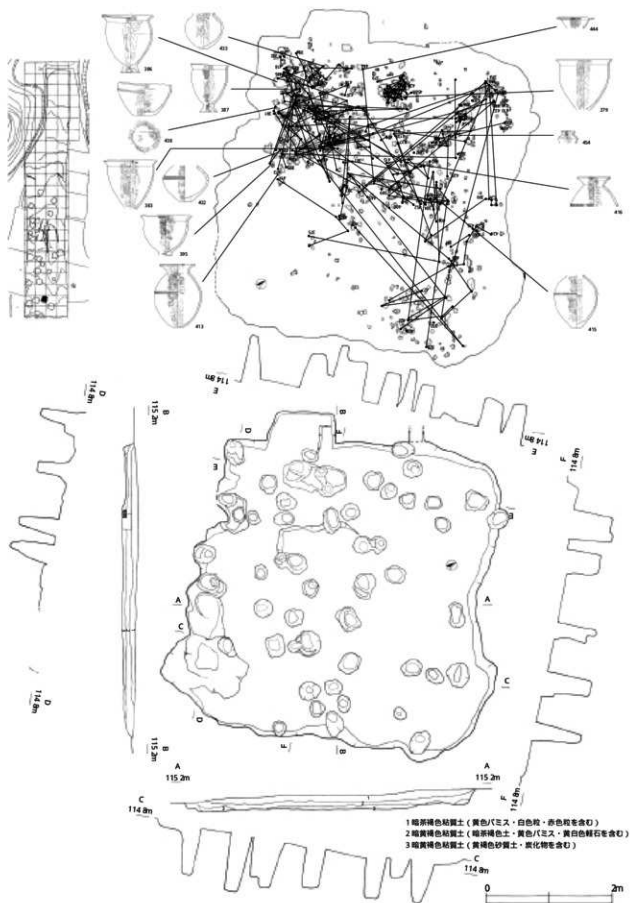
甕形土器 (第53図～第56図 373～412)

373～378, 380, 381, 383, 384, 386は口縁約30cmの中型土器で、口縁部が「く」の字状に長めに外反する。多くの土器では、口縁部内外面にはヨコ調整が、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整の後、タテ方向のヘラナテ調整が観察できる。胴部内面ではヘラナテ調整を丁寧に行うものや、明瞭なハケメ調整がみられるもの(374, 378)がある。また、胴部下端部ではタテ方向のケズリ調整が残るもの(383)と、ハケメ調整やヘラナテ調整の卓越するもの(386)がある。383は口縁部内面と胴部の境界には明瞭な稜線が観察でき、口縁部は長い土器である。口縁部は外反の度合いが弱く、胴部外面のタテ方向のハケメ調整が口縁下部まで達し、口縁部外面と胴部の境には指頭押圧調整が行われ、境界の稜線は不明瞭である。386は口縁部が短く、「く」の字状に外反する土器で、胴部上半部で張るのが特徴である。

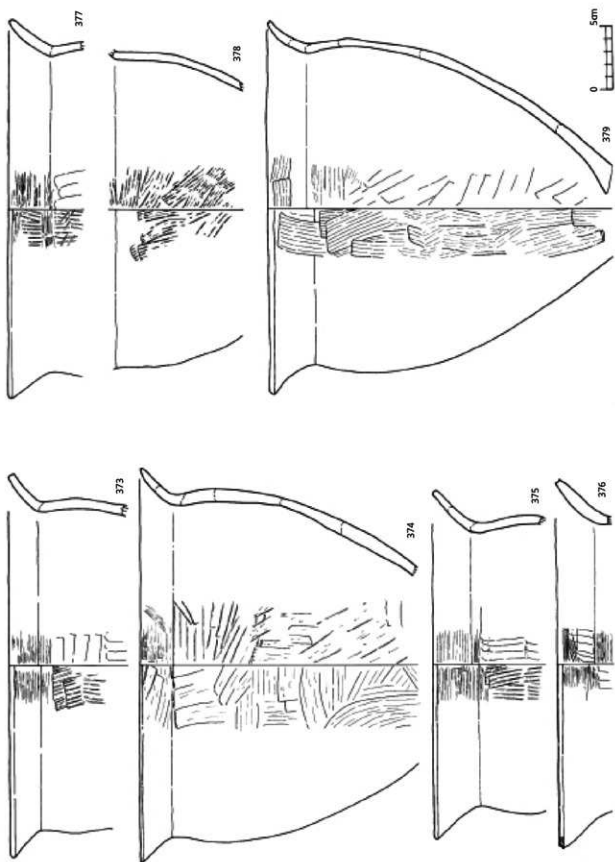
379は口縁約30cmの中型土器で、口縁部は短めで外反の度合いが弱く、口縁部外面には掻き上げ調整が施される。口縁部内面と胴部の境界には、胴部上部部にヨコ方向の調整が強く行われるため明瞭な稜線が観察できる。また、口縁部外面と胴部の境界では、ハケメ調整をいったん切っており、明瞭な稜線が観察できる。

392, 395は口縁約30cmの中型土器で、口縁部内面と胴部の境界には、胴部上部部に斜方向のハケメ調整が強く行われるため明瞭な稜線が観察できる。口縁部外面と胴部の境界では、392ではヨコ方向のヘラナテ調整が、395では掻き上げ調整が施されるため、稜線は不明瞭である。

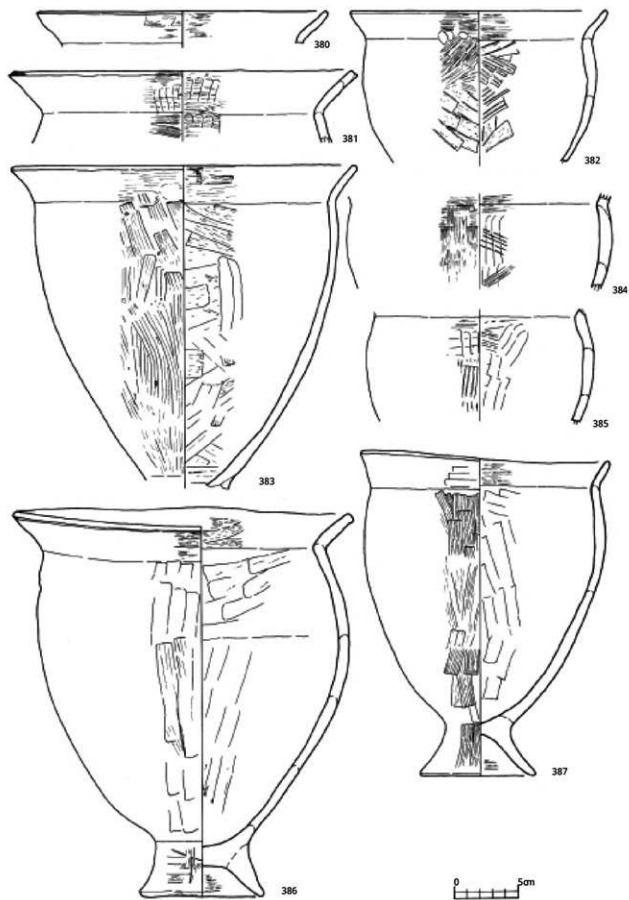
382, 385, 387, 388～391, 393, 394, 396は小振りの甕形土器で、口径は約20cmである。いずれも口縁部外面と胴部の境界では、指頭押圧調整やヨコ方向のヘラナテ調整、あるいは掻き上げ調整が施されるため、稜線は弱い、あるいは不明瞭である。388, 390, 391では口縁部は「く」の字状に長めに外反し、口縁部内面と胴部の境界には明瞭な稜線が観察できる土器である。389, 393では口縁部は短めで外反の度合いが弱く、口縁下部外面には掻き上げ調整が施され、稜線は弱い。いずれも胴部上半面にススの付着が観察できるのが特徴である。



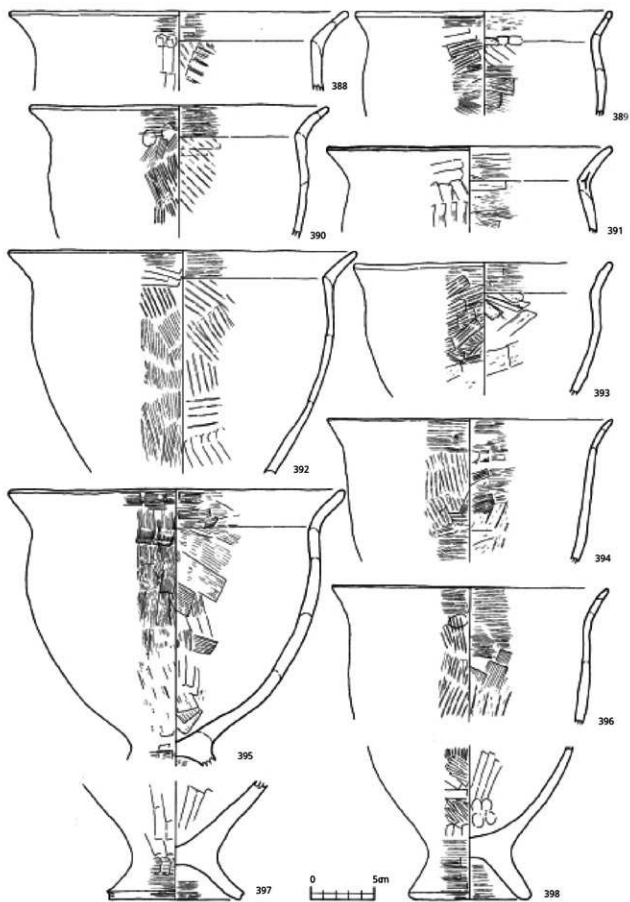
第 5.2 図 2号竖穴住居跡検出・遺物出土状況



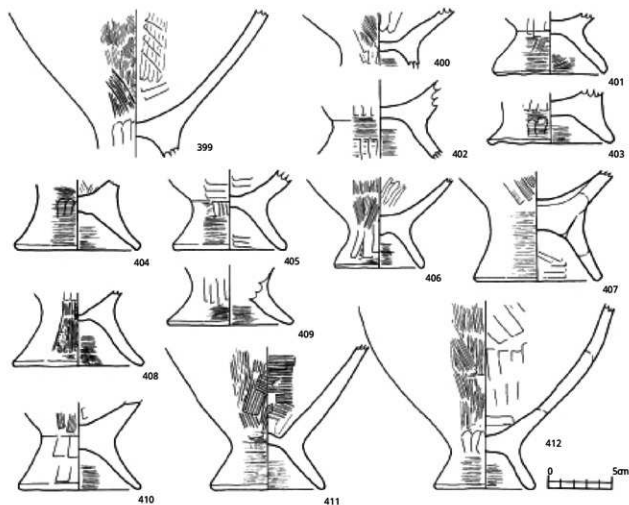
第 5 组 2 号 墓穴住居跡出土遺物 土器 1



第54图 写暨穴住居跡出土遺物 土器 2



第55圖 2号竪穴住居跡出土遺物(土器3)



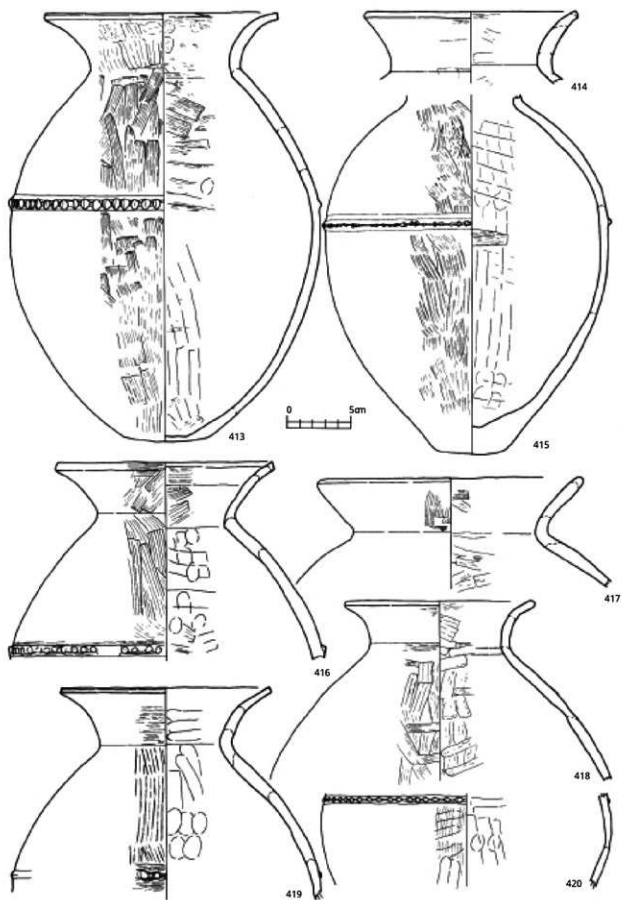
第56図 2号竪穴住居跡出土遺物(土器4)

400～410は底部である。401, 403, 406, 407, 412は脚が立ち気味になり, 404, 405, 408～410は脚が広がる土器である。403及び409は, 脚部の形態にかかわらず, 脚が低いのが注目できる。また, 402及び403は底部内面が特に平坦な形態のもの, 406及び408は底部内面に突起がつく形態のものである。底部の厚さに違いがあるものの, 404及び407では, 径の小さな平底の立ち上がり部分に中空の輪状の脚台を付ける成形技法が明瞭に観察できた。脚の低い409でも薄い底部を厚くしたうえで, 中空の輪状の脚台を付けるようである。

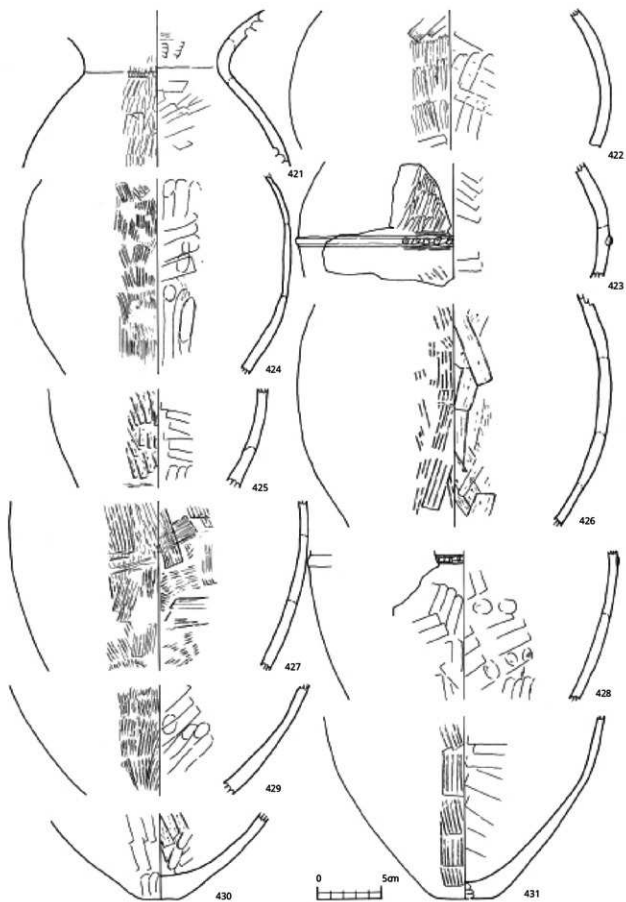
壺形土器(第57図～第59図 413～437)

413～431は中型土器のうち長胴形の壺形土器である。

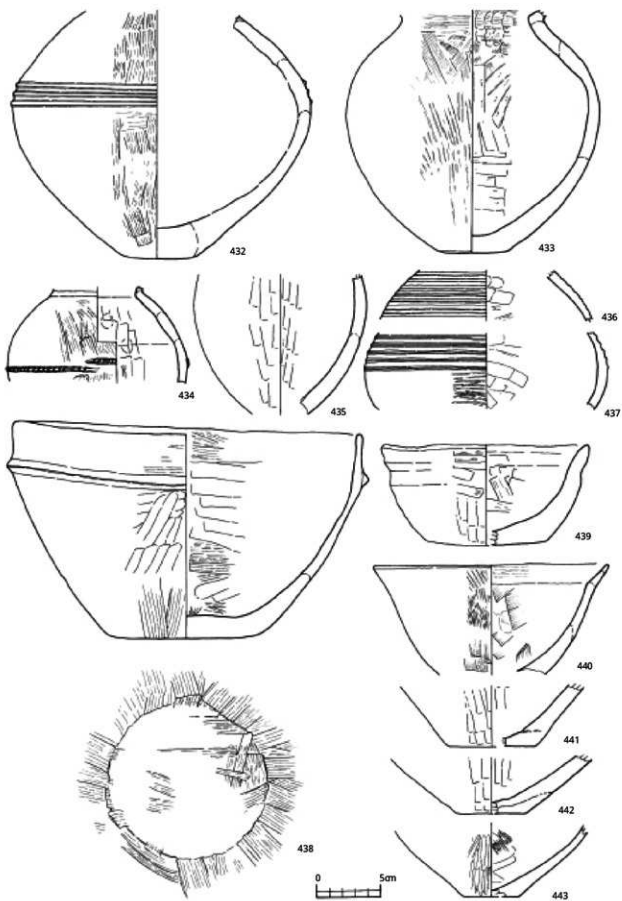
器形的特徴としては, 口縁部形態では, 大きく外反するもの(413, 421)と, 直線的に開くもの(416, 417)と, 肩部から頸部に立ち上がり, 短く開く口縁部がつくもの(418, 419)の3種類がみられる。肩部はいずれもなだらかに胴部に移行する。胴部中央部には, 刻目を施す貼り付け突帯を1条巡らすもの(413, 415, 416, 419, 420, 423, 428)が多いものの, 突帯を施さないもの(424, 426, 427)もみられる。胴部下半は緩やかにすぼまるもの(413, 429)と, 直線的にすぼまるもの(425, 431)がある。



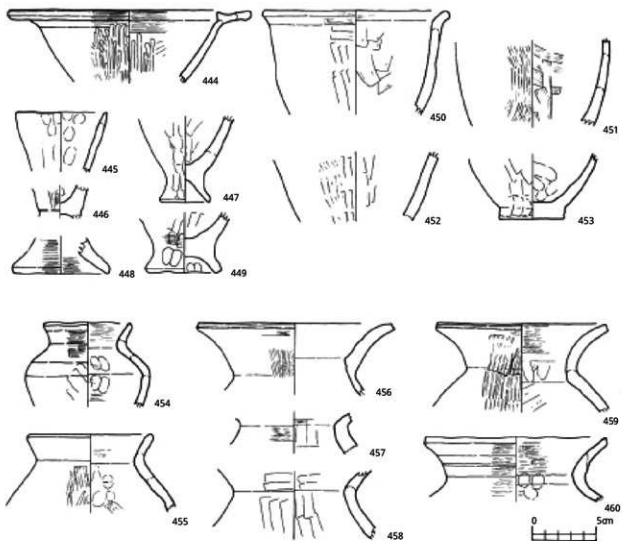
第5图 Z号竖穴住居跡出土遺物(土器5)



第58图 弓形穴住居跡出土遺物(土器6)



第59图 写暨穴住居跡出土遺物(土器7)



第60図 写野穴住居跡出土遺物(土器8)

調整は、口縁部外面では、上端までハケメ調整を行うもの(413、416、417)と、上半はヨコ調整を、下半はタテ方向のハケメ調整を行うもの(418、419)、ヨコ調整の後にナデ調整を行うもの(414)がある。肩部から胴部では、外面はハケメ調整を行い、内面は上半ではヨコあるいは斜方向のヘラナデ調整を行い、下半ではヘラナデ調整を行うものが多い。なお、刻目を施す貼り付け突帯を巡らすものは、突帯の上端と下端にヨコ調整を行うものが多い。ハケメ調整には、幅が太めの工具を使用するもの(419、426、431)と、幅が細めの工具を使用するもの(413、415、416など)がある。特徴的な土器としては、まず、421、423は胴部上半外面ではミガキに近い丁寧なナデ調整を行うものである。また、425は胴部下半外面ではケズリ調整の後にタテ方向のハケメ調整を行い、428及び430は胴部下半外面ではタテ方向のヘラナデ調整を行い、426は胴部下半内面ではタテ方向のケズリ調整の後にタテ方向のナデ調整を行うものを挙げることができる。

432、433は中型土器のうち胴部が球形に張る壺である。口縁部形は不明である。432では胴部中央部には貼り付け突帯を3条巡らし、胴部下半は直線的にすぼまる。433では胴部中央部には貼り

付け突帯を施さず、胴部下半は緩やかにすぼまる。調整は外面では共にタテ方向のハケメ調整を行い、内面ではヘラナデ調整を行う土器である。

435は長胴形の小板りの壺形土器である。突帯を施さず、胴部下半は緩やかにすぼまる土器である。調整は、内外面共にタテ方向のヘラナデ調整を行う土器である。

434、436、437は小板りの土器のうち胴部が球形に張る壺形土器である。完形の土器がないため、口縁部形及び胴部下半から底部形態は不明である。434は胴部中央部には貼り付け突帯を1条巡らし、調整は外面では共にタテ方向のハケメ調整を行い、内面ではタテ方向のヘラナデ調整を行う土器である。436と437は同一個体である。胴部上半外面ではミガキに近い丁寧なヨコ方向のナデ調整を行った後に、削り出しによる多条の突帯を施す土器である。内面ではヨコ方向の丁寧なヘラナデ調整を行う土器である。

鉢形土器（第59図 438～443）

438は口径約27cm、底径約13cm、高さ約17cmを測る土器である。口縁部は直立し、胴部は直線的に底部にすぼまる。底部は平底である。口縁部と胴部の境には断面三角形の突帯を1条巡らす。調整では、口縁部外面ではヨコ調整を、胴部上半外面ではタテ方向のヘラナデ調整を、胴部下半外面ではタテ方向のハケメ調整を、内面ではヨコ方向のヘラナデ調整を行う。特に、底部外面のハケメ調整が目に見える。胴部下端のハケメ調整との先後関係は一方的でなく、この土器をもって、成形は口縁部から底部へ積み上げたとは言えない。ただし、底部から口縁部へ積み上げる順位方向での成形を考えた際には、生乾きの早い段階で底面を上げての底面調整であることを示している。

439～443は小板りの鉢形土器である。

439は底部から直線的に開き、口縁部外面直下に1条凹線を巡らす。口縁部内面と胴部の境界は不明瞭である。調整は、内外面共にナデ調整を行う。440は底部から口縁部では緩く湾曲したボウル形を呈し、口縁部外面と胴部の境界は不明瞭である。口縁部内面と胴部の境界には、胴部上端部に斜方向のハケメ調整及びナデ調整が行われ、明瞭な稜線が観察できる。441～443は底部である。底部から胴部下半では直線的に開き、441では立ち上がりが強く、442、443では大きく開くものである。調整は、内外面共にタテ方向のヘラナデ調整である。443では外面調整はタテ方向のミガキに近い丁寧なナデ調整が行われる。

444は鉢形土器あるいは蓋である。口縁部は長く伸び、口唇先端は平坦面を呈する。口縁部内面と胴部との境には、断面三角形の突帯を巡らす。胴部は緩やかに湾曲しながらすぼまる。調整は、口縁部は内外面共にヨコ調整が施され、胴部は内外面共にタテ方向のミガキに近い丁寧なナデ調整を行うものである。

第60図445～453は壺形土器のミニチュア土器及び小型土器である。445は短頸壺形土器の直行する口縁を呈し、肩部はなだらかである。446～449は壺形土器を模したミニチュア土器である。450～452は口縁部が短く外反する小型の壺形土器である。調整は、いずれもタテ方向のヘラナデ調整あるいはハケメ調整である。453は緩やかに湾曲しながらすぼまる土器である。胴部下半に凹盤状の平底がつく。調整は内外面共にナデ調整である。

第60図454～460は壺形土器の小型土器である。454・455はわずかに開く短い口縁部から胴部へ肩部が張る形態を呈する。456～460は口縁部が大きく外反し、肩部はいずれもなだらかに胴部に移行する土器である。

ウ 3号竪穴住居跡 (SH-03) (第61図～第64図、図版8)

(7) 住居跡構造

A・B-4区で検出された3号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約550cm×短辺約520cmで、検出面から床面までの深さは約35cmである。住居西側に長辺約100cm×短辺約80cmを測る小規模な張り出しを確認した。また、検出段階では確認できなかったものの、中央部にある掘り込みは、住居跡廃絶後に改めて造られた遺構であることが断面で明らかである。また、床面には33基のピットを検出した。そのうち北西壁から約140cm離れたP1及びP2と、南東壁から約70cm離れたP3及びP4を主柱と考え、4本柱の構造と認められる。

(f) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね2層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1から出土した。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3の出土遺物は1点である。また、478や462は住居跡廃絶後に一括廃棄されたものである。なお、378は1号竪穴住居跡と、出土土器のうち2点は2号竪穴住居跡と接合関係が認められる。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、小型土器、蓋で構成される。

甕形土器 (第62・63図 461～477)

461、462は口径約30cmを測り、口縁部が「く」の字状に長めに外反する中型土器である。口縁部内面と胴部の境界には明瞭な稜線が観察できる。463～465、471は口径約30cmを測り、口縁部は外反の度合いが弱い中型土器である。口縁部外面と胴部の境界ではヘラナテ調整 (463、464)、若しくは挿き上げ調整 (465、471) が施され、稜線は不明瞭である。466～470、474～477は小振りの甕形土器で、466～468の口径は約20cmである。466では口縁部が内湾し、467では口縁部の外反の度合いが強く、468では口縁部の外反の度合いが弱い土器である。474～477は底部である。474～476は底部内面が平坦な形態を呈し、脚が立ち気味である。

壺形土器 (第63・64図 478～484)

477、478は胴部が張り、胴部中央部に刻目を施す貼り付け突帯を1条巡らす土器である。478は口縁部が大きく外反するものである。483は径約4cmの平底である。

480、481、484は小型土器である。480は口縁部が直立し、481はわずかに開く口縁部形態を呈し、484は長胴形を呈する土器である。

鉢形土器 (第64図 485)

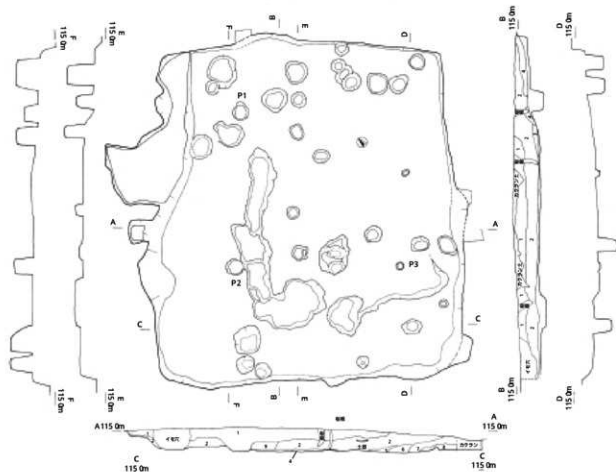
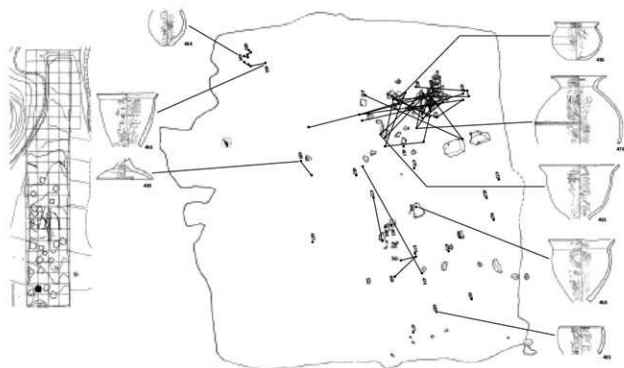
485は凹形浮文が胴部下側に貼付される土器である。口唇部は丸く取まり、口縁部はやや内傾し、胴部は張らずに、直線的にすぼまる形態を呈する。調整は、細い鉋状工具での強いナテ調整が行われる。

蓋 (第64図 489)

489は蓋である。把手部先端は欠損し、全体形は不明である。体部は緩やかに湾曲し、端部へ移行し、端部内面には平坦面を作出する。内面中央部には凹錐状の凹み部には、工具の回転痕が残り、鉋状工具で整形後に作ったことがわかるほど、調整は粗い。

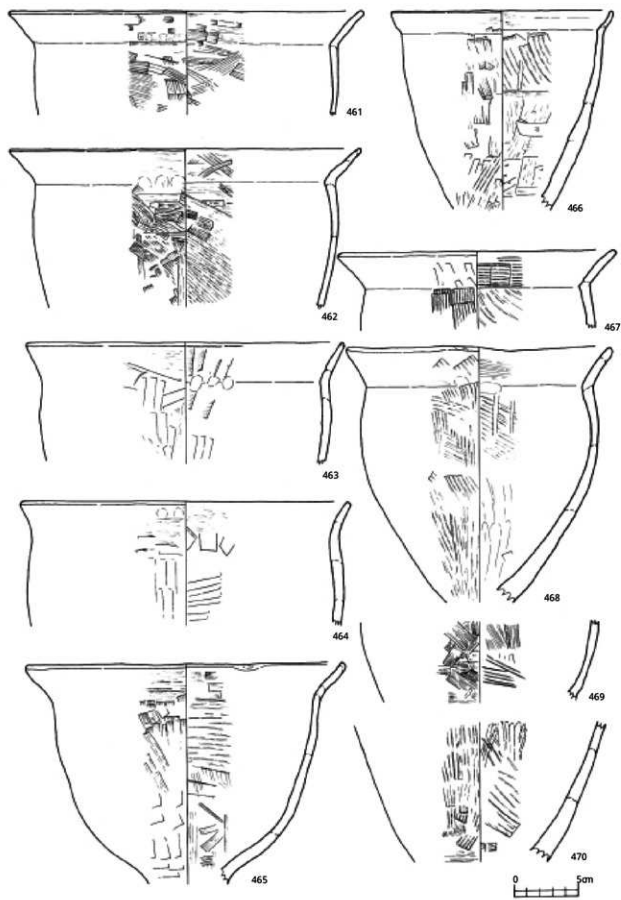
小型壺形土器 (第64図 486)

486の口縁部は短く、頸部から直接外へ開く。胴部は球形状を呈し、底部は直径約6cmの丸底に近い平底である。口縁部の器壁の厚さが薄いこと、内外面の色調が黄白色を呈すること、口縁部及

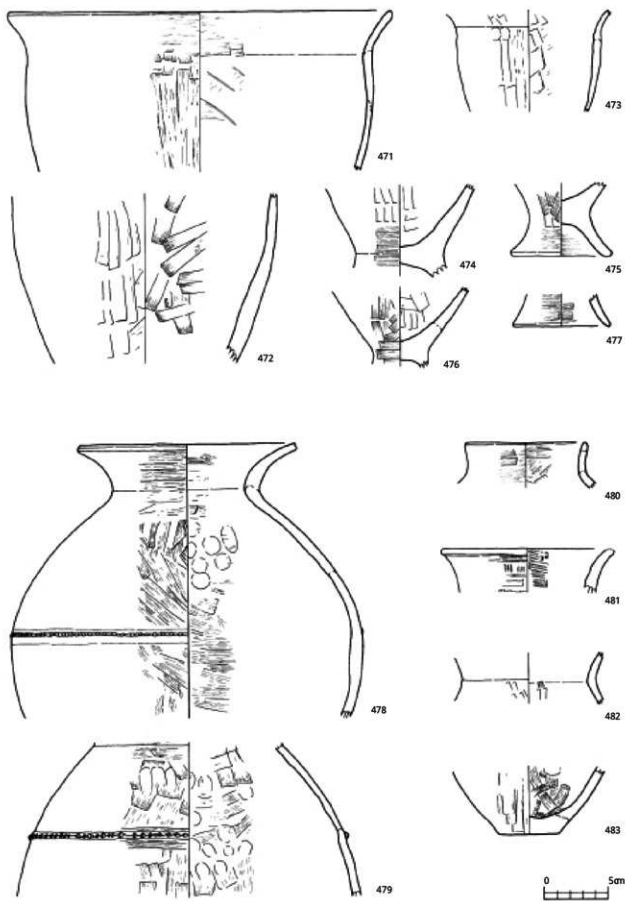


- 1 暗褐色粘質土（白色肌・黄色/灰土を含む）
- 2 暗赤褐色粘質土（黄色/灰土を多量に含む・白色肌を含む）
- 3 暗赤褐色粘質土（黄色/灰土を含む・炭化物を含む）
- 4 黄褐色粘質土（黄色/灰土を含む）
- 5 暗赤褐色粘質土（黄色/灰土を含む）
- 6 暗赤褐色粘質土（黄色/灰土を含む）
- 7 3と同じ
- 8 4と同じ
- 9 暗褐色粘質土（黄色/灰土を含む・炭化物を含む）

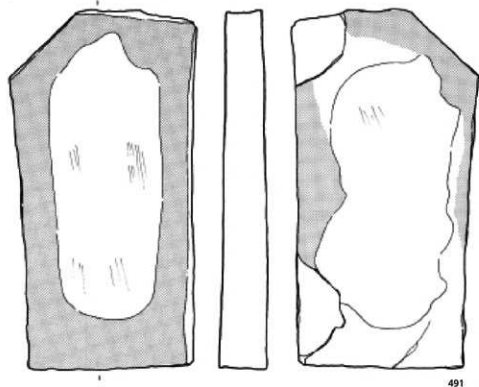
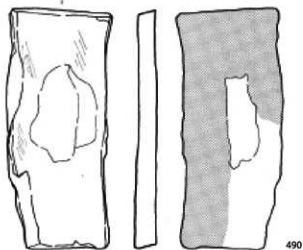
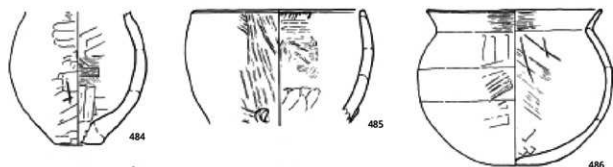
第6図 瑪壑穴住居跡検出・遺物出土状況



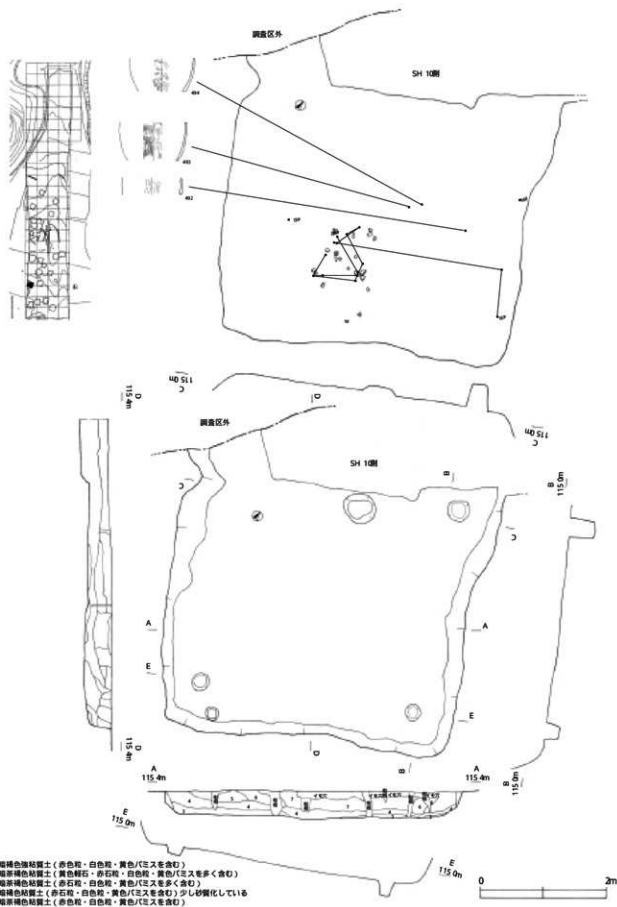
第62図 考野穴住居跡出土遺物(土器1)



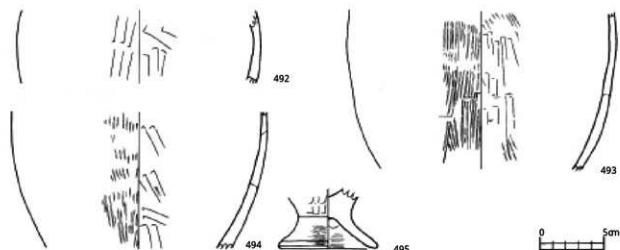
第63图 3号窑穴住居跡出土遺物(土器2)



第64図 珂野穴住居跡出土遺物(土器3・石器)



第65図 4号竪穴住居跡検出・遺物出土状況



第66図 4号竪穴住居跡出土遺物(土器)

び胴部最大径部にススの吸着がみられることなど、特徴的な土器である。

出土石器は、礫石及び鉄床石で構成される。

490, 491は扁平な石材を使用した礫石及び鉄床石である。表裏両面共に使い込んでいる。490では一面に、491では両面及び側縁部に鉄分の付着及び被熱による変色が視られる。

エ 4号竪穴住居跡 (SII-04) (第65・66図, 図版9)

(7) 住居跡構造

A-5・6区で検出された4号竪穴住居跡は、北側を10号竪穴住居跡に切れ、西側が調査区外に延びるため、全体形は不明である。上面観は隅丸長方形を呈し、規模は長辺約480cm(残存部)×短辺約470cmを測る。検出面から床面までの深さは約40cmである。残存部には付帯施設は確認できなかった。また、床面には5基の柱穴を認め、壁際の4基のうち3基は住居隅に、1基は中央部に検出された。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、資料化した遺物は、床面直上と埋土3、埋土2からの出土である。埋土3ではガラス製の小玉が出土している。また、493, 494は床面直上からの出土である。なお、床面直上出土遺物のうちの1点は15号竪穴住居跡埋土1の出土土器と接合関係が認められる。

出土土器は甕形土器(第66図 492~495)のみである。492~494は胴部である。調整は、492では丁寧なヘラナデ調整が、493・494ではタテ方向のハケメ調整の後ヘラナデ調整が行われる。ハケメ調整には、幅が太めの工具を使用するもの(494)と、幅が細めの工具を使用するもの(493)がある。495は脚が拡がり、脚の高さが低めの底部である。

オ 5号竪穴住居跡 (SH-05) (第67図～第70図, 図版8・9)

(7) 住居跡構造

B-5・6区で検出された5号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約480cm×短辺約470cmを測る。検出面から床面までの深さは約40cmである。張り出し及び中央掘り込みなどの付帯施設は確認できなかった。また、床面には27基のピットを検出した。そのうち北西壁から約70cm離れ、床面からの深さが約25cmあるP1と、南東壁から約70cm離れ、床面からの深さが約40cmあるP2を主柱と考えるか、あるいは北東壁から約240cm離れ、床面からの深さが約25cmあるP3と、南西壁から約150cm離れたP4を主柱と考える、いずれも2本柱の構造と認められる。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、埋土1は攪乱層である。出土した多くの遺物は、埋土上層の埋土2からの出土である。また、埋土下層の埋土3出土土器16点のうち7点は、埋土2出土遺物との接合関係にあり、埋土内の上下動の激しさを示す。また、中央部埋土3のサンプル上から水晶製の小玉が出土した。床面直上からの出土は少なく、資料化できなかった。407は2号竪穴住居跡と、埋土2出土土器のうち、3点は6号竪穴住居跡埋土3出土土器と、496は6号竪穴住居跡床面直上の出土土器と、埋土2出土土器のうち1点は11号竪穴住居跡埋土2の出土土器と接合関係が認められる。

出土土器は、甕形土器、壺形土器で構成される。

甕形土器 (第68図 496～502)

496は口径が約20cmを測る小振りの甕形土器である。口縁部内外面と胴部の境界では、明瞭な稜線が観察できる。調整は内外面共にヘラナデ調整が丁寧に行われている。497は中型の胴部下半部の甕形土器である。調整は、外面では細めのハケメ調整が、内面ではヘラナデ調整が行われる。498～502は底部である。499、501、502は脚の高さが高く、拡がる土器である。調整は外面では細めのハケメ調整やヨコ調整が行われ、内面ではヨコ調整が行われる。500は脚の高さが低く、短く立ち気味になる土器である。498では、径の小さな平底の立ち上がり部分に中空の輪状の脚台を付ける成形技法が明瞭に観察できた。

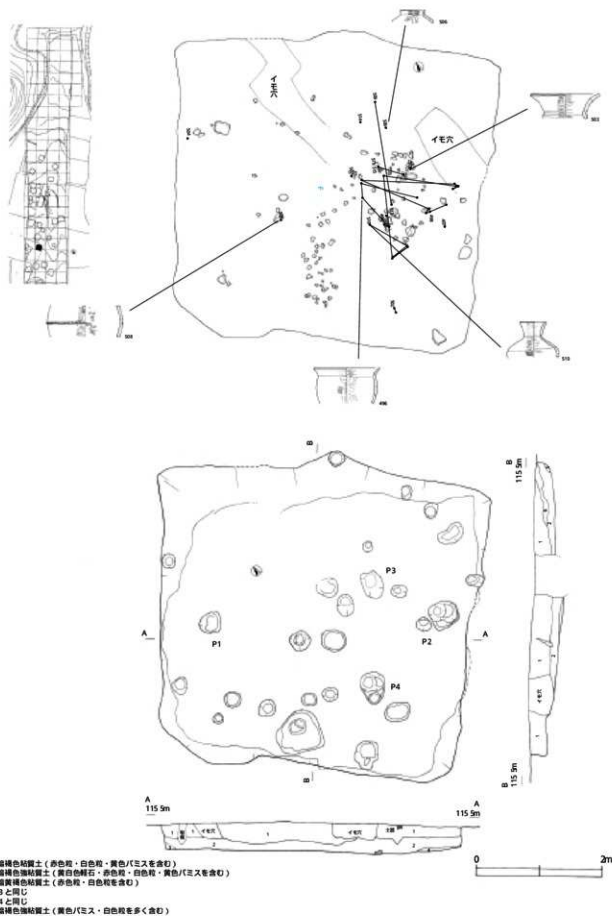
壺形土器 (第68図 503～515)

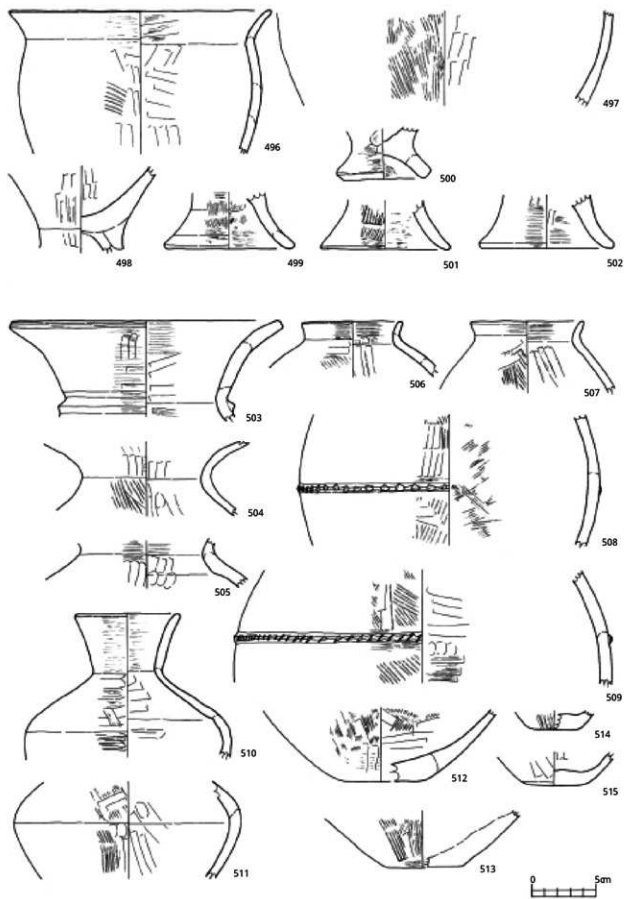
503～505、508、509は中型土器のうち長胴形の壺である。口縁部は大きく外反し、肩部はなだらかに移行し、胴部中央部には、刻目を施す貼り付け突帯を1条巡らすものである。調整は、口縁部外面ではヨコ調整の後にナデ調整を行い、胴部から胴部では、外面はハケメ調整の後にヘラナデ調整を行い、内面は斜方向のハケメ調整やヘラナデ調整を行う。

512、513、515は中型土器の底部である。512、513は底部が開き、胴部下半から直線的にすぼまり平底を呈する、胴部が球形に張る壺形土器の底部と考えられる。また、515は底部の立ち上がりが強く長胴形の壺形土器の底部と考えられる。

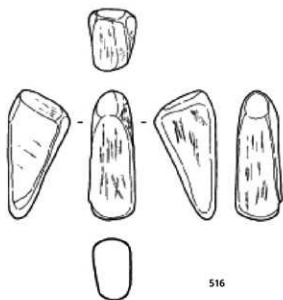
506、507は短頸壺形土器の小型土器である。わずかに開く口縁部は短い。506は肩部が張る形態を呈し、507は肩部がなだらかに胴部に移行する土器である。514は底径がかなり小さい平底を呈する。

510・511は肩部から胴部上半へ強く張る長頸壺である。頸部から口縁部は直線的にわずかに開く形態を呈する。胴部上半から下半へは、外面では緩やかに移行し、稜線は非常に不明瞭である。ま

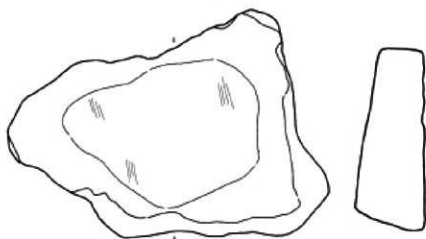




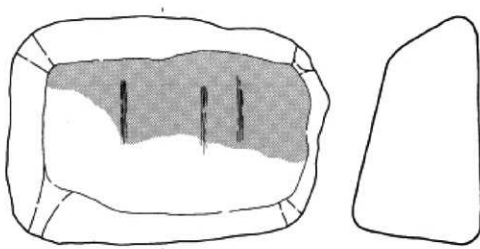
第68图 5号竖穴住居跡出土遺物(土器)



516

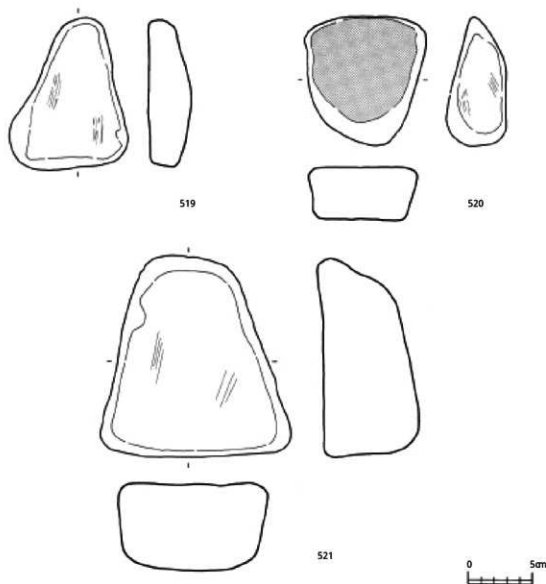


517



518

第69図 男野穴住居跡出土遺物(石器1)

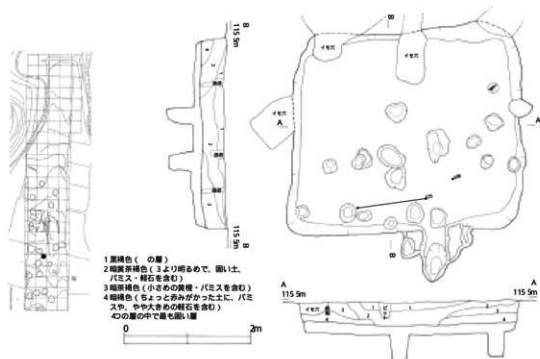


第7(図) 5号竪穴住居跡出土遺物(石器2)

た、内面では胴部上半に接合の際の痕跡が明瞭に残存し、しほりも観察できる。調整は、外面では細めのハケメ調整が全体に行われ、特に肩部から胴部上半ではミガキに近い丁寧なナデ調整が行われる。また、内面ではヘラナア調整が観察できる。

出土石器は、砥石及び鉄床石、銚石で構成される。

516、519、520は砥石と銚石の兼用品である。516では長さ約10cmの小円礫の3面を使用し、519、520では長さ約10cmの扁平な小円礫を使用し、共に、線条痕が観察できることから手持ち砥石と想定できる。また、被熱の影響と考えられる黒色化や赤色化が観られ、銚石への使用も考えられる。517、518は鉄床石と砥石の兼用品である。共に大きな礫を使用し、表面が黒色化、赤色化し、517では側面部に敲打痕があり、鉄床石への使用が考えられる。また、多くの線条痕が観察できる面があり、置き砥石としての使用も想定できる。520は長さ約15cm、厚さ約8cmの円礫の1面が凹部を呈し、敲打痕があり台石と想定できる。



第7図 6号壑穴住居跡検出状況



第7図 6号壑穴住居跡出土遺物(土器)

カ 6号壑穴住居跡 (SH-06) (第71・72図, 図版9・10)

(7) 住居跡構造

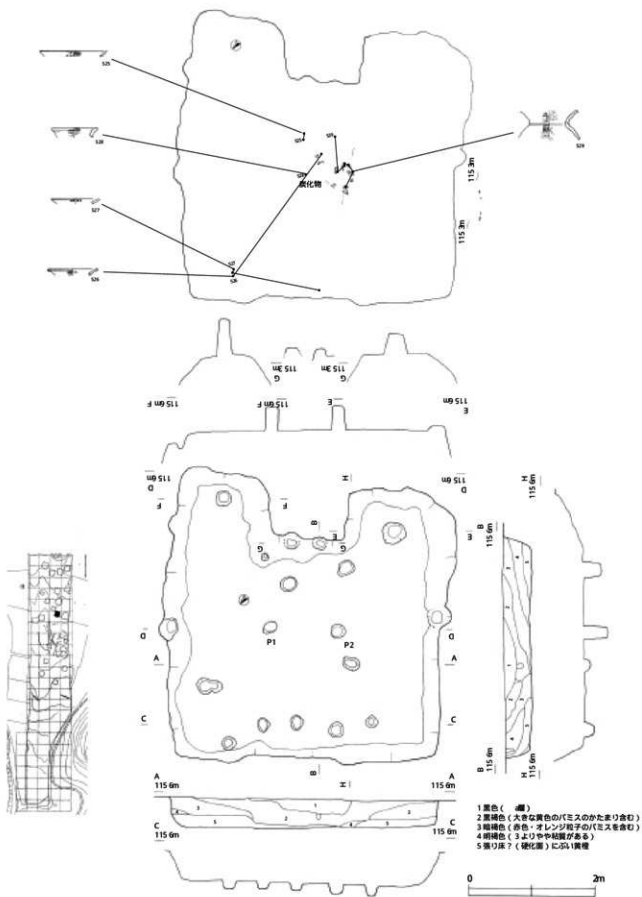
B-7区で検出された6号壑穴住居跡の上面視は隅丸方形を呈し、規模は長辺約370cm×短辺約320cmを測る。検出面から床面までの深さは約30cmである。南東壁側に三角形状に約80cm突き出した付帯施設を確認した。先端部には深さ約30cmの斜方向に延びるピットが併せて検出されており、性格は不明である。また、床面には18基のピットを検出し、いずれも東側に集中し、特異的である。また、北東壁から約200cm離れ、床面からの深さが約40cmあるP1とP2を主柱と考え、心心距離が約70cmと短い2本柱の構造と認められる。

(イ) 住居跡内出土遺物

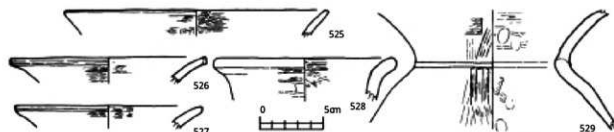
住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土下層の埋土3と埋土上層の埋土2からの出土で、床面直上の出土遺物はない。なお、496は、5号壑穴住居跡と接合関係が認められる。

出土土器は、変形土器、鉢形土器で構成される。

522は口径が約20cmの小振りの変形土器である。口縁部は短めで外反の度合いが弱く、口縁部内



第7図 写壺穴住居跡検出・遺物出土状況



第74図 7号竖穴住居跡出土遺物（土器）

外面と胴部の境界には明瞭な稜線が観察できない。523は小型の菱形土器胴部である。524は口径約15cmの小型の鉢形土器である。口唇内面は内傾し、胴部は緩やかに弯曲する土器である。

キ 7号竖穴住居跡（SH-07）（第73・74図、図版10）

(7) 住居跡構造

B-8区で検出された7号竖穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約460cm×短辺約430cmである。検出面から床面までの深さは約45cmである。南東側には、北側に長辺140cm×短辺110cmと、南側に長辺170cm×短辺60cmを測る張り出しと、それぞれ1基ずつのピットを検出した。この張り出しについては、住居構造での主柱配置から考えると、建築当初から想定された施設と想定でき、「長辺130cm×短辺70cmの掘り残し部分がある」と認識するのが正確である。また、北東側と南西側では厚さ約20cmの張り床が検出された。

床面には18基のピットを検出した。そのうち北西壁から約200cm離れ、床面からの深さが約35cmあるP1とP2が主柱と考え、心心距離が約110cmある2木柱の構造と認められる。この主柱軸上の両壁際には深さの浅い小ピットを検出した。また、北西壁から約50cm離れて壁に沿って柱穴の列状配置を確認した。

(f) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土上層の埋土2から出土した。床面直上や埋土下層の埋土3からの出土遺物は少なく、いずれも碎片である。出土遺物は住居中央部に集中する傾向がある。なお、他の住居跡と接合関係にある遺物は認められなかった。

出土土器は、菱形土器、壺形土器で構成される。

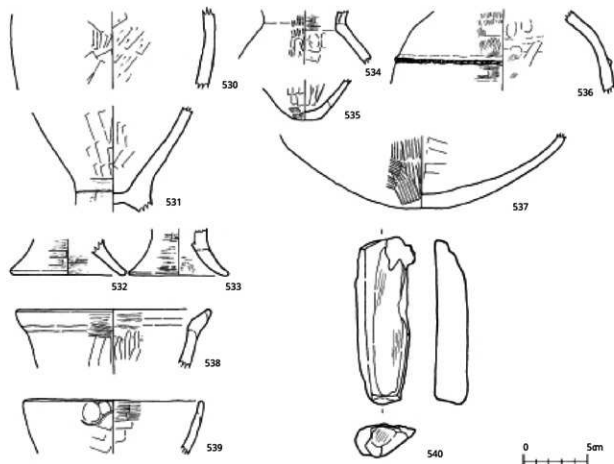
菱形土器（第74図 528）

口径約15cmを測る、口縁部が短く外反する長胴形の小型の菱形土器である。調整は、口縁部がヨコ調整、胴部上端がヨコ方向のヘラナデ調整である。

壺形土器（第74図 525～527、529）

525、529は中型土器である。525は直線的に開く口縁部の先端部分である。529は口縁部が大きく外反し、長胴形を呈する土器である。525では調整が内外面共にヨコ調整を行い、529ではタテ方向のハケメ調整の後にナデ調整を行う土器である。

526、527は小型土器である。いずれも口縁部が大きく外反し、調整は内外面共にヨコ調整を行う土器である。



第7図 8号竪穴住居跡出土遺物(土器・石器)

ク 8号竪穴住居跡 (SH-08) (第75・76図, 図版11)

(7) 住居跡構造

A-8区で検出された8号竪穴住居跡は、西側が調査区外に延びるため、全体形は不明である。上面視は隅丸方形を呈し、規模は長辺約690cm(残存部)×短辺約660cmを測る。検出面から床面までの深さは約50cmである。付帯施設では、北側を除く三方には高さ約5cmのベッド状遺構があり、南側では幅約120cmを測る。一段下がった部分の範囲は長辺約510cm×短辺約390cmを測る。東側に長辺140cm×短辺110cm、深さ約10cmを測る小規模な掘り込みを確認した。床面には20基のピットを検出した。そのうち、東壁から約330cm離れ、床面からの深さが約30cmあるP1及びP2を主柱と考える2本柱の構造と、西壁から約210cm(残存部)離れたP3及びP4と東壁から約240cm離れたP5及びP6を主柱と考える4本柱の構造とが認められる。このことから、住居構造を変更した建て替えがあったと想定できる。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土上層の埋土2からの出土である。床面直上の出土遺物は1点のみで、埋土下層の埋土3の出土遺物は少なく、いずれも破片である。なお、他の住居跡と接合関係にある遺物は認められなかった。

出土土器は、変形土器、壺形土器、小型土器で構成される。

変形土器(第76図 530~533)

いずれも小振りの甕形土器である。530、531は長胴形を呈し、調整は内外面共にタテ方向のヘラナテ調整を行う。532、533は脚が広がる底部である。532は脚の高さが低い土器である。

甕形土器（第76図 536・537）

536は小振りの土器のうち胴部が球形に張る壺である。胴部中央部には貼り付け突帯を1条巡らす。537は大振りの底部で、直径約6cmを測る丸底を呈する特異的な土器である。

小型土器（第76図 534、535、538、539）

538は口径約15cmを測る、口縁部が短く外反する長胴形の甕形土器である。調整は、口縁部がヨコ調整、胴部上端がタテ方向のヘラナテ調整である。534、535は甕形土器である。

534では肩部がなだらかに胴部へ移行する。535は特に小さな平底を呈する。539は鉢形土器で、口縁部は丸く収まり、口縁部はやや直立し、胴部は緩やかにすぼまる形態を呈する。

出土石器のうち資料化できたのは1点である。

540は棒状の石材を使用した砥石及び鋳石である。正面及び端部を使い込み、線条痕が確認できる手持ちの砥石である。また、もう一方の端部には被熱による変色が観られ鋳石の兼用品と考えられる。

ケ 9号竪穴住居跡（SH-00）（第77図～第81図、図版11・12）

(7) 住居跡構造

A-3・4区で検出された9号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約580cm×短辺約560cmを測る。検出面から床面までの深さは約60cmである。住居跡四辺それぞれに間仕切りのある、規模が概ね長辺約180～200cm×短辺約100～120cmを測る張り出しを6か所確認した。西側3か所の張り出し部には概ね長辺約140～160cm×短辺約70～80cm、深さ約10cm測る凹み状の土坑を検出した。この張り出しについても、7号竪穴住居跡と同様に建築当初から想定された施設と考えられる。中央竪穴部の規模は、長辺約320cm×短辺約300cm、張り出し部からの深さは約20cmを測る。竪穴部の北西壁際に、壁帯溝と呼ぶには幅が約70cmと広い深さ約10cmの凹み状の付帯施設を検出した。この凹みの中央部側に接して長辺約60cm×短辺約30cmの範囲に凝固した焼土が発見された。

また、床面には18基のピットを検出した。そのうち竪穴部の北西壁から約160cm離れ、北東及び北西壁際にある心心距離が約220cm、床面からの深さが約60cmと30cmあるP1とP2が主柱と考えられる2本柱の構造と認められる。また、張り出し部から7基のピットを、中央竪穴部の3隅で5基のピットを検出した。さらに、北西壁際に並んで発見された心心距離が約100cmある2基のピットは、出入口の可能性がある。

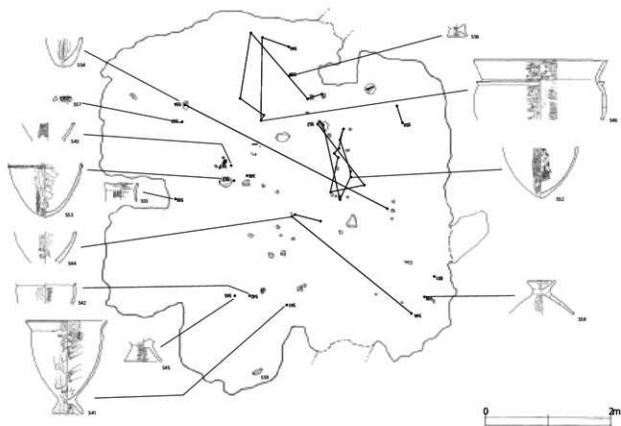
(8) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね4層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土上層の埋土1及び埋土2の出土である。床面直上及び埋土下層の埋土3の出土遺物は少なく、いずれも碎片である。なお、315は1号竪穴住居跡と接合関係が認められる。

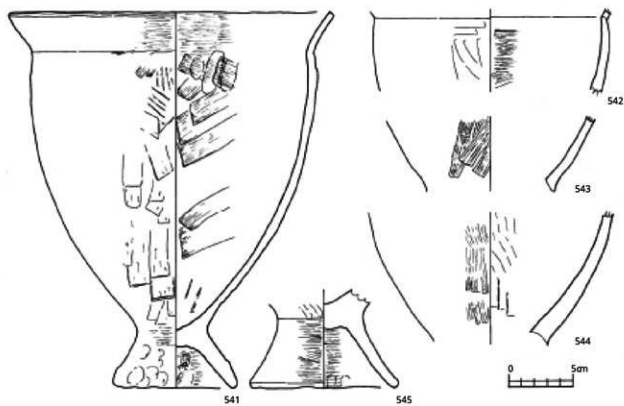
出土土器は、甕形土器、壺形土器、小型土器、蓋で構成される。

甕形土器（第78・80図 541～546）

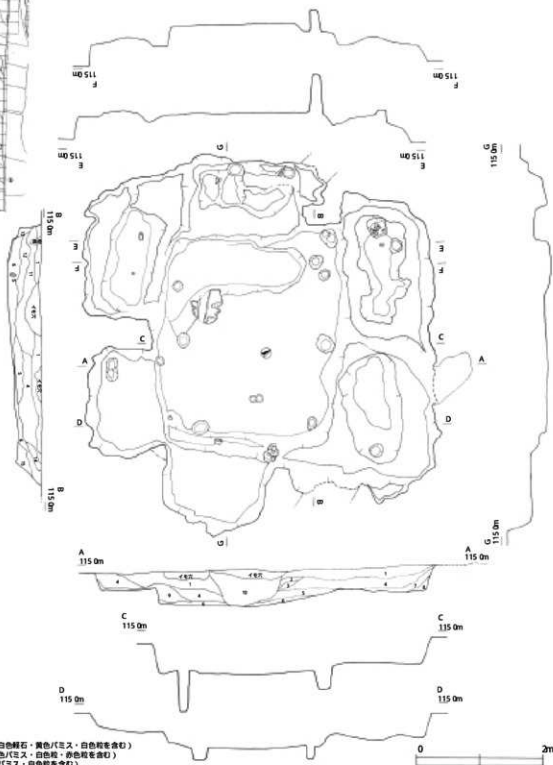
546は二重口縁甕である。口径直径43cmを測る。口縁部は長めに外反し、短い鋸がつく。口縁部



第7図 9号竪穴住居跡遺物出土状況

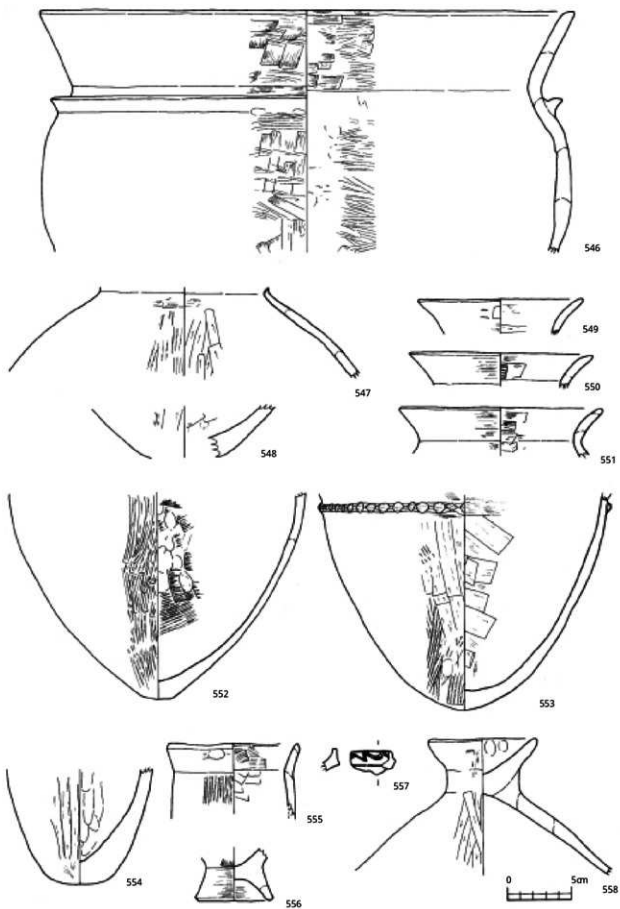


第7図 9号竪穴住居跡出土遺物(土器1)

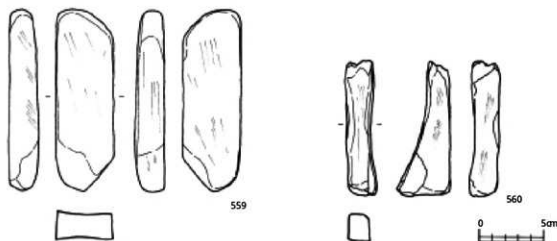


- 1 珪質褐色粘質土 (黄白色軽石・黄色/バニス・白色粒を多く含む)
 - 2 珪質褐色粘質土 (黄色/バニス・白色粒・赤色粒を多く含む)
 - 3 珪質褐色粘質土 (黄色/バニス・白色粒を多く含む)
 - 4 珪質褐色粘質土 (黄色/バニス・白色粒を多く含む)
 - 5 珪質褐色粘質土 (白色粒・黄色/バニスを多く含む)
 - 6 珪質褐色粘質土 (白色粒・黄色/バニスを多く含む)
 - 7 珪質褐色粘質土 (黄色/バニス・白色粒を多く含む)
- ※ 5 之上部
- 8 珪質褐色粘質土 (黄色/バニス・黄白色軽石を多く含む)
 - 9 珪質褐色粘質土 (黄白色軽石・黄色/バニス・赤色粒・白色粒を特に多く含む)
 - 10 珪質褐色粘質土 (黄白色軽石・黄色/バニス・赤色粒・白色粒を特に多く含む)
 - 11 珪質褐色粘質土 (赤色粒・白色粒・黄色/バニスを多く含む)
 - 12 珪質褐色粘質土 (黄白色軽石・黄色/バニス・赤色粒を多く含む)
 - 13 珪質褐色粘質土 (白色粒・赤色粒を多く含む)
 - 14 珪質褐色粘質土 (黄白色軽石・黄色/バニス・赤色粒を多く含む)
 - 15 珪質褐色粘質土 (黄色/バニス・白色粒を多く含む)

第 79 図 9号竪穴住居跡検出状況



第 80 图 9 号竖穴住居跡出土遺物 (土器 2)



第8図 9号竪穴住居跡出土遺物(石器)

内面と胴部の境界の稜線は不明瞭である。口縁内外共にヨコ調整の後にヨコ方向のヘラナデ調整を、胴部外面ではタテ方向のミガキに近い丁寧なナデ調整を、胴部内面ではヨコ方向のヘラナデ調整を行う。

541・545は中型土器で、541は口縁部は外反の度合いが弱く、口縁部内面と胴部の境では指頭押川調整を行い、境界の稜線は不明瞭である。また、口縁部外面と胴部の境界には、口縁部ではヨコ調整を強く行うため明瞭な稜線が観察できる。545は脚が広がり、脚の高さが高く、底部内面に突起がつく底部である。

542～544は小振りの土器胴部である。胴部外面にはタテ方向のハケメ調整の後、タテ方向あるいはヨコ方向のヘラナデ調整が観察できる。

壺形土器(第80図 547～554)

547は中型土器のうち胴部が球形に張る壺形土器である。549～551は小型土器のうち大きく外反する口縁部である。548、552、553は中型土器のうち長胴形の壺形土器である。548では径約4cmの平底で、直線的に立ち上がる。552、553、554は直線的にすはまる胴部下半部である。

小型土器(第80図 555～556)

555は口縁部が短く外反する壺形土器である。外面ではタテ方向のハケメ調整、内面ではヨコ方向のヘラナデ調整を行う。556は底部内面が平坦な脚が立ち気味の底部である。

その他(第80図 557)

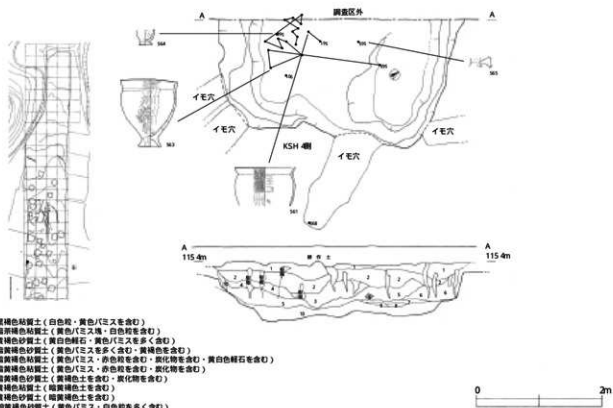
557は外面に構描きを模した波状文を施す二重口縁壺形土器の口縁部である。

蓋(第80図 558)

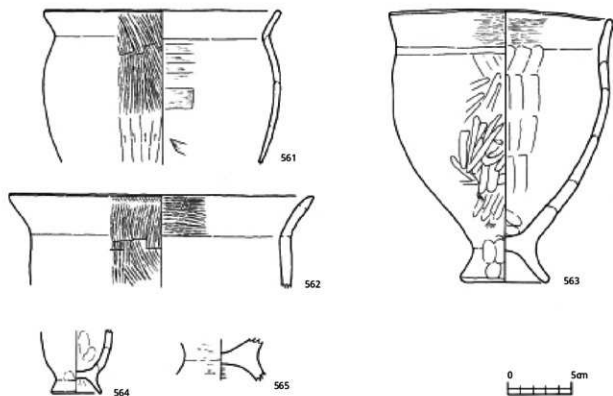
558は皿部内面中央部が若干凹み、最終ナデ調整が甘いことから、蓋と判断したが、脚台付き皿形土器の可能性もある。

出土石器は、砥石及び鉄床石、鈍石で構成される。

559は砥石、鉄床石及び鈍石の兼用品である。扁平な石材を使用し、表裏面及び2側面の4面では多くの線条痕が観察できることから手持ち砥石と想定できる。また、表裏面では被熱の影響と考えられる黒色化や赤色化が観られ、鉄床石への使用も考えられる。さらに、先端部では敲打痕が多



第 8 図 10号竪穴住居跡検出状況



第 8 図 10号竪穴住居跡出土遺物 (土器)

数観察でき、鋸石への使用も考えられる。560は扁平な石材を使用し、3面で線条痕が観察でき、よく使い込まれていることから砥石と想定できる。石材は石英粗面岩の一種である「犬草石」の可能性が高い。

コ 10号竪穴住居跡 (SH-10) (第82・83図, 図版13)

(7) 住居跡構造

A-6区で検出された10号竪穴住居跡は、西側が調査区外に延びるため、全体形は不明である。上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約370cm×短辺約320cm(残存部)を測る。検出面から床面までの深さは約80cmである。南西壁側に幅約40cm、床面からの高さ約20cmを測るベッド状遺構が確認できた。一段下がった部分の範囲は長辺約320cm(残存部)×短辺約300cmを測る。北東壁際に長辺140cm(残存部)×短辺100cm、深さ約10cmを測る、上面観が楕円形を呈する小規模な掘り込みを確認した。また、床面にはピットを1基も確認できなかった。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね4層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物が10数点出土したのは、本遺跡では最多の住居跡の一つである。また、埋土下層の埋土3ではガラス製の小玉が出土している。なお、他の住居跡と接合関係にある遺物は認められなかった。

出土土器は、甕形土器、ミニチュア土器で構成される。

甕形土器 (第83図 561~565)

561~563, 565は小振りの甕形土器である。561は口径が約20cm, 562は口径が約25cmある。いずれも口縁部は短めで外反の度合いが弱く、口縁部外面には掻き上げ調整が施され、胴部との境界の稜線は不明瞭である。また、口縁部内面と胴部の境界では、ハケメ調整を一旦切り、明瞭な稜線が観察できる。563は口縁部がほぼ直立し、胴部が若干張り、胴部下半から底部へは直線的にすばまり、底部内面は平坦な、脚は短く立ち気味の底部である。

ミニチュア土器 (第83図 564)

564は甕形土器を模した土器である。

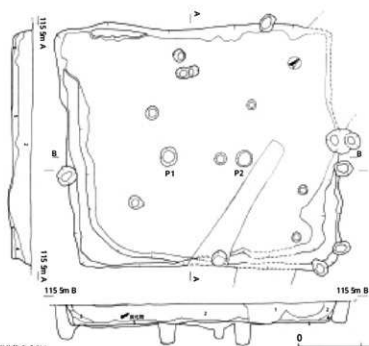
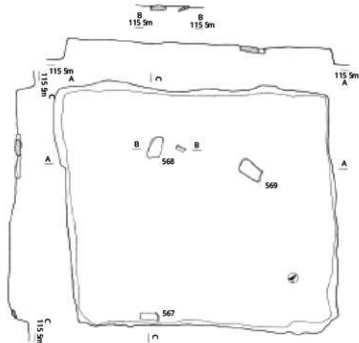
サ 11号竪穴住居跡 (SH-11) (第84図~第86図, 図版13)

(7) 住居跡構造

C-6・7区で検出された11号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約430cm×短辺約390cmを測る。検出面から床面までの深さは約35cmである。また、張り出し及び中央掘り込みなどの付帯施設は確認できなかった。床面には19基のピットを検出した。そのうち、南西壁と北東壁からそれぞれ約160cm離れ、床面からの深さが約30cmあるP1とP2を主柱と考え、心心距離が約120cmある2本柱の構造と認められる。この主柱軸上の両壁際には深さの浅い小ピットを検出した。この構造は7号竪穴住居跡と同様である。

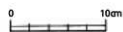
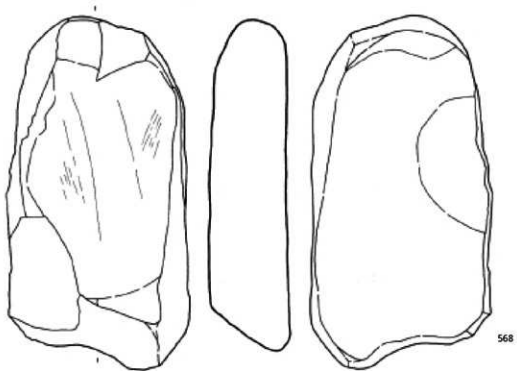
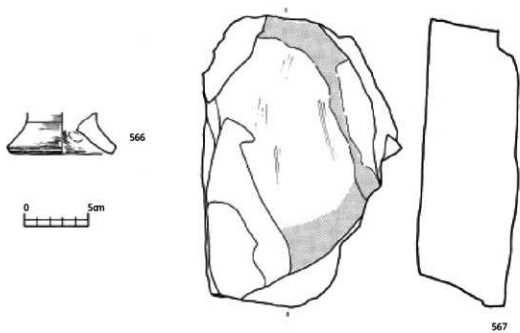
また、北東壁際に並んで発見された心心距離が約120cmある2基のピットは、出入口の可能性がある。

この住居跡では、床面から約10cm上の面で、鉄床石と考えられる台石が3個設置されたままで出

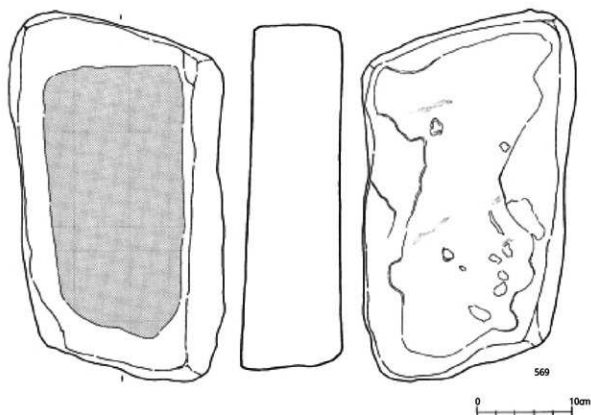


- 1 イモ穴
 2 黒褐色粘質土 (黄色/珪石・白色粉を含む・炭化物を含む)
 3 4 之間
 4 暗褐色粘質土
 5 暗黄褐色粘質土 (黄白色珪石・黄色/珪石を含む)
 6 黄褐色粘質土 (赤色粉・白色粉・黄色/珪石を含む)

第 84 図 1号竪穴住居跡検出状況



第8图 1号竖穴住居跡出土遺物(土器・石器1)



第86図 1号竪穴住居跡出土遺物(石器2)

土したことから、この面が第2次生活面と想定した。第1次生活面廃絶後に、上面の規格を全く変えずに、第2次生活面を造った貴重な例である。

(f) 住居跡内出土遺物(第85・86図)

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土上層の埋土2の出土である。第1次生活面の床面直上及び第2次生活面の床面直上の出土遺物は少なく、いずれも碎片である。なお、5号竪穴住居跡と接合関係が認められる土器が1点出土した。

出土土器は、変形土器(566)である。

566は脚が低く、短い底部である。底部内面は平坦な形態を呈し、径の小さな平底の立ち上がり部分に中空の輪状の脚台を付ける成形技法が明瞭に観察できた。

出土石器は、砥石及び鉄床石で構成される。

567～569は鉄床石と砥石の兼用品である。567は厚さ約10cm、568は厚さ約8cm、569は厚さ約10cmを測る、いずれも重量のある大きな礫を使用し、表面が黒色化あるいは赤色化など変色していること、また側面部に敲打痕があることから、鉄床石への使用が考えられる。また、567では表面の1面が、568、569ではそれぞれ表裏面の2面が良く使い込まれ、多くの線条痕が観察できることから、置き砥石としての使用も想定できる。

シ 12号竪穴住居跡 (SH-12) (第87図～第91図, 図版13・14)

(7) 住居跡構造

A・B-6・7区で検出された12号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約520cm×短辺約440cmを測る。検出面から床面までの深さは約50cmである。付帯施設では張り出し部とベット状遺構、中央竪穴部を検出した。

北西壁と南西壁にはそれぞれに間仕切りのある張り出しを3か所確認した。規模は、北西壁の張り出しでは長辺約200cm×短辺約100cmを測る。北西壁の張り出しには、さらに南西側に、長辺約80cm×短辺約70cmを測る小規模な張り出しを検出した。この張り出しについては、7号竪穴住居跡や9号竪穴住居跡とは異なり、住居構造での主柱配置から考えると、建築当初には想定されていた施設と想定できる。

住居跡四辺には床面からの高さが約20cmのベット状遺構があり、南西側では幅約100cm、北西側では幅約130cm、北東側では幅約170cm、南東側では幅約120cmである。このベット状遺構の中には、四方のうち、北東側には長辺約180cm×短辺約80cmを、南東側には長辺約260cm×短辺約80cmを、南西側には長辺約310cm×短辺約80cmを、深さそれぞれ約5cm～10cmを測る凹み状の土坑を検出した。

四方をベット状遺構に囲まれる中央竪穴部の規模は、隅丸長方形を呈し、長辺約250cm×短辺約200cmを測る。

また、床面には13基のピットを検出した。そのうち中央竪穴部の4隅にあるP1、P2、P3、P4が主柱と考えられ、4本柱の構造と認められる。床面からの深さはP1が約30cm、P2が約25cm、P3が約20cm、P4が約15cmである。

また他のピットは、張り出し部ではそれぞれ1基ずつ合計3基を、北東壁側の両隅にそれぞれ1基ずつ検出した。さらに、南西側のベット状遺構上で、並んで発見された心心距離が約120cmある2基のピットは、出入口の可能性がある。

(8) 住居跡内出土遺物

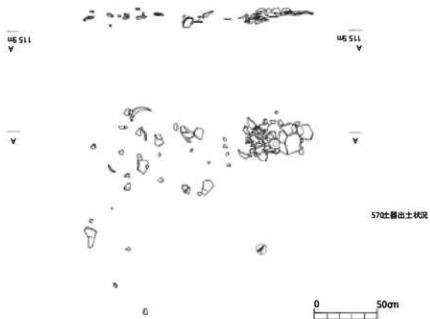
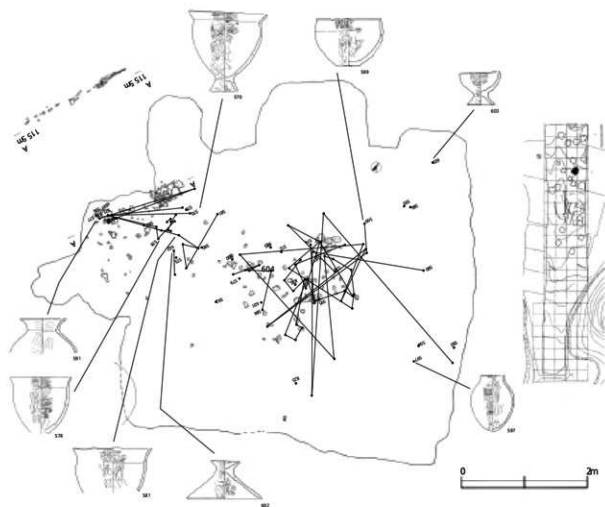
住居跡内の埋土は概ね4層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1や埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物はほとんどなく、埋土下層の埋土3の出土遺物のうち資料化できるものはなかった。また、埋土2の出土遺物の多くが埋土1の出土遺物と接合関係にあり、埋土内の上下動の激しさを示す。また、581や599など埋土内出土土器には完形に復元できたものがあり、住居廃絶後の一括廃棄と考えられる。なお、他の住居跡と接合関係にある遺物は認められなかった。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、小型土器、蓋で構成される。

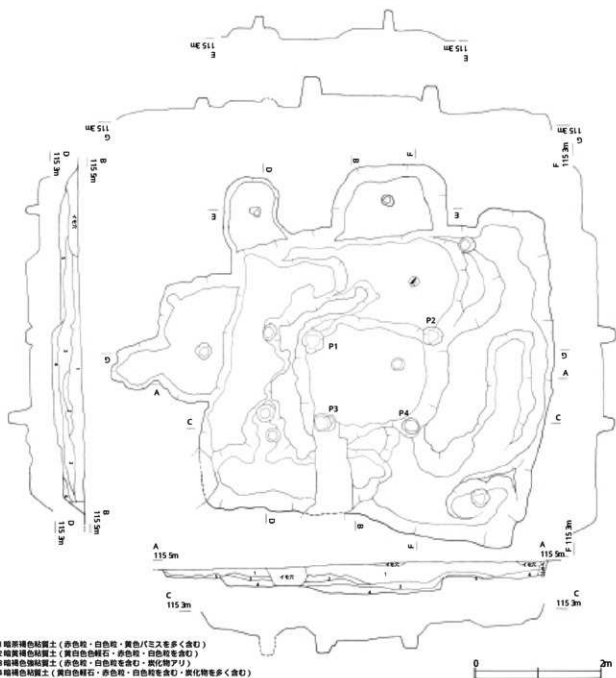
甕形土器 (第89・90図 570～588)

570～572、574、577は口縁部が「く」の字状に長めに外反する土器である。

570、571、577は口径約30cmの中型土器である。胴部がやや張り、底部へ緩やかにすぼまる土器である。口縁部内外面と胴部の境界には、明瞭な稜線が観察できる。570の底部では、脚が立ち気味で脚の高さが高く、底部内面が特に平坦な形態を呈する。調整は、口縁部内外面にはヨコ調整を、胴部外面にはタテ方向のハケメ調整の後、ヘラナデ調整を行い、胴部内面ではヘラナデ調整を丁寧に行い、胴部下端部ではタテ方向のケズリ調整が残る土器である。577には胴部下外面に楕円状



第 8 图 12号整穴住居跡遺物出土状況



- 1 緑黄褐色粘質土 (赤色粒・白色粒・黄色パミスを多く含む)
- 2 緑黄褐色粘質土 (黄白色粒石・赤色粒・白色粒を含む)
- 3 緑褐色粘質土 (赤色粒・白色粒を含む・炭化物を多く含む)
- 4 緑褐色粘質土 (黄白色粒石・赤色粒・白色粒を含む・炭化物を多く含む)
- 5 緑黄褐色粘質土 (アカカヤ汚染土)
- 6 緑黄褐色粘質土 (黄色パミス・白色粒を含む)

第 88 図 12号 竪穴住居跡検出状況

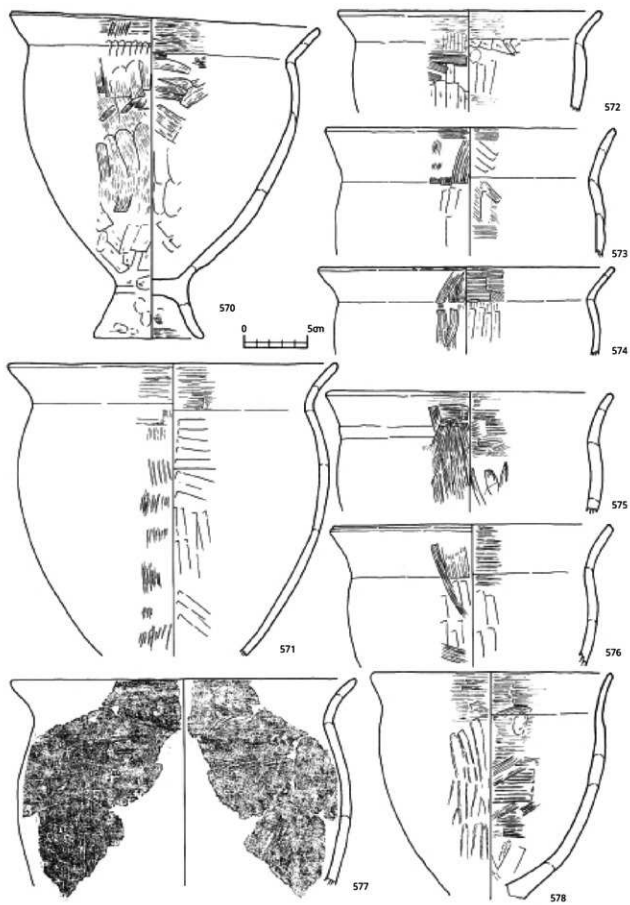
の線刻が視られる。

572, 574は口径は約20cmを測る小振りの甕形土器である。いずれも口縁部外面と胴部の境界では、指頭押圧調整やヨコ方向のヘラナデ調整を行うため、稜線は弱い土器である。

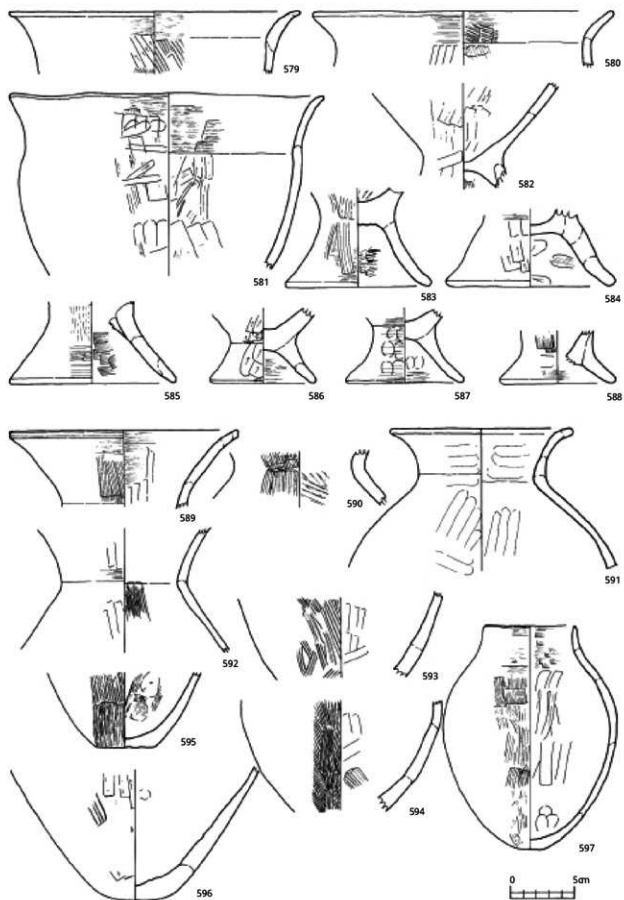
573, 575, 576, 578~581は口縁部の外反の度合いが弱い土器である。

580, 581は中型土器で、573, 575, 576, 578, 579は小振りの甕形土器である。口縁部外面と胴部の境界では、抜き上げ調整 (573, 576) や、ハケメ調整 (575) や、ヨコ調整 (578, 580) や、ヘラナデ調整 (579, 581) を行い、稜線は不明瞭である。また、内面の稜線は明瞭である。

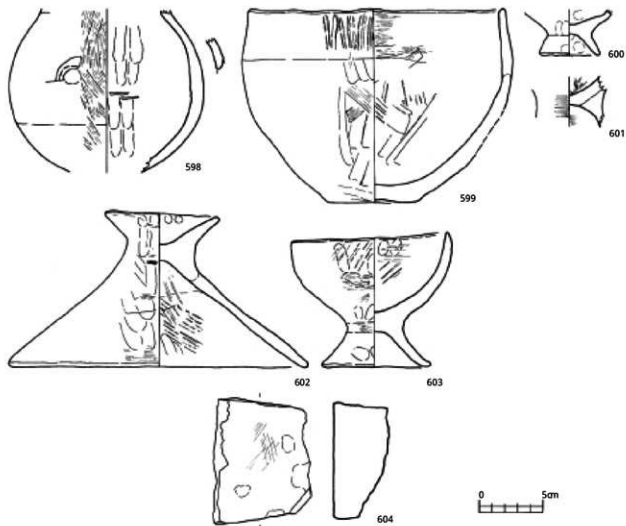
582~588は底部である。



第89图 12号竖穴住居跡出土遺物(土器1)



第9图 12号竖穴住居跡出土遺物(土器2)



第9図 12号竪穴住居跡出土遺物(土器3・石器)

583, 585~588は脚が広がる土器である。583, 585, 587では脚の高さが高く, 588では低い。583, 586, 587では底部内面が平坦な形態を呈する。

584は脚が立ち気味の上器で, 脚の高さが高く, 底部内面が特に平坦な形態を呈する。

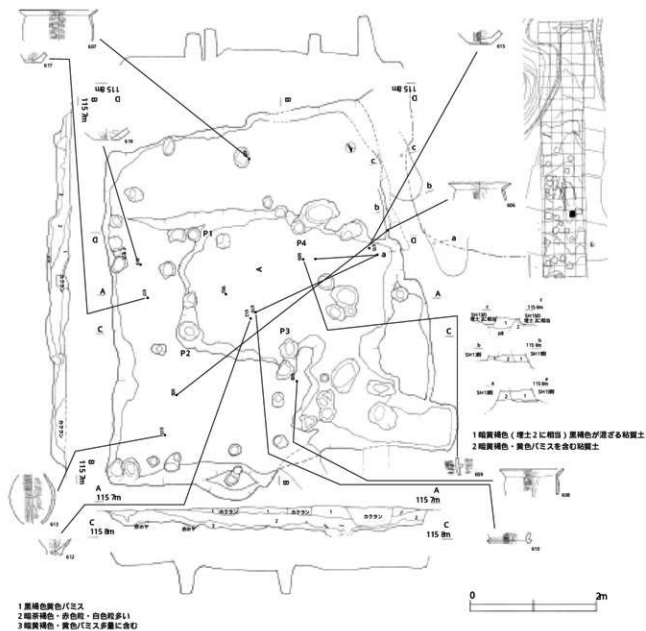
壺形土器(第90・91図 589~598)

589~596は長胴形を呈する中型土器である。

589, 592は口縁部が直線的に開くもの, 591は肩部から頸部に立ち上がり, 短く開く口縁部がつくものである。調整は, 589では, 口縁部外面に上半はヨコ調整を, 下半はタテ方向のハケメ調整を行い, 591では全体的にナデ調整を丁寧に行う。593, 594は胴部下半, 595, 596は底部である。593, 594では緩やかにすぼまり, 595, 596では直線的にすぼまる。調整は, 外面ではタテ方向のハケメ調整を, 内面ではタテ方向のヘラナデ調整を行う。

597は長胴形を呈する小型土器で, 口縁部は直立し, 胴部は緩やかに底部へすぼまる。

598は胴部が球形に張る小型土器である。口縁部及び底部が欠落し, 全体形は不明である。胴部中央部には貼り付け突帯などを施さず, 胴部下半は直線的にすぼまる。胴部中央には外径約2cm, 内径約1cmを測る, 焼成後にあけられた穿孔がある。



第92図 13号竪穴住居跡検出状況

鉢形土器 (第91図 509・603)

509では口径約27cm、底径約13cm、高さ約17cmを測る。口縁部は直立し、胴部は直線的にすぼまり、底部は平底である。外面に突帯を施さず、口縁部外面にはタテ方向のハケメ調整を行い、胎土にクロウンモが含まれることが特徴的であり、438と異なる点である。

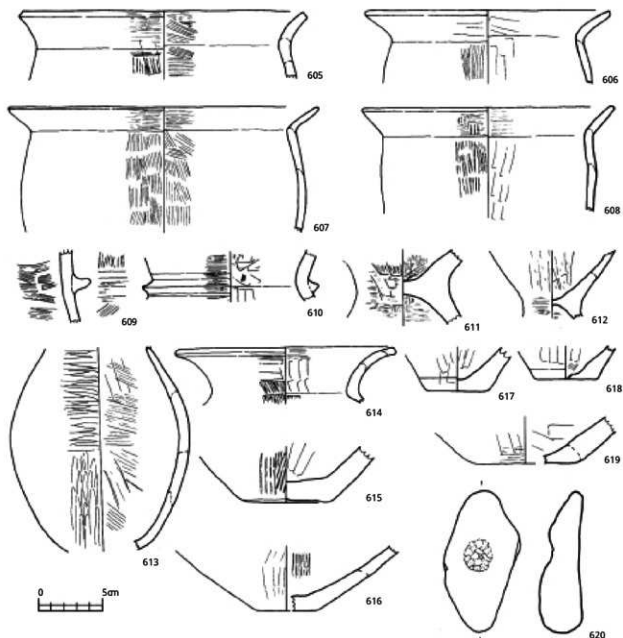
603は塊形土器に、底部内面が平坦な形態を呈し、脚が広がる底部がついたものである。

蓋(602)には、大きなつまみがあり、先端部に向け直線的に延びる形態を呈する。

出土石器(604)は、鉄床石である。厚さ4cmを測る石材を使用し、よく使い込んでいる。被熱による変色及び敲打痕が視られる。

ス 13号竪穴住居跡 (SIH-13) (第92・93図, 図版15)

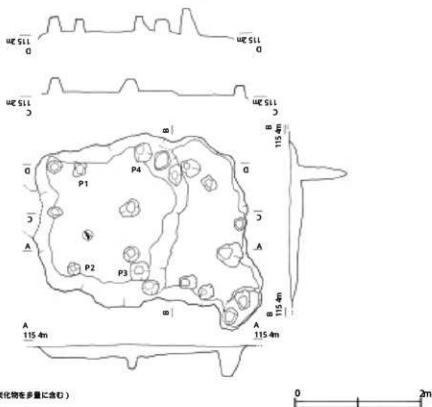
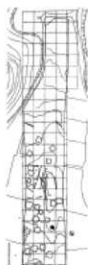
(7) 住居跡構造



第9図 13号竪穴住居跡出土遺物(土器・石器)

C・D-8区で検出された13号竪穴住居跡の上面視は隅丸方形を呈し、規模は長辺約580cm×短辺約470cmを測る。検出面から床面までの深さは約25cmである。付帯施設ではベッド状遺構及び中央竪穴部を検出した。ベッド状遺構は、住居跡の三方で検出された。北東側では幅約120cm、北西側では幅約110cm、南西側では幅約200cm、床面からの高さが約10cmを測る。ベッド状遺構に囲まれる中央竪穴部は、隅丸長方形を呈し、規模は長辺約350cm×短辺約210cmを測る。また、床面には40基のピットを検出した。そのうち中央竪穴部の北西側の両角のP1とP2、南西側中央のP3及び北東側中央のP4が主柱と考え、4本柱の構造と認められる。床面からの深さはP1が約40cm、P2が約45cm、P3が約35cm、P4が約35cmを測る。また、南西壁から約40cm離れて柱穴の列状配置を確認した。

(4) 住居跡内出土遺物



図は単一層
1 陥坑褐色シルト質粘質土（黄色/ヒズ酸量多量・炭化物を多量に含む）

第94図 14号竪穴住居跡検出状況



第95図 14号竪穴住居跡出土遺物（土器）

出土土器は、甕形土器、壺形土器で構成される。

甕形土器（第93図 605～612）

605では短めの口縁部が、606～608では長めの口縁部が、「く」の字状に外反する。口縁部内外面共にヨコ調整を行う。609, 610は二重口縁甕で、短い鐙がつく。611, 612は胴部下半から底部である。底部内面は平坦な形態を呈する土器である。

壺形土器（第93図 613～619）

614は大きく外反する口縁部、613は長胴形小型土器、615～619は小さな平底である。615, 616, 619では立ち上がりが大きく開き、617, 618では立ち上がりが強い土器である。

出土石器（620）は、棒状の石材を使用し、表面に敲打痕の集中部がある。鉈石である。

ガラス裂小玉（902）が埋土下層の埋土3から出土している。

セ 14号竪穴住居跡（SH-14）（第94・95図、図版15）

(7) 住居跡構造

C-6区で検出された14号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約330cm×短辺約

270cmを測る。検出面から床面までの深さは約10cmである。南東壁側に幅約110cmのベッド状遺構を確認した。また、竪穴部の規模は、長辺約260cm×短辺約230cmを測る。床面には19基もの数多くのピットを検出した。竪穴部の4隅にあるピットP1、P2、P3、P4が主柱と考え、心心距離が約100cm～190cmと短い4本柱の構造と認められる。

木住居跡は、床面から検出面までの高さが、他の住居跡と比べ非常に低いことを考えると、本来の住居跡のうち中央竪穴部とベッド状遺構の部分である可能性が高い。

(4) 住居跡内出土遺物 (第95図)

G21は鉢形土器の口縁部である。器壁が薄い。G22は甕形土器の胴部下半で、接合痕がよく観察できる。

ソ 15号竪穴住居跡 (SH-15) (第96・97図, 図版15)

(7) 住居跡構造

D-8区で検出された15号竪穴住居跡は、東側が調査区外に延びるため、全体形は不明である。上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約580cm(残存部)×短辺約510cmを測る。検出面から床面までの深さは約30cmである。調査区境にて張り出し様のラインがみられたが詳細は明らかでなく、また、中央掘り込みなどの付帯施設は確認できなかった。

床面には49基もの数多くのピットを検出したものの、2本柱あるいは4本柱など規格性のある構造を認められなかった。いずれのピットも深さがほぼ同じで、主柱と支柱の区別ができない構造は、1号竪穴住居跡と同様である。また、住居跡周辺には数多くのピットが検出され、いずれのピットも竪穴住居跡の埋上状況と同様のため、同時期のものと判断できた。したがって、住居跡内で検出した柱穴が、住居に伴うものなのかも判断ができない。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1と埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物や、埋土下層の埋土3の出土遺物は少なく、いずれも破片である。この埋土層ではガラス製の小玉が出土している。なお、1号竪穴住居跡と接合関係が認められる土器が1点出土した。

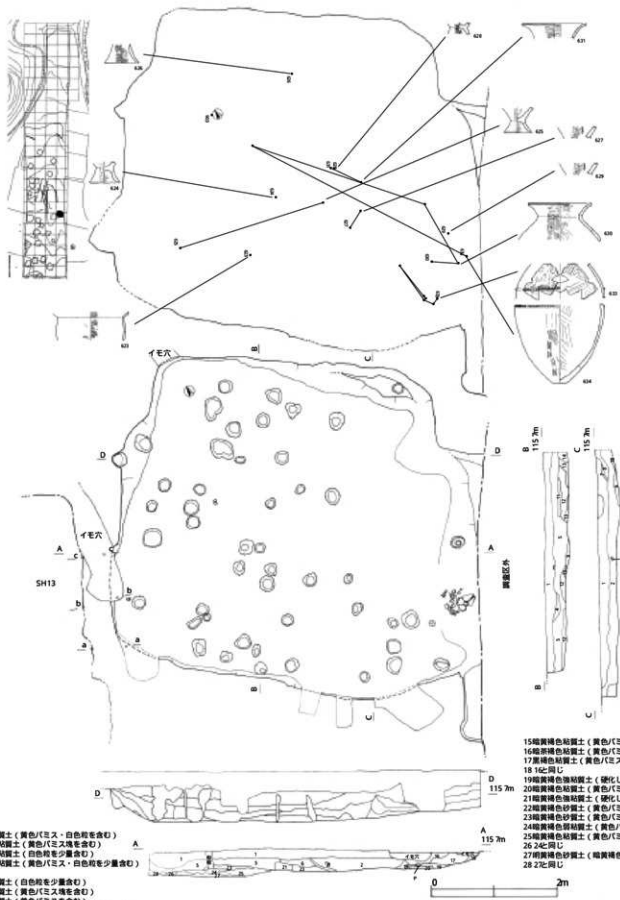
出土土器は、甕形土器、壺形土器で構成される。

甕形土器 (第97図 G23～G29)

G23は口縁部が「く」の字状に長めに外反し、胴部があまり張らない土器である。口縁部内外面共に胴部の境界には明瞭な稜線が観察できる。調整は、内外面共にハケメ調整の後にヘラナデ調整を行うものである。G24～G29は底部である。G24～G26、G29ではいずれも脚の高さが高く、脚が広がる形態である。G24、G25、G28では底部内面が平坦な形態を呈し、G24では特に平坦である。

壺形土器 (第97図 G30～G34)

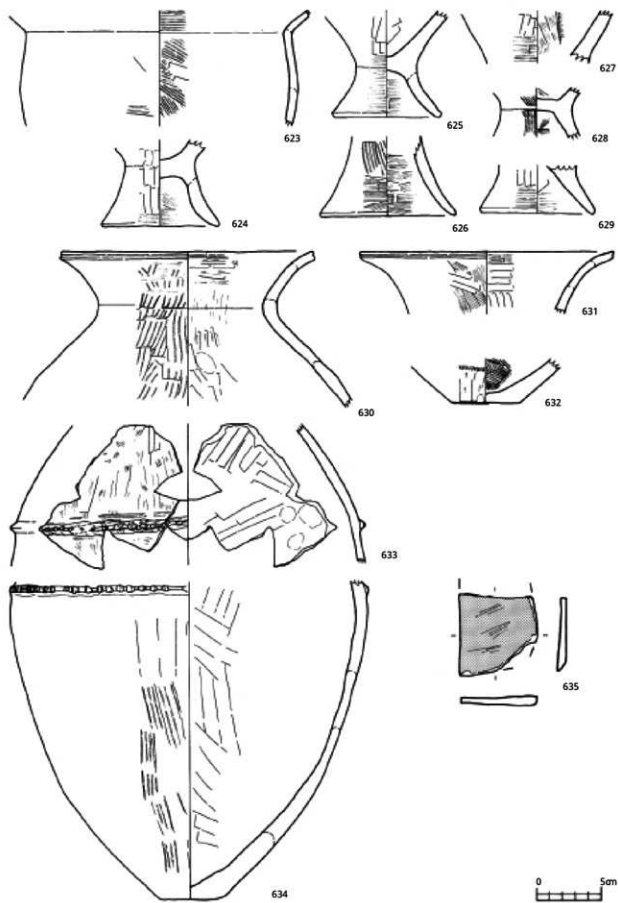
いずれも長胴形を呈する中型土器である。G30、G31では口縁部は大きく外反する。G30では肩部はいずれもなだらかに胴部に移行する。G33、G34では胴部中央部に刻目を施す貼り付け突帯を1条巡らす。G34では胴部下半は直線的にすぼまる。G32では胴部下半へ開き、小さな平底を呈する底部である。調整は、外面は幅がための工具を使用したハケメ調整の後にヘラナデ調整を行い、内面はヘラナデ調整を行うものである。



- 1 暗褐色粘質土（黄色バミス・白色粒を含む）
- 2 暗茶褐色粘質土（黄色バミスを含む）
- 3 暗茶褐色粘質土（白色粒を少量含む）
- 4 暗茶褐色粘質土（黄色バミス・白色粒を少量含む）
- 5 2と同一
- 6 茶褐色粘質土（白色粒を少量含む）
- 7 暗褐色粘質土（黄色バミスを含む）
- 8 茶褐色粘質土（黄色バミスを含む）
- 9 暗茶褐色砂質土（黄色バミスを極めて少量に含む）
- 10 黄褐色砂質土
- 11 黄褐色粘質土（硬化した土）
- 12 暗茶褐色粘質土（黄色バミスを少量含む）
- 13 黄褐色粘質土（茶褐色土を含む）
- 14 12と同一

- 15 暗黄褐色粘質土（黄色バミスを含む）
- 16 暗茶褐色粘質土（黄色バミスを少量含む）
- 17 黄褐色粘質土（黄色バミス・白色粒を少量含む）
- 18 16と同一
- 19 暗黄褐色粘質土（硬化した土）
- 20 暗黄褐色粘質土（黄色バミスを極めて少量に含む）
- 21 暗黄褐色粘質土（硬化した土）
- 22 暗黄褐色砂質土（黄色バミスを少量に含む）
- 23 暗黄褐色砂質土（黄色バミスを少量含む）
- 24 暗黄褐色粘質土（黄色バミスを少量含む）
- 25 暗黄褐色粘質土（黄色バミスを少量・茶褐色土を含む）
- 26 24と同一
- 27 暗黄褐色砂質土（暗黄褐色土を含む）
- 28 27と同一

第9図 15号竪穴住居跡検出状況



第9图 19号竖穴住居跡出土遺物(土器・石器)

出土石器は、砥石及び鉄床石である。

G35は扁平な石材を使用し、線条痕が観察できる面が凹面になることから手持ち砥石と想定できる。また、表裏両面共に被熱の影響と考えられる黄色化や赤色化や、鉄分の付着が観られることから鉄床石への使用も考えられる。石材は石英粗面岩の一種である「天草石」の可能性が大きい。

タ 16号竪穴住居跡 (SH-16) (第98・99図、図版16)

(7) 住居跡構造

A-5区で検出された16号竪穴住居跡は、東側が調査区外に延びるため、全体形は不明である。上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約570cm×短辺約160cm(残存部)を測る。検出面から床面までの深さは約60cmである。北東壁には張り出しを検出した。南側が残存せず、全体形は不明である。規模は長辺約220cm(残存部)×短辺130cmである。この張り出しには、不整形な深さ約10cmの凹み状の上坑があった。

この住居跡は、生活面が2回にわたり構築されている可能性が、ピットの埋土が住居跡埋土最下層土を切っている状況などから指摘できる。

このうち第2次生活面では、長辺約160cm(残存部)×短辺50cm(残存部)、深さ約10cmの中央竪穴部と推定できる土坑を、調査区境際で検出した。

床面には9基のピットを検出した。そのうち5基は第2次生活面検出時に壁面に沿って列状配置を確認し、1基は張り出し部にて検出したものの、全体像が判明せず、2本柱あるいは4本柱など規格性のある構造を認められなかった。また、第1次生活面検出時には調査区境際にて3基のピットを検出した。

(8) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1や埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3からの出土遺物は少なく、いずれも砕片である。埋土2ではガラス製小玉が2点(904, 905)出土した。なお、他の住居跡と接合関係にある遺物は認められなかった。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、ミニチュア土器で構成される。

甕形土器(第99図 636~642)

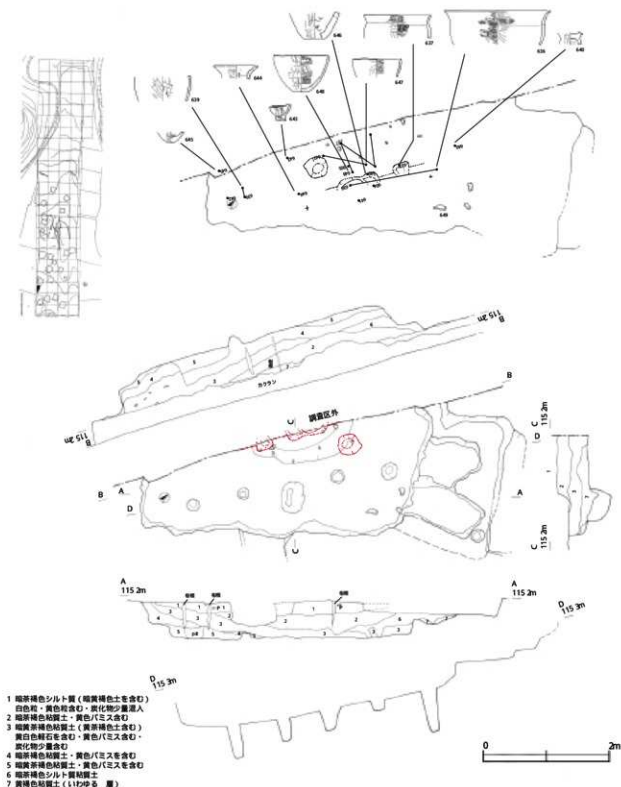
636は口径約30cmを測る中型土器である。口縁部は短めで外反の度合いが弱く、口縁部外面には掻き上げ調整が施され、稜線は弱い。口縁部内面と胴部の境界には、胴部上部部にヨコ方向の調整が強く行われるため明瞭な稜線が観察できる。

637~639は口径は約20cmを測る小振りの甕形土器である。637・638では口縁部は短めで外反の度合いが弱く、637では外面にヘラナア調整を、638では掻き上げ調整を行い、稜線は不明瞭である。639では調整はタテ方向のケズリ調整の後にヘラナア調整を行うものである。

640~642は底部である。642は脚が広がる土器である。640, 641は底部内面が特に平坦な形態のものである。

壺形土器(第99図 644~646)

644は肩部から頸部に立ち上がり、短く開く口縁部がつく土器である。調整はタテ方向のケズリ調整の後ヨコ調整を行うものである。

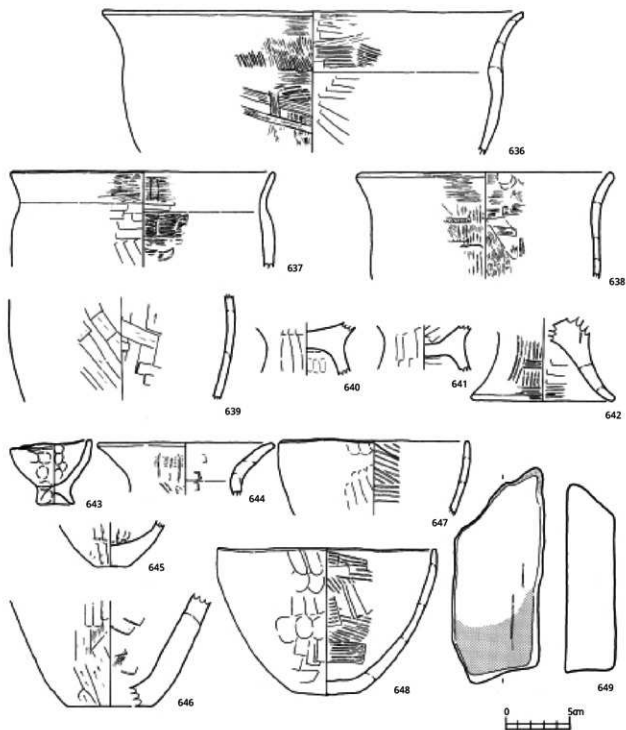


第98図 16号竪穴住居跡検出状況

615・616は底部である。小さな平底に立ち上がり強い胴部下半がつくものである。

鉢形土器 (第99図 617・618)

口径約15cm～17cmを測り、鉢形土器の中では小振りの土器である。口縁部は直立し、胴部は緩やかに弯曲しながら底部にすぼまる。底部は平底である。調整では、外面ではタテ方向のヘラナデ



第99図 16号竪穴住居跡出土遺物（土器・石器）

調整を、胴部下半外面ではタテ方向のケズリ調整を、内面ではための工具を使用したハケメ調整を行う。

ミニチュア土器（第99図 643）

643は脚台付き鉢形土器形土器のミニチュア土器である。口径約6cm、高さ約5cmを測る。口縁部は直立し、胴部は緩やかに湾曲しながら底部にすぼまる。

資料化した出土石器は砥石及び鉄床石のみ1点である。

649は厚さ4cmの扁平な石材を使用し、表面は使い込まれ、線条痕が観察できることから砥石と

想定できる。また、被熱の影響と考えられる黄色化や赤色化が認められることから鉄床石への使用も考えられる。

チ 17号竪穴住居跡 (SH-17) (第100・101図, 図版16・17)

(7) 住居跡構造

A-12・13区で検出された17号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は約460cm×約460cmを測る。検出面から床面までの深さは約30cmである。付帯施設では壁帯溝と炉跡を検出した。壁帯溝は北東壁から北西壁に沿って検出され、規模は幅約70cm×90cm、深さ約10cm～20cmの断面がU字形を呈す。炉跡は北東壁から約220cm、南東壁から約150cm離れた地点に、長径約80cm×短径約60cmの楕円形を呈する、深さ約15cmの1坑である。

床面には14基のピットを検出した。そのうち北西壁から約240cm離れ、床面からの深さが約40cmあるP1とP2を主柱と考え、中心距離が約120cmの2本柱の構造と認められる。また、北西壁から約150cm離れて柱穴の列状配置を確認した。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1や埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3からの出土遺物は少ない。なお、埋土2出土土器のうち、1点は18号竪穴住居跡埋土1の出土土器と、1点は19号竪穴住居跡埋土2の出土土器との接合関係が認められる。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器で構成される。

甕形土器 (第101図 650・652)

650・652は底部である。650では底部内面が特に平坦な形態を呈し、652では短く開き、脚に高さが高いものである。脚先端部には平坦面を作出するのが特徴である。

壺形土器 (第101図 651)

651は大きく外反する口縁部である。調整はヨコ調整の後にナデ調整を行うものである。

鉢形土器 (第101図 652)

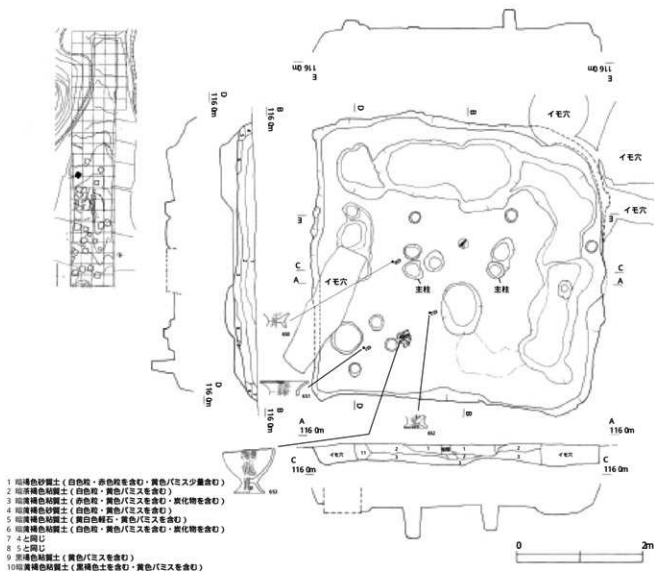
652は脚台付きの鉢形土器である。口径約16cm、底径約13cm、高さ約9.5cmを測る土器である。口縁部は直立し、胴部は緩やかに弯曲しながらすぼまり、脚が広がる。調整は脚部から口縁部にタテ方向のハケメ調整の後ナデ調整を行うものである。

ツ 18号竪穴住居跡 (SH-18) (第102図～第106図, 図版17・18)

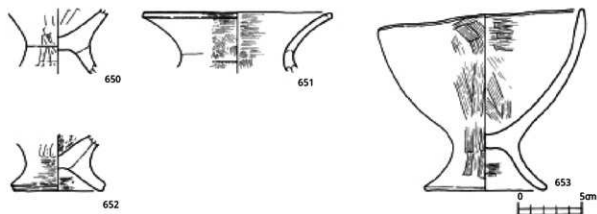
(7) 住居跡構造

A-14区で検出された18号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約460cm×短辺約430cmを測る。検出面から床面までの深さは約30cmである。南西側に長辺250cm×短辺50cmを測る張り出し1基を検出した。この張り出しについては、住居構造での主柱配置から考えると、建築当初から想定された施設と想定でき、「長辺約180cm×短辺50cmの掘り残し部分がある」と認識するのが正確である。

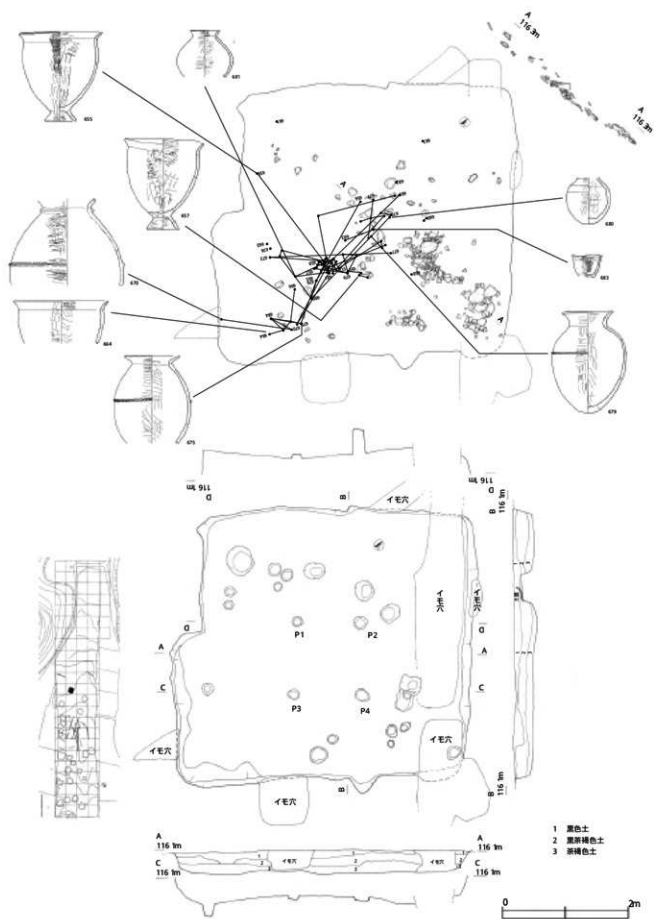
床面には22基のピットを検出した。そのうち北西壁から約180cm離れたP1及びP2と、南東壁から約130cm離れたP3及びP4を主柱と考え、4本柱の構造と認められる。



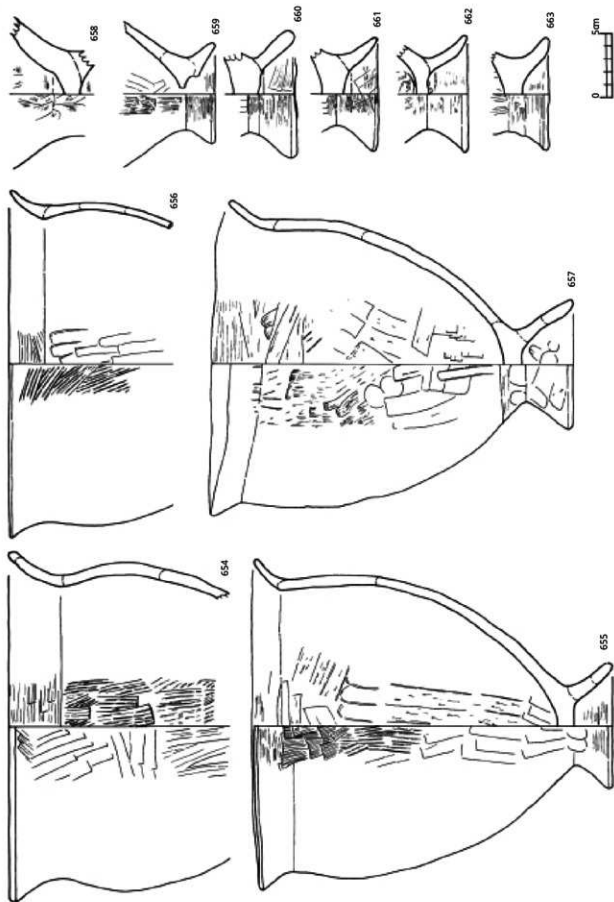
第10図 17号竪穴住居跡検出状況



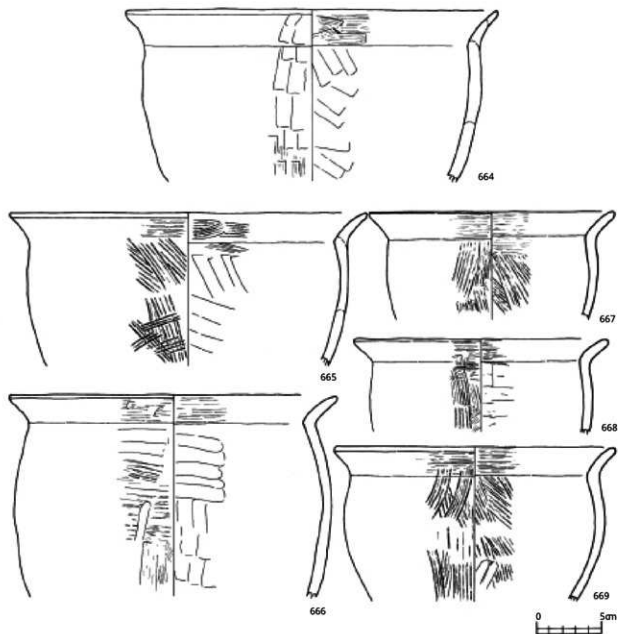
第10図 17号竪穴住居跡出土遺物（土器）



第10図 18号竪穴住居跡検出・遺物出土状況



第 10 组 1955 年出土器物 (土器 1)



第104図 18号竪穴住居跡出土遺物(土器2)

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1や埋土上層の埋土2の出土である。特に、埋土2の出土遺物は、完形に復元できたものが多く、住居廃絶後に一括廃棄されたものと想定される。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3からの出土遺物は少ない。なお、出土土器のうち1点は17号竪穴住居跡と、2点は、19号竪穴住居跡と接合関係が認められる。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器で構成される。

甕形土器(第103・104図 654~669)

654~657, 664, 665は口縁部は外反の度合いが弱い、口径約30cmを測る中型土器である。口縁部

外面と胴部の境界ではヘラナデ調整（654、664）や、胴部上端から口縁下部まで掻き上げ調整（655、657、665）、若しくはハケメ調整（656）が施され、稜線は不明瞭である。そのうち、654～656、664、665では胴部上端部と口縁下部の調整をいったん切っており、境界は明瞭な稜線が観察できる。また、657ではヨコ方向のヘラナデ調整が施されるため、稜線は不明瞭である。

666は口縁部が「く」の字状に長めに外反する口径約30cmを測る中型土器である。口縁部内外面にはヨコ調整を、胴部外面にはヨコ方向のハケメ調整の後、タテ方向のヘラナデ調整を、胴部内面ではヘラナデ調整を丁寧に行うものである。

667～669は口径は約20cmを測る小振りの甕形土器である。口縁部は「く」の字状に長めに外反し、口縁部内面と胴部の境界には明瞭な稜線が観察できる土器である。

658～663は底部である。657の底部は脚が立ち気味になり、655、652は脚が抜がる土器である。655、650、663は底部内面が特に平坦な形態のもの、662は底部内面に突起がつく形態のものである。658、659、660、662、663では径の小さな平底の立ち上がり部分に中空の輪状の脚台を付ける成形技法が明瞭に観察できた。

壺形土器（第105・106図 670～682）

670～679は中型土器のうち長胴形の壺形土器である。

器形的特徴としては、肩部から頸部に立ち上がり、短く開く口縁部がつき（671、675、679）、肩部はいずれもなだらかに胴部に移行し、胴部中央部には、刻目を施す貼り付け突帯を1条巡らすものである。胴部下半は緩やかにすはまるもの（675、677、579）と、直線的にすはまるもの（676、678）がある。底部は4cm～5cm程の小さめの底径の平底である。調整は、口縁部外面ではヨコ調整の後にナデ調整を行い、肩部から胴部では外面はハケメ調整を、内面は上半ではヨコあるいは斜方向のヘラナデ調整を、下半ではハケメ調整あるいはヘラナデ調整を行うものである。

特徴的な土器として670を挙げる事ができる。この土器は大振りの土器で、肩部と口縁部外面の境に、断面が三角形状を呈する無刻目突帯を1条巡らし、調整では胴部外面ではミガキに近い丁寧なナデ調整を行うものである。

小型土器（第106図 680～683）

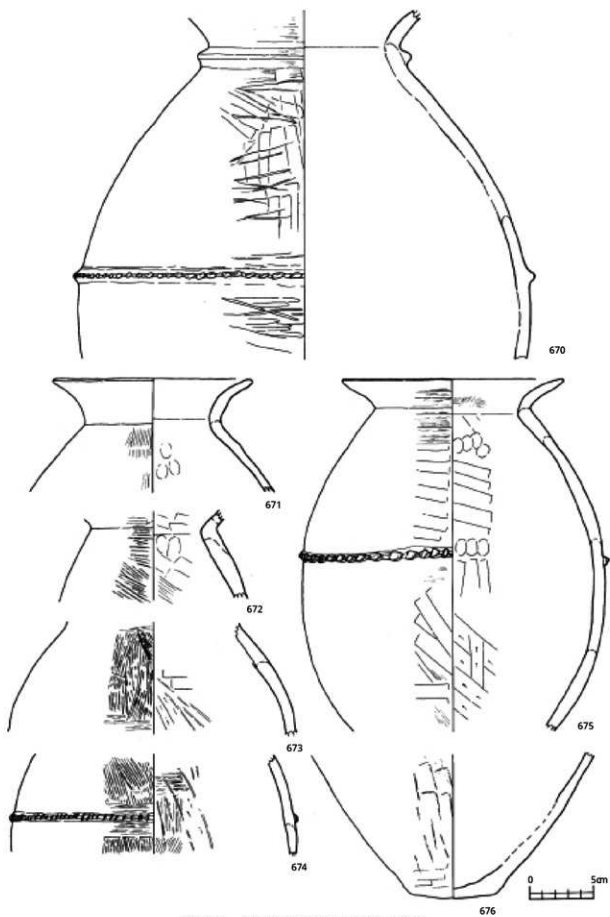
680は肩部から底部の土器で、長胴形の壺形土器である。調整は内外面共にタテ方向のケズリ調整の後に粗いナデ調整を行うものである。

681・682はわずかに開く短い口縁部から胴部へ肩部が張り、681は胴部が球形に張る形態を呈し、突帯は巡らさない土器である。調整は、681の外面ではヘラナデ調整を行い、内面では指頭圧調整とヘラナデ調整を行う。また、682の外面では共にタテ方向のハケメ調整を行い、内面ではタテ方向のハケメ調整を行う土器である。

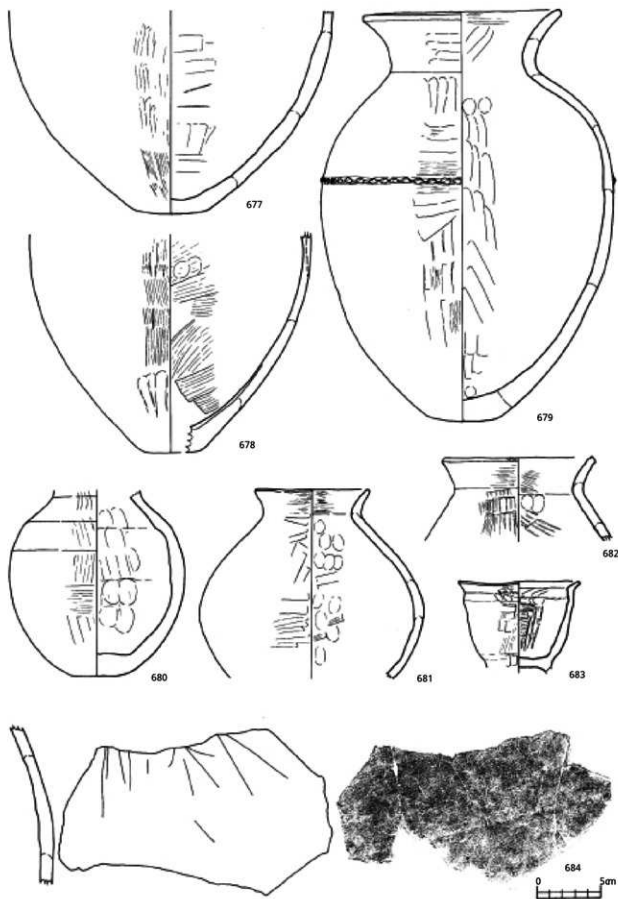
683は鉢形土器である。口縁部は「く」の字状に短めに外反し、口縁部内面と胴部の境界には明瞭な稜線が観察できる土器である。胴部はほぼ直立したまま直線的に底部に移行し、平底の立ち上がり部分に中空の輪状の脚台を付けるようである。調整は、外面ではタテ調整の後に指頭圧調整を行い、内面ではヘラナデ調整を行う。

線刻土器（第106図 684）

684は長胴形の壺形土器の胴部中央片である。胴部上半から続く線刻が10数本みられる。いずれも先の尖った工具による刻線である。描いた対象物は不明である。



第105圖 18号竅穴住居跡出土遺物(土器3)



第106图 18号竖穴住居跡出土遺物(土器4)

テ 19号竪穴住居跡 (SH-19) (第107図～第110図, 図版18)

(7) 住居跡構造

C-13区で検出された19号竪穴住居跡の上面観は剛丸方形を呈し、規模は長辺約480cm×短辺約470cmを測る。検出面から床面までの深さは約40cmである。張り出し及び中央掘り込みなどの付帯施設は確認できなかった。

床面には30基のピットを検出したものの、2本柱あるいは4本柱など規格性のある構造を認められなかった。いずれのピットも深さがほぼ同じで、主柱と支柱の区別ができない。また、住居跡周辺には数多くのピットが検出され、いずれのピットも竪穴住居跡の埋土状況と同様のため、同時期ものと判断できた。したがって、住居跡内で検出した柱穴が、住居に伴うものなのかも判断できない。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1や埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3からの出土遺物は少なく、資料化できたのは696の1点であった。特に、埋土2の出土土器では完形に復元できたものが多く、住居廃絶後に一括廃棄されたものと想定される。

なお、埋土2出土土器の中には18号竪穴住居跡埋土1の出土土器と、19号竪穴住居跡埋土2の出土土器と接合関係が認められるものがある。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、手づくね土器で構成される。

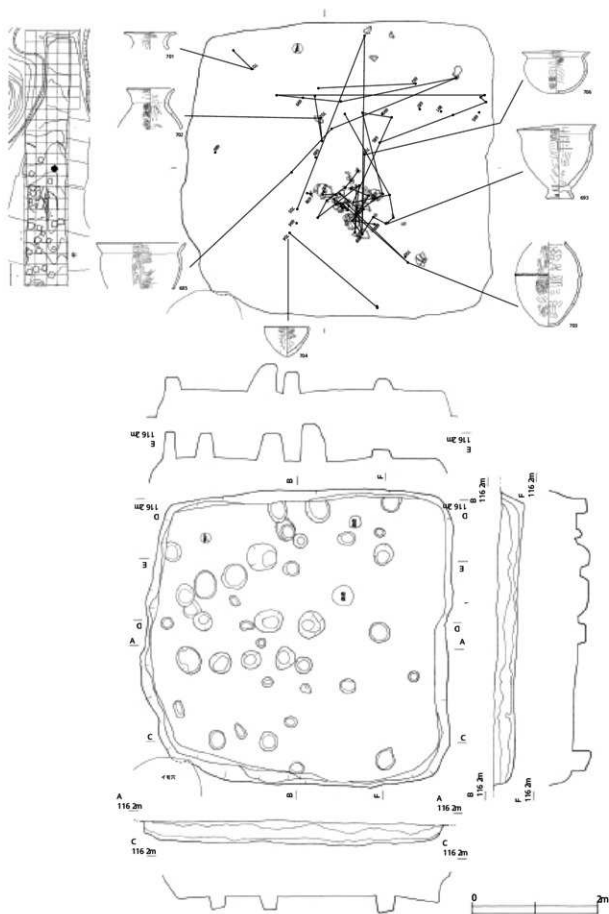
甕形土器 (第108図 685～699)

甕形土器はくの字状口縁で、脚台の付くものである。胴部は肩が張り、概して短い。

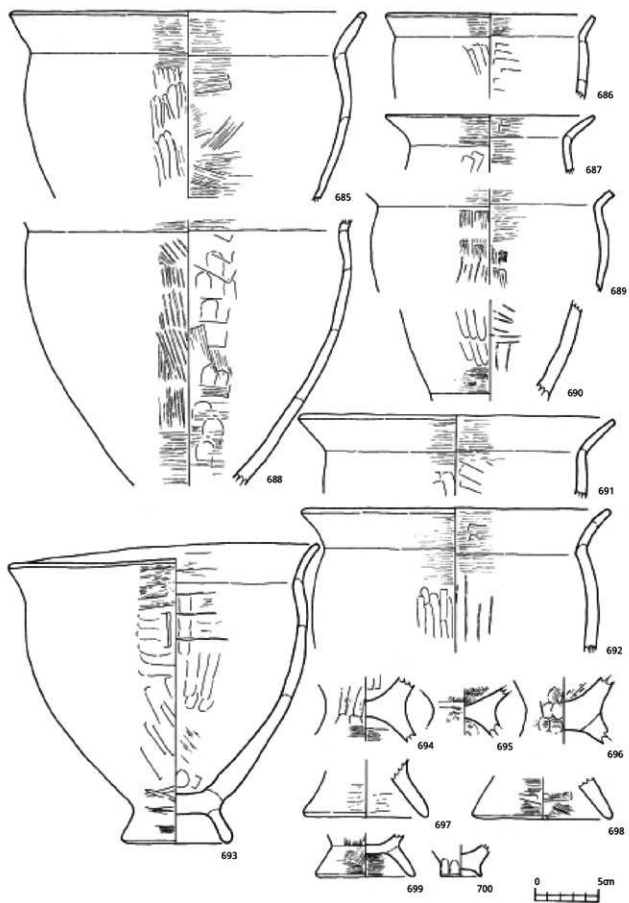
685は口縁直径が28cmとやや大きめのもので、口縁が外へ反るために、頸部の内面にはゆるやかな稜がみられる。外面は口縁部がヘラ横ナデ、胴部が粗いハケ縦ナデで仕上げ、内面は口縁部がていねいなヘラ横ナデ、胴部が繊細状ハケナデで、薄く仕上げている。686・687は口縁直径が16cmほどの小さいものであるが、686が頸部からゆるやかに立ち上がるのに対して、687は強く外反する。内外ともヘラナデで、外にはススが付いている。688は頸部から底部付近で、外面は粗いハケナデのあと、底部近くがヘラナデで仕上げている。内面はヘラ横ナデで仕上げ、薄くなっている。689も頸部付近で、内面は稜ができ、外にはヘラ痕跡がみられる。690は底付近でコゲがある。691・692は口縁直径が25cmほどのもので、頸部から稜をもって強く外反しているが、691が直に近く伸びているのに対して、692は外へ反って端部へ向かっており、口唇部は丸く収まる。内面の口縁部は横ナデで、胴部はケズリに近い粗いヘラナデである。厚い作りで、直径1cm大の小石も含まれている。693はややひずんでいるが、完形品である。口径直径が24cm、高さが23cm、脚台直径が8cmあり、口径部はゆるやかに外反している。内外ともヘラナデで仕上げている。脚台端は丸く収まっており、脚台高が低い。底は大きく、どっしりした器形を呈している。脚台は低いもので、699は高さが28cmしかない。

壺形土器 (第109図 701～703)

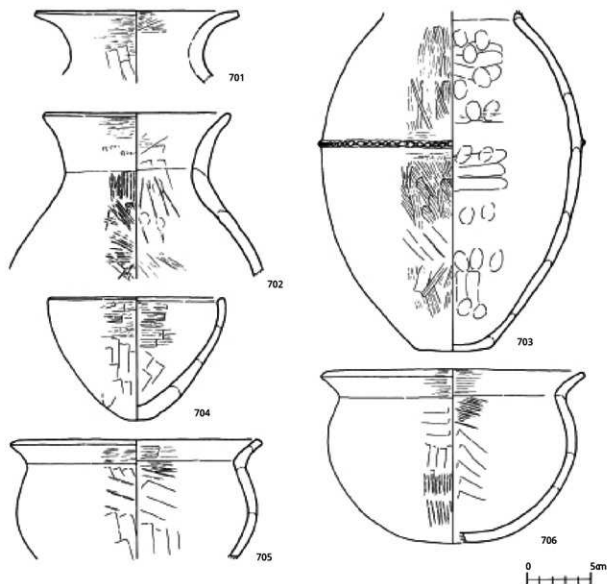
口縁が強く外反するものと、くの字状になるものがあり、底は平たい。701は口縁直径が16cmで、頸部でくびれ、強く外反している。口唇部はくぼんでおり、内外ともヘラミガキ様のていねい



第 10 図 19号竪穴住居跡検出・遺物出土状況



第108圖 19号暨穴住居跡出土遺物(土器1)

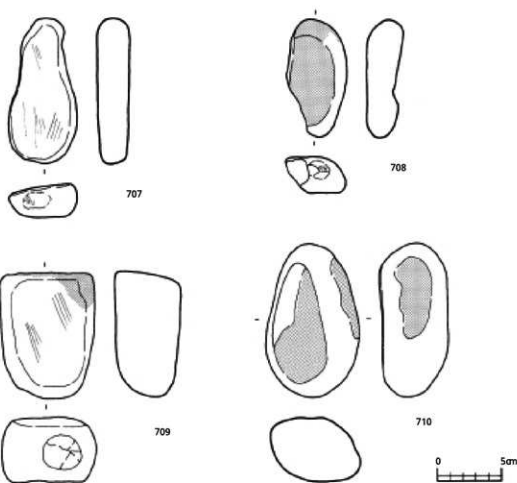


第109図 19号竪穴住居跡出土遺物（土器2）

なナデである。702も頸部がくびれて、外へ反っているが、外反度は弱い。口縁直径が14.5cmある。口縁の作りは雑で、ゆるやかな二重口縁風になっている。外面調整は粗いハケナデ、内面調整は口縁がヘラナデ、胴部がヘラケズリである。703は胴部中央あたりがもっともふくらんでおり、ここに小さな刻目突帯が貼り付いている。頸部までの高さが26.5cmと長胴形を呈している。底は直径6cmと安定した平底である。外面上部は縦方向のヘラナデだが、下部はそのあとでいねいにヘラナデで仕上げている。内面もヘラナデだが、703には指頭圧痕が残っており、指ナデの可能性がある。

鉢形土器（第109図 704～706）

704は口縁直径が13.5cm、高さが10cmの小さい平底の器形をしており、口縁部がやや内反している。内外ともいねいなヘラナデで仕上げている。705・706は頸部から口縁部が強く外反し、丸底の鉢である。口縁直径は705が19cm、706が20cmあり、706の高さは14cmである。外面の下部はハケ



第110図 19号竪穴住居跡出土遺物(石器)

ナデであるが、ほかはヘラナデ仕上げでこしらえ、口縁には指頭圧痕がついている。

ミニチュア土器(第108図 700)

壺形のミニチュア土器である。先の尖った小さな脚台が付いており、外面はヘラでナデられている。

(イ) 石器(第110図 707~710)

直方体の砂岩円礫を利用した砥石・敲石が4点出土している。707はやや扁平なもので、表裏二面を使用している。短側面は両側とも敲石として用いている。708は一部に欠損のみられるだ円形の円礫で、表裏と側面の三面を使用している。上下には敲打面があり、敲石としても用いられている。709は厚さ5cmの分厚い礫の一面を砥石として使用しているが、短側面の両側には打痕跡がみられ、敲石としても使われている。710も分厚いだ円礫で、全面を使用している。砥石と磨石様の用途として用い、各所に擦痕がみられる。

ト 20号竪穴住居跡 (SH-20) (第111図～第113図, 図版19)

(7) 住居跡構造

A-11・12区で検出された20号竪穴住居跡の上面観は隅丸方形を呈し、規模は約480cm×約480cmを測る。検出面から床面までの深さは約40cmである。南西側では21号竪穴住居跡を切っている。北西側にテラスが2段ある階段状張り出し1基を検出した。全体は長辺230cm×短辺110cmを測る上面観が台形状を呈し、テラスの幅は約40cm～50cm、床面から1段目のテラスの高さが約20cm、1段目から2段目のテラスの高さは約10cmを測る。各テラスにはピットが向かい合って検出され、併せて出入口の可能性もある。また、北側隅には上面観が不整形を呈する深さ約10cmの凹み状の1坑が検出された。

床面には32基のピットを検出した。そのうち、北西壁から約170cm離れたP1と、南東壁から約180cm離れたP2を主柱と考え、中心距離が約110cmの2本柱の構造と認められる。この主柱軸上には深さの同程度や浅いものを検出し、これらは支柱の可能性が想定できる。

(8) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した多くの遺物は、埋土最上層の埋土1や埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3からの出土遺物は少ない。特に、埋土2では復元がかなりできたものなどは、住居廃絶後に一折廃棄されたものと想定される。また、北側部分では生活面に接した状態で、7個ほどの自然礫を集積させた遺構を検出した。なお、埋土2出土土器722は21号竪穴住居跡埋土1の出土土器と接合関係がある。

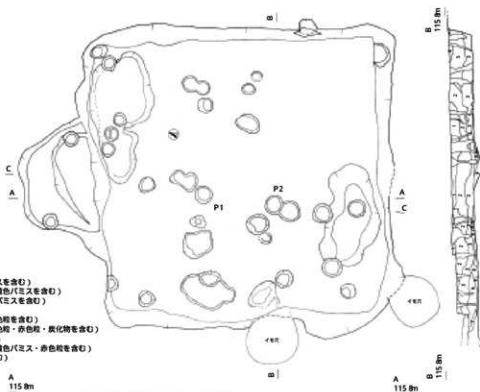
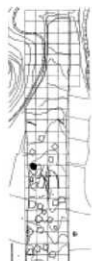
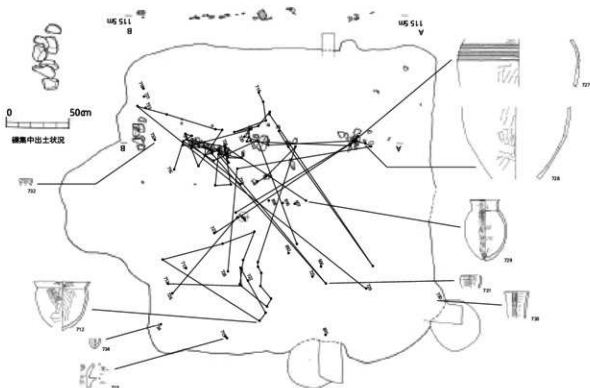
出土土器は、壺形土器、壺形土器、埴形土器、ミニチュア土器で構成される。

壺形土器 (第112図 711～725)

くの字状口縁で、低い胴部となり、脚台が付く。711は口縁直径が17cmで、内面は頸部から稜をもって胴部へ移るくの字状口縁となるもので、口唇部は方形を呈する。内外ともヘラナデで仕上げされており、丸底甕と思われる。外にはススが付着している。712は口縁直径が17.5cmで、頸部で強く外反し、頸部内面は稜線となる。丸みをおびた器形を呈し丸底の甕のようにも見えるが、脚台の剥離痕がみえることから尖がり底に脚台が付く。内外ともヘラナデで仕上げ、ヘラの稜がみえる。うすい作りになっている。外面は剥離痕がみられ、ススも付着し、軟質の焼きである。713は底近くで、外面にスス、内面にコゲが付着している。外面が下から上への縦方向のハケナデ、内面がていねいなヘラナデ仕上げである。714は底部近くで、内外面ともヘラナデで仕上げ、外面の胴下部にはススも付着している。脚台と胴部の接合には粘土を厚く重ねている。715は頸部下に上向きの高い突帯の貼り付けられた大型のくの字状口縁壺形土器である。外面はていねいなヘラナデ、直面はヘラ横ナデ仕上げである。脚台は、直径が7.5cm～10cmあり、裾はまっすぐハの字状に広がるものと、外反するものがある。概して低いのが、716は5cmと高い。718はていねいな作りをしており、裾が広く広がり、端部はハケナデをしている。

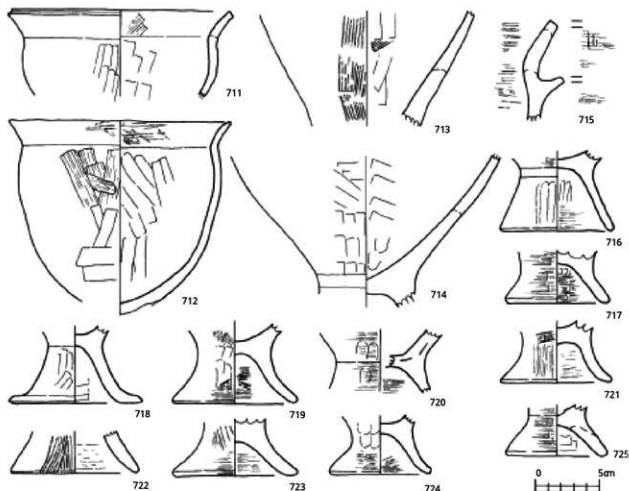
壺形土器 (第113図 726～730)

大型のものと小型のものがある。大型のもの(726～728)は内外面とも白っぽい乳灰色を呈し、芯は黒褐色のもので、同一個体と思われる。くびれた頸部から口縁へ強く外反するもので、肩部に5条の低い三角突帯が貼り付けられている。内外面とも剥離が目立ち、特に内面は激しい。内外とも



- 1 陶質褐色粘質土（白色粒・黄色/三スを含む）
- 2 陶質褐色粘質土（白色粒・赤色粒・黄色/三スを含む）
- 3 陶質褐色粘質土（黄白色礫石・黄色/三スを含む）
- 4 陶質褐色粘質土（白色粒を含む）
- 5 陶質褐色粘質土（黄色/三ス塊・白色粒を含む）
- 6 陶質褐色粘質土（黄色/三ス塊・白色粒・赤色粒・炭化物を含む）
- 7 陶質褐色粘質土（黄色/三スを含む）
- 8 陶質褐色粘質土（陶質褐色土を含む・黄色/三ス・赤色粒を含む）
- 9 陶質褐色粘質土（陶質褐色土を少量含む）
- 10 8と同じ
- 11 9と同じ
- 12 欠番
- 13 陶質褐色粘質土（陶質褐色土を含む）
- 14 陶質褐色粘質土（黄色/三ス・白色粒を含む）
- 15 8と同じ
- 16 9と同じ

第 11 図 20号竪穴住居跡検出・遺物出土状況

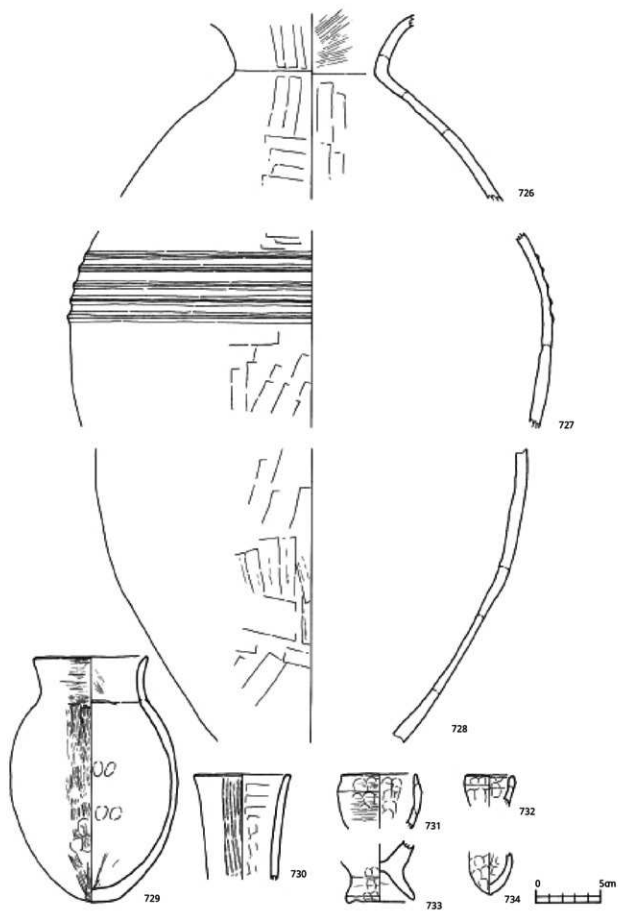


第112図 20号竪穴住居跡出土遺物(土器1)

でいねいなヘラナアで仕上げている。729は小型の長胴形をしたもので、口縁直径が8.5cm、高さが20cmである。頸部から内傾ぎみに立ち上がり、口縁でやや外反している。肩部はナア肩となり、不安定な平底である。外面胴部はハケでいねいにナアしており、口縁部はヘラで横方向にでいねいにナア、ミガキ風となる。内面もでいねいなヘラナア仕上げである。730は頸部から外へやや開きながらまっすぐ立ち上がる口縁直径7.5cmの細頸形土器である。外面はヘラでいねいにミガいているため縦筋がみえる。内面もでいねいなヘラ横ナアで仕上げられており、口唇部は矩形を呈する。意図は不明だが、破損後に頸部を周辺から意識的に打ち欠いている。口縁部の三分の二ほどと外面にも同様の敲打痕がみられる。

ミニチュア土器(第113図 731~734)

鉢形・甕形のものがある。鉢形の口縁部は、直径が6cmで内弯するもの(731)と、直径が3.5cmでまっすぐ伸びるもの(732)とがある。甕形のもの(733)は脚台が付き、脚台直径が5cmとやや大型で、胴部も分厚い。一部ヘラナアもみられる。734は甕の底で、尖っている。焼成の良いものである。



第113圖 20号竪穴住居跡出土遺物(土器2)

ナ 21号竪穴住居跡 (SH-21) (第114図～第116図, 図版20)

(7) 住居跡構造

A・B-11区で検出された21号竪穴住居跡は、北東側を20号竪穴住居跡に切られ、全体形は不明である。上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約350cm×短辺約240cmを測る。検出面から床面までの深さは約30cmである。付帯施設では壁帯溝と中央竪穴部を検出した。壁帯溝は南壁側を除く三方の壁際で検出した。西側では幅が約90cm、北側では約40cm、東側では約60cm、深さは約5cm～10cmを測る。この部分では、支柱と想定される多くの柱穴を検出した。また、中央竪穴部は隅丸方形を呈し、規模は長辺約90cm×短辺約70cmを測る、深さ約10cmを測り、小規模である。

また、床面には23基のピットを検出した。そのうち、東壁から約220cm離れたP1及びP2と、西壁から約180cm離れたP3及びP4を支柱と考え、4本柱の構造と認められる。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、遺物の出土層は埋土最上層の埋土1が最も多く、埋土2の出土も多い。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3からの出土遺物は少ない。特に、埋土1や埋土2では復元がかなりできたものなどは、住居廃絶後に一括廃棄されたものと想定される。なお、722は21号竪穴住居跡の出土土器と接合関係がある。

出土土器は、甕形土器、壺形土器、小型壺形土器で構成される。

甕形土器 (第115図 735～744)

くの字状口縁で、長胴形の胴部に脚台の付く器形である。735・736・738は口縁直径が28～29cmほどの大きさで、口縁部は735がゆるやかに外反しているのに対して、736は頸部内面に稜ができるほど強く屈曲している。肩部はあまり張らずにゆるやかに底部へ移っている。737は口縁直径が15cmと小型のもので、口縁部は頸部内面に稜をもつほど強く屈曲し、まっすぐ外へ開いている。胴部はやや丸みをおびている。脚台はハの字状に開いており、裾が開くものと、まっすぐ伸びるものがある。脚台端の直径は6cm～9.5cm位のもの、4～5cmしかない小型のものがある。

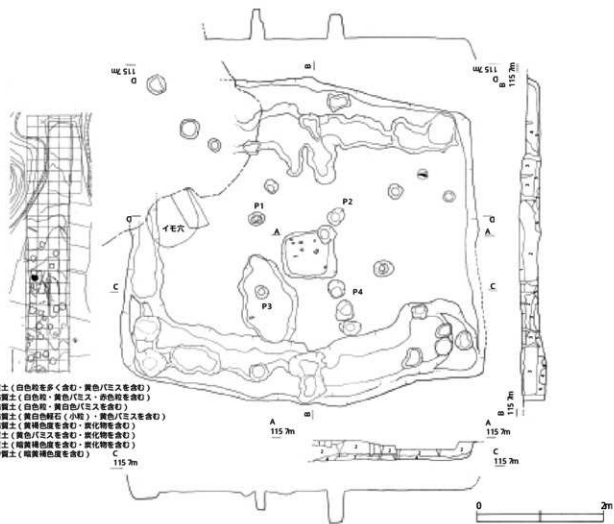
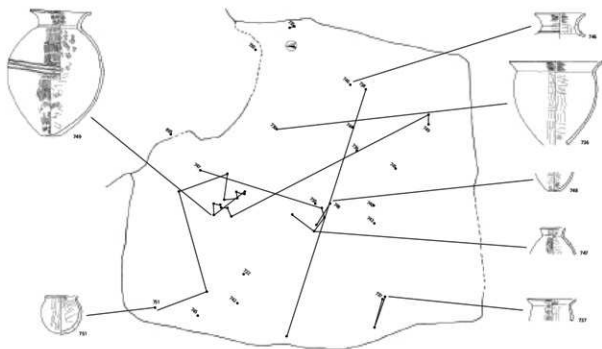
壺形土器 (第115図 745～749)

口縁部はゆるやかに外反するものと、強く外反するもの、直に外へ開くものがあり、底は平底である。745は口縁直径が10.5cmで、ゆるやかに外反している口縁部である。746は口縁直径15cmの強く外反する口縁部で、端部は矩形を呈する。頸部に三角突帯が貼り付けられている。747は口縁直径が8cmの、頸部からやや外反きみにまっすぐ外へ開く小さなもので、ナデ肩となる。748も小型の平底である。749は口縁直径が19cm、高さが40.5cm、底部直径が5cmある。口縁部は頸部から外へゆるやかに反っており、内面に小さな三角突帯が削り出される。口縁部はくぼんでおり、頸部に先が丸みをおびた三角突帯が貼り付けられている。胴部中央には一条の三角突帯が貼り付けられている。

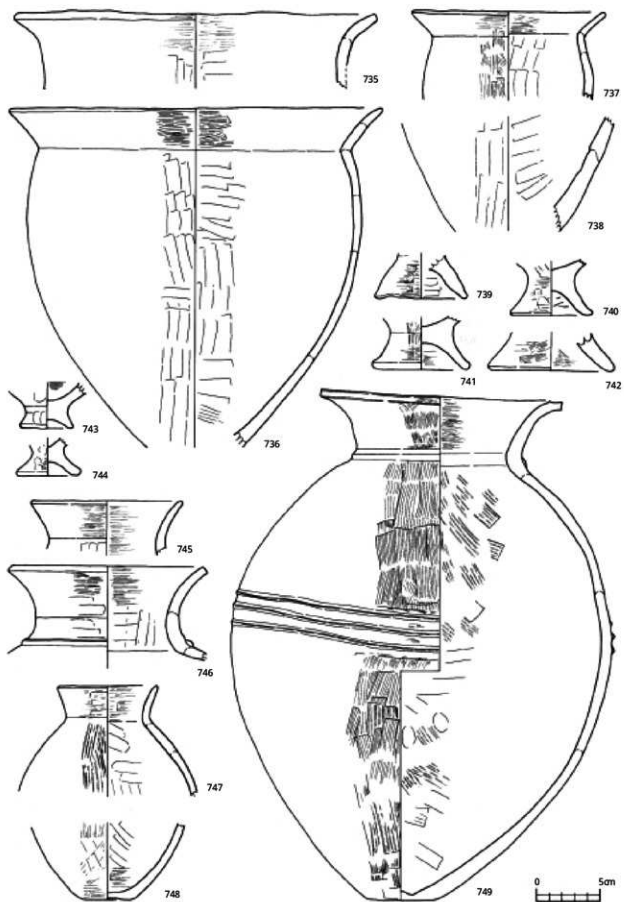
小型壺形土器 (第116図 750・751)

750は外へ開きながらまっすぐ伸びる口縁部で、口縁直径が8cmある。長い口縁で、口唇部はくぼんでいる。

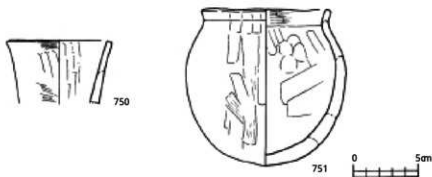
751は口縁直径が10cm、高さが12.5cmの、頸部から外へ開く短い口縁部と、球形状の胴部、丸底からなる壺形土器である。



第114図 21号竪穴住居跡検出・遺物出土状況



第 115 圖 2 号 竖穴住居跡出土遺物 (土器 1)



第116図 21号竪穴住居跡出土遺物(土器2)

ニ 22号竪穴住居跡 (SH-22) (第117・118図、図版20・21)

(7) 住居跡構造

C-12区で検出された22号竪穴住居跡の上面視は隅丸方形を呈し、規模は長辺約420cm×短辺約410cmを測る。検出面から床面までの深さは約50cmである。張り出し及び中央掘り込みなどの付帯施設は確認できなかった。また、床面には19基のピットを検出した。そのうち、北壁から約180cm、西壁から約180cm離れ、床面からの深さが約50cmあるP1と、南壁から約120cm、西壁から約200cm離れ、床面からの深さが約40cmあるP2を主柱と考え、心距離が約120cmある4本柱の構造と認められる。また、4隅並びに各壁面近くに柱穴があり、支柱と想定できる。

(4) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね4層に分かれ、遺物の出土層は埋土上層の埋土1や埋土2よりも埋土下層の埋土3からの出土が多い。床面直上の出土遺物は少ない。また、埋土4の出土遺物には、ガラス製小玉や鉄製品などがみられる。埋土1出土土器755は23号竪穴住居跡埋土1の出土土器と接合関係が認められる。

出土土器は壺形土器、小型甕形土器、ミニチュア土器で構成される。

壺形土器 (第118図 752)

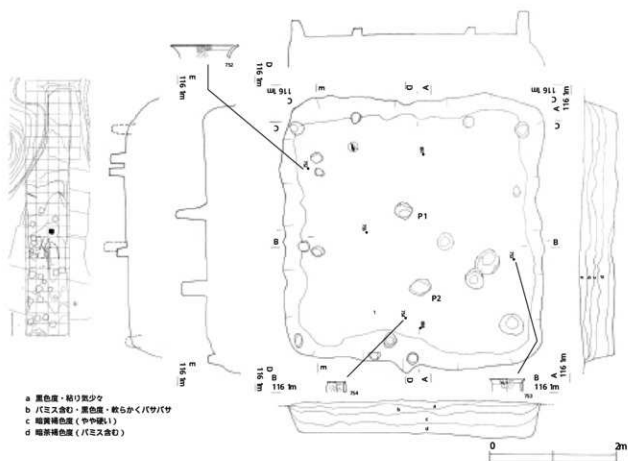
直径が21cmある広L口縁の土器で、口唇部は深いヘラ凹線が巡っており、口縁内面の端近くは指ナデでややくぼんでいる。白っぽい発色をし、ガラス・長石などを多く含んでいる。内外ともヘラナデ仕上げである。

小型甕形土器 (第118図 753)

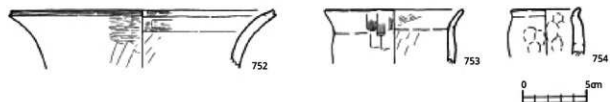
L口縁直径が11cmあるくの字状L口縁の甕形土器で、頸部内面は稜となる。内外ともヘラナデで仕上げているが、外面は縦方向に粗くナデている。

ミニチュア土器 (第118図 754)

くの字状の短い口縁の甕形をしたもので、胴部は丸みをおびている。外面は丁寧にヘラでナデている。茶褐色を呈し、焼成良好である。



第117図 23号竪穴住居跡検出状況



第118図 23号竪穴住居跡出土遺物(土器)

ヌ 23号竪穴住居跡 (SH-23) (第119・120図, 図版21・22)

(7) 住居跡構造

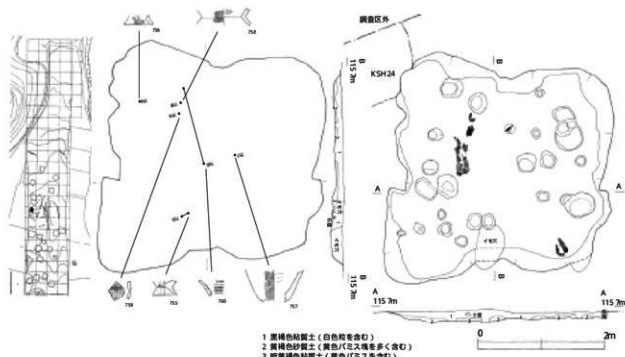
A-10区で検出された23号竪穴住居跡は、北側隅を24号竪穴住居跡に切られる。上面視は隅丸方形を呈し、規模は約350cm×約350cmを測る。検出面から床面までの深さは約10cmである。また、中央竪穴部などの付帯施設は確認できなかった。また、床面には21基ものピットを検出した。床面にはクリと同定された炭化材が見つかり、焼失住居と考えられる。

(f) 住居跡内出土遺物

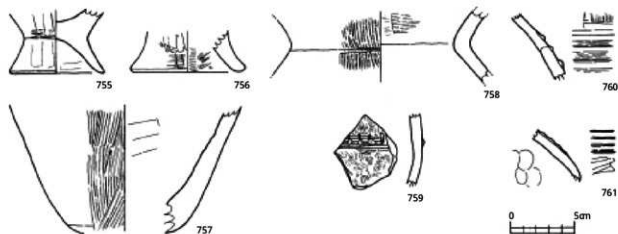
出土土器は、甕形土器、壺形土器で構成される。

甕形土器 (第120図 755・756)

脚台は直径が7～8.5cmあり、先端が細いものと丸みをおびた分厚いものがある。755はピンク色を呈し、焼きは普通である。756は内外ともいいねいにヘラでナデている。



第119図 2号竪穴住居跡検出状況



第120図 2号竪穴住居跡出土遺物(土器)

壺形土器 (第120図 757~761)

底部は安定した丸底である。外面は縦方向のハケナデで仕上げているが、内面は剥削が目立つ。白色石・長石などの細石を多く含んでいる。頸部はくびれて、口縁部は外へまっすぐ広がる。外面はハケの縦ナデ、内面はヘラナデである。肩部には三条あるいは四条の低い三角突帯が貼り付けられるが、761は小さくて浅い。761は小型の壺形土器で、肩から胴にかけての破片である。759の外面ははいねいなヘラナデで仕上げられ、低い三角突帯を貼り付けたあと、ヘラ刻みが施されている。758は小石を多く含んだ砂質土であるが、761は細かい砂を用いている。

ネ 24号竪穴住居跡 (SII-24) (第121・122図, 図版22)

(7) 住居跡構造

A-10区で検出された24号竪穴住居跡は、東側隅で23号竪穴住居跡を切り、西側が調査区外に延びるため、全体形は不明である。上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約530cm×短辺約130cm（残存部）を測る。検出面から床面までの深さは約50cmである。また、残存部には中央掘り込みなどの付帯施設は確認できなかった。また、床面には2基のピットを認め、南東壁際に1基、南西隅に1基検出した。

(f) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれ、出土した遺物の多くは、埋土最上層の埋土1や埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3の出土遺物は少なく、いずれも破片である。また、763は埋土3の出土である。なお、他の住居跡と接合関係にある遺物は認められなかった。

出土土器は甕形土器のみである。

甕形土器(第122図 762~763)

口縁部はくの字状に外反するものである。762は口縁直径が22cmあり、内面の口縁部はヘラ横ナデ、胴部はヘラ縦ナデで仕上げているが、頸部で段をもっている。764は球胴状を呈したもので、内外とも幅の狭いハケナデで仕上げ、薄く作っている。焼成は良く、堅致である。

ノ 25号竪穴住居跡 (SH-25) (第123・124図、図版22)

(f) 住居跡構造

D-20区で検出された25号竪穴住居跡は、東側が調査区外に延びるため、全体形は不明である。上面観は隅丸方形を呈し、規模は長辺約460cm×短辺約130cm（残存部）を測る。検出面から床面までの深さは約50cmである。また、中央部には方形を呈する浅いくぼみを認識したものの、断面では確認できず、遺構と判断できなかった。他の部分では、残存部には中央掘り込みなどの付帯施設は確認できなかった。また、床面には5基のピットを認め、そのうち4基は南西壁際にて検出した。

(f) 住居跡内出土遺物

住居跡内の埋土は概ね3層に分かれる。出土した遺物量が少なく、多くは埋土上層の埋土2の出土である。床面直上の出土遺物はなく、埋土下層の埋土3の出土遺物は少ない。なお、他の住居跡と接合関係にある遺物は認められなかった。

出土土器は、鉢形土器、甕形土器で構成される。

鉢形土器(第124図 765)

口縁直径が11cm、高さが9.5cm、脚台直径が4cmの台付鉢形土器である。鉢部は口縁端が内反する器形をし、低い脚台が付いている。外面はヘラナデだが、脚台付近は粗くケズっている。内面もヘラナデだが、黒くいぶされたようになっている。形は雑に作っているが、調整は内面ともいはいである。

甕形土器(第124図 766・767)

胴の下部が2点ある。内外ともヘラナデで仕上げているが、外は粗い。

(2) 掘立柱建物跡 (第125・126図)

堂園遺跡B地点では、1棟の掘立柱建物跡が、C-10区で検出された。この建物跡は、IIb層上面で土色が変わった際に検出が可能となったもので、実際の生活面は高かったものと考えられる。

また、この建物跡の帰属時期は、ピットの埋土の上質や土色などが、先述した竪穴住居跡の柱穴や、後述する埋納ピットの上質や土色などと類似していることから、竪穴住居跡や埋納ピットの帰属時期と同じ、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期に相当すると判断した。

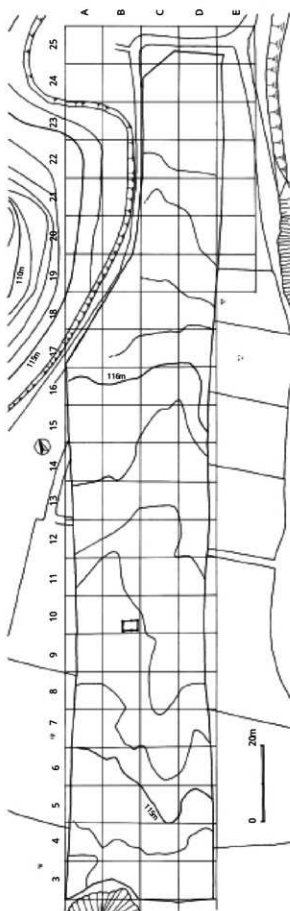
検出した建物跡の長軸の方向は、N-65°-Eを測る。建物規模は1間×2間で、桁行方向の平均値が400cm、梁間方向の平均値が265cm、面積は約10.6㎡を測る。また、柱穴規模の平均値は、上面長径が27cm、検出面からの深さが26cmである。

柱穴計測表 (単位:cm)

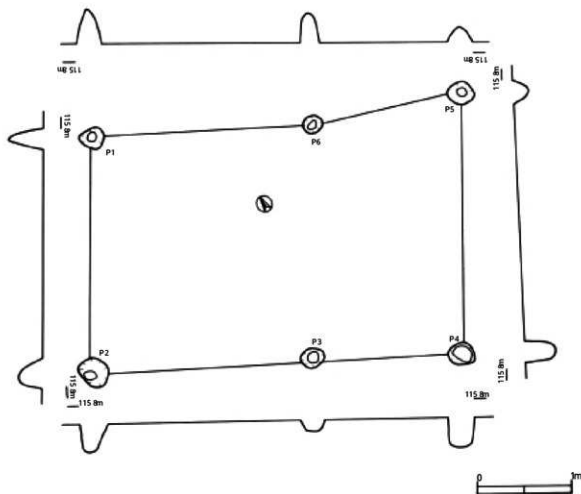
柱穴番号	柱穴径			調査時 pit番号
	長径	短径	深さ	
1	25	22	35	647
2	32	30	30	645
3	25	20	30	644
4	30	23	30	760
5	30	25	15	649
6	20	20	20	648

柱間中心距離計測表

	柱穴番号	柱間(単位:cm)
桁行方向	2~3	225
	3~4	175
	2~4	400
	5~6	170
	6~1	230
梁間方向	5~1	400
	1~2	250
	4~5	280



第125図 掘立柱建物跡位置図



第126図 掘立柱建物跡検出状況

(3) 検出ピット

堂園遺跡B地点では、ほぼ全域にわたり、760基のピットを検出した。傾向としてはC区列及びD区列の集中し、東側調査区外に伸びる様相を呈している。

調査に当たっては、全てのピットを縮尺1/10で図化し、記録保存を行った。今回の報告にあたっては、紙数の関係上、配置図の提示にとどめた。

検出したピットの概要としては、上面観が略円形を呈し、直径が20cmから50cm、深さが20cmから100cm越えるものまでであった。ピットの土色は、主観に基づく分類ではあるが、暗茶褐色及び茶褐色を呈するものが多く、暗茶褐色を呈するものが455基、暗茶褐色を含むものが475基、茶褐色を呈するものが225基あった。また、中には黒褐色系を呈するものも観られた。土質はほとんどがシルト質の粘質土である。

以上の、土色茶褐色及び茶褐色を呈する特徴は、竪穴住居跡の柱穴や埋納ピットなどの規模や、土色・土質と共通するものであり、これらのピットの帰属時期は、竪穴住居跡や埋納ピットの帰属時期と同じ、弥生時代終末から古墳時代初頃にかけての時期に相当すると判断した。ただし、黒褐色系を呈するものは帰属時期が新しくなる可能性が高い。

(4) 埋納ピット

(第127図～第132図 図版23～25)

堂園遺跡B地点では、750基以上のピットが検出されたが、そのうち、ピット中に完形土器、若しくは一括して納められた土器が出土したピットを、埋納ピットとした。合計14基を検出した。いずれも、竪穴住居跡の検出面と同じⅡb層、あるいはⅡc層上面の上色に変化した際に検出した。ピットを検出した後に土器が入れているのが判明したものや、土器の出土が先で後にピットを検出したものがあった。特に、土器の出土が先の場合は当時の生活面が高かったと判断できる。

埋納ピットの検出範囲は、A～C-4～15区に限られ、数多くの竪穴住居跡の検出範囲と重なる。多くの埋納ピットは、竪穴住居跡近辺で検出されたが、4号、5号、7号、8号、9号など竪穴住居跡と関係なく検出されたのも確認できた。

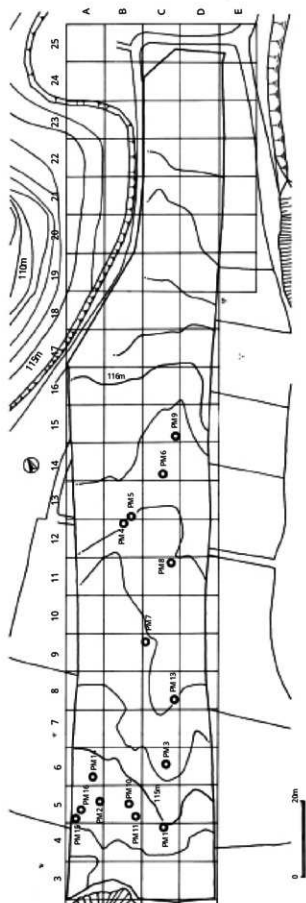
① 1号(第128図)

C-4区で検出された1号では、上面観が径約35cmの円形を呈し、底径約20cm、検出面からの深さ約45cmを測る。ピット検出面から5cmほどの位置に、ほぼ完形の土器が横倒しになった状態で出土した。

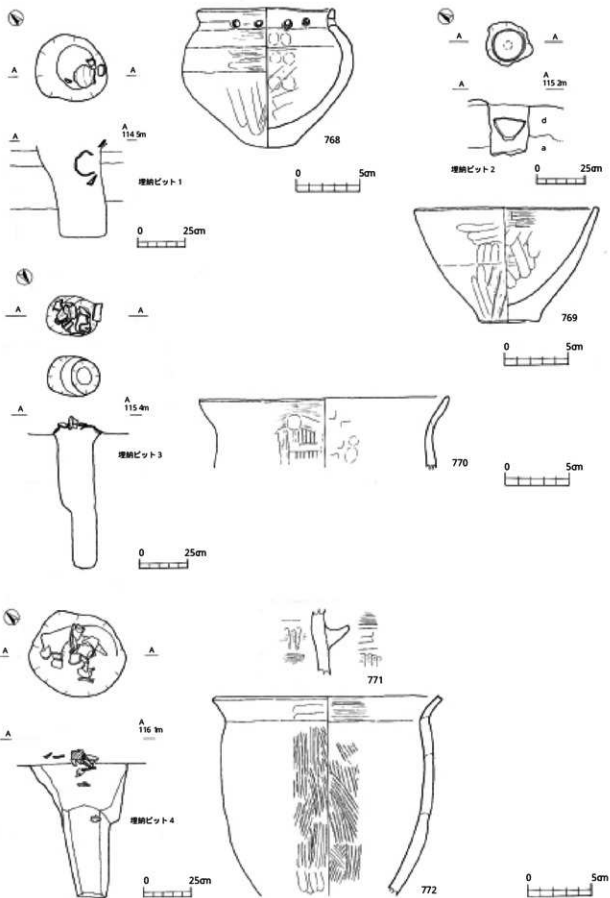
768はやや外へ開く短い縁部の短頸小壺である。口縁直径は10.5cm、高さは11cmで、頸部に2個一対の小さな孔が穿たれている。肩が張っており、底は丸みをおびた平底である。外面上半は横方向、下半は縦方向のヘラナデで仕上げている。内面もヘラナデで仕上げているが、指頭押圧の痕が残っている。

② 2号(第128図)

A-5区で検出された2号では、上面観が径約20cmの略円形を呈し、底径約15cm、検出面からの深さ約25cmを測る。ピット検出面から7cmほどの位置に、ほぼ完形の土器が口縁部を上にした状態で出土した。



第127図 埋納ピット分布配置図



第12図 埋納ピット遺構検出状況・埋納土器(1)

769は口縁直径が14cm、高さが9cm、底部直径が5cmの鉢形土器である。ややあげ底ぎみの平底から丸みをおびて、外へ開きながら口縁へ立ちあがっている。

③ 3号(第128図)

C-6区で検出された3号は、14号堅穴住居跡の北側で検出された。上面観が長径約30cm×短径約20cmの略楕円形を呈し、底径約10cm、検出面からの深さ約30cmを測る。ピット上面に、甕形土器の上半部片が折り重なるように出土した。ピットは深さ約40cmで段掘りが行われていた。

770はゆるやかに外反する直径が20cmの口縁となる甕形土器である。口縁部はゆるやかに外反しているが、端部近くが直に立ち上がっている。

④ 4号(第128図)

B-12区で検出された4号では、上面観が径約50cmの略円形を呈し、底径約15cm、検出面からの深さ約70cmを測る。ピット上面に土器片が折り重なるように出土した。ピットは深さ約30cmで段掘りが行われていた。

771は口縁下部にも、上向きの高いつば状突帯が貼り付けられている大型の甕形土器である。772は口縁部が外へ強く反る甕形土器である。口縁直径は18cmで、胴部は丸みをおびているが、張りは少ない。内外とも縦あるいは斜方向のハケナデを主とするが、口縁部外面は横方向、胴下部外面は縦方向のヘラナデである。

⑤ 5号(第129図)

B-13区で検出された5号では、4号に隣接して検出された。上面観が長径約40cm×短径約30cmの略楕円形を呈し、底径約7cm、検出面からの深さ約75cmを測る。ピット上面に数個体の土器片が折り重なるように出土した。ピットは深さ約30cmで段掘りが行われ、深さ約40cm以下ではピット壁面に棒状工具の掘り痕跡が検出された。

773～775は甕形土器である。773は頸部から強く外反して、直径が14cmの口縁部へ向かう。胴部は中ほどでふくらむ器形をし、ここに小さなヘラ刻みのある三角突帯が二条に貼り付けられている。外面は縦方向のハケナデ、内面はヘラナデで仕上げているが、指頭圧痕がみられる。774は胴部の上半部で、ここに三角突帯が三条貼り付けられている。775は長胴形の胴部で、上半部に一条の三角突帯が貼り付けられている。外面・内面ともヘラナデで仕上げている。

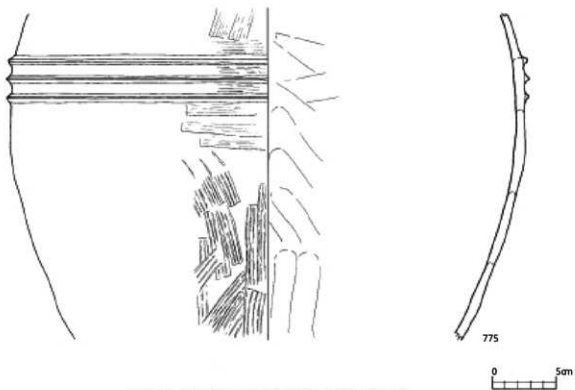
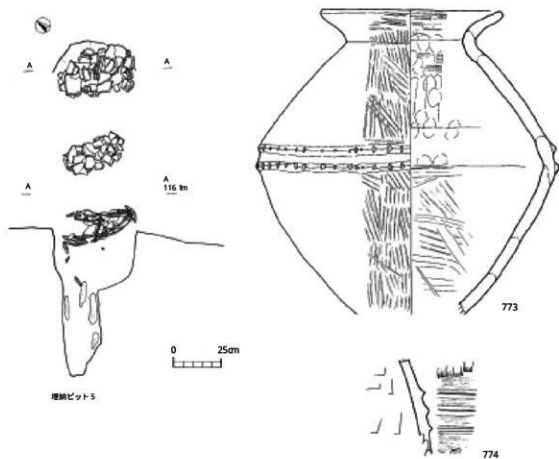
⑥ 6号(第130図)

C-14区で検出された6号では、上面観が径約35cmの略円形を呈し、底径約7cm、検出面からの深さ約60cmを測る。ピット上面に土器片が折り重なるように出土した。

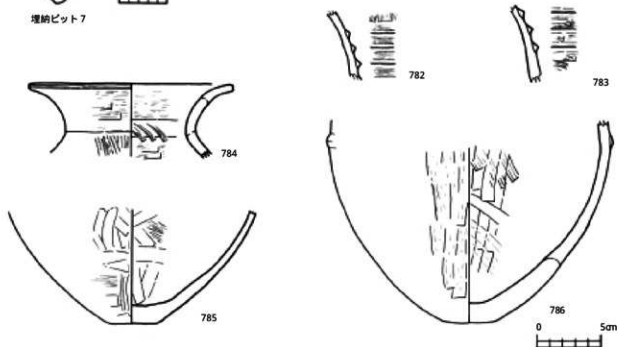
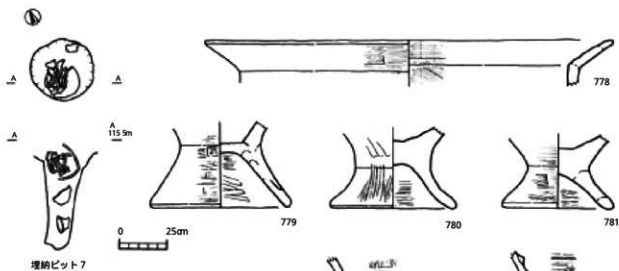
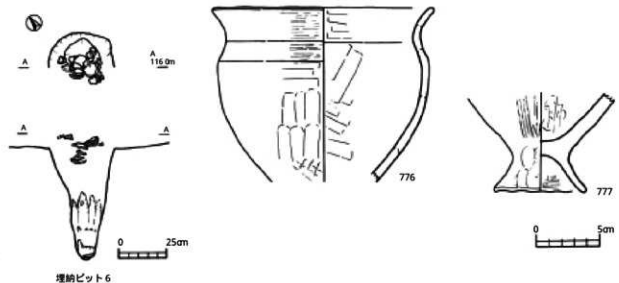
776は口縁直径が17.5cmのくの字状にゆるやかに外反する浅い甕形土器で、薄い作りであることから丸底の可能性もある。肩部がやや張っているが、丸みをおびて底へ向かう。777は台付き鉢形土器と思われる。直径が7cm、高さが3cmの八の字状に広がる脚台で、ヘラナデで仕上げ、薄い作りである。

⑦ 7号(第130図)

C-9区で検出された7号は、溝状遺構4の床面で検出された。7号埋納ピット内出土土器が、溝状遺構4上層の出土遺物と接合関係にあることから、7号埋納ピットは溝状遺



第129図 埋納ピット遺構検出状況・埋納土器(2)



第130図 埋納ピット遺構検出状況・埋納土器(3)

構4廃絶後に造られたことが判明した。上面観は一辺約40cmの略隅丸方形を呈し、底径約10cm、検出面からの深さ約70cmを測る。ピット上面に、壺形土器底部の中に土器片が折り重なるように出土した。

壺形土器(778~781)と、壺形土器(782~786)が出土している。

壺形土器の口縁部は直径が32cmと大きく、頸部で外へ強く屈曲している。薄い作りである。脚台は直径が10.5cm、高さが4.5cmのハの字状を呈する高いものと、直径が9.5cmで高さが3.5cm、あるいは直径が8.5cmで高さ3cmの裾広がりととなる低いものがある。

壺形土器の口縁部は、頸部から強く外反する形をしており、口唇部はくぼんでいる。直径は16cmである。胴部は中央付近がふくらむ長胴形をしており、782・783のように肩部に三条の三角突帯が貼り付けられているものもある。底は小さな平底を呈し、内外ともヘラナデで仕上げている。

⑧ 8号(第131図)

C-11区で検出された8号では、上面観が長径約75cm×短径約20cm(残存部)の略楕円形を呈し、底径約10cm、検出面からの深さ約90cmを測る。ピット上面に数個体の土器片が出土した。ピットは深さ約5cmで段掘りが行われ、中程以下ではピット壁面に棒状工具の掘り痕跡が検出された。

787は口縁直径14.5cm、高さ13cm、脚台直径8.5cmの台付鉢形土器である。鉢部はやや丸みをおびながら口縁端へ立ち上がり、端部はとがりぎみに終わる。脚台はハの字状を呈しているが、やや外反し、薄い作りとなる。788は壺形土器の低い脚台である。直径が9.5cm、高さ3.5cmある。

⑨ 9号(第131図)

C-15区で検出された9号では、上面観が径約20cmの円形を呈し、底径約7cm、検出面からの深さ約20cmを測る。ピット上面に数個体の土器片が出土した。

789・790はハの字状に外反する壺形土器である。内外ともヘラナデ調整である。

⑩ 10号(第131図)

B-5区で検出された10号では、上面観が径約25cmの円形を呈し、底径約15cm、検出面からの深さ約27cmを測る。ピット下面に数個体の土器片が出土した。

791はゆるやかに外反する長い口縁の深鉢形土器である。口縁直径は17.5cmあり、ハケナデ仕上げである。

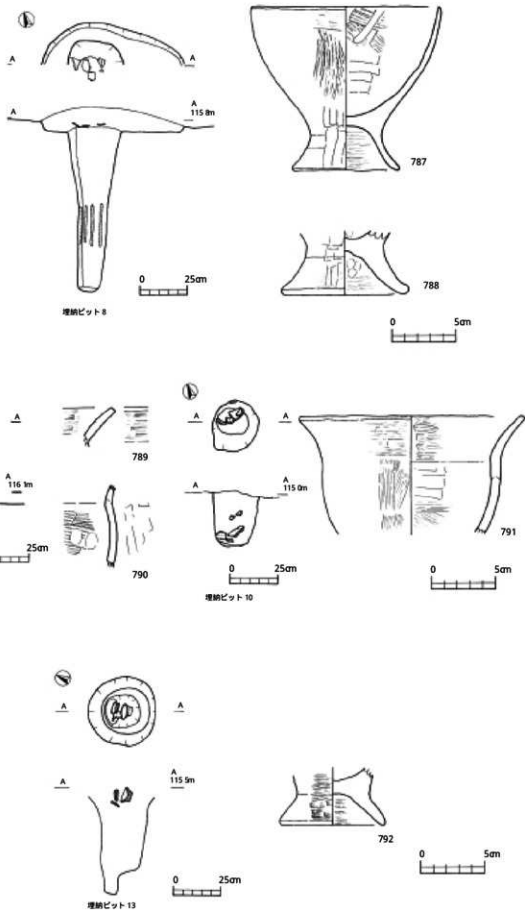
⑪ 13号(第131図)

C-8区で検出された13号は、13号堅穴住居跡の南側で検出された。上面観が長径約40cm×短径約35cmの略円形を呈し、底径約5cm、検出面からの深さ約50cmを測る。ピット上面に、土器片が重なるように出土した。ピットは深さ約40cmで段掘りが行われていた。

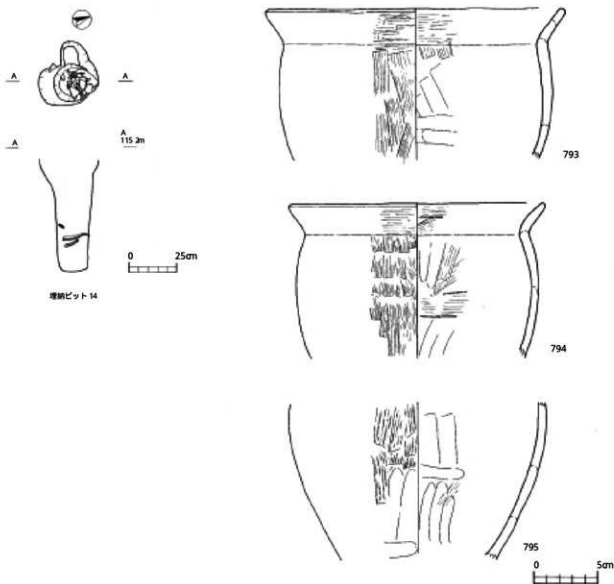
792は直径が8cm、高さが2.5cmの壺形土器脚台である。ハの字状に開き、低い脚台だが、先端はとがっている。

⑫ 14号(第132図)

A-6区で検出された14号は、4号堅穴住居跡の北西壁近くで検出された。上面観が長



第13図 埋納ビット選構検出状況・埋納土器(4)



第132図 埋納ピット遺構検出状況・埋納土器(5)

径約30cm×短径約20cmの略楕円形を呈し、底径約10cm、検出面からの深さ約60cmを測る。ピット西側には、上面径が長径約15cm×短径約10cmの略楕円形を呈した階段状のテラスが張り出している。ピット検出面から30cmほどの位置に、土器片が重なるように出土した。ピットは深さ約7cmで段掘りが行われていた。

内面の頸部に険ができるほど口縁部がくの字形に強く外反する甕形土器で、肩がややふくらむものの細まりながら低部へ移っている。口縁直径は793が23cm、794が20cmである。外面はハケナデ仕上げだが、口縁部が横ナデで、胴部が縦ナデである。内面はヘラナデである。

(5) 柵列状遺構 (第133・134図 図版26)

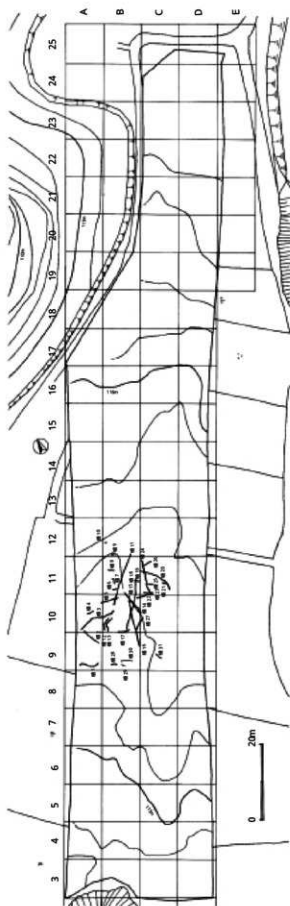
堂園遺跡B地点では、直径5cm～10cm、検出面からの深さ約10cmを測る、数多くの小ピットを検出した。そのうち、間隔が10cmから100cmを超えるものまであったものの、列状配置が見受けられるものについて、「柵列状遺構」とした。合計31条を検出した。いずれも、竪穴住居跡の検出面と同じIIb層、あるいはIIc層上面の土色に変化した際に検出した。

柵列状遺構の検出範囲は、A～C-9～12区に限られる。この範囲は、竪穴住居跡の検出されるA～C-3～8区の範囲と、A-10・11区及びA～C-12～14区の範囲に大きく2群に分かれる、合間の未検出地区に当たることが、注目される。

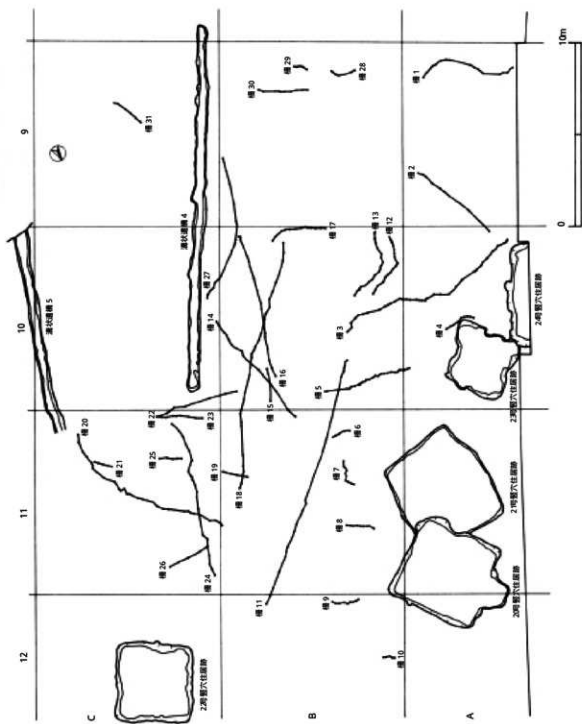
柵列状遺構の中には、交差するものがあることから、改築した可能性が大きいものの、新旧関係はつかめなかった。

この柵列状遺構には、柵6～10のように列の長さが短いものと、柵3、11、16、18のように列の長さが長いものがある。竪穴住居跡の近辺で検出されるものには、列の長さが短いものが多い傾向がある。

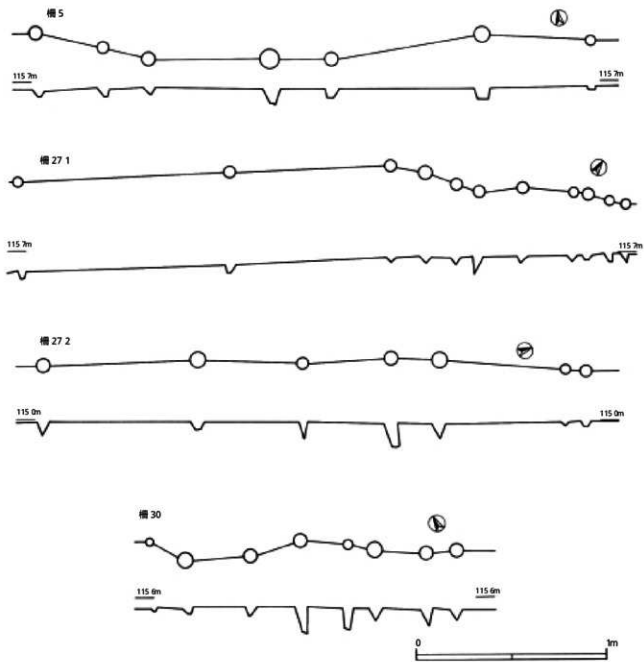
また、個々の小ピットの断面形態については、ピット底面が箱状の平らになるものと、三角形状に尖るものがある。この両者は、同じ列で混在しており、形態による時期差や性格の差がないことが明らかである。



第133図 柵列状遺構配置図



第 134 図 構列状遺構検出状況



第 135 図 柵列状遺構小ピット断面状況

(6) 溝状遺構 (第136図～第138図 図版28)

四条の溝状遺構が検出されている。いずれも南北方向に流れているが、それぞれの連続性は不明である。4号と5号はほぼ並行しているが、3号と6号は4号・5号といくらかずれている。

① 3号 (第136図・第137図)

A-15区で検出された溝状遺構で南側は直に近く立ち上がって終わっているが、北側は用地外へ延びている。幅は50cmあり、約8m検出されている。深さは10cm前後あり、中央はやや浅くなっている。埋土は2～3層に分かれ、下層が黒褐色粘質土で、その上に北側では暗黄褐色粘質土、南側では暗茶褐色粘質土、茶褐色粘質土が堆積している。

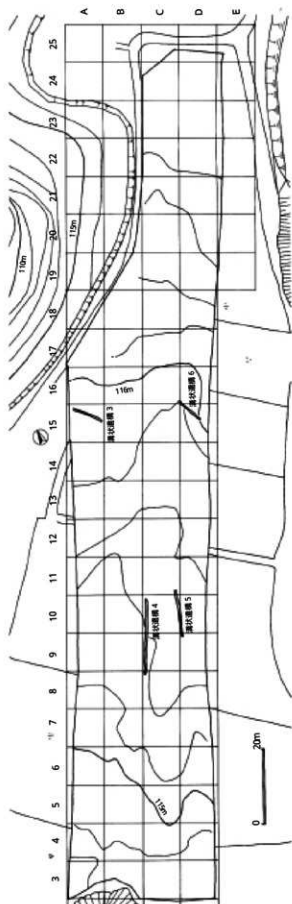
遺物はほとんどない。

② 4号 (第136図・137図・138図 796～811)

C区の西端近くの8～10区で検出されたほぼまっすぐ延びる溝状遺構で、両端とも途切れている。幅は40cm～80cmあり、約20mの長さである。深さは20cm～30cmと深く、上部のほうから多くの土器が出土した。796～798は埋土1で出土したものである。

甕形土器 (796・797・800～803・806) は頸部がゆるやかに外反するもので、脚台は概して低い。脚台は裾部がゆるやかに広がるもので、直径は8.5cm～10cm、高さは3cm～4cmある。797でみられるように脚台と胴部を接合したのち、さらに外へ粘土を補填している。ヘラナデ仕上げである。

甕形土器 (798・799・807～810) は、口縁部が外反するもので、胴部は長胴形をし、小さな平底である。798は直径が17cmと大きい広口甕で、口唇部に凹線がある。799の直径は14.5cmある。807はナデ屑で、口縁部が長い。外面調整がヘラナデのものもあるが、ヘラナデのものが多い。



第136図 溝状遺構配置図

811は直径が7.5cmの安定した平底で、壺形土器の底である可能性があるが、弥生時代前期の変形土器の可能性もある。内面の剥脱が目立つ。

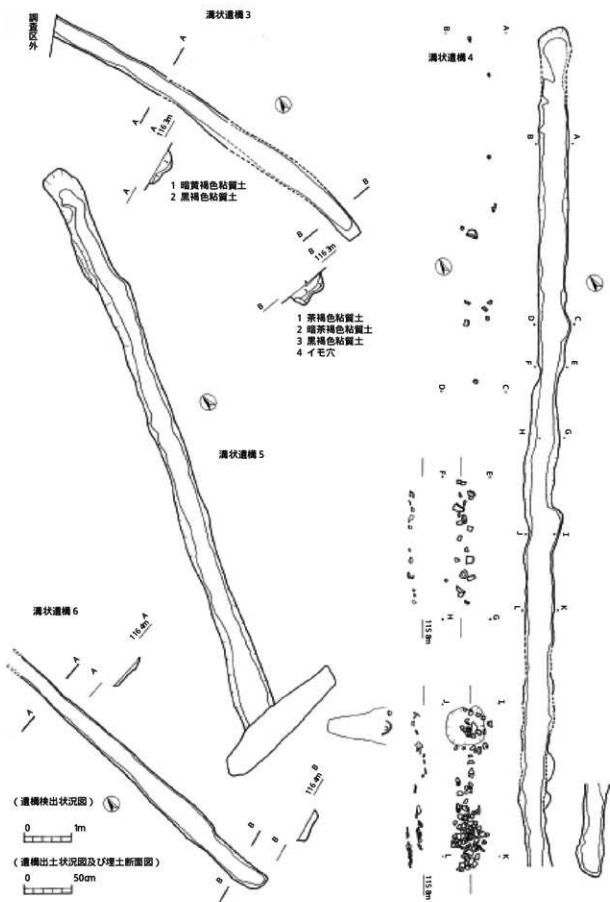
③ 5号（第136図・137図・138図 804・805）

4号の東約9mのC・D境付近、9～11区で検出された4号と並行する溝状遺構で、両側とも途切れている。幅は50cmで、長さが約13mある。

804・805は壺形土器の脚台で、直径が9cm、高さが3.5cmある。脚台端は外へ広がり、丸みをおびている。内外ともヘラナデだが、804の内・外面とも指頭圧痕がみられる。

④ 6号（第136図・第137図）

D-15区で検出されたほぼ南北に流れる溝状遺構で、南側は終わっているが、北は浅くなって切れている。幅が30～50cm、深さが5～10cmで、長さ7mが検出されている。



第137図 溝状遺構検出状況



796



797



798

溝状遺構 2 出土遺物



799



800



806



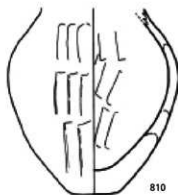
809



801



807



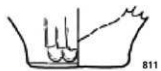
810



802



808



811



803

溝状遺構 4 出土遺物



804

溝状遺構 5 出土遺物



805



第 138 図 溝状遺構出土遺物(土器)

2 包含層出土遺物

(1) 土器 (第140図 812~818)

812は直径が15cmの壺形土器の口縁部である。頸部から強く外反し、口唇部は中央に凹線がある矩形を呈している。外面はていねいなヘラナデである。

813は外反する壺形土器の頸部周辺の破片で、薄い作りになっている。外面は粗いヘラナデになっている。

814・815は免田式土器の壺形土器肩部で同一個体である。肩部の上側に九条の凹線が巡り、その最下部にヘラ押し文が連続的に押されている。下側には五条の浅いヘラによる半円沈線が右から左へ描かれている。外面はていねいなナデ整形で、焼成度は良好である。茶褐色を呈し、白色石・茶色石が多く含まれている。

816は口唇部に粗い横方向の条痕がみられる壺形土器の口縁部で、口縁端近くで内側へ強く屈曲している。

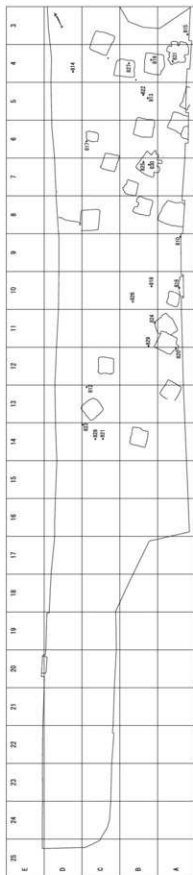
817は口縁直径19cm、高さ7cmの鉢形土器である。丸底から丸みをもって立ち上がった胴部は頸部で、強く外へ屈曲し、外反する口縁部へ至る。口唇部には一条の凹線がみられる。胴部外面はヘラケズリだが、口縁部外面や、内面はヘラナデで仕上げている。口縁内面はハケナデである。これは蓋形土器の可能性もある。

818は壺形土器の肩部である。内外ともヘラによるていねいな縦ナデで、外面にヘラによる絵画が描かれているが、なにを描いているのか不明である。

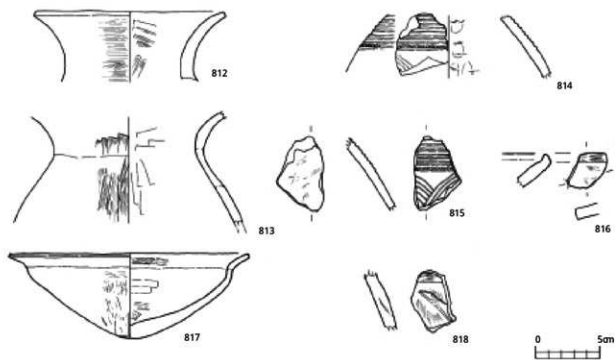
(2) 土製品

① 円盤形土製品 (第141図 819~829)

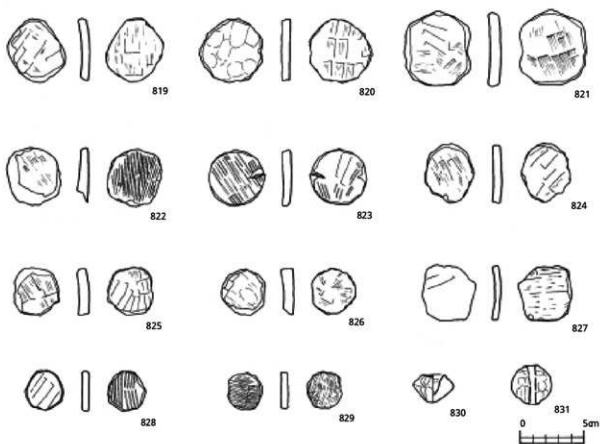
壺形土器や甕形土器の破片を円形に打ち欠いて、円盤形にこしらえたもので、包含層のほか2号(827)・3号(819)・9号(822)・12号(825)・21号(824)の各住居跡からも出土して



第139図 弥生一古墳土器・土製品分布図



第14図 弥生~古墳土器



第14図 弥生~古墳土製品

いる。直径は3cm足らずのもの(829)から6cmほどある大きなもの(821)までである。打ち欠いたままで角がとがったものが多いが、823・828は周辺をていねいにみかいて丸くこしらえている。820・821・823・824・826・828は縄文土器を加工したものである。

②ミニチュア土器(第141図 830)

12号住居跡で出土した、口縁直径が1.8cm、高さ2.2cmの甕を模したものである。ソロバン玉状に胴部がふくらみ、上から指頭状のものが穴をあけて直口甕状にしている。外面はヘラナデでていねいに仕上げている。

③球状土製品(第141図 831)

9号住居跡で出土した、直径が3cmほどの球状を呈する土で、3mmほどの孔が焼成前に穿たれている。周辺はヘラでていねいにナデている。

(3) 剥片石器類

ここでは、Ⅱ層から出土した石器のうち、弥生時代終末～古墳時代に該当する可能性が高い石器を取り扱う。層的には縄文時代の石器と同一層から出土したものもあるが、石材及び製作技術から分離を行った。なお、分離が困難であった一部の剥片石器、石斧類、礫石器などについては、縄文時代の石器と同項目で取り扱う。

磨製石鏃等(第143図832～837)

832～837は磨製石鏃及びその木製品と考えられるものである。832は頁岩を素材とする。全面を研磨によって丁寧に整形している。形態的には鉄鏃のプロポーションに近く、鉄鏃の模倣品として製作されたものとみられる。833は先端部と脚部の一部が欠損するもの、ほぼ定形をなす。表裏とも丁寧な研磨によって整形され、袂部の湾曲も研磨によって丁寧に作出されている。834は節理が発達するホルンフェルス素材とし、周縁部に細かな整形剥離を施している。研磨はほとんど行われ

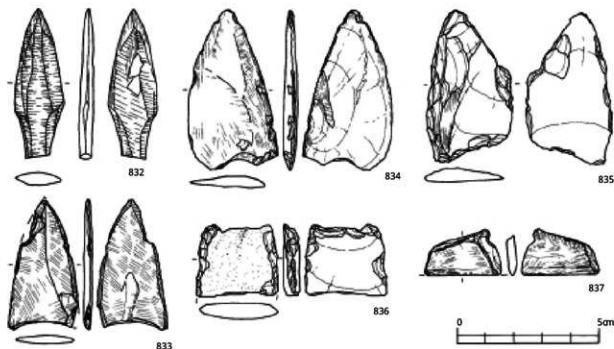


第14図 弥生～古墳石器・石製品分布図

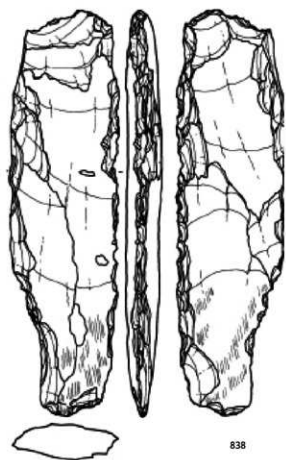
ておらず、整形剥離段階で放棄された未製品とみられる。835は薄いホルンフェルスの素材剥片を利用し、右側縁と挾部に研磨による加工が観察されるが、加工は部分的である。未製品の可能性もあるが、形状的には製品としても機能しうる。836もホルンフェルス素材とするが、周縁の整形加工のみで研磨痕は観察されない。やや分厚く、上半分は折損する。特別な再生加工は行われておらず、そのまま放棄されたものとみられる。837は表裏とも丁寧に研磨された製品である。薄く扁平な資料であるが大部分は欠損しており、全体形は不明である。下端部はやや丸みを帯びる形状で摩滅痕が観察される。磨製石鏃ではなく、石産丁の刃部である可能性が高い。

打製石斧等(第144図838～第146図847)

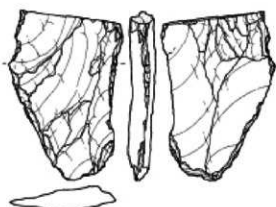
838～847は打製石斧およびその関連資料である。838は良質の頁岩を使用する打製石斧である。横長の扁平な素材剥片を利用し、周縁部に丁寧な整形剥離を施して短冊形に仕上げている。先端部は顕著な摩滅痕が観察され、刃部左側縁は再生加工を繰り返しながら使用された可能性が高い。839は打製石斧の未製品と考えられる資料である。素材剥片の周縁部に簡単な整形加工を施しているが、上半部は節理により折損している。摩滅痕等は観察されず、整形段階で放棄された可能性が高い。840も未製品と考えられる資料である。上部と下部は折損しており全体形は不明であるが、薄手の素材剥片を使用し、両側縁の整形加工にやや挾部の作出を意識した剥離が見られるため、打製石斧の関連資料として取り扱った。摩滅痕等は特に観察されない。841及び842は薄手のホルンフェルスの剥片を素材とし、周縁部に簡単な整形加工が施された資料である。素材はやや脆弱であるが、下端部にはわずかに微細剥離や摩滅痕が観察される。整形剥離は上半部に集中し、装着を意識したものと考



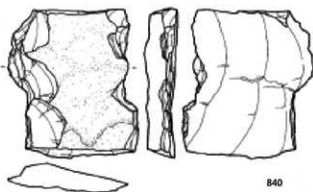
第143図 弥生～古墳石器(1)



838



839



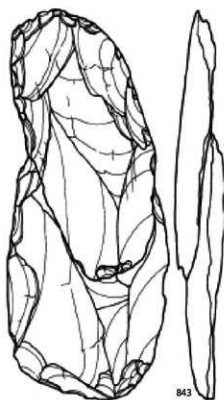
840



841

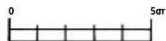


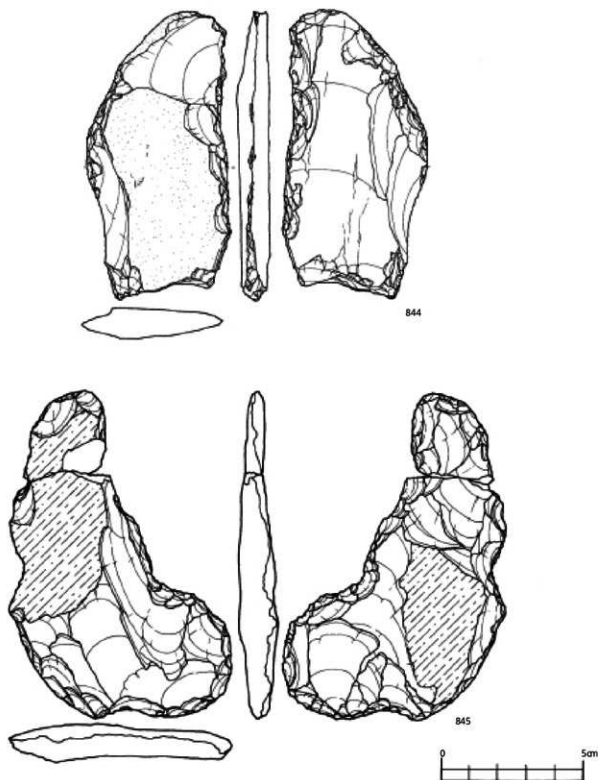
842



843

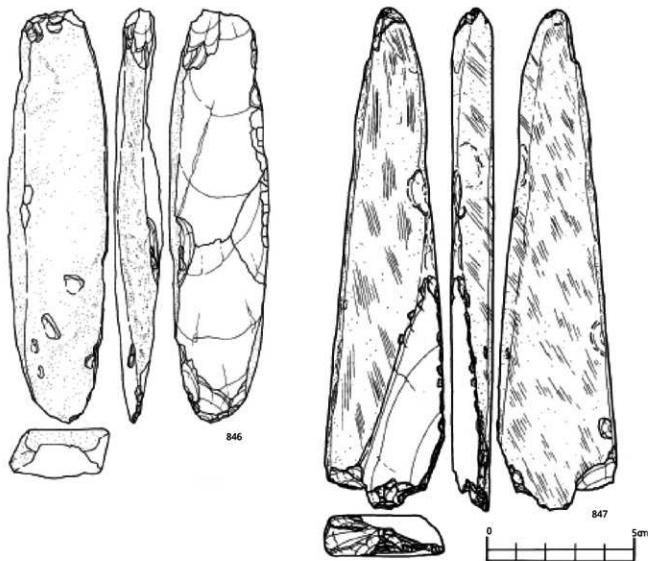
第144图 弥生一古墳石器(2)





第 145 図 弥生へ古墳石器 (3)

えられる。841は先端部にはほとんど加工が施されておらず、先端部が薄くなる素材剥片の形状を利用して製作が行われた可能性が高い。842についても、簡単な整形剥離が行われるのみで、基部付近に整形剥離が施されている。843は841と842の接合資料である。節理に沿って横剥ぎに近い形で素材剥片が生産されたことが分かる。844も下端部が欠損するものの、打製石斧と考えられる資

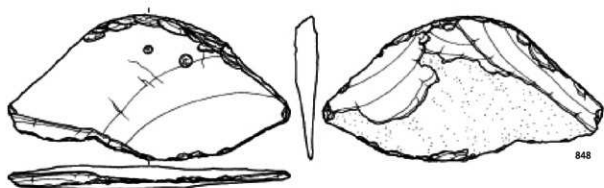


第146図 弥生-古墳石器(4)

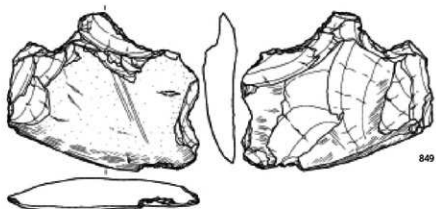
料である。良質なホルンフェルス素材としており、破断面付近の両側縁には、わずかがが摩滅痕が観察される。右側縁には非常に丁寧な整形剥離が施されており、破断面後に削器に転用されたものと考えられる。845は粘板岩質の粗質頁岩を素材とするものである。欠損と再生加工を繰り返したものと推測され、全体形は不整形を呈している。打製石斧として機能しうるものかどうか判断としないが、下端部付近には摩滅痕が観察されることから、打製石斧の関連資料と判断した。摩滅痕は右側縁の湾曲部の中程まで観察され、機能部は下端部のみでなく、下半部のかなり広い部分に及ぶものと推察される。

846・847は礫素材の形状を利用して加工を行っているものである。礫器として取り扱うべきものであるが、打製石斧に類する機能が想定されるため、これに準じて取り扱う。

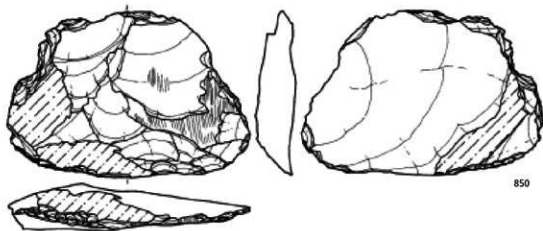
846は節理がやや発達するホルンフェルス素材とするものである。棒状礫を利用し、先端部に鋭利な整形加工を施して機能部とする。また、装着部と想定される部分には、打撃痕や摩滅痕が観察される。847も棒状礫を素材とする。刃部加工は背面側からのみ行われており、未製品のまま放



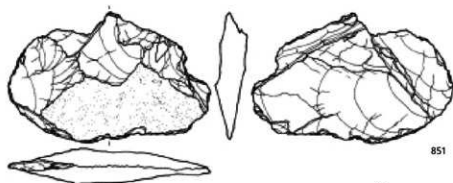
848



849



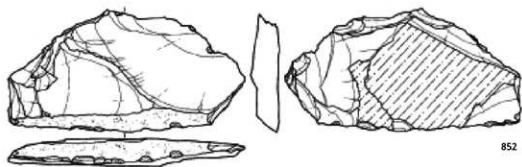
850



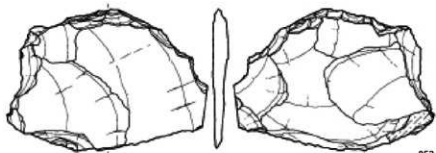
851



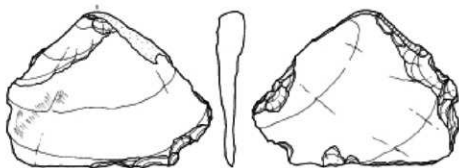
第14圖 弥生-古墳石器(5)



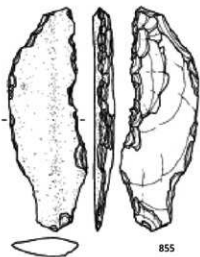
852



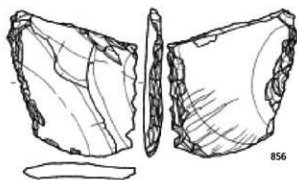
853



854



855



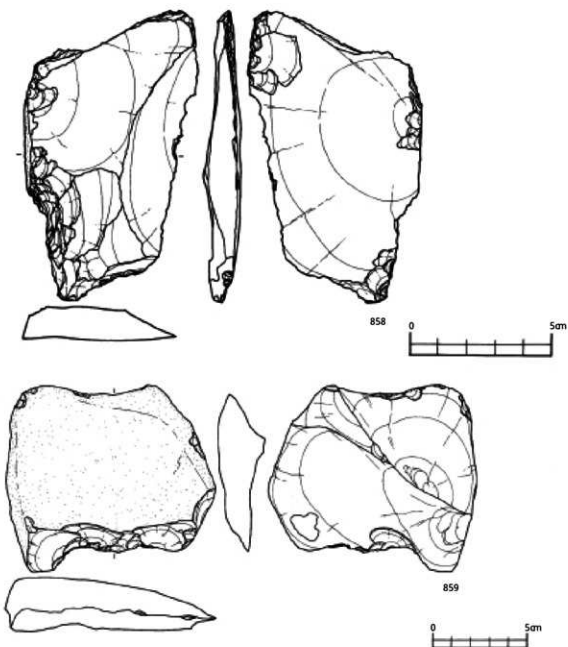
856



857



第148圖 弥生一古墳石器(6)

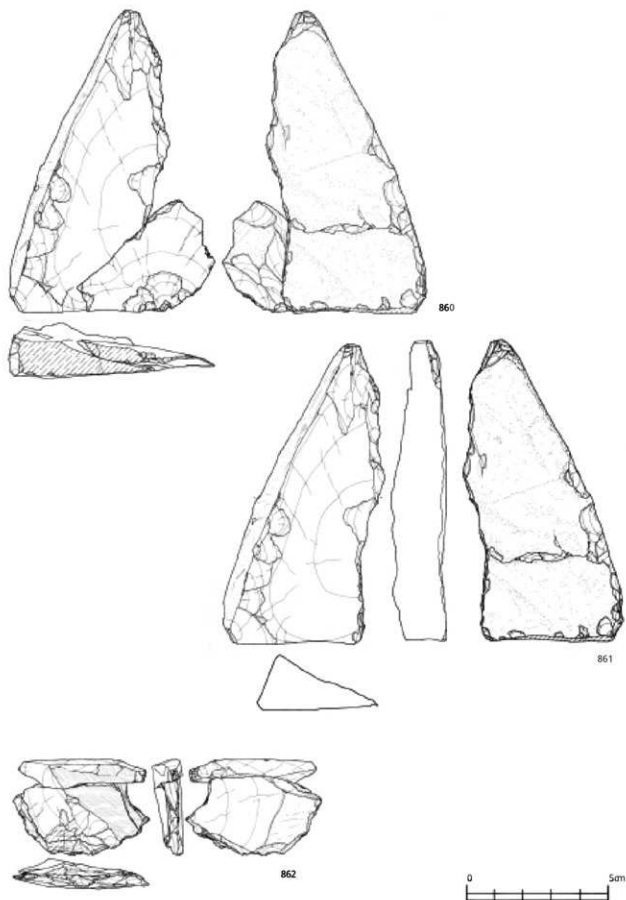


第149図 弥生-古墳石器(7)

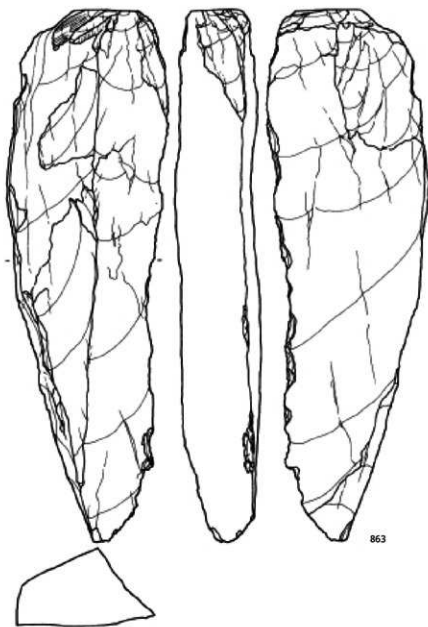
棄されたものと考えられる。

石廬丁・削器等(第147図848～第149図858)

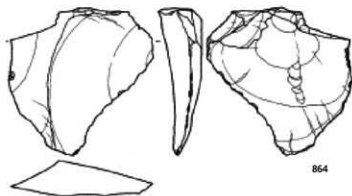
848～858は石廬丁ないしこれに類する削器等とみられる資料である。848は比較的良好なホルンフェルス素材とし、丁寧な整形剥離によって半月形に仕上げられている。研磨痕はみられないが、下縁部には微細剥離痕が観察される。また、正面上部には2か所に穿孔がみられるが、貫通はしていない。849はやはり良好なホルンフェルス素材とするものである。攪乱による損傷が激しいが、刃部付近を中心に丁寧に研磨されている。850はやや粗質のホルンフェルス素材とする。周縁は丁寧な整形剥離によって整形されており、側縁がややえぐれる台形状を呈する。刃部はやや鈍いが細かな剥離痕が部分的に集中し、わずかながら摩滅痕も観察される。研磨によるものか、部分的に



第150图 弥生~古墳石器(8)



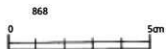
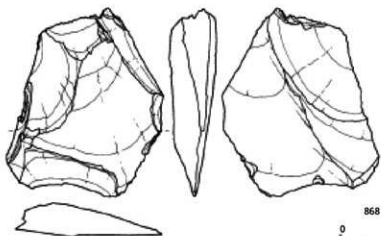
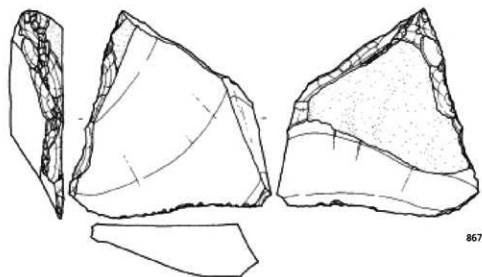
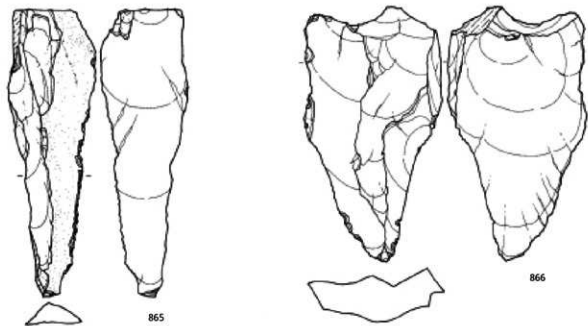
863



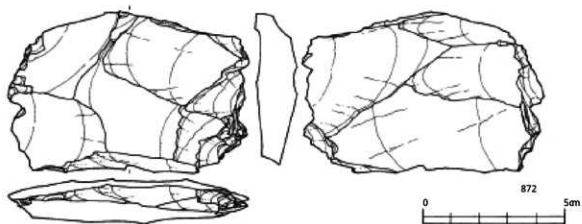
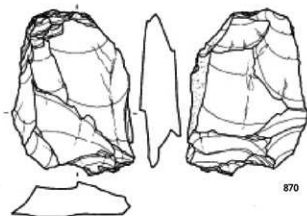
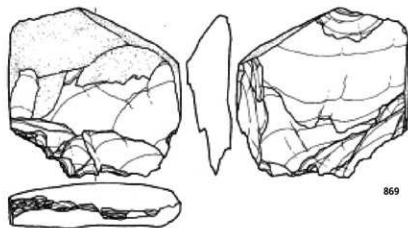
864



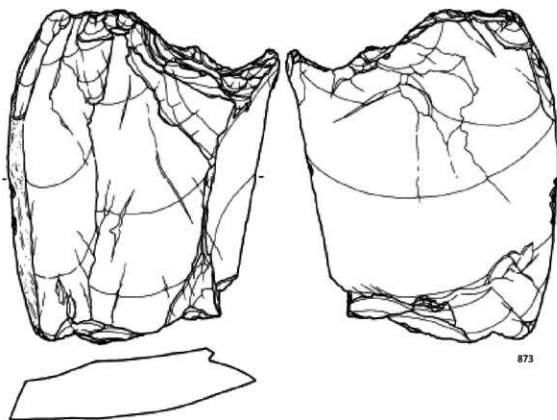
第 15 図 弥生〜古墳石器 (9)



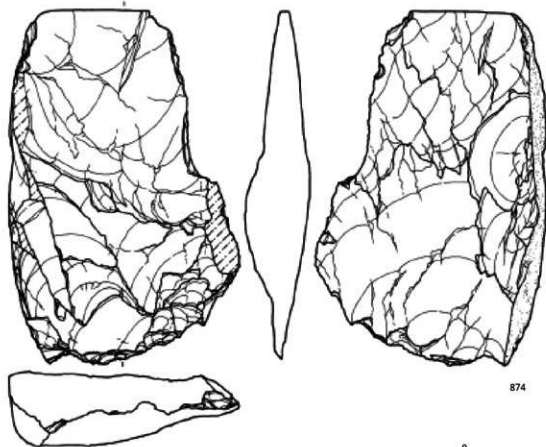
第15图 弥生—古墳石器(10)



第153图 弥生一古墳石器(11)



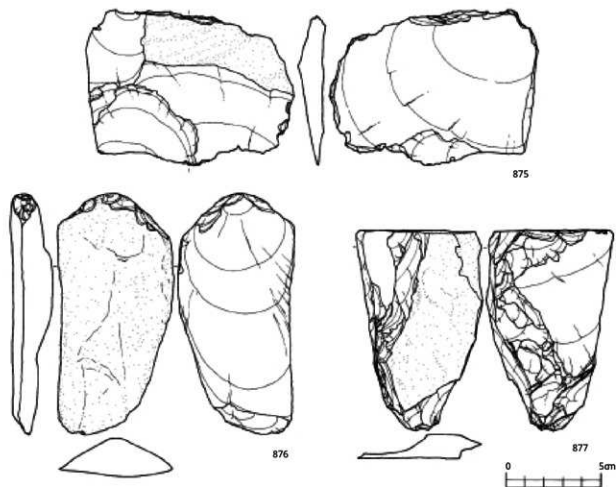
873



874

第154图 弥生-古墳石器(12)





第155図 弥生-古墳石器(13)

平滑面が形成されている。851もやや粗質のホルンフェルス素材とするものである。日立った整形剥離は行われていないが、下端部には使用によるとみられる微細な剥離痕が多く観察される。

852～858は削器として取り扱った。852はやや良質な薄いホルンフェルスの剥片を素材とする。両側縁～上部の周縁には簡単な整形剥離を施し、下端部は鈍いが使用によるとみられる微細剥離痕が観察される。853も薄いホルンフェルスの剥片を素材とし、同様に両側縁から上部の周縁に整形加工を施して製品としている。下端部には微細剥離痕が多く観察される。また左右の端部には浅い挟り状の加工がみられる。854は粗質のホルンフェルスを素材とし、三角形に剥離した素材の形状を利用して、両側縁に簡単な整形加工を施して製品としている。やはり下端部に微細剥離痕が観察される。852～854は積極的な整形剥離が観察されないため、削器として取り扱ったが、両側縁～上部の周縁に簡単な整形剥離を施し、下端部に使用によるとみられる剥離痕が形成される特徴から、石庭丁的な機能を想定しうる一群である。

855は削器である。自然面を残すやや粗質のホルンフェルスを素材とし、主に右側縁に整形剥離を施して製品としている。左側縁にはあまり整形剥離は施されていないが、微細剥離は多く観察される。856は薄い扁平な剥片を素材とする。上半分が欠損しているため、全体形は不明である。整形剥離が細かいことから削器として取り扱ったが、打製石斧の可能性もある。左側縁～下端部は、わずかながら摩滅している。857は削器である。剥落した削器ないし打製石斧の刃部とみられるが、

剥落後に二次加工を加え、再生している。858は大形のホルンフェルスの剥片を素材とする削器である。素材剥片の一部に部分的に刃部加工を施し、製品としている。

二次加工剥片等(第149図859～第152図868)

859は二次加工剥片として取り扱った。白く風化するホルンフェルスを素材とし、上端部と下端部にやや大柄の整形剥離を施した後、細かい剥離を加えて刃部を形成している。刃部は上下縁ともやや内湾する形状となっている。また、右側縁には微細剥離痕が観察される。

860～862は接合資料である。860と861は同一資料であり、860が接合状態を示す。大形のホルンフェルスを素材とし、自然面を打面として大形の剥片(14916)を剥離する。剥離された剥片にも簡単な整形剥離が加えられ、下端部には微細な剥離痕が観察される。削器として使用された可能性が高い。861は残核として残った大形の素材に二次加工を加え、礫器としている。862はやや節理が発達する良質のホルンフェルスを素材とする。周縁には粗い整形剥離が施されているが、刃部形成には至っていない。上部を右方向からスボール状に剥離している。右応丁またはこれに類する削器の未製品と考えられる。

863～868は微細剥離痕剥片である。863は自然面を打面とする大形のホルンフェルスの縦長剥片を素材とする。右側縁の主要剥離面側に微細な剥離痕が観察され、削器的な機能を想定できる。864はホルンフェルスを素材とする不定形剥片である。両側縁の主要剥離面側に、わずかながら微細剥離痕が観察される。865もホルンフェルスを素材とするものである。右側縁に微細剥離痕が多く観察され、削器的な機能が想定される資料である。866は白く風化するホルンフェルスを素材とするもので、部分的に微細剥離痕が観察される。867も良質なホルンフェルスを素材とする。不定形剥片を利用して、下端部を中心に微細剥離痕が観察される。868もホルンフェルスを素材とし、不定形剥片を利用している。部分的に微細剥離痕がみられる。

剥片等(第153図869～第155図877)

869～874は剥片等のうち、右応丁ないしこれに類する削器類の未製品や素材と考えられる資料を抽出した。ホルンフェルスを素材とするものが多く、幅広く薄手の剥片を利用するものが多く、頭部ないし端部に折断的な加工を施す特徴がみられる。

869は自然面を残す素材に整形剥離を加えたものである。整形剥離は一方のみで、刃部形成等がみられないことから、整形途中で放棄された未製品と判断した。870は剥片を素材とするものである。主に素材剥片の下端部から整形剥離を加えているが、やはり刃部形成等の意匠はみられない。871は素材剥片の頭部と端部に二次加工を加え、浅い抉りを意識した整形を行っている。製品の下端部には部分的ながら微細剥離痕も観察されるため、使用されている可能性もある。872も素材剥片の頭部と端部に二次加工を施している。製品の左側縁にみられる加工は折断的であり、製品の幅を意図した可能性が高い。873はやや大形ではあるが、加工方法には共通性がみられるため、関連資料として取り上げた。やはり素材剥片の頭部と端部に二次加工が集中している。左側縁に部分的な潰れが観察されるが、使用によるものかどうかは判然としない。874も大形であるが、同様に関連資料と判断した。節理が発達する粗質のホルンフェルスを素材とする。二次加工は素材剥片の頭部側に多く観察されるが、やや細かい。右側縁の上部に微細剥離痕が観察されるため、削器的に使用された可能性も考えられる。

875～877は剥片である。875は白く風化する頁岩であり、薄く扁平な素材である。素材の右側縁

には部分的に二次加工がみられるが、そのまま製品として使用されたかどうかは判然としない。石廬丁及びこれに類する刮器等のなかに同様の石材を素材とするものはなく、縄文時代の石器である可能性もある。876はホルンフェルス素材とする縦長剥片である。背面は自然面を残す。877は節理が発達するホルンフェルスである。自然面を多く残すが部分的に剥離痕がみられ簡単な整形剥離が施されているものとみられる。

(4) 礫石器類

Ⅱ b、Ⅱ c、Ⅱ d層から砂岩製礫石と、軽石製品が出土している。

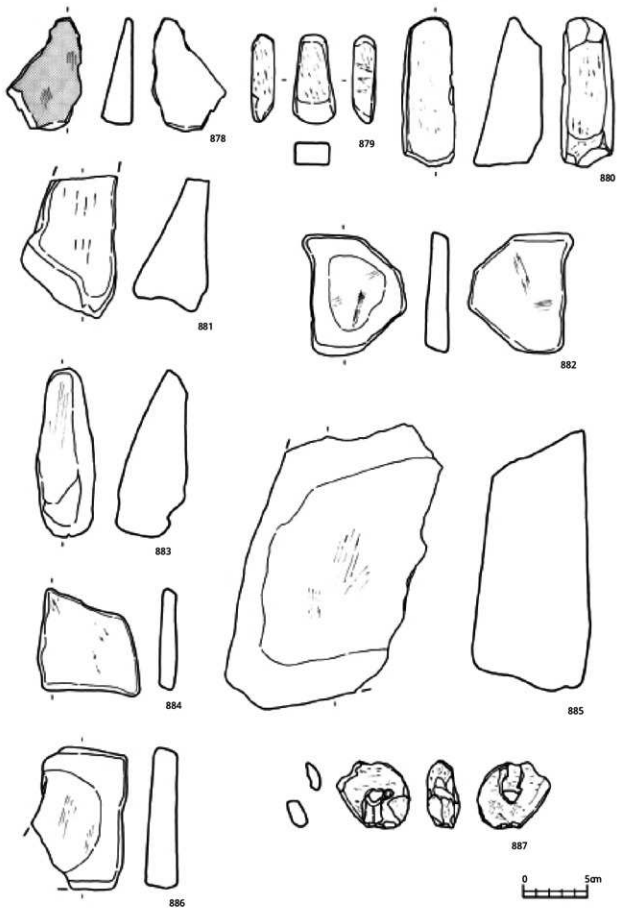
① 礫石

いずれも河原石の円礫を用いており、形状は、扁平なものと分厚いものがある。大きさは手に持てるほどの小さなものが多いが、大きなものも1点ある。置き礫石と、手持ち礫石とがあり、二面を使ったものと三面を使ったものがある。

878は二か所に欠損部があるが、長辺が9 cmほどの小円礫を用いている。二面を使用しており、断面は台形様を呈している。879は長辺7 cm、短辺3 cmほどの小さな円礫を使用し、裏面は自然面を残しているが、表面と二側面の三面を使用している。表面は屈曲部分にも使用痕のあることから、手持ち礫石として用いられるものと思われる。880は分厚い円礫の二側面を使用している。使い込みによりツルツルしている。881は一部が欠損している。分厚い石材の表裏二面を用い、使用により断面は台形状を呈している。882は扁平な石材を用いており、表裏二面を使っている。883は分厚い石材の一面を使用している。884は小さな扁平な石材を用いており、表裏二面を使い込んで、さらに厚さ1.5 cm程に薄くなっている。885は厚さが7～8 cmもある大きな礫を用いており、途中から欠損している。表面・裏面の二面を用いており、片面は平坦だが、一方は使い込んですり減っている。側面の角部の一か所には敲打痕もあり、台石としても兼用されている。886は一部を欠損しているが、扁平なもので、表裏面の二面を用いている。

(5) 軽石製品

17号住居跡で出土した有孔軽石製品である。直径が5.5 cm、厚さが2.5 cmほどの気泡が多い軽石に両側から斜めに孔をうがっており、孔は広がっている。



第 156 图 弥生〜古墳石器 (14) ・石製品

(6) 鉄製品

888は無茅三角形鉄鏃である。基部には抉りを入れ、身の中央に穿孔を2か所施す。扁平で、基部の端を欠損しているが、残りは良好である。

889は小型の刀子である。刀身と茎の幅が同じで、目釘穴が2か所みられる。目釘穴は刀身に對して斜めに穿たれており、表裏両面に木質が残っている。

890はヤリガンナの先端である。作業部位に明瞭な裏すきが認められる。

891は工具の柄である。木の柄に溝を彫った後、方形の棒状鉄器をはめ込み、樹皮を巻いて工具の柄としている。棒状鉄器は幅5mm、厚さ2mmの細長い形態で、小型の釜ではないかと思われる。

892は方形に成形された用途不明品である。

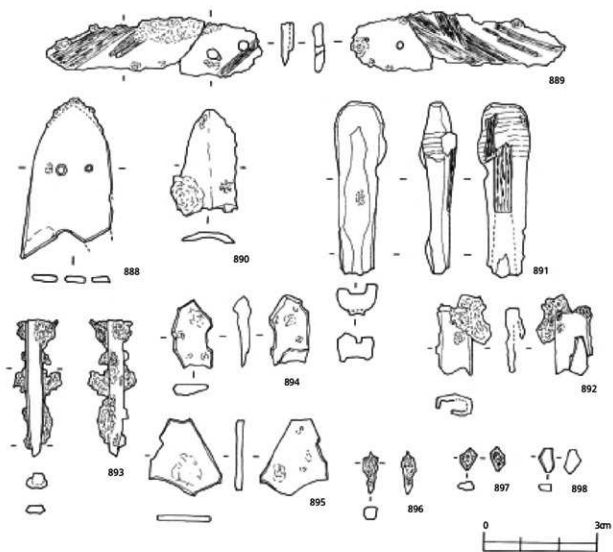
893は細身の棒状鉄器で、上半部は欠出していると思われる。断面方形で、先端は尖る。894～898は鍛冶関連遺物と考えられる。894、895は三角形鉄片で、側面は丸みを帯びている。896は棒状鉄片、897・898は微小鉄片である。

(7) ガラス製小玉・水晶製小玉

住居跡やⅡa層からガラス製あるいは水晶製の小玉が13点出土している。ガラス玉は直径が2mm程度の小さいものから、6mm程度の大きいものまで大小あり、色もコバルトブルーのような澄んだ青色のものや、藍色をしたものまで各種ある。16号住居跡と20号住居跡では2点出土しているが、その他の住居跡では1点ずつの出土である。

899は藍色をした中型のもので、4号住居跡で出土している。気泡が目立ち、丸みをおびている。900はやや緑がかった青色をした大型のもので、孔径も2mmあり大きい。気泡が目立ち、分厚い。8号住居跡で出土している。901は澄んだ青色をした小型のもので、10号住居跡での出土である。902は藍色をした中型のもので、周辺は丸みをおびている。扁平なもので、13号住居跡での出土である。903は緑色がかった発色をした大型のもので、周辺は丸みをおび、気泡が目立つ。15号住居跡で出土している。904は澄んだ青色をした小型のもので、16号住居跡で出土している。905は澄んだ青色をした中型のもので分厚い。904と同じ16号住居跡で出土している。906は藍色をした小型のもので、20号住居跡で出土している。907も藍色をした中型のもので、分厚い。906と同じ20号住居跡の出土で、大きさ・色ともよく似ている。908は澄んだ青色をした小型のもので、丸みをおびている。B-10区Ⅱa層で出土している。

909は白色をした水晶製の大型のもので、中央が丸みをおびたソロバン玉に近い形状をしている。分厚い作りで、孔のうがたれる片方は直にすり切っており、一方はややくぼんでいる。5号住居跡で出土している。



第15圖 弥生-古墳鉄製品



888



889



891



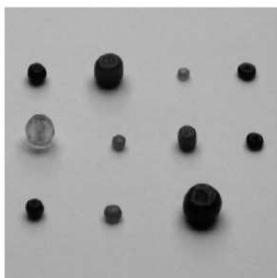
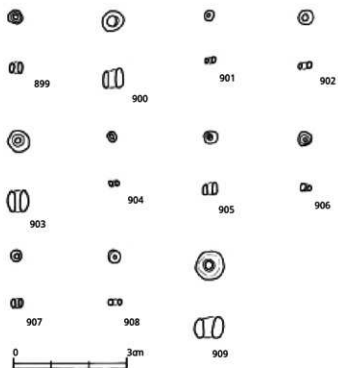
893



895



896-898



第 158 図 弥生-古墳ガラス・水晶製品

第5節 古代以降の遺構・遺物

古代以降の遺物が600点近く出土しており、その時期の遺構と思われる道跡や土坑なども発見されている。近世以降と思われる陶器・染付・瓦なども出土しており、その多くは近代以降のものようであるが、中には堂平窯で焼かれたと思われる内面に当て具痕跡を残す薄手の甕破片もあることから近世初期のものが混入している可能性もある。伊万甲焼などの染付が86点、苗代川焼・竜門司焼などの陶器が286点、瓦が3点ある。小破片が多く、推肥などに混入して二次的に運ばれたものようである。

1 遺構

古代以降のものと思われる遺構に道跡、土坑があるが、ほかに、上面が硬化し、その下にくぼみのある不定形硬化面と呼んだものがある。

1) 道跡

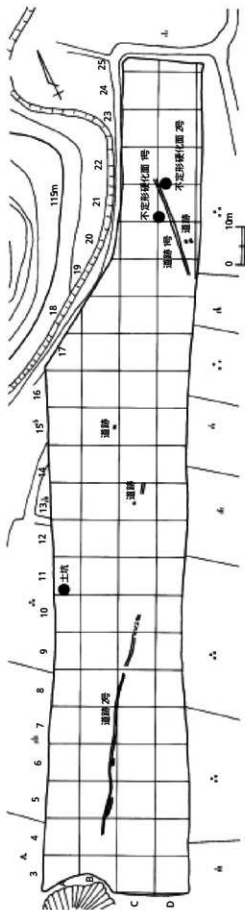
道跡と思われる硬化面が各地でみられているが、長く連なるものと、短い距離しか検出できないものがあり、そのつながりもはっきりしない。3条以上の道跡を検出しているが、これらのなかには一連のものもあり、最終的にはもう少し少なくなるものと思われる。

①道跡1号(Ⅱ:溝状遺構1)

D19区からD20区、C・D21区、C22区へと続く幅40~90cm、深さ12cmほどの溝状となる道跡で、長さ約30mが検出されている。ほぼ一直線に続いており、主軸方向はN9度Eである。理上は上から1・2・3の3層に分かれ、1層が黒褐色粘質土、2層が茶暗褐色粘質土、3層が暗黄褐色強粘質土となる。2層の上部と3層は硬化した土である。

②道跡2号(Ⅱ:古道跡1~5)

B4区からB-5~8区、C-8~10区へと続く幅が30cmほどの硬化面で、長さ約60m



第158図 古代以降の遺構配置図

が検出されている。場所によって途切れたり、2～3条になったりしており、時期によって方向や場所を変えている可能性がある。この周辺から出土しているのはほとんどが成川式土器の小破片（66点）であるが、古代の土師器坏も4点あり、この道跡は古代以降のものと思われる。

910と911は坏の底部で、ヘラ切離しである。ともに底近くが外へ広がっている。明茶褐色あるいは淡茶褐色を呈し、焼成度は普通である。石英や茶色石などの微石が多いこまかい砂を使用している。

④ その他の道跡（旧：古道跡6・7・A・B）

C13区、B15区、D20区などで硬化面がみられ、状況からして道跡と思われる。C13区では幅30cm、長さ2.7m検出されており、向きや位置から道跡2号に続く同一のものである可能性がある。いずれも出土品がなく、時期は不明である。

2) 土坑（旧：埋納ピット12）

A11区のIIb層で土師器坏の完形品が出土した。長径90cm、短径60cm、深さ90cmの略だ円形をした土坑の直上にあるが、関連ははっきりしない。土師器坏の脇に古墳時代の甕形土器破片があった。

坏は口縁直径13.5cm、高さ6cm、底部直径5cmの完形品で、薄い器壁であるが、底は厚い。外面・内面ともろくろびき調整で、雑な仕上げをしており、底はヘラ切り離しで仕上げている。明茶褐色を呈し、焼成度は普通である。石英・茶色石などの微石が多い細砂質土を用いている。

3) 不定形硬化面

時期がはっきりせず、形状も不定のため、実測図は記載していない。自然にできたものの可能性もある。

① 1号

C・D21区で東西3m、南北2～3mの範囲に暗黒褐色をした硬化面がある。硬化部分は厚さ3～10mmほどである。下にはいくつかのピットがあるが、関連は不明である。

② 2号

D21・22区で東西に3.6m、南北に2.5mの範囲の硬化面があり、下のほうは10～25cmほどのくぼみが十か所近くみられる。

2 遺物

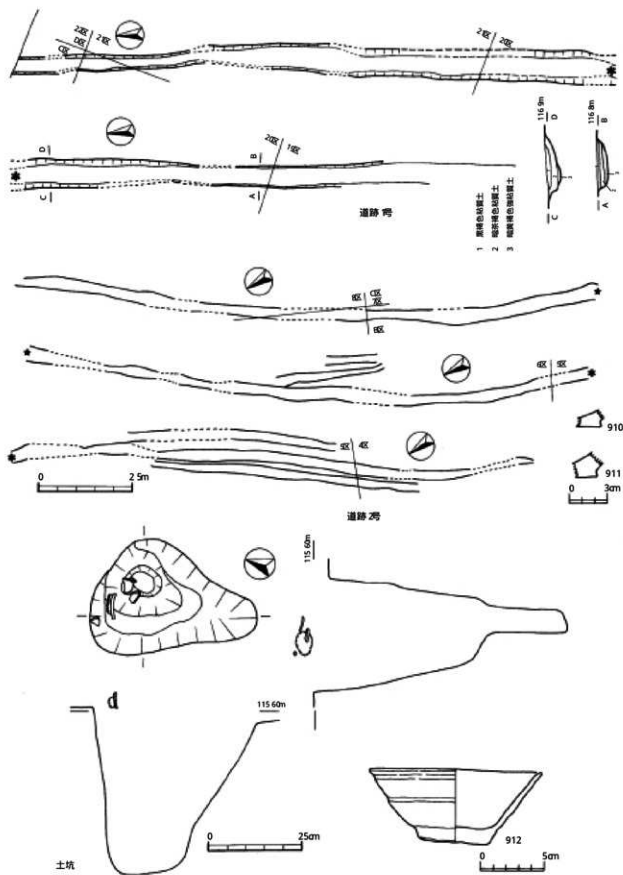
土師器・須恵器・青磁・白磁が出土している。

1) 土師器（第161図913～930）

ほぼ全面に156点出土しており、ほとんど古代のものだが、糸切り底があり、さらに青磁・白磁などがあることから中世のものが含まれている可能性がある。器種には皿、坏と甕がある。

皿はゆるやかに外反するものと、強く外反するものがある。913は口縁直径が11cmあり、ゆるやかに外反している。914は口縁近くで強く外反している。さらに頭部の下では、掘ったようになり薄くなっているため、口縁部が玉縁状になっている。

坏の口縁部はまっすぐ伸びているが、916は傾きが強い。915は口縁直径が16.5cmある大型のもので、内面は横方向のヘラケズリが施されている。底は内外ともでこぼこが目立つヘラ切り離しの底部である。底近くでくびれをもって外へ広がるものと、段をもたずにすんなりと底へ至るものがある。底の直径は5.5～7cmである。918は内側中央が突出しているが、整然とした形状をしている。



第16図 古代の遺構

921は分厚い底で、外底に植物繊維用痕がみられる。焼成が良くなく磨滅が目立つ。石英・灰黒色石・長石などの微石を多く含む砂質土を用いており、乳茶褐色を呈している。

碗の口縁部は内外ともでこぼこが目立ち、端部は丸みをおびている。乳褐色を呈し、焼成度は良くないため、磨滅が目立つ。石英・黒色石・茶色石などの微石が多いこまかい土を用いている。

929・930は糸切り離し底の小型皿で、玉縁状の口縁を呈し、底から口縁へ向かってやや外反してゐる。乳茶褐色を呈し、軟質の焼きで、精製土を用いている。これらは中世のものである。

2) 須臾器 (第161図 931~933)

壺の口縁部が1点と、甕の破片が3点出土している。口縁部は直径が14cmあり、頸部から外反し、強い段をもち外反する二重口縁状を呈する。内外とも褐釉がかかっており、焼成度は良好である。

甕の外表面タキは条痕だが、内面当て具痕は同心円のものと同条痕のものがある。932は外面が青灰色、内面が赤みがかった淡茶褐色を呈している。933は外面が灰褐色、内面が茶がかった灰褐色を呈している。2点とも外面には自然釉がかかり、933は緑っぽい。

3) 青磁 (第161図 934~941)

14~15世紀代の碗が13点と皿が1点ある。

碗の口縁部はまっすぐ伸びるものと、内湾するもの、底は小型のものと普通のものがある。936は高台が欠けているが、内底部に花卉文の陽刻がある。外底部に輪状の露胎部があり、べっ甲色の釉もかかっている。ややあげ底となっている。937は高台がやや内側に傾くもので、底は露胎となり、内外とも釉の色が変わっている。胴部は深緑色、底は黄みがかった緑色を呈する。貫入が目立つ。938は丸みをもった高台であり、底部には輪状の露胎部がある。内底には貫入がみられる。939は内面に沈線による文様がある。小さい高台だが、高台貼付部の外には厚い釉がかかっている。940は逆台形のしっかりした高台があり、高台内面は鋭く切っている。付部から内側は露胎となっている。

皿は口縁直径が13cmほどの稜花皿で、貫入が目立つ。口縁部と底部の境は段をなしている。口縁端内面には横線がみられる。A・B 7・8区で出土している。

4) 白磁 (第161図 942~944)

端反り碗と無文碗・厚さの薄い杯とがある。943はやや内反ぎみにまっすぐ伸びる無文碗で、外面はやや窪む。厚さの薄い杯が2点出土している。高台は付着部内外に釉切れがあり、付部は露胎となっている。高台直径は7cmある。942はA 10区、943はA・B 7・8区、944はC 6区で出土している。

5) 染付 (第161図 945)

断面が方形となる高台をもつ碗で、高台内面は露胎となる。内面には重ね焼きの痕跡がある。外面には2条の横線・多条の縦線がみられ、底部と高台境には釉切れがある。C 7区で出土している。

6) 土師質土器 (第161図 946)

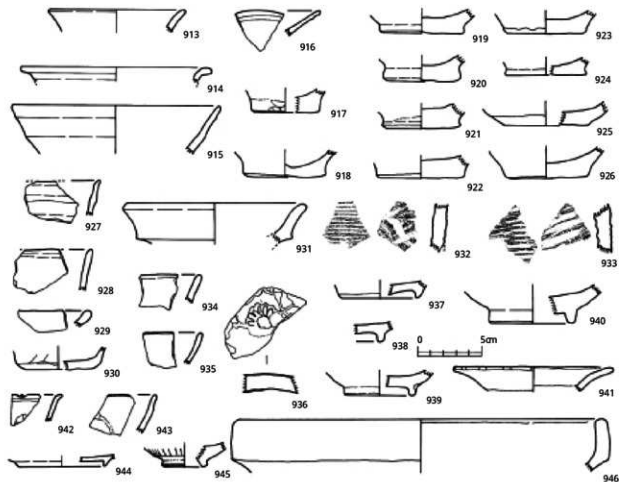
口縁の直径が29cmある鍋である。やや内傾する直立口縁部から稜をもって急角度で狭くなって底部へ移っている。内外とも横方向のナデ仕上げだが、外面の胴部は粗いナデである。淡茶褐色を呈しているが、内外ともスガが付着し、暗くなっている。焼成度は良く、金雲母、白色石・茶色石などのこまかい石粒を含んでいる。B 7区で出土している。

3. 小結

堂園遺跡のA地点では南北方向の道跡と、それに交差するような東西方向の道跡が検出されている。これらは幅が1mほどあり、厚さも深い所で数cmあるようなしっかりした道跡で、周辺から出土している土器からして古代頃のものと考えられている。

B地点で検出された道跡は向きからして、A地点で検出された南北方向に続く道跡の延長部にあたる可能性が高い。この道跡は谷山方面から神殿を通り、平山へ抜ける古代の公道ともいえる大きな道で、その名残りをA地点では良く残しているが、B地点では削平が激しく一部分しか残していない。鳴野原台地では、堂園遺跡の両地点で検出された痕跡から推定すれば、A地点の北東側で谷から台地へ上がり、山裾沿いに通ったあとA地点を横切り、B地点の南側で谷を降っているのだろう。現在では、この谷は急崖となっているが、当時はまだ浅い谷頭状の地形であった可能性がある。

出土している土器は、9～10世紀頃、12世紀後半～13世紀前半、14世紀～16世紀前半、17世紀と、多様な時期のものがあるが、その量はわずかつづであり、集落などの生活臭は探りにくい。ただその中で、9～10世紀頃の土師器は定形品も含め、一定の量がある。その中でも坏は一定量あり、その作りは一定している。つまり、底部が外へ張り出しており、底部整形はいずれも雑である。ただ坏のほかに皿・碗が存在するのに対し、甕の破片が皆無というのは、一般集落の出土状況とは異なっており、当遺跡の特殊なあり方を示している。今後、類例を探し、検討する必要がある。



第16図 古代・中世の出土遺物

第6節 分析・鑑定

堂園遺跡B地点の分析・鑑定については、平成17年度から平成19年度にかけて、放射性炭素年代測定、炭化種実同定、炭化材物種同定は株式会社加速器分析研究所が、黒曜石製石器の産地推定は有限会社遺物材料研究所が行った。本節は、各社の報告を基に、一部遺物の事実記載を加筆した。

1 鹿児島県鶴野遺跡ほか出土植物遺体の同定調査 株式会社加速器分析研究所（平成19年2月28日/3月13日）

(1) はじめに

鹿児島県に所在する堂園遺跡では、炭化した植物遺体が出土している。これについてその種類を同定したので、以下にその結果を示す。

(2) 調査方法

試料を実体顕微鏡下で観察し、その形態から種の同定を試みた。その際、石川茂雄（1994年）、大井（1978年）、北村・村田（1979年）、中田・井之口・南谷（2000年）を参照した。

(3) 結果

木本1種と草本1種が認められた。写真を示し、同定結果を表1.2に記す。学名は北村・村田（1979年）によった。

第2表 植物遺体同定表

No.	和名	科名	学名	種類	部位	写真No.
1	針葉樹	—	—	木本	雄球花	1
2	針葉樹	—	—	木本	雄球花	2
3	タデ科	タデ	Polygonaceae	草本	果実	3
4	タデ科	タデ	Polygonaceae	草本	果実	4

第3表 出土遺構と結果

No.	遺構No.	地区	出土層位	種類と部位	写真No.
1	12号竪穴住居跡南側ベルト	B-7	床上層	雄球花	1
2	12号竪穴住居跡中央炉	B-7	床上層	雄球花	2
3	12号竪穴住居跡中央炉	B-7	—	タデ科の果実	3
4	5号竪穴住居跡中央炉	B-6	床面直上	タデ科の果実	1

[参考文献]

石川茂雄（1994年）「原色日本植物種子写真図鑑」、石川茂雄図鑑発行委員会

大井次三郎（1978年）「改訂増補新編日本植物誌顕花編1、至文堂

北村四郎・村田深（1964年）「原色日本植物図鑑草本編」上、中、下保育社

北村四郎・村田深（1979年）「原色日本植物図鑑木本編」1、II、保育社

中山南大・井之口希秀・南谷忠志（2000年）「日本植物種子図鑑」、東北大学出版会

牧野富太郎（1989年）「改訂増補牧野新日本植物図鑑」、北隆社

※）本測定は、当社協力会社・（株）吉田生物研究所にて実施した。



1. 針葉樹の雄球花



2. 針葉樹の雄球花



3. タデ科の果実



4. タデ科の種子

2 堂園遺跡B地点ほか出土炭化種実 株式会社加速器分析研究所（平成19年8月3日）

(1) 分析結果

試料は肉眼及び双眼鏡体顕微鏡で観察・同定を行った。以下に同定された分類群と部位を示す。

ア 試料番号1(取上No.9195、5号竪穴住居跡埋上3)チャンチンモドキ(炭化内果皮)

イ 試料番号2(取上No.10600、22号竪穴住居跡埋上4)不明炭化種実

ウ 試料番号3(取上No.5833、7号竪穴住居跡埋上2)ブナ科(炭化葉破片)

エ 試料番号4(取上No.9126、21号竪穴住居跡埋上1)ブナ科(炭化葉半分)

オ 試料番号5(取上No.2876、5号竪穴住居跡埋上2)モモ(炭化核半分)

(2) 炭化種実の形態記載

ア チャンチンモドキ(*Chocrospondias axillaris* (Roxb.) B.L.Burtt et A.W.Hill var. *japonica* (Ohwi) Ohwi); 内果皮は楕円形で骨質で堅く頂部同心円上に5つの細い楕円形の穴がある。

- イ 不明：果殻または種子であるが、破片で形態や構造などに特徴がなく同定できない。
- ウ ブナ科(Fagaceae)：子葉は完形であれば楕円形で、中央から半分に分割れやすい。子葉頂部に根があり、割れた子葉では根が産生して数少ない楕円形の穴があいていることが多い。試料番号3、4ともにこの穴が確認できる。ブナ科のうちコナラ属とマナシイ属がこの楕円形の子葉であり、子葉では両者の区別はつかない。
- オ モモ(*Prunus persica* (Linn.)Batsch)：核は楕円形で扁平、中央から2つに分割られる構造となっており、核壁は厚く堅い。核表面には流理状の深い溝が入り、穴がある。ウメの場合は深い溝はなく浅く細い溝と浅く小さな穴が散在する。

※) 本測定は、当社協力会社・古代の森研究會にて実施した。

3 鹿児島県鹿野郷遺跡出土炭化材の樹種調査結果

株式会社加速器分析研究所 (平成19年2月28日)

(1) 試料

試料は鹿児島県鹿野郷遺跡B地点23号壁穴住居跡床面直上から出土した柱材1点である。

(2) 観察方法

炭化材の数mm立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口(横断面)、柃目(放射断面)、板目(接線断面)面の薄片プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果(広葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

ブナ科クワ属クワ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (遺物No.3) (写真No.3)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大導管(～500 μ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔周囲を形成している。孔内外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小導管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柃目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は人体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、単方向要素として道管、それを取り囲む細胞壁柔軟細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クワは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京大木質科学研究所(1990)

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社(1979)

深澤和三「樹体の解剖」海育社(1997)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所史料第27冊 木器集成図録五畿古代篇」(1985)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所史料第35冊 木器集成図録五畿原始篇」(1993)

※) 本測定は、当社協力会社・(株)古田生物研究所にて実施した。

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFXDX Type 115

第4表 出土炭化材同定表

No.	品名	樹種
3	23号壁穴住居内出土炭化材	ブナ科クワ属クワ



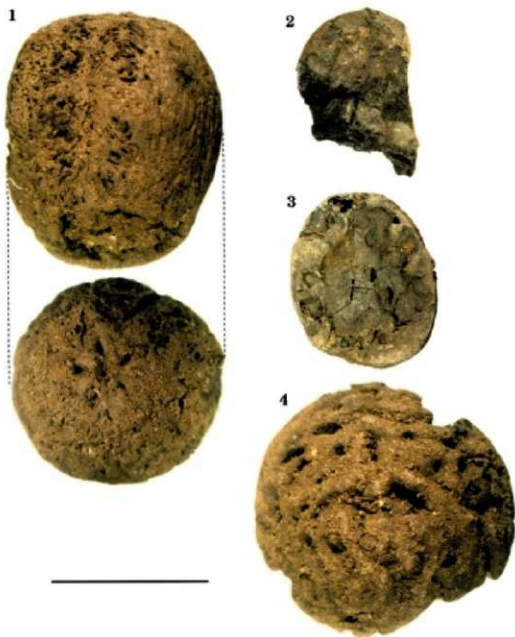
No.3 板目



No.3 柃目



No.3 木口



堂園遺跡B地点出土炭化種実

1. チャンチンモドキ 炭化内果皮(9495), 2. ブナ科 炭化子葉(5933), 3. ブナ科
炭化子葉(9126), 4. モモ 炭化核(2876) (スケールは10mm)

4 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS 測定)

株式会社加速器分析研究所 (平成19年2月28日/3月13日/8月3日)

(1) 遺跡の位置

室蘭道跡跡地点は、鹿児島県川辺郡川辺町清水中畑3161(北緯31°25'03"、東経130°24'50")に位置する。

(2) 遺跡の立地

万之瀬川と神蔵川の上流域に挟まれ、三方が谷に囲まれたシラス土壌の上の舌状台地に立地する。

(3) 測定の意義

遺跡内の複数の住居跡の前後関係および集落の継続期間を明らかにする。

(4) 測定対象試料

測定対象試料は、竪穴住居5号の埴土3出土のチャンチンモドキと同定された種実炭化物 (Na2: 取上番号949G; IAA-70530)、竪穴住居7号の埴土2出土のブナ科と同定された種実炭化物 (Na3: 取上番号5933; IAA-70531)、竪穴住居23号 (KSH23)の床面直上から出土した柱材(IAA-62158)、竪穴住居3号 (KSH3)の床面直上から出土した柱材 (IAAA-62130)、竪穴住居7号の床面直上から出土した炭化材1点 (Na1: IAAA-62475)の合計5点である。検出面であるIc層の上面から、間断的に起る火山噴出物(灰ゴブ、約2700年前)が検出されている。

(5) 化学処理工程

ア メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

イ AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、100℃で乾燥する。

ウ 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、300℃で30分、850℃で2時間加熱する。

エ 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで酸化炭素(CO2)を精製する。

オ 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(還元)し、グラファイトを作製する。

カ グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(6) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした14C-AMS 専用装置 (NECPelletron 9SDH2) を使用する。134個の試料が検出できる。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシェウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により13C/12Cの測定も同時に行う。

(7) 算出方法

ア 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

イ BP 年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

ウ 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 σ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

エ $\delta^{13}C$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}C$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}C$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰;パーミル)で表した。

$$\delta^{14}C = \frac{(^{14}As - ^{14}As)}{^{14}As} \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\delta^{13}C = \frac{(^{13}As - ^{13}As)}{^{13}As} \times 1000 \text{ (‰)}$$

ここで、 ^{14}As : 試料炭素の ^{14}C 濃度 ($^{14}C/^{12}C$) または($^{14}C/^{13}C$)

^{14}A : 標準現代炭素の ^{14}C 濃度 ($^{14}C/^{12}C$) または($^{14}C/^{13}C$)

$\delta^{13}C$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 (^{13}A = $^{13}C/^{12}C$)を測定し、PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)製の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}C/^{12}C$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}C$ を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と記述する。

また、 $\Delta^{14}C$ は、試料炭素が $\delta^{13}C = -25.0$ (‰)であるととしたときの ^{14}C 濃度 (^{14}A)に換算した上で計算した値である。(1)式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}C$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}As = ^{14}As \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000)) \text{ (‰}^{14}As \text{として}^{14}C/^{12}C \text{を使用するとき)}$$

または

$$^{14}As = ^{14}As \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000)) \text{ (}^{14}A \text{として}^{14}C/^{12}C \text{を使用するとき)}$$

$$\Delta^{14}\text{C} = \left[\frac{^{14}\text{A}_s - ^{14}\text{A}_r}{^{14}\text{A}_s} \right] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭素濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない状態で相当するBP年代値が比較的良好でその只も同一時代のもと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

$\Delta^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

同様のな取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age; yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln \left[\left(\frac{\Delta^{14}\text{C}}{1000} + 1 \right)^{-1} \right]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

オ 14C 年代値と誤差は、1 桁目を四捨五入して10 年単位で表示される。

カ 校正年代の計算では、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCal v3.10 校正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

⑧ 測定結果

壱穴住居23号 (KSII23) の床面直上から出土した柱材 (IAAA-62158) が1980 = 40yrBP、壱穴住居3号 (KSII3) の床面直上から出土した柱材 (IAAA-62159) が1980 = 30yrBP の14C 年代である。暦年校正年代 (1 σ) は、それぞれ40BC~70AD の間に含まれ、ともに弥生時代後期前期の年代である。2 基の住居の年代はほぼ等しく、順序との関係整合的であることから、妥当な年代と考えられる。

壱穴住居5号の埋上3 出土の種炭炭化物 (Na2; 取上番号9405: IAAA-70530) の14C 年代が1940 = 40yrBP、壱穴住居7号の埋上2 出土の種炭炭化物 (Na3; 取上番号5933: IAAA-70531) の14C 年代が1920 = 30yrBP である。暦年校正年代 (1 σ = 68.2%) は、Na2 が20~90AD (38.9%)、Na3 が50~125AD である。2 点の年代は誤差範囲で一致し、弥生時代後期に相当する。壱穴住居7号から出土した炭化材1点 (Na1: IAAA-62475) が2000 = 30yrBP の14C 年代である。暦年校正年代 (1 σ = 68.2%) は、170BC~50BC であり、弥生時代中期後半に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver, M. and Peñah, H. (1977) Discussion Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19, 355-363

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. Radiocarbon, 37 (2) 425-430

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43 (2A) 355-363

Bronk Ramsey, C., van der Plicht and B. Weninger (2001) Wiggle Matching radiocarbon dates. Radiocarbon, 43 (2A) 381-389

第5表 放射性炭素年代測定結果

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-62158	試料採取場所	Libby Age (yrBP) : 1,980 ± 40
	試料形態 : 炭化材	$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -23.61 ± 0.80
	試料名(番号) 1	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -218.3 ± 3.4
		pMC (%) = 78.17 ± 0.34
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -216.1 ± 3.1
#1543-1		pMC (%) = 78.39 ± 0.31
		Age (yrBP) : 1,960 ± 30
	IAAA-62159	Libby Age (yrBP) : 1,980 ± 30
	試料形態 : 柱材	$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -23.49 ± 0.70
	試料名(番号) 2	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -218.1 ± 3.3
#1543-2		pMC (%) = 78.19 ± 0.33
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -215.6 ± 3.1
		pMC (%) = 78.44 ± 0.31
		Age (yrBP) : 1,950 ± 30
	IAAA-62475	試料採取場所
試料形態 : 炭化材	$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -26.27 ± 0.68	
試料名(番号) 1	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -229.0 ± 3.2	
	pMC (%) = 77.10 ± 0.32	
#1603	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -231.0 ± 3.0
		pMC (%) = 76.90 ± 0.30
		Age (yrBP) : 2,110 ± 30

IAAA-70530	試料形態 炭化物 試料名(番号) 2(取上番号9495)	Libby Age (yrBP) : 1,940 ± 40
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -29.53 ± 0.53
#1795-1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -214.6 ± 3.4
		pMC (%) = 78.54 ± 0.34
IAAA-70531	試料形態 炭化物 試料名(番号) 3(取上番号5933)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -221.9 ± 3.3
		pMC (%) = 77.81 ± 0.33
#1795-2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Age (yrBP) : 2,020 ± 30
		Libby Age (yrBP) : 1,920 ± 30
IAAA-70530	試料形態 炭化物 試料名(番号) 3(取上番号5933)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -23.46 ± 0.43
		$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -212.8 ± 3.3
#1795-2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%) = 78.72 ± 0.33
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -210.3 ± 3.2
IAAA-70531	試料形態 炭化物 試料名(番号) 3(取上番号5933)	pMC (%) = 78.97 ± 0.32
		Age (yrBP) : 1,900 ± 30

第6表 暦年較正年代表

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-62158	1	1978 ± 34
IAAA-62159	2	1975 ± 33
IAAA-62475	1	2089 ± 33
IAAA-70530	2(取上番号 9495)	1940 ± 35
IAAA-70531	3(取上番号 5933)	1922 ± 33

Reimer et al.(2004)IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration,0-26cal kyr BP,Radiocarbon 46:1029-1058
ここに記載するLibby Age(年代値)と誤差は下1桁を丸めない値です。

5 富岡遺跡B 地点出土黒曜石製遺物の産地推定

有限会社 遺物材料研究所

(1) はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探るという目的で、蛍光X線分析法によりサマサイトおよび黒曜石製遺物の石材産地推定を行なっている^{1) 2)}。最近の黒曜石の伝播距離に関する研究では、伝播距離は数千キロメートルは一般的で、6千キロメートルを推測する学者もでてきている。このような研究結果が出てきている現在、正確に産地を判定すると言うことは、原理原則に従って判定を行うことである。原理原則は、同じ元素組成の黒曜石が属した産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある石器の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。「遺物原材とある産地の原石が一致した」という「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されているとはじめて言い切れる。また、「十分条件」を求めることにより、「一致しなかった産地との交流がなかった」と結論でき、考古学に重要な資料が提供される。

(2) 産地分析の方法

先ず原石採取であるが、本来、一つの産地から産出する全ての原石を採取し分析する必要があるが現実的には不可能である。そこで、産地から抽出した数十個の原石でも、その産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測出来、理論的にも証明されている方法として、マハラノビスの距離を求めてその結果を用いておこなうホリングのT2乗検定法がある。ホリングのT2乗検定法とクラスター判定法(判定ではなく分類)、元素散布図法(散布図範囲に入るか否かで判定)の各々の方法を比較すると以下の通りとなる。

クラスター判定法はクラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動してしまう。例えば、A 原石製の遺物とA、B、C 産地の原石でクラスターを作ったとき遺物はA 原石とクラスターを作るが、A 原石を抜いて、D、E 産地の原石を加えてクラスターを作ると、遺物がE 産地とクラスターを作ってしまう。もし、A 産地が調査されていないと、遺物はE 原石製遺物と判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。また、A 原石製遺物と分かっているならば、E 原石とクラスターを作らないようにもできる。クラスター分析を正確に行うには遺物の原石産地を予め推測し、クラスターを組み立てる必要があるため、正しい結果を得るのは大変に困難なものとなる。

元素散布図法は肉眼で原石群元素散布図の中に分析した遺物の結果が入るか否かを図示した方法で、原石の含有元素の絶対定置値を求めてその違いを地球科学的に議論するには地質学では最も適した方法であるが、産地分析の見地からみると、クラスター法よりさらに後退した方法であり、何個の原石を分析すればその産地を正確に表現出来るのか不明で、例えば分析する原石の数が少ないときはA 産地とB 産地が区別できていたのに、分析する原石数が増えるとA 産地、B 産地の区別ができなくなる可能性があり(クラスター法でも同じ危険性がある)、判定結果に疑問が

残る。以上のことから産地分析の方法として理想的なもの、地質学の常識的な知識（高校生）さえあればよく、火山学、堆積学などの専門知識は必要なく、また、実際の分析においては非破壊で遺物の形態の違いによる相対定量値の影響を介しながら同定を行うことが必要で、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って正確な判定をおこなえるかが重要である。このようにクラスタ判別法、元素散布図法の欠点を解決するために考え出され、理論的に証明された判定法がホテリングのT₂乗検定法である。産地分析を正確におこなうには、ある産地の原石の元素組成と遺物の元素組成が一致すればその産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。考古学では、人工品の様式が一致するとする結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として十器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調査素材があり、それらが一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する上で重要な意味をもつ結果である。しかし、石器の様式による分類ではなく自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が産地から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用にするなど産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石材を近く産地と誤判定する可能性がある。人が移動させた石の元素組成とA産地原石の元素組成が一致し、必要条件を満たしたとき、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなるが、偶然（産地分析法が不完全なために）一致した可能性も大きく、その他のB、C、D、・・・の産地の原石と比較していない場合それぞれの産地でないとの誤断がないために、A産地とも言い切れない。ここで、十分条件として、可能なかぎり地球上の全ての原産地（A、B、C、D、・・・）の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を無限観察で求めることは観察する人たちが個々の主観が入り、分類基準がまちまちとなるため混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても全ての産地が区別できるかは、それぞれが分析している産地分析法によってそれぞれ異なるため、実際におこなってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原産地の原石と客観的に比較して得られたかにより大きく左右され、比較した産地が少なければ信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分組成は原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含まれる微量成分組成には違いがあると考えられるため、微量成分を中心に元素分析をおこないこれを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散など遺物の分析値を対比して、各平均値にのずれ具合（マハラノビスの距離）を求める。また、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地点が異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT₂乗検定を行う。この検定を分析した全ての産地についておこない、ある遺物原料と同じ元素組成の原石がA産地では10個中に一個みられ、B産地では一方個中に一個、C産地では百方個中に一個、D産地では・・・一個と各産地別に求められるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと判定する。すなわち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は鹿児島県川辺郡川辺町に位置する歌園跡B産地出土の黒曜石製遺物(3) 箇で、産地分析の結果が得られたので報告する。

3) 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行う。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素で、塊試料の形状による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それぞれで産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比の値を産地を区別する指標としてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山梨、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を地図1に示す。元素組成の違いによってこれら原石を分類して表1に示す。この原石群に原産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると209個の群になる。佐賀県の渡邊地域および大分県の延島地域の観音崎、西瀬の両地区は黒曜石の石名な原産地であり、延島地域ではガラス質安山岩もみられ、これについても分析をおこなった。隠岐島、宮城島、青森県、和歌山の一部の黒曜石には、Srの含有量が非常に少なく、この特徴により産地分析を行う際他の原産地と区別する有用な指標となっている。九州西北地域の原産地で採取された原石は、相互に元素組成が似た原石がみられる(表2)。九州西北地域で似た元素組成を示す黒曜石の原石群は、渡邊、古里第一、松浦第一の各群（渡邊系と仮称する）および渡辺、中町第二、古里第三、松浦第四の各群（松浦系と仮称する）などである。渡辺系原石の中で中町第二群に一致する原石は12%で、一部は渡邊群に重なるが中町第二群に一致する遺物は中町系と分類した。また、古里第二群の原石と肉眼的および元素組成的に似た原石は隠野町津島川筋頭で多量に採取でき、この原石は越島黒曜石と色調を合しているが、元素組成によって黒曜石と容易に区別できる。もし似た元素組成の原石で遺物が作られたとき、この遺物は複数の原産地から採集された原石を特定できない場合がある。たとえ遺物の原石産地がこれら渡邊系、松浦系、渡辺系、古里系の中の一群および古里第二群のみに限られてきても、この遺物の原石産地は渡邊系、松浦系および古里第二群の原石を産出する複数の地点を考えなければならない。角礫の黒曜石の原産地は渡邊および松浦、中町、古里（第二

群は角礫)の各産地から判定していることから、似た元素組成の原石産地の区別は遺物の自然面が円礫か角礫かを判断すれば原石産地の判定に有用な情報となる。旧石器の遺物の元素組成に一致する原石を産出する川棚町大崎産地から北方集団に位置するところに松岳産地があるが、現在富岡からは8mm程度の小礫しか採取できない。また、佐賀県多久のサヌカイト原産地からは黒曜石の原石も採取され梅野群を作った。九州中部地域の塚原と小川の原産地は隣接し、黒曜石の生成マグマは阿賀と新潟両産地は区別できない。また、熊本県の市岡、轟、冠ヶ岳の各産地の原石はローマ化した阿賀の火砕流の層の中に含まれる最大でも視覚的な黒曜石であり、非常に広範囲な地域から採取されるもので、福岡県八女市の昭和溜池からも同質の黒曜石が採取され昭和溜池群を作った。

従って両面の産地に同定された遺物の原材産地を局所的に特定できない。桑の木津留原産地の原石は元素組成によって2個の群に区別することができる。桑ノ木津留第1群は道路切り通し桑の露頭から採取できるが、桑ノ木津留第2群は転搬として採取でき、これら両者を肉眼的に区別はできない。また、間根ヶ平原産地では肉眼観察で流紋黒曜石のような黒灰色不透明な黒曜石から桑ノ木津留に似た原石が採取され、これらについても原石群を作成し間根ヶ平産黒曜石を使用した遺物の産地分析を可能にした。遺物の産地分析によって桑ノ木津留第1群と第2群の使用頻度を遺跡毎に調査して比較することにより、遺跡相互で同じ比率であれば遺跡間の交易、交流が推測できるであろう。石炭層の黒曜石は大部分炭台地、熊本黒澤宮坂、箱石峠、長谷峠、五ヶ瀬川の各産地および大神宮、鹿児島県の徳満町上牛鼻産地および平木場産の各産地から採取されそれぞれ見た目は似ていて、肉眼観察ではそれぞれ区別が困難であるが、大半は元素組成で区別ができる。しかし、上牛鼻、平木場産の両原石については各元素比値が異なるため区別はできない。

これは向黒曜石を作ったマグマは同じで、このマグマが地殻の割れ目を通して上牛鼻および平木場地区に吹きだしたと考えられ、両者の原石の元素組成が似ていると推定できる。従って、産地分析で上牛鼻群または平木場群のどちらかに同定されても、遺物の原石産地は上牛鼻系として上牛鼻または平木場地区を考慮する必要がない。出水原産地の元素組成と同じ原石は日東、五女木の各原産地から産出してこれらは相互に区別できず日東系とした。竜ヶ水産原石は桜島の対岸の竜ヶ水地区の海岸および海岸の段丘面から採取される原石で元素組成で他の産地の黒曜石と容易に弁別できる。

4) 結果と考察

遺跡から出土した黒曜石質石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であるとと考えられる。黒曜石質石器で、水和層の影響を考慮するとすれば、軽い元素の分析はほとんど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられる。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比の値を用いて産地分析を行なった場合と除かず産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比の値についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値には多少の不確実さを作すが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した宝塚遺跡B地点出土の黒曜石質遺物の分析結果を表3に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するための統計計的手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRr/Zrの1つの変量だけを考える。表3の試料番号1927番の遺物ではRr/Zrの値は0.518で、流紋のRr/Zrの「平均値」±「標準偏差値」は、0.533±0.030である。遺物と原石群の差を流紋の標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から0.5σ離れている。ところで流紋の原産地から100個の原石を採ってきて分析すると、平均値から±0.5σのずれより大きいものが92個ある。すなわち、この遺物が、流紋の原石から作られていたと仮定しても、0.5σ以上離れた確率は62%であるとと言える。だから、流紋の平均値から0.5σしか離れていないときには、この遺物が流紋の原石から作られたものでないとは到底言い切れない。ところがこの遺物を間根ヶ平第一群と比較すると、間根ヶ平第一群のRr/Zrの「平均値」±「標準偏差値」は、0.918±0.055であるので間根ヶ平第一群の標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から7.27σ離れている。これを確率の言葉で表現すると、間根ヶ平第一群の産地の原石を採ってきて分析したとき、平均値から7.27σ以上離れた確率は、三兆分の一であると言える。このように、三兆個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、間根ヶ平第一群産の原石から作られたものではないと断定できる。これら2つのことを簡単にまとめて言うと、この遺物は流紋に62%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから流紋産原石が使用されていると同定され、さらに間根ヶ平第一群に三億倍分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから間根ヶ平第一群産原石ではないと同定される。遺物が一ヶ所の産地(流紋産地)と一致したからと言って、流紋産地と間根ヶ平第一群の産地は成分が異なっているも、分析している試料は原石でなく遺物であり、さらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない。また、同種岩石中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は残る。すなわちある産地(流紋)に一致し必要条件を満たしたと言っても一致した産地の原石とは限らないために、殆く確率による判断を表1の299個すべての原石群・遺物群について行ない、1つ条件である低い確率(0.1%未満)で帰属された原石群・遺物群の原石は使用していないとして消していくことにより、はじめて流紋産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRr/Zrといった唯一つの変量だけでなく、前述した8個の変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とSr元素との間に相関があり、Caの量を言えばSrの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群の原石群と比較したとき、

Ca 量が一致すれば当然 Sr 量も一致するはずである。もし Sr 量だけが少しずれている場合には、この試料は A 群に属していないと推定しなければならない。このことを数值的に導き出すようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T² 乗判定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する¹⁾。産地の同定結果は 1 個の遺物に対して、黒曜石では 209 個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち、淡路系原石と判定された遺物について、台湾の台東山脈系原石、北朝鮮の会寧産物で使用された原石および信州和田峠、霧ヶ峰産の原石の可能性を考慮する必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表 1 に記入した。原石群を作った原石試料は重径 3cm 以上であるが、小さな遺物試料は単位時間あたりの分析カウントは少なくなり、含有量の少ない元素では、得られた遺物の測定値には大きな誤差範囲が含まれ、原石群の元素組成のパラッキの範囲を超えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている 0.1% に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離 D² 乗の値を記した。この遺物については、記入された D² 乗の値が原石群の中で最も小さな D² 乗値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の元素組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えては間違いないと判断されたものである。また、蛍光 X 線分析では、分析試料の風化による表面状態の変化（粉末の場合程度の違い）、不定形では試料の置き方で誤差範囲を越えて分析値に影響が残り、分析値は変動し判定結果は一定しない。特に元素組成の比の値の似た原産地同士では区別が困難で、遺物が複数の原石産地に同定されるとき、および、信頼限界の 0.1% の判定境界に位置する場合は、分析場所を覚えて 3~12 回分析し最も多くの回数同定された産地を判定の欄に記している。また、判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率（1% 以下）の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択するために、誤った先史時代交流を推測する可能性が低くなる。

今回、分析した宝園遺跡 B 地点出土の黒曜石製遺物の中で、産地を判定する信頼限界の 0.1% に達しない遺物がみられた。これら産地が特定できなかった理由は、(1) 遺物が異常に風化し元素組成の変化が非常に激しい場合、(2) 遺物の厚さが非常に薄く、特に遺物の平均厚さが 1.5mm 以下の薄い試料では、Mn/Zr、Fe/Zr の比値が大きく分析され、1mm 厚で Fe/Zr 比は約 15% 程度大きく分析される。しかし、1mm 厚あれば Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr については分析部室範囲で産地分析結果への影響は小さく、Mn/Zr、Fe/Zr の影響で推定確率は低くなるが原産地の同定は可能と思われる。(3) 未発見の原石を使用している場合などが考えられる。分析番号 90254 番と 90269 番の遺物は 1mm 以上の厚さがあり厚さの影響はない。また、軽元素比の Ca/K、Ti/K の値は、上半鼻群と比較すると、風化を受けたように小さくなり（K が大きくなる）なり、しかし、見かけ上遺物表面には光沢があり風化していないようにみえるため、この両試片にエタノール処理で風化層を除き分析したところ、上半鼻群と同定された。

また、分析番号 90282 番の遺物は、厚さが薄く上記の(2)の場合と考えられ厚さが 0.8mm のものを分析したときにおこなう厚さ補正をすると、吉里・稚葉川群に一致した。

分析した黒曜石製遺物 30 個の中で淡路系産物が 13% (13 個)、吉里・中町・松浦系、上半鼻系産物が 13% (4 個)、竜ヶ水産、腰岳産、常風 B 遺物群が 7% (2 個)、轟・冠ヶ岳・昭和湖池・南園産、中町系産、西瀬・観音崎産、吉里産、吉里・稚葉川産が 3% (1 個) と同定された。

この結果、使用頻度の高い原石産地と宝園遺跡 B 地点の交易、交流が活発であったと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 藤科哲男・東村武信(1975)、蛍光 X 線分析法によるササカイト石器の原産地推定 III。考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 藤科哲男・東村武信・鎌木義典(1977) (1978)、蛍光 X 線分析法によるササカイト石器の原産地推定 III。(IV)。考古学と自然科学、10:1153-81:33-47
- 3) 藤科哲男・東村武信(1983)、石器原料の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信(1980)、考古学と物理化学。学生社

第7表-1 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

分析 標数	原産地別原石名	元素比									
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fa/Zr	Rb/Zr	Si/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
136	白雲山群	0.178±0.014	0.103±0.005	0.021±0.001	0.018±0.001	0.014±0.004	0.283±0.019	0.301±0.017	0.024±0.002	0.034±0.001	0.184±0.010
137	白雲山群	0.170±0.014	0.091±0.003	0.079±0.013	2.114±0.142	0.40±0.059	0.263±0.019	0.340±0.030	0.028±0.002	0.074±0.010	
27	白雲山群	0.138±0.004	0.027±0.002	0.107±0.015	3.649±0.191	1.855±0.088	0.097±0.016	0.479±0.039	0.107±0.007	0.068±0.006	
36	白雲山群	0.138±0.004	0.022±0.002	0.105±0.017	3.123±0.172	1.848±0.085	0.105±0.019	0.443±0.044	0.071±0.046	0.071±0.046	
34	白雲山群	0.139±0.003	0.023±0.003	0.099±0.007	2.700±0.178	1.782±0.103	0.102±0.036	0.472±0.026	0.098±0.046	0.031±0.001	
30	白雲山群	0.81±0.013	0.055±0.006	0.081±0.010	3.260±0.117	1.624±0.031	0.941±0.030	0.185±0.020	0.038±0.002	0.047±0.008	
107	白雲山群	0.81±0.011	0.099±0.005	0.087±0.009	2.773±0.097	1.812±0.037	0.818±0.034	0.137±0.024	0.041±0.019	0.033±0.002	
50	白雲山群	0.718±0.055	0.145±0.005	0.077±0.011	2.112±0.117	0.791±0.020	0.718±0.032	0.178±0.022	0.045±0.005	0.017±0.014	
47	白雲山群	0.707±0.030	0.126±0.006	0.074±0.017	3.046±0.163	0.759±0.044	0.849±0.045	0.203±0.032	0.038±0.004	0.114±0.019	
18	白雲山群	0.51±0.016	0.097±0.005	0.085±0.016	2.051±0.142	1.814±0.034	0.789±0.054	0.238±0.025	0.031±0.016	0.031±0.016	
38	白雲山群	0.51±0.016	0.097±0.005	0.085±0.016	2.051±0.142	1.814±0.034	0.789±0.054	0.238±0.025	0.031±0.016	0.031±0.016	
40	白雲山群	0.522±0.016	0.101±0.010	0.068±0.016	2.105±0.140	1.809±0.055	0.783±0.044	0.201±0.030	0.040±0.003	0.0419±0.014	
84	白雲山群	0.259±0.004	0.118±0.006	0.017±0.001	3.04±0.052	0.422±0.012	0.153±0.009	0.138±0.007	0.009±0.003	0.025±0.001	
50	白雲山群	0.27±0.011	0.128±0.006	0.018±0.001	3.49±0.057	0.413±0.013	0.167±0.010	0.137±0.006	0.008±0.003	0.025±0.001	
41	白雲山群	0.28±0.004	0.077±0.003	0.025±0.001	1.679±0.030	0.610±0.019	0.234±0.013	0.313±0.020	0.031±0.006	0.028±0.001	
65	白雲山群	0.328±0.006	0.128±0.005	0.045±0.008	1.813±0.062	0.824±0.034	0.644±0.026	0.178±0.023	0.044±0.020	0.027±0.002	
57	白雲山群	0.272±0.006	0.095±0.003	0.044±0.002	1.738±0.072	0.947±0.102	0.439±0.016	0.201±0.015	0.051±0.026	0.029±0.001	
58	白雲山群	0.272±0.006	0.095±0.003	0.044±0.002	1.738±0.072	0.947±0.102	0.439±0.016	0.201±0.015	0.051±0.026	0.029±0.001	
58	白雲山群	0.272±0.006	0.095±0.003	0.044±0.002	1.738±0.072	0.947±0.102	0.439±0.016	0.201±0.015	0.051±0.026	0.029±0.001	
48	白雲山群	0.390±0.011	0.137±0.006	0.030±0.006	1.810±0.058	0.872±0.014	0.238±0.014	0.178±0.019	0.029±0.015	0.033±0.004	
50	白雲山群	0.390±0.011	0.137±0.006	0.030±0.006	1.810±0.058	0.872±0.014	0.238±0.014	0.178±0.019	0.029±0.015	0.033±0.004	
51	白雲山群	0.470±0.024	0.116±0.013	0.044±0.004	1.933±0.101	0.953±0.045	0.445±0.029	0.192±0.033	0.034±0.015	0.033±0.006	
52	白雲山群	0.470±0.024	0.116±0.013	0.044±0.004	1.933±0.101	0.953±0.045	0.445±0.029	0.192±0.033	0.034±0.015	0.033±0.006	
48	白雲山群	0.512±0.021	0.096±0.004	0.051±0.001	2.467±0.036	0.529±0.013	0.688±0.016	0.144±0.000	0.028±0.001	0.014±0.001	
48	白雲山群	0.512±0.021	0.096±0.004	0.051±0.001	2.467±0.036	0.529±0.013	0.688±0.016	0.144±0.000	0.028±0.001	0.014±0.001	
68	白雲山群	0.578±0.056	0.110±0.011	0.051±0.011	2.555±0.086	0.653±0.013	0.273±0.013	0.214±0.006	0.026±0.001	0.022±0.002	
65	白雲山群	0.678±0.011	0.145±0.005	0.056±0.014	2.631±0.176	0.690±0.038	0.636±0.027	0.167±0.027	0.037±0.020	0.030±0.003	
67	白雲山群	0.249±0.011	0.074±0.005	0.061±0.010	2.781±0.097	1.037±0.056	0.434±0.023	0.338±0.028	0.054±0.023	0.025±0.002	
67	白雲山群	0.249±0.011	0.074±0.005	0.061±0.010	2.781±0.097	1.037±0.056	0.434±0.023	0.338±0.028	0.054±0.023	0.025±0.002	
28	白雲山群	0.499±0.026	0.124±0.007	0.052±0.010	2.635±0.181	0.892±0.061	0.707±0.044	0.197±0.029	0.039±0.023	0.033±0.002	
28	白雲山群	0.499±0.026	0.124±0.007	0.052±0.010	2.635±0.181	0.892±0.061	0.707±0.044	0.197±0.029	0.039±0.023	0.033±0.002	
50	白雲山群	0.254±0.028	0.070±0.004	0.080±0.010	3.028±0.291	0.782±0.040	0.784±0.051	0.197±0.026	0.039±0.023	0.033±0.002	
50	白雲山群	0.254±0.028	0.070±0.004	0.080±0.010	3.028±0.291	0.782±0.040	0.784±0.051	0.197±0.026	0.039±0.023	0.033±0.002	
75	白雲山群	0.473±0.018	0.148±0.007	0.080±0.015	1.764±0.072	0.438±0.027	0.607±0.028	0.157±0.020	0.024±0.017	0.033±0.002	
40	白雲山群	0.37±0.006	0.133±0.006	0.055±0.008	1.723±0.066	0.516±0.019	0.513±0.018	0.177±0.016	0.007±0.005	0.030±0.005	
58	白雲山群	0.28±0.028	0.097±0.005	0.193±0.032	1.834±0.182	0.930±0.274	1.475±0.207	0.249±0.066	0.085±0.031	0.031±0.004	
27	白雲山群	0.340±0.022	0.132±0.007	0.231±0.019	2.683±0.095	0.695±0.044	1.105±0.054	0.399±0.037	0.178±0.021	0.047±0.014	
36	白雲山群	0.00±0.000	0.007±0.001	0.013±0.002	0.128±0.008	0.068±0.002	0.064±0.000	0.064±0.000	0.033±0.004	0.029±0.002	
18	白雲山群	0.07±0.005	0.098±0.003	0.013±0.002	0.131±0.002	0.131±0.002	0.092±0.002	0.073±0.005	0.034±0.006	0.027±0.005	
28	白雲山群	0.299±0.024	0.089±0.003	0.061±0.012	2.051±0.257	1.188±0.062	0.571±0.065	0.277±0.065	0.078±0.025	0.028±0.002	
33	白雲山群	0.344±0.021	0.132±0.007	0.072±0.023	2.851±0.143	0.681±0.052	1.001±0.030	0.389±0.039	0.037±0.002	0.048±0.018	
45	白雲山群	0.250±0.004	0.066±0.003	0.042±0.006	2.457±0.131	1.153±0.066	0.581±0.031	0.284±0.031	0.048±0.037	0.029±0.006	
52	白雲山群	0.250±0.004	0.066±0.003	0.042±0.006	2.457±0.131	1.153±0.066	0.581±0.031	0.284±0.031	0.048±0.037	0.029±0.006	
64	白雲山群	0.25±0.017	0.086±0.003	0.074±0.012	2.518±0.148	1.149±0.063	0.548±0.032	0.248±0.032	0.044±0.033	0.029±0.002	
41	白雲山群	0.905±0.245	2.484±0.055	0.161±0.018	1.570±0.336	0.688±0.014	1.621±0.041	0.244±0.022	0.027±0.014	1.409±0.044	
43	白雲山群	0.294±0.009	0.097±0.004	0.020±0.014	1.920±0.184	0.930±0.081	0.920±0.043	0.247±0.039	0.098±0.040	0.029±0.002	
44	白雲山群	0.097±0.004	0.097±0.004	0.017±0.001	1.504±0.074	0.953±0.072	0.939±0.072	0.116±0.045	0.116±0.045	0.029±0.006	
48	白雲山群	0.383±0.006	0.116±0.005	0.049±0.017	1.800±0.054	0.580±0.025	0.441±0.022	0.212±0.020	0.056±0.015	0.033±0.003	
27	白雲山群	0.638±0.033	0.187±0.021	0.052±0.007	1.784±0.061	0.305±0.016	0.431±0.021	0.209±0.016	0.045±0.014	0.041±0.003	
37	白雲山群	0.634±0.033	0.185±0.013	0.050±0.002	1.766±0.048	0.307±0.017	0.430±0.026	0.209±0.016	0.045±0.014	0.041±0.003	
28	白雲山群	0.909±0.044	0.249±0.015	0.051±0.005	2.544±0.149	0.618±0.029	0.618±0.029	0.138±0.015	0.026±0.013	0.040±0.002	
21	白雲山群	0.174±0.066	0.078±0.017	0.051±0.005	2.544±0.149	0.618±0.029	0.618±0.029	0.138±0.015	0.026±0.013	0.040±0.002	
37	白雲山群	4.828±0.395	1.830±0.104	0.178±0.017	1.392±0.119	0.169±0.063	0.158±0.016	0.158±0.016	0.037±0.018	0.027±0.002	
58	白雲山群	0.381±0.011	0.130±0.005	0.102±0.010	2.719±0.118	0.431±0.022	0.692±0.036	0.244±0.021	0.096±0.047	0.038±0.015	
40	白雲山群	0.31±0.021	0.120±0.005	0.114±0.005	1.833±0.068	0.615±0.044	0.656±0.064	0.309±0.029	0.107±0.057	0.033±0.001	
40	白雲山群	0.31±0.021	0.120±0.005	0.114±0.005	1.833±0.068	0.615±0.044	0.656±0.064	0.309±0.029	0.107±0.057	0.033±0.001	
40	白雲山群	0.31±0.021	0.120±0.005	0.114±0.005	1.833±0.068	0.615±0.044	0.656±0.064	0.309±0.029	0.107±0.057	0.033±0.001	

表7-2 各曜曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

分析 分類	原産地原石群名	元素比										
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
神奈川県	箱根	31	0.55±0.05	0.23±0.19	0.63±0.24	0.93±0.07	0.80±0.21	0.20±0.11	0.04±0.06	0.46±0.08	1.78±0.16	
	箱根	31	0.86±0.04	0.49±0.19	1.19±0.92	0.93±0.07	0.80±0.21	0.20±0.11	0.04±0.06	0.46±0.08	1.78±0.16	
	箱根	31	0.83±0.07	0.48±0.19	1.19±0.92	0.93±0.07	0.80±0.21	0.20±0.11	0.04±0.06	0.46±0.08	1.78±0.16	
	箱根	31	0.81±0.018	0.56±0.007	2.139±0.057	0.628±0.023	0.504±0.009	0.011±0.006	0.073±0.013	0.007±0.006	0.890±0.023	
	箱根	52	0.90±0.15	0.50±0.15	0.94±0.009	2.723±0.164	0.085±0.006	0.731±0.023	0.13±0.011	0.010±0.006	0.890±0.023	
	箱根	31	1.259±0.078	0.84±0.018	0.87±0.004	1.697±0.068	0.087±0.006	0.551±0.023	0.13±0.011	0.010±0.006	0.890±0.023	
静岡県	小笠原	46	0.11±0.006	0.92±0.004	0.237±0.038	3.211±0.119	0.828±0.040	0.154±0.034	0.041±0.024	0.077±0.023	0.429±0.016	
	小笠原	42	0.72±0.012	0.865±0.003	0.964±0.003	0.103±0.019	0.78±0.025	0.599±0.039	0.160±0.028	0.081±0.014	0.353±0.012	
	小笠原	36	0.19±0.017	0.113±0.006	0.740±0.050	1.720±0.060	0.748±0.026	0.665±0.029	0.121±0.026	0.047±0.011	0.392±0.018	
	小笠原	45	0.44±0.052	0.108±0.014	0.739±0.021	2.291±0.132	0.74±0.155	1.22±0.068	0.127±0.041	0.061±0.053	0.412±0.025	
	小笠原	168	0.159±0.010	0.689±0.003	0.101±0.018	3.34±0.076	0.95±0.051	0.360±0.030	0.373±0.039	0.090±0.035	0.346±0.011	
	小笠原	72	0.159±0.010	0.689±0.003	0.100±0.019	3.24±0.084	0.95±0.051	0.369±0.033	0.379±0.032	0.088±0.033	0.345±0.011	
富山県	加賀	13	0.17±0.028	0.049±0.008	0.117±0.011	0.435±0.082	0.83±0.124	0.33±0.094	0.409±0.148	0.19±0.028	0.305±0.018	
	加賀	57	0.47±0.043	0.684±0.012	0.114±0.011	5.09±0.171	1.667±0.091	0.276±0.046	0.372±0.046	0.025±0.003	0.347±0.017	
	加賀	37	0.144±0.017	0.863±0.004	0.094±0.009	3.73±0.045	1.31±0.037	0.208±0.030	0.263±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	
	加賀	47	0.176±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	2.82±0.066	0.058±0.016	0.275±0.058	0.184±0.042	0.068±0.025	0.308±0.014	
	加賀	53	0.23±0.004	0.942±0.002	0.123±0.010	2.59±0.041	0.97±0.061	0.045±0.010	0.443±0.038	0.142±0.022	0.026±0.002	
	加賀	101	0.223±0.024	0.103±0.009	0.058±0.008	1.64±0.078	0.69±0.101	0.049±0.010	0.428±0.018	0.145±0.018	0.049±0.017	
長野県	佐久	53	0.00±0.017	0.890±0.005	0.064±0.008	1.997±0.069	0.850±0.077	0.357±0.034	0.149±0.026	0.068±0.017	0.022±0.002	
	佐久	8	0.26±0.014	0.689±0.008	0.059±0.008	1.187±0.092	0.748±0.073	0.392±0.011	0.46±0.022	0.048±0.024	0.025±0.005	
	佐久	44	0.72±0.017	0.068±0.003	0.069±0.017	2.078±0.110	0.77±0.056	0.77±0.046	0.374±0.042	0.154±0.054	0.029±0.002	
	佐久	47	0.869±0.006	0.142±0.005	0.033±0.001	1.608±0.034	0.261±0.009	0.332±0.006	0.150±0.006	0.033±0.009	0.036±0.001	
	佐久	46	0.33±0.011	0.87±0.037	0.030±0.007	7.11±0.066	0.618±0.027	0.283±0.012	0.181±0.016	0.035±0.018	0.023±0.009	
	佐久	55	0.15±0.018	0.853±0.005	0.099±0.011	3.354±0.058	0.615±0.053	0.084±0.012	0.309±0.038	0.109±0.028	0.023±0.007	
石川県	白川	30	0.17±0.005	0.682±0.002	0.045±0.007	1.878±0.056	0.883±0.034	0.265±0.012	0.097±0.021	0.139±0.018	0.024±0.002	
	白川	48	0.123±0.004	0.956±0.002	0.083±0.012	1.987±0.056	0.97±0.061	0.131±0.044	0.21±0.021	0.026±0.012	0.318±0.004	
	白川	41	0.947±0.066	0.115±0.015	0.200±0.016	3.800±0.362	0.158±0.011	0.833±0.040	0.188±0.015	0.023±0.012	0.045±0.005	
	白川	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.006	1.492±0.078	0.821±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	白川	12	0.863±0.032	0.087±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	白川	44	0.72±0.017	0.068±0.003	0.069±0.017	2.078±0.110	0.77±0.056	0.77±0.046	0.374±0.042	0.154±0.054	0.029±0.002	
新潟県	新潟	47	0.869±0.006	0.142±0.005	0.033±0.001	1.608±0.034	0.261±0.009	0.332±0.006	0.150±0.006	0.033±0.009	0.036±0.001	
	新潟	46	0.33±0.011	0.87±0.037	0.030±0.007	7.11±0.066	0.618±0.027	0.283±0.012	0.181±0.016	0.035±0.018	0.023±0.009	
	新潟	55	0.15±0.018	0.853±0.005	0.099±0.011	3.354±0.058	0.615±0.053	0.084±0.012	0.309±0.038	0.109±0.028	0.023±0.007	
	新潟	30	0.17±0.005	0.682±0.002	0.045±0.007	1.878±0.056	0.883±0.034	0.265±0.012	0.097±0.021	0.139±0.018	0.024±0.002	
	新潟	48	0.123±0.004	0.956±0.002	0.083±0.012	1.987±0.056	0.97±0.061	0.131±0.044	0.21±0.021	0.026±0.012	0.318±0.004	
	新潟	41	0.947±0.066	0.115±0.015	0.200±0.016	3.800±0.362	0.158±0.011	0.833±0.040	0.188±0.015	0.023±0.012	0.045±0.005	
愛知県	豊田	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.006	1.492±0.078	0.821±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	豊田	12	0.863±0.032	0.087±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	豊田	44	0.72±0.017	0.068±0.003	0.069±0.017	2.078±0.110	0.77±0.056	0.77±0.046	0.374±0.042	0.154±0.054	0.029±0.002	
	豊田	47	0.869±0.006	0.142±0.005	0.033±0.001	1.608±0.034	0.261±0.009	0.332±0.006	0.150±0.006	0.033±0.009	0.036±0.001	
	豊田	46	0.33±0.011	0.87±0.037	0.030±0.007	7.11±0.066	0.618±0.027	0.283±0.012	0.181±0.016	0.035±0.018	0.023±0.009	
	豊田	55	0.15±0.018	0.853±0.005	0.099±0.011	3.354±0.058	0.615±0.053	0.084±0.012	0.309±0.038	0.109±0.028	0.023±0.007	
静岡県	静岡	30	0.17±0.005	0.682±0.002	0.045±0.007	1.878±0.056	0.883±0.034	0.265±0.012	0.097±0.021	0.139±0.018	0.024±0.002	
	静岡	48	0.123±0.004	0.956±0.002	0.083±0.012	1.987±0.056	0.97±0.061	0.131±0.044	0.21±0.021	0.026±0.012	0.318±0.004	
	静岡	41	0.947±0.066	0.115±0.015	0.200±0.016	3.800±0.362	0.158±0.011	0.833±0.040	0.188±0.015	0.023±0.012	0.045±0.005	
	静岡	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.006	1.492±0.078	0.821±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	静岡	12	0.863±0.032	0.087±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	静岡	44	0.72±0.017	0.068±0.003	0.069±0.017	2.078±0.110	0.77±0.056	0.77±0.046	0.374±0.042	0.154±0.054	0.029±0.002	
愛知県	豊田	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.006	1.492±0.078	0.821±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	豊田	12	0.863±0.032	0.087±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	豊田	44	0.72±0.017	0.068±0.003	0.069±0.017	2.078±0.110	0.77±0.056	0.77±0.046	0.374±0.042	0.154±0.054	0.029±0.002	
	豊田	47	0.869±0.006	0.142±0.005	0.033±0.001	1.608±0.034	0.261±0.009	0.332±0.006	0.150±0.006	0.033±0.009	0.036±0.001	
	豊田	46	0.33±0.011	0.87±0.037	0.030±0.007	7.11±0.066	0.618±0.027	0.283±0.012	0.181±0.016	0.035±0.018	0.023±0.009	
	豊田	55	0.15±0.018	0.853±0.005	0.099±0.011	3.354±0.058	0.615±0.053	0.084±0.012	0.309±0.038	0.109±0.028	0.023±0.007	
岐阜県	岐阜	37	0.209±0.020	0.127±0.008	0.038±0.002	1.628±0.048	0.648±0.028	0.679±0.022	0.115±0.008	0.061±0.022	0.022±0.001	
	岐阜	42	0.407±0.026	0.127±0.008	0.038±0.002	1.628±0.048	0.648±0.028	0.679±0.022	0.115±0.008	0.061±0.022	0.022±0.001	
	岐阜	30	0.17±0.005	0.682±0.002	0.045±0.007	1.878±0.056	0.883±0.034	0.265±0.012	0.097±0.021	0.139±0.018	0.024±0.002	
	岐阜	48	0.123±0.004	0.956±0.002	0.083±0.012	1.987±0.056	0.97±0.061	0.131±0.044	0.21±0.021	0.026±0.012	0.318±0.004	
	岐阜	41	0.947±0.066	0.115±0.015	0.200±0.016	3.800±0.362	0.158±0.011	0.833±0.040	0.188±0.015	0.023±0.012	0.045±0.005	
	岐阜	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.006	1.492±0.078	0.821±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
岐阜県	岐阜	30	0.17±0.005	0.682±0.002	0.045±0.007	1.878±0.056	0.883±0.034	0.265±0.012	0.097±0.021	0.139±0.018	0.024±0.002	
	岐阜	48	0.123±0.004	0.956±0.002	0.083±0.012	1.987±0.056	0.97±0.061	0.131±0.044	0.21±0.021	0.026±0.012	0.318±0.004	
	岐阜	41	0.947±0.066	0.115±0.015	0.200±0.016	3.800±0.362	0.158±0.011	0.833±0.040	0.188±0.015	0.023±0.012	0.045±0.005	
	岐阜	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.006	1.492±0.078	0.821±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	岐阜	12	0.863±0.032	0.087±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.328±0.029	0.091±0.022	0.048±0.015	0.026±0.002	
	岐阜	44	0.72±0.017	0.068±0.003	0.069±0.017	2.078±0.110	0.77±0.056	0.77±0.046	0.374±0.042	0.154±0.054	0.029±0.002	
岐阜県	岐阜	30	0.17±0.005	0.682±0.002	0.045±0.007	1.878±0.056	0.883±0.034	0.265±0.012	0.097±0.021	0.139±0.018	0.024±0.002	
	岐阜	48	0.123±0.004	0.956±0.002	0.083±0.012	1.987±0.056	0.97±0.061	0.131±0.044	0.21±0.021	0.026±0.012	0.318±0.004	
	岐阜	41	0.947±0.066	0.115±0.015	0.200±0.016	3.800±0.362	0.158±0.011	0.833±0.040	0.188±0.015	0.023±0.012	0.045±0.005	
	岐阜	34	0.228									

第7表-3 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地原石群名	分析 個数	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
長崎県	久賀半島	37	0.17±0.009	0.86±0.002	0.03±0.006	1.17±0.043	0.39±0.012	0.01±0.004	0.35±0.014	0.23±0.002	
	鹿島	28	0.17±0.007	0.85±0.002	0.03±0.005	1.16±0.035	0.38±0.012	0.01±0.004	0.34±0.014	0.23±0.002	
	月山	28	0.14±0.006	0.83±0.002	0.03±0.006	1.17±0.035	0.39±0.012	0.01±0.004	0.35±0.014	0.23±0.002	
	長門	28	0.14±0.006	0.83±0.002	0.03±0.006	1.17±0.035	0.39±0.012	0.01±0.004	0.35±0.014	0.23±0.002	
	松浦	42	0.21±0.005	0.93±0.004	0.07±0.006	2.54±0.134	1.57±0.076	0.42±0.034	0.28±0.037	0.62±0.033	0.34±0.011
	松浦	42	0.19±0.012	0.83±0.006	0.06±0.011	2.31±0.323	1.52±0.199	0.21±0.055	0.19±0.050	0.26±0.003	0.33±0.010
	松浦	42	0.44±0.016	0.83±0.010	0.05±0.010	1.85±0.205	0.85±0.121	0.36±0.098	0.14±0.039	0.08±0.003	0.38±0.002
	松浦	42	0.24±0.014	0.86±0.004	0.04±0.006	1.74±0.069	0.53±0.036	0.48±0.039	0.11±0.017	0.02±0.002	0.35±0.017
	中津	42	0.24±0.011	0.80±0.010	0.057±0.004	1.89±0.089	0.810±0.037	0.39±0.039	0.13±0.017	0.14±0.026	0.25±0.001
	中津	42	0.19±0.042	0.79±0.023	0.046±0.003	1.73±0.089	0.66±0.091	0.48±0.044	0.11±0.018	0.10±0.024	0.25±0.001
熊本県	高瀬	50	0.257±0.012	0.79±0.004	0.076±0.015	2.63±0.114	1.69±0.146	0.40±0.195	0.19±0.073	0.23±0.074	0.58±0.033
	高瀬	50	0.257±0.012	0.79±0.004	0.076±0.015	2.63±0.114	1.69±0.146	0.40±0.195	0.19±0.073	0.23±0.074	0.58±0.033
	高瀬	41	0.265±0.032	0.86±0.009	0.046±0.010	1.93±0.143	0.79±0.110	0.43±0.046	0.12±0.041	0.11±0.044	0.61±0.003
	高瀬	43	0.19±0.009	0.85±0.005	0.040±0.008	1.68±0.114	0.83±0.056	0.251±0.023	0.19±0.024	0.12±0.038	0.31±0.010
	大瀬	74	0.17±0.012	0.83±0.002	0.041±0.012	1.710±0.081	0.81±0.036	0.181±0.024	0.207±0.028	0.13±0.024	0.23±0.002
	大瀬	74	0.17±0.012	0.83±0.002	0.041±0.012	1.710±0.081	0.81±0.036	0.181±0.024	0.207±0.028	0.13±0.024	0.23±0.002
	大瀬	74	0.17±0.012	0.83±0.002	0.041±0.012	1.710±0.081	0.81±0.036	0.181±0.024	0.207±0.028	0.13±0.024	0.23±0.002
	大瀬	74	0.17±0.012	0.83±0.002	0.041±0.012	1.710±0.081	0.81±0.036	0.181±0.024	0.207±0.028	0.13±0.024	0.23±0.002
	大瀬	74	0.17±0.012	0.83±0.002	0.041±0.012	1.710±0.081	0.81±0.036	0.181±0.024	0.207±0.028	0.13±0.024	0.23±0.002
	大瀬	74	0.17±0.012	0.83±0.002	0.041±0.012	1.710±0.081	0.81±0.036	0.181±0.024	0.207±0.028	0.13±0.024	0.23±0.002
宮崎県	大瀬	30	0.281±0.016	0.14±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	0.339±0.012	0.27±0.013	0.068±0.012	0.031±0.004	0.92±0.002
	大瀬	30	0.281±0.016	0.14±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	0.339±0.012	0.27±0.013	0.068±0.012	0.031±0.004	0.92±0.002
	大瀬	44	0.258±0.009	0.14±0.006	0.033±0.005	0.774±0.078	0.329±0.017	0.27±0.016	0.068±0.012	0.031±0.004	0.92±0.002
	大瀬	53	1.52±0.139	0.85±0.035	0.075±0.008	4.49±0.460	2.47±0.014	1.23±0.092	0.099±0.018	0.041±0.012	0.93±0.003
	大瀬	53	1.52±0.139	0.85±0.035	0.075±0.008	4.49±0.460	2.47±0.014	1.23±0.092	0.099±0.018	0.041±0.012	0.93±0.003
	大瀬	53	1.52±0.139	0.85±0.035	0.075±0.008	4.49±0.460	2.47±0.014	1.23±0.092	0.099±0.018	0.041±0.012	0.93±0.003
	大瀬	53	1.52±0.139	0.85±0.035	0.075±0.008	4.49±0.460	2.47±0.014	1.23±0.092	0.099±0.018	0.041±0.012	0.93±0.003
	大瀬	53	1.52±0.139	0.85±0.035	0.075±0.008	4.49±0.460	2.47±0.014	1.23±0.092	0.099±0.018	0.041±0.012	0.93±0.003
	大瀬	53	1.52±0.139	0.85±0.035	0.075±0.008	4.49±0.460	2.47±0.014	1.23±0.092	0.099±0.018	0.041±0.012	0.93±0.003
	大瀬	53	1.52±0.139	0.85±0.035	0.075±0.008	4.49±0.460	2.47±0.014	1.23±0.092	0.099±0.018	0.041±0.012	0.93±0.003
鹿児島県	伊佐	71	0.89±0.027	0.72±0.046	0.035±0.013	0.295±0.305	0.25±0.018	0.15±0.057	0.03±0.014	0.04±0.013	0.92±0.004
	伊佐	71	0.89±0.027	0.72±0.046	0.035±0.013	0.295±0.305	0.25±0.018	0.15±0.057	0.03±0.014	0.04±0.013	0.92±0.004
	伊佐	84	0.791±0.082	0.779±0.009	0.045±0.005	1.208±0.023	0.27±0.018	0.81±0.046	0.048±0.012	0.02±0.014	0.931±0.009
	伊佐	53	1.65±0.165	0.84±0.036	0.080±0.015	4.977±0.587	2.23±0.015	1.33±0.104	0.098±0.016	0.040±0.008	0.931±0.003
	伊佐	48	1.47±0.136	0.62±0.041	0.078±0.011	4.83±0.634	2.25±0.016	1.28±0.124	0.101±0.041	0.043±0.013	0.927±0.003
	伊佐	48	1.47±0.136	0.62±0.041	0.078±0.011	4.83±0.634	2.25±0.016	1.28±0.124	0.101±0.041	0.043±0.013	0.927±0.003
	伊佐	48	1.47±0.136	0.62±0.041	0.078±0.011	4.83±0.634	2.25±0.016	1.28±0.124	0.101±0.041	0.043±0.013	0.927±0.003
	伊佐	48	1.47±0.136	0.62±0.041	0.078±0.011	4.83±0.634	2.25±0.016	1.28±0.124	0.101±0.041	0.043±0.013	0.927±0.003
	伊佐	48	1.47±0.136	0.62±0.041	0.078±0.011	4.83±0.634	2.25±0.016	1.28±0.124	0.101±0.041	0.043±0.013	0.927±0.003
	伊佐	48	1.47±0.136	0.62±0.041	0.078±0.011	4.83±0.634	2.25±0.016	1.28±0.124	0.101±0.041	0.043±0.013	0.927±0.003
宮崎県	伊佐	78	0.208±0.021	0.101±0.008	0.024±0.006	1.362±0.086	1.021±0.098	0.351±0.037	0.16±0.027	0.02±0.022	0.622±0.007
	伊佐	47	0.207±0.015	0.094±0.006	0.020±0.006	1.521±0.075	1.000±0.048	0.418±0.020	0.168±0.024	0.06±0.024	0.620±0.003
	伊佐	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.24±0.060	0.75±0.039	0.205±0.029	0.04±0.036	0.622±0.002
	伊佐	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.24±0.060	0.75±0.039	0.205±0.029	0.04±0.036	0.622±0.002
	伊佐	30	0.18±0.016	0.083±0.005	0.047±0.002	0.831±0.072	0.94±0.054	0.34±0.032	0.21±0.031	0.04±0.053	0.922±0.008
	伊佐	45	0.84±0.012	0.10±0.006	0.037±0.007	4.88±0.074	0.78±0.034	0.42±0.049	0.23±0.020	0.03±0.027	0.624±0.008
	伊佐	45	0.84±0.012	0.10±0.006	0.037±0.007	4.88±0.074	0.78±0.034	0.42±0.049	0.23±0.020	0.03±0.027	0.624±0.008
	伊佐	45	0.84±0.012	0.10±0.006	0.037±0.007	4.88±0.074	0.78±0.034	0.42±0.049	0.23±0.020	0.03±0.027	0.624±0.008
	伊佐	45	0.84±0.012	0.10±0.006	0.037±0.007	4.88±0.074	0.78±0.034	0.42±0.049	0.23±0.020	0.03±0.027	0.624±0.008
	伊佐	45	0.84±0.012	0.10±0.006	0.037±0.007	4.88±0.074	0.78±0.034	0.42±0.049	0.23±0.020	0.03±0.027	0.624±0.008
鹿児島県	伊佐	37	1.62±0.098	0.80±0.037	0.053±0.006	3.34±0.215	1.68±0.013	1.10±0.056	0.08±0.009	0.02±0.009	0.938±0.002
	伊佐	34	1.84±0.054	0.81±0.028	0.062±0.005	3.97±0.182	1.84±0.011	1.26±0.049	0.09±0.010	0.02±0.010	0.938±0.003
	伊佐	46	0.53±0.029	0.167±0.006	0.081±0.013	1.494±0.093	0.611±0.039	0.68±0.052	0.127±0.023	0.069±0.022	0.933±0.003
	伊佐	46	0.53±0.029	0.167±0.006	0.081±0.013	1.494±0.093	0.611±0.039	0.68±0.052	0.127±0.023	0.069±0.022	0.933±0.003
	伊佐	37	0.17±0.010	0.88±0.007	0.038±0.007	1.862±0.076	0.553±0.016	0.51±0.017	0.123±0.021	0.02±0.016	0.929±0.007
	伊佐	37	0.17±0.010	0.88±0.007	0.038±0.007	1.862±0.076	0.553±0.016	0.51±0.017	0.123±0.021	0.02±0.016	0.929±0.007
	伊佐	37	0.17±0.010	0.88±0.007	0.038±0.007	1.862±0.076	0.553±0.016	0.51±0.017	0.123±0.021	0.02±0.016	0.929±0.007
	伊佐	37	0.17±0.010	0.88±0.007	0.038±0.007	1.862±0.076	0.553±0.016	0.51±0.017	0.123±0.021	0.02±0.016	0.929±0.007
	伊佐	37	0.17±0.010	0.88±0.007	0.038±0.007	1.862±0.076	0.553±0.016	0.51±0.017	0.123±0.021	0.02±0.016	0.929±0.007
	伊佐	37	0.17±0.010	0.88±0.007	0.038±0.007	1.862±0.076	0.553±0.016	0.51±0.017	0.123±0.021	0.02±0.016	0.929±0.007
鹿児島県	伊佐	48	0.220±0.008	0.104±0.004	0.019±0.016	1.28±0.062	0.608±0.026	0.500±0.026	0.13±0.030	0.064±0.023	0.624±0.003
	伊佐	40	0.13±0.004	0.84±0.003	0.044±0.012	1.23±0.027	1.019±0.026	0.39±0.012	0.03±0.009	0.04±0.031	0.923±0.006
	伊佐	44	0.18±0.005	0.86±0.012	0.031±0.002	1.96±0.036	0.58±0.017	0.66±0.023	0.08±0.015	0.02±0.019	0.929±0.001
	伊佐	44	0.18±0.005	0.86±0.012	0.031±0.002	1.96±0.036	0.58±0.017	0.66±0.023	0.08±0.015	0.02±0.019	0.929±0.001
	伊佐	44	0.18±0.005	0.86±0.012	0.031±0.002	1.96±0.036	0.58±0.017	0.66±0.023	0.08±0.015	0.02±0.019	0.929±0.001
	伊佐	44	0.18±0.005	0.86±0.012	0.031±0.002	1.96±0.036	0.58±0.017	0.66±0.023	0.08±0.015	0.02±0.019	0.929±0.001
	伊佐	44	0.18±0.005	0.86±0.012	0.031±0.002	1.96±0.036	0.58±0.017	0.66±0.023	0.08±0.015	0.02±0.019	0.929±0.001
	伊佐	44	0.18±0.005	0.86±0.012	0.031±0.002	1.96±0.036	0.58±0.017	0.66±0.023	0.08±0.015	0.02±0.019	0.929±0.001
	伊佐	44	0.18±0.005	0.86±0.012	0.031±0.002	1.96±0.036	0.58±0.017	0.66±0.023	0.08±0.015	0.02±0.019	0.929±0.001
	伊佐	44	0.18±0.005	0.86±0.012	0.031±0.002	1.96±0.036	0.58±0.017	0.66±0.023	0.08±0.015	0.02±0.019	0.929±0.001

第7表-6 黒曜石製造物群の元素比の平均値と標準偏差値

各地産物群名	分析結果										
	Ca/K	Cr/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Str/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
北島産	62	0.453 ± 0.031	0.131 ± 0.005	0.041 ± 0.006	1.769 ± 0.172	0.448 ± 0.021	0.119 ± 0.019	0.130 ± 0.012	0.018 ± 0.010	0.534 ± 0.016	0.559 ± 0.032
IS22	66	0.453 ± 0.031	0.131 ± 0.005	0.041 ± 0.006	1.769 ± 0.172	0.448 ± 0.021	0.119 ± 0.019	0.130 ± 0.012	0.018 ± 0.010	0.534 ± 0.016	0.559 ± 0.032
FR1	51	0.643 ± 0.012	0.124 ± 0.006	0.052 ± 0.007	0.339 ± 0.032	0.889 ± 0.032	0.156 ± 0.011	0.004 ± 0.006	0.029 ± 0.011	0.407 ± 0.043	0.373 ± 0.047
FR2	59	0.535 ± 0.061	0.108 ± 0.007	0.053 ± 0.008	2.545 ± 0.139	0.557 ± 0.051	0.085 ± 0.028	0.195 ± 0.021	0.016 ± 0.022	0.623 ± 0.008	0.427 ± 0.037
FR3	24	0.380 ± 0.037	0.098 ± 0.007	0.058 ± 0.006	0.878 ± 0.145	0.878 ± 0.056	0.081 ± 0.021	0.104 ± 0.023	0.011 ± 0.022	0.623 ± 0.008	0.427 ± 0.037
FR4	32	0.688 ± 0.032	0.221 ± 0.007	0.084 ± 0.006	2.540 ± 0.101	0.478 ± 0.018	0.002 ± 0.023	0.198 ± 0.013	0.017 ± 0.021	0.623 ± 0.003	0.447 ± 0.011
KT1	56	1.103 ± 0.055	0.146 ± 0.007	0.081 ± 0.008	0.680 ± 0.133	0.314 ± 0.053	0.175 ± 0.022	0.133 ± 0.016	0.018 ± 0.021	0.843 ± 0.007	0.516 ± 0.015
KT2	38	0.959 ± 0.027	0.154 ± 0.005	0.085 ± 0.010	2.852 ± 0.092	0.454 ± 0.028	1.111 ± 0.042	0.107 ± 0.015	0.042 ± 0.008	0.357 ± 0.010	0.379 ± 0.010
KT3	62	0.444 ± 0.011	0.070 ± 0.004	0.056 ± 0.013	1.749 ± 0.168	1.069 ± 0.106	0.424 ± 0.036	0.327 ± 0.042	0.033 ± 0.031	0.623 ± 0.011	0.379 ± 0.011
KS3	48	0.144 ± 0.009	0.041 ± 0.005	0.080 ± 0.013	2.595 ± 0.126	1.480 ± 0.057	0.165 ± 0.019	0.389 ± 0.042	0.089 ± 0.028	0.624 ± 0.002	0.337 ± 0.015
KL1	48	0.185 ± 0.017	0.040 ± 0.003	0.081 ± 0.013	2.182 ± 0.122	1.031 ± 0.041	0.435 ± 0.025	0.263 ± 0.028	0.050 ± 0.018	0.623 ± 0.002	0.289 ± 0.009
KL2	48	0.185 ± 0.017	0.040 ± 0.003	0.081 ± 0.013	2.182 ± 0.122	1.031 ± 0.041	0.435 ± 0.025	0.263 ± 0.028	0.050 ± 0.018	0.623 ± 0.002	0.289 ± 0.009
HY	31	0.238 ± 0.011	0.131 ± 0.006	0.048 ± 0.006	1.856 ± 0.066	0.418 ± 0.028	1.441 ± 0.015	0.492 ± 0.024	0.029 ± 0.028	0.020 ± 0.015	0.481 ± 0.061
SN1	33	0.209 ± 0.009	0.097 ± 0.004	0.033 ± 0.005	1.971 ± 0.037	0.244 ± 0.011	0.268 ± 0.011	0.281 ± 0.012	0.000 ± 0.012	0.021 ± 0.006	0.329 ± 0.006
SN2	26	0.287 ± 0.006	0.118 ± 0.006	0.076 ± 0.008	1.577 ± 0.082	0.718 ± 0.035	0.292 ± 0.017	0.264 ± 0.029	0.028 ± 0.038	0.023 ± 0.009	0.383 ± 0.015
SN3	107	0.451 ± 0.011	0.121 ± 0.006	0.053 ± 0.007	1.801 ± 0.071	0.347 ± 0.020	0.193 ± 0.014	0.216 ± 0.015	0.054 ± 0.011	0.029 ± 0.011	0.276 ± 0.043
秋田産	60	0.252 ± 0.014	0.118 ± 0.007	0.124 ± 0.005	1.605 ± 0.088	0.678 ± 0.056	0.063 ± 0.026	0.272 ± 0.029	0.083 ± 0.017	0.026 ± 0.008	0.378 ± 0.021
HTS	46	0.259 ± 0.009	0.093 ± 0.003	0.097 ± 0.011	2.055 ± 0.067	0.741 ± 0.028	0.793 ± 0.016	0.331 ± 0.021	0.004 ± 0.019	0.036 ± 0.003	0.444 ± 0.010
HTL	41	0.317 ± 0.014	0.109 ± 0.006	0.090 ± 0.006	1.829 ± 0.056	0.696 ± 0.026	0.176 ± 0.016	0.242 ± 0.013	0.008 ± 0.014	0.038 ± 0.016	0.373 ± 0.044
AIT	31	0.850 ± 0.013	0.215 ± 0.004	0.111 ± 0.006	4.308 ± 0.109	0.114 ± 0.008	0.009 ± 0.026	0.248 ± 0.012	0.014 ± 0.016	0.028 ± 0.006	0.360 ± 0.009
岩手産	172	1.950 ± 0.059	0.474 ± 0.025	0.097 ± 0.017	2.095 ± 0.077	0.083 ± 0.006	0.31 ± 0.052	0.177 ± 0.012	0.011 ± 0.016	0.684 ± 0.025	1.081 ± 0.105
ALS	162	0.297 ± 0.092	0.099 ± 0.021	0.111 ± 0.009	3.122 ± 0.081	0.324 ± 0.010	0.055 ± 0.049	0.291 ± 0.012	0.026 ± 0.017	0.076 ± 0.010	0.254 ± 0.052
SD	48	0.900 ± 0.056	0.741 ± 0.021	0.118 ± 0.010	3.927 ± 0.077	0.117 ± 0.012	0.006 ± 0.036	0.246 ± 0.011	0.006 ± 0.017	0.083 ± 0.013	0.175 ± 0.029
UN31	48	0.903 ± 0.121	0.542 ± 0.056	0.104 ± 0.003	3.507 ± 0.099	0.118 ± 0.012	0.051 ± 0.053	0.238 ± 0.016	0.082 ± 0.032	0.085 ± 0.004	0.206 ± 0.061
AC1	63	0.478 ± 0.014	0.192 ± 0.006	0.054 ± 0.008	1.581 ± 0.072	0.409 ± 0.017	0.440 ± 0.019	0.189 ± 0.019	0.091 ± 0.019	0.033 ± 0.005	0.437 ± 0.016
AC2	48	0.478 ± 0.014	0.192 ± 0.006	0.054 ± 0.008	1.581 ± 0.072	0.409 ± 0.017	0.440 ± 0.019	0.189 ± 0.019	0.091 ± 0.019	0.033 ± 0.005	0.437 ± 0.016
AC3	36	0.637 ± 0.016	0.144 ± 0.005	0.083 ± 0.010	1.891 ± 0.051	0.202 ± 0.010	0.381 ± 0.017	0.298 ± 0.018	0.044 ± 0.012	0.049 ± 0.005	0.168 ± 0.013
新潟産	56	0.920 ± 0.015	0.110 ± 0.004	0.140 ± 0.015	3.176 ± 0.212	0.729 ± 0.039	1.367 ± 0.086	0.104 ± 0.036	0.039 ± 0.013	0.039 ± 0.003	0.398 ± 0.010
IN2	48	0.233 ± 0.006	0.044 ± 0.002	0.068 ± 0.002	1.841 ± 0.074	0.939 ± 0.030	0.734 ± 0.024	0.192 ± 0.011	0.057 ± 0.029	0.018 ± 0.001	0.214 ± 0.005
IN3	48	0.233 ± 0.006	0.044 ± 0.002	0.068 ± 0.002	1.841 ± 0.074	0.939 ± 0.030	0.734 ± 0.024	0.192 ± 0.011	0.057 ± 0.029	0.018 ± 0.001	0.214 ± 0.005
長野産	50	0.730 ± 0.108	0.270 ± 0.023	0.150 ± 0.014	1.580 ± 0.045	0.587 ± 0.017	0.609 ± 0.023	0.120 ± 0.017	0.078 ± 0.044	0.029 ± 0.001	0.346 ± 0.009
FM11	44	0.207 ± 0.005	0.115 ± 0.003	0.050 ± 0.014	4.308 ± 0.434	0.777 ± 0.125	1.802 ± 0.026	0.477 ± 0.124	0.038 ± 0.086	0.035 ± 0.001	0.774 ± 0.089
山口産	56	0.381 ± 0.016	0.138 ± 0.005	0.038 ± 0.012	1.611 ± 0.102	0.721 ± 0.039	0.487 ± 0.026	0.128 ± 0.022	0.047 ± 0.016	0.023 ± 0.003	0.331 ± 0.013
山口	46	0.381 ± 0.016	0.138 ± 0.005	0.038 ± 0.012	1.611 ± 0.102	0.721 ± 0.039	0.487 ± 0.026	0.128 ± 0.022	0.047 ± 0.016	0.023 ± 0.003	0.331 ± 0.013
大分産	46	0.381 ± 0.016	0.138 ± 0.005	0.038 ± 0.012	1.611 ± 0.102	0.721 ± 0.039	0.487 ± 0.026	0.128 ± 0.022	0.047 ± 0.016	0.023 ± 0.003	0.331 ± 0.013
宮崎産	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ± 0.011
山口	48	0.217 ± 0.013	0.057 ± 0.004	0.010 ± 0.002	0.671 ± 0.023	0.739 ± 0.057	0.048 ± 0.052	0.129 ± 0.017	0.058 ± 0.015	0.022 ± 0.002	0.377 ±

6 堂園B遺跡出土小玉4点の蛍光X線分析装置を用いた分析結果について

(1) はじめに

ガラスは、人類が最初に創り出した素材で、化学的に非常に安定していることから現代においても生活に必要な不可欠な素材である。また、天然素材では得られない澄んだ美しさと多様な色彩によって古くから工芸品として使われている。

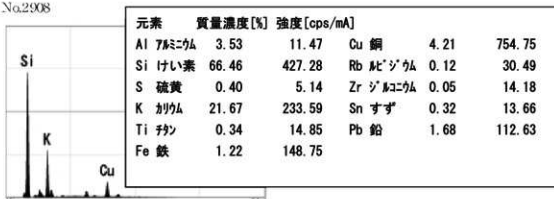
日本においては、青森県の亀ヶ岡遺跡から縄文時代晩期（約2300年前）の青色ガラス小玉が出土し、弥生時代に入ると佐賀県の古野ヶ里遺跡からガラス製管玉、岡山県の鹿田遺跡からガラス塊・印跡、福岡県の一雲遺跡・須玖遺跡からガラス製管が出土している。古墳時代に入ると福岡から関東の範囲で多孔土器が出土し、鑄造鋳型によるビーズ製作が行われたと考えられている。鹿児島県においては、最近の調査でガラス製小玉の出土例が増えてきているが、調査事例が少なく研究はこれからである。

(2) 分析方法

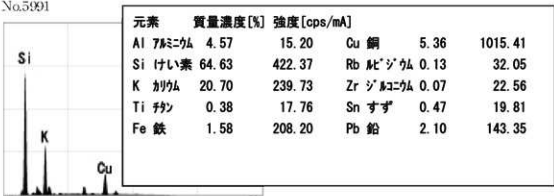
今回堂園B遺跡で出土したガラス玉については、当センター所有の堀場製作所製の蛍光X線分析装置XGT-1000を用いて成分分析を行い、標準試料を用いないFRMで定量分析を試みた。測定条件は、X線照射範囲:直径100 μm、測定時間:200 s、パルス処理時間:P3、X線管電圧:15/50 kV、電流自動、X線フィルタ:なし、試料セル:なしである。

(3) 分析結果

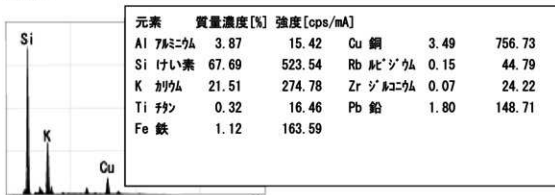
ア No.2908



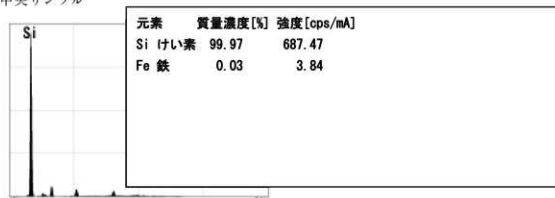
イ No.5991



ウ No.7804



エ 中央サンプル



(4) 考察

今回分析した小玉のうち3点は、カリウム、銅、鉛、鉄を含むガラスであることが確認できた。また、1点については、ケイ素以外にごく少量の鉄しか確認できず、天然素材を加工した小玉である可能性が高いと思われる。

(5) 参考文献

白井洋輔 著 謎を秘めた古代ビーズ再現 2007/3/25

黒川高明 著 ガラスの技術史 2005/7/10

中山公男 監修 世界ガラス工芸史 2000/3/31

第 章 堂園遺跡A地点

第1節 発掘調査の概要と経過

平成19年度の本調査の調査対象地は、堂園遺跡A地点を南北に通っている県道部分である。

平成16・17年度の調査では、県道を境界として、字名を用いて東側を瀬戸口地区、西側を堂園堀地区として調査した。平成16年度は、両地区のⅡ～Ⅲ層の本調査と堂園堀地区のⅣ層以下の調査を実施した。Ⅱ～Ⅲ層にかけては、古代の道跡のほか、弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑などの遺構を検出し、土器や鉄器等の遺物が出土した。土坑は近くで完形土器の出土する例が多く、埋土中から赤色顔料が検出されたことなどから、木棺土坑墓である可能性が高く、包含層出土土器にも完形に復元可能なものが多く、土坑墓との関係が想起された。

平成19年度の調査は、平成16・17年度の発掘調査の際に設定した10m×10m間隔のグリッド網を復元して用いた。現道のアスファルト及び、砂利、砂を撤去した後、調査を開始したが、砂利、砂の直下から旧道面が検出されたので、旧道部分の位置を一部記録し、撤去した。旧道は、Ⅲ層途中まで掘り込み、砂と粘土層を交互に締め固め建設されていたので、人力での撤去は途中で断念し、重機で剥ぎ取ることとした。旧道部分のⅡ層、Ⅲ層の包含層は道路建設の際に削平されていた。Ⅱ層直上では、前回の調査で検出された道跡と交わる古代の道跡が検出された。Ⅱ～Ⅲ層にかけての調査では、前回の調査から継続している住居跡の調査を行ったが、土坑墓の可能性のある遺構は検出されなかった。

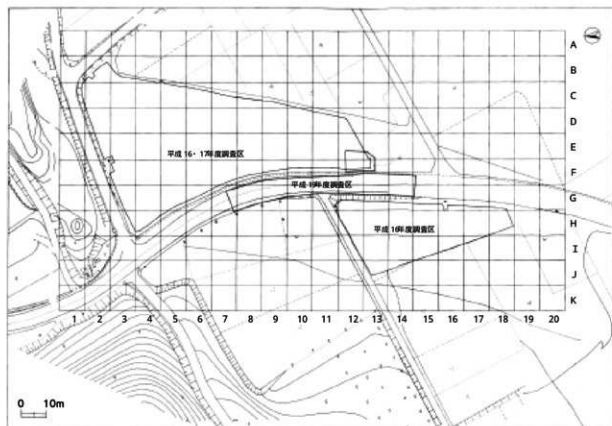
年度	調査区	内 容	期間
平成 16	B-2区～F-13区(瀬戸口)	本調査(Ⅱ～Ⅲ層)	平成 16年 8月 16日
	G-11区～H-18区(堂園堀)	本調査(Ⅱ～Ⅲ層,Ⅳ層以下)	～平成 17年 3月 18日
平成 17	B-2区～F-13区(瀬戸口)	本調査(Ⅱ～Ⅲ層) ※ 土坑墓群の調査	平成 17年 6月 14日 ～平成 17年 10月 7日

第2節 層位

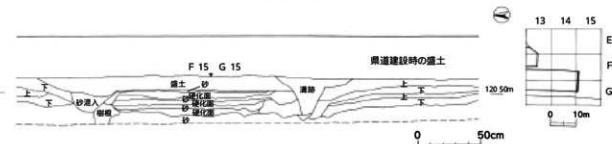
平成19年度の調査区は、県道のストレートから緩いカーブ部分で、道路幅だけで狭いという条件と、調査の継続性を維持する目的から、平成17年度までの調査で用いた上層区分をそのまま用いることとした。

堂園遺跡A地点の上層堆積状況は、背後に小丘があり塙野原台地の中央部に位置しており、おおむね安定している。しかし、火山灰層の堆積については発達しておらず、明瞭でもない。層ごとの特徴を柱状図で略述する。

I層	灰黒色土(現代の耕作土)
II層	黒茶褐色土(弥生～古墳時代の包含層)
III層	黄茶褐色火山灰腐植土(アカホヤ火山灰ベース, 縄文時代後期の包含層)
IV層	暗褐色土
V層	黒褐色硬質土(無遺物層)
VI層	黄褐色火山灰(陶摩火山灰, 無遺物層)
VII層	暗茶褐色(無遺物層)
VIII層	暗茶褐色粘質土(無遺物層)
IX層	砂質土(無遺物層)
X層	砂礫混火山灰土(シラス, 無遺物層)



第16図 グリッド配置図



第16図 土層断面図

第3節 縄文時代

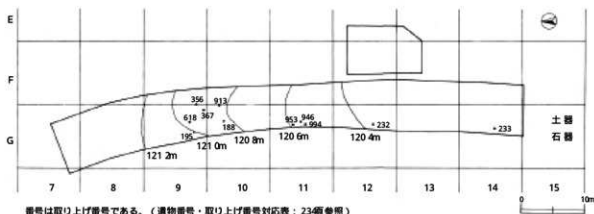
1 調査の概要

縄文時代の調査は、弥生時代から古墳時代の遺物の包含層であるⅡ層の調査終了後におこなった。縄文時代の遺物の包含層であるⅢ層は、旧道建設による削平がⅡ層ほど進んでおらず、G-11,12,14区からも遺物が出上している。土器片4点と石器7点が出土した。

2 縄文土器（第165図 947～950）

947は、口唇部に貝殻によると思われる刺突文が縦位に繰り返される。外面には二枚貝の復縁を使用した斜位の条痕が見られ、内面には波状の条痕が見られる。外面、内面とも黒褐色である。

948は、口縁部下に一条の沈線が器形に沿って施されている。外面、内面ともヘラ磨きが施されている。胴部に近い部位から口唇部にかけて、器厚は6.5mmから4.5mmへと薄くなる。外面、内面とも黒褐色であるが、外面は、より黒色が強い。949は、口縁部にかけて内弯する。口縁部内側には浅い沈線が施され、断面は玉縁状となる。950は、頸部から胴部にかけてと考えられ、外反すると思われる口縁部は破損している。丁寧なヘラナドと思われる調整が施されている。



番号は取り上げ番号である。(遺物番号・取り上げ番号対応表：234頁参照)

第164図 縄文時代遺物出土状況図及びコンタ図

3 石器 (第166図 951~957)

(1) 打製石鏃 (951~955)

951は、安山岩を素材とし、側辺は弧状に張り出している。扱いは僅かで浅い。952は、頁岩を素材とし、側辺は弧状に張り出している。扱いは深く半弧状に入る。953は、黒曜石を素材とし、脚部の作出が明確に立罔されている。954は、黒曜石を素材とし、側辺の弧状の張り出しは見られない。扱いは僅かで浅い。955は、頁岩を素材とし、側辺の弧状の張り出しは見られないが、両側縁に鋸歯状の加工が施されている。扱いは深い直線的に入る。

(2) 打製石斧 (957)

957は、打製石斧である。両側縁部に結束のための扱部が整形され、扱部は使用により磨減している。刃部は欠けており、そのあと部分的に再加工されている。

(3) その他 (956)

956は、黒曜石を両面加工した二等辺三角形の分厚い石器である。長さが39mm、最大幅が22.5mmである。先端はにぶい。

第4節 弥生~古墳時代

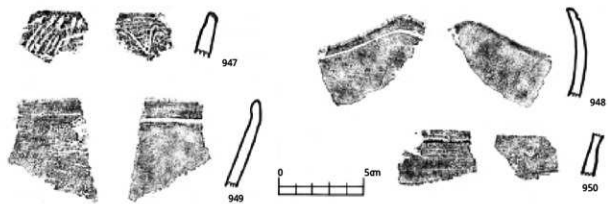
弥生時代から古墳時代にかけての調査は、旧道を剥き取り、旧道建設により削平されていない調査区のI層(現代の耕作土)を掘り下げた後、II層の調査として実施した。遺物の出土状況が、F・G-8・9区に集中して見えるが、F・G-8・9区は、旧道の範囲からはずれた部分で、II層が攪乱されていなかったためである。

1 遺構

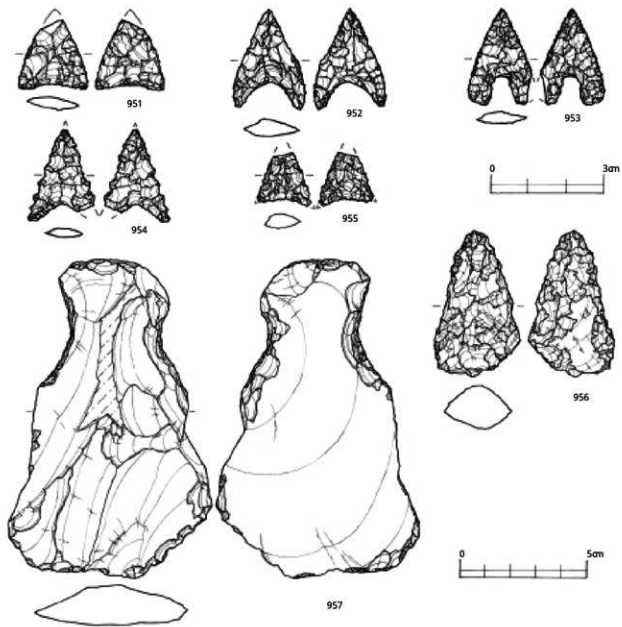
平成17年度の本調査の際に、E・F-12・13区で確認されていた竪穴住居跡と思われる遺構の調査を、平成19年度に継続して行った。

(1) 竪穴住居跡(第168図)

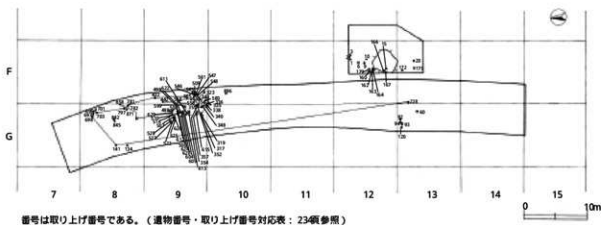
住居跡と考えられる遺構は、III層上面で検出された。西側の一部を既設建造物の撤去が困難であったため調査することができなかったが、プランは、長軸が3.53m、短軸が3.20mの隅丸方形であると考えられる。床面は、検出面から18.0cmほど掘り込みであるが、実際の掘り込み検出面より上面であると考えられる。北西側には、掘り込みが床面より6cmほど浅い、長軸が2.2m、短軸が1.1mの略方形をしたベッド状の高まりがある。長軸を主軸とすると、主軸の方位は、N-53°-Eで



第165图 厩出土石器実測図・縄文時代



第166图 厩出土石器実測図・縄文時代



番号は取り上げ番号である。(遺物番号・取り上げ番号対応表：234頁参照)

第16図 弥生時代から古墳時代の遺構配置図及び遺物分布図

ある。床面で柱穴の可能性が考えられるピットを8基検出した。このうち主柱穴と思われる2本のピットがあり、柱間隔は、52cmである。北側の柱穴は、直径が28cm、深さが32cmである。南側の柱穴は、直径が27cm、深さが32cmである。遺物は、土器が2点、石器が1点出土したが、床着ではない。

(2) 住居跡内出土遺物 (第169図 958~960)

住居内から、3点の遺物が出土した。958は、口縁部が逆L字状に屈曲する壺形土器である。垂れ下がり気味で内面は突出している。口唇部はややくぼんでおり、表面は丁寧に調整されている。959は、断面三角形の突帯が二条確認できる壺形土器の肩部である。資料から断定することはできないが、958の一部の可能性もある。

960は、頁岩を素材として用いた、加工痕がある剥片である。最大長12cm、最大幅7cm、最大厚1.5cmを測る。挟りの部分に両側からの加工が見られ、加工途中の打製石斧の可能性も考えられる。

2 遺物(第170, 171図)

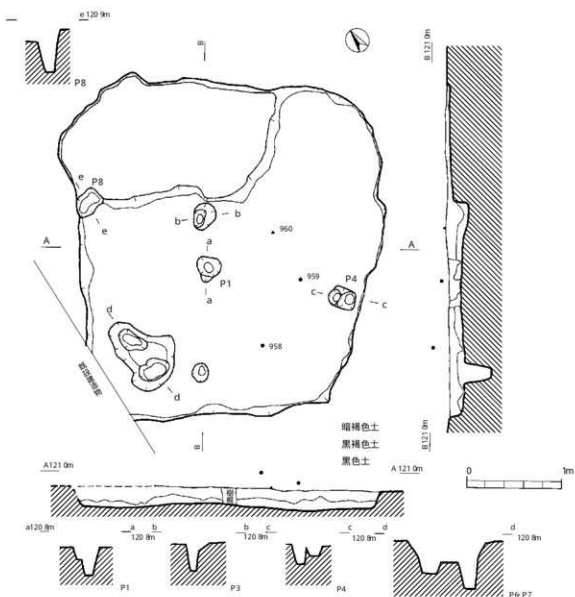
壺形土器、甕形土器などがⅡ層より出土した。包含層には、堆積に時期差を表すような明確な変化が見られなかったため、前回の発掘調査報告書の区分に準じ、時期別にまとめた。

961と962は、甕形土器の口縁部である。961は、口縁直径が25.5cmと小型で、断面舌状の口縁部が、上方へ傾き、内面の突出が顕著である。口唇先端は厚い。胴部は、復元できなかったが、口縁部から胴部にかけて張る方向に残存している口縁部から胴部にかけての器壁は薄く4mm程である。胎土の粒は細かく、金雲母や角せん石が含まれている。962は、直径が38cmで断面舌状の口縁部が上方へ傾き、内面の突出が顕著であるが、口唇部先端が尖り気味である。頭部の器壁が薄い。胎土の粒は細かいが、金雲母や角せん石の粒の大きさが961と比して細かい。

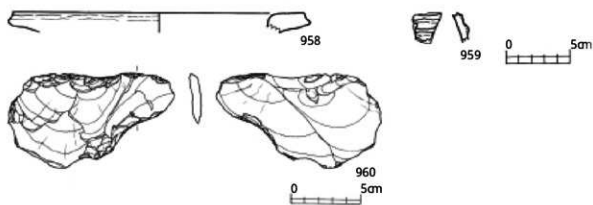
963は、二重の口縁となる甕形土器の胴部である。断面舌状の突帯が上方へ弧を描きせり上がる。表面には煤が付着している。

964は、口唇部から胴部までが残る口縁直径が30cmの甕形土器である。口縁部は断面方形で、上方へ傾き内面は屈曲し稜をもつ。胴部には断面が略三角形の突帯が2条巡らされている。口縁部と胴部の境目には、土器製作時の指圧痕が見られる。表面には、口縁部から突帯間、突帯直下までは、横位のヘラ磨き等の器面調整、胴部は斜位のヘラ磨き等の器面調整が見られる。

965は、甕形土器の充実脚台で、端部がやや広がる形状である。内面には焦げ跡と思われる思



第168図 竪穴住居跡実測図



第169図 住居跡内出土遺物実測図

みがみられる。966は、高環形土器の脚部の一部と思われ、表面は横方向に丁寧なヘラ磨きが施され、朱色に塗られている。

967と968は、壺の口縁部から頸部にかけての部位で逆L字状を呈するが、やや外が下がっている。967の口縁部は厚みがあり、内面はやや突出している。頸部外面は、上下方向にヘラ磨きによると思われる調整が施されているが、内面の摩滅が激しい。復元口径は、18cmである。970の口縁部も967同様であるが、口唇部には凹線がみられる。頸部の口縁部側には、製作時に頸部と口縁部の境の補強のため付け足したと思われる粘土と圧着痕が見取れる。頸部の器面調整は、上下方向のヘラ磨きである。復元口径は17.5cmである。969は、壺の肩部と思われる。三角形の突帯が三条巡らされている。

970から972は、縦方向の筋がみられる彩文土器と思われる資料である。器壁は薄く堅緻である。底は小さい平底で、底まで筋がみられる。

973と974は、甕形土器の口縁部である。立ち上がりの弱い「く」字形口縁で口縁部内面に弱い稜を形成している。973の口唇部は方形で、胎土には細かく微粒の角せん石が混在する。974の口唇部は円形で、胎土には細かく微粒の角せん石が混在する。裏面にハケ目調整が施されている。

975は、壺形土器の口縁部から頸部にかけての部位で、内面に稜は見られない。976は、壺の頸部から胴部までの部位である。突帯は巡らされていない。977は、胴部全体がアーモンド形の器形となる。胴部に断面三角形の刻目突帯が巡らされ丸底である。978は、安定した平底である。表面はハケ目調整が施されている。979は、丸底の底部である。表面には丁寧なヘラナデが施されている。

第5節 古代～中世

Ⅱ層直上から、古代から中世にかけての道跡と考えられる硬化面が検出された。遺物は、土師器、内黒土師器、内赤土師器、須恵器があり、黒書土師器も1点出土した。

1 遺構

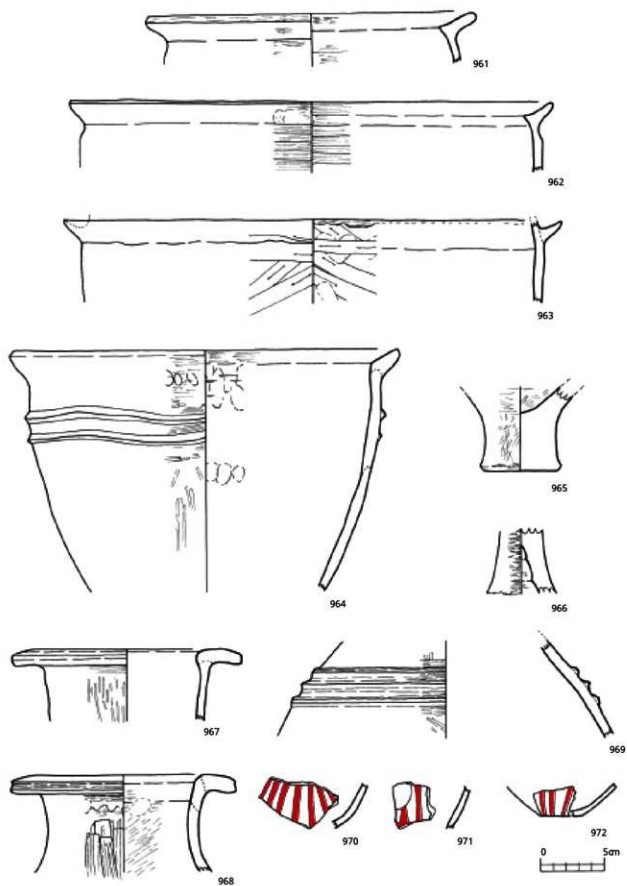
F・G-8～10区にかけて、道跡と考えられる硬化面及び、柱穴と思われるピットが20基検出された。

(1) 道跡 (第173図)

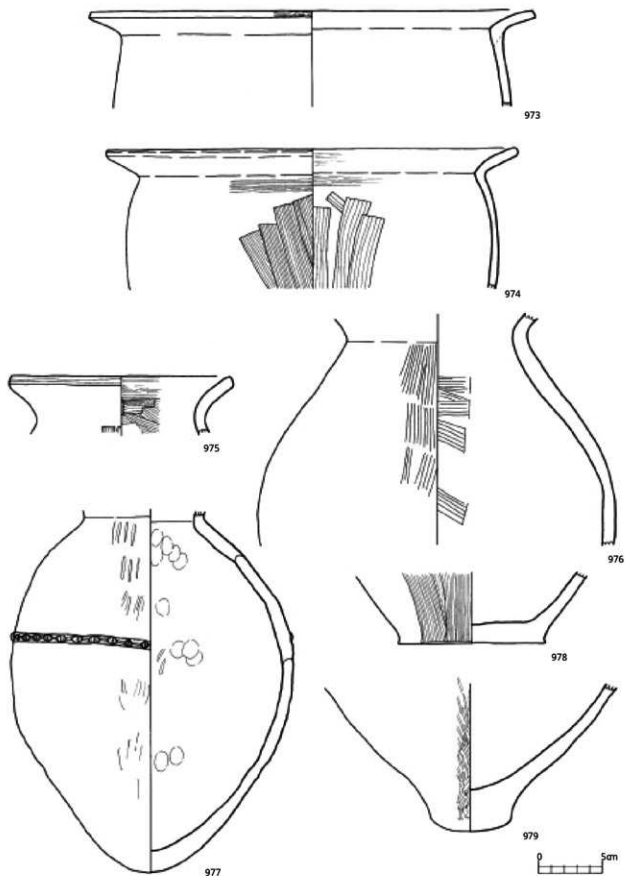
G・F-8～11区に、道跡と考えられる硬化面を検出した。時期は、硬化面で出土した遺物から古代から中世にかけての時期に該当すると考えられる。硬化面の様子から2層に大別した。1層は2層に比べて硬く、よく踏みしめられており、道幅は35cm～100cm程度である。G・F-10区で平成17年度の調査で検出された北東の方向から続く硬化面と交わる。G-11区に、僅かであるが調査区外に道跡が続くことをうかがわせる硬化面が残る。G-10・11区の道跡は旧道の建設のために削平されており検出できなかった。

(2) 柱穴 (第174図)

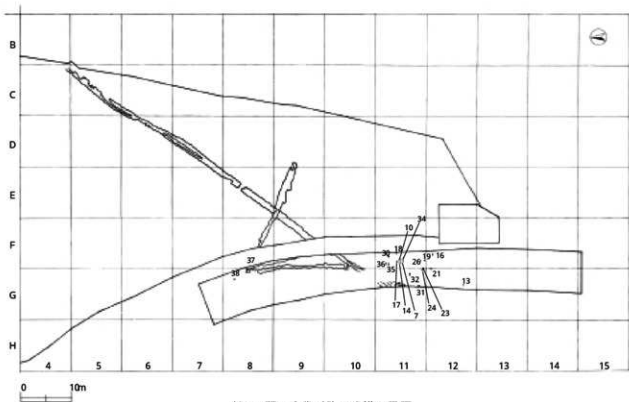
G-8区から2基、F-11区から12基、G-11区から3基、F-12区から1基、G-12区から2基の柱穴跡と考えられるピットが検出された。20基の柱穴の中から6基を図化した。いずれもⅢ層上面で検出し、埋土は、いずれもⅡ層の黒褐色土である。



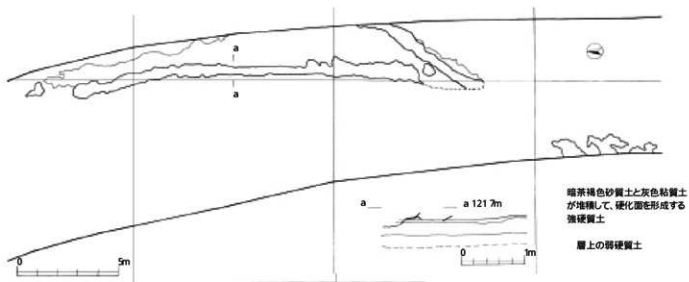
第17図 層出土遺物実測図・弥生〜古墳時代(1)



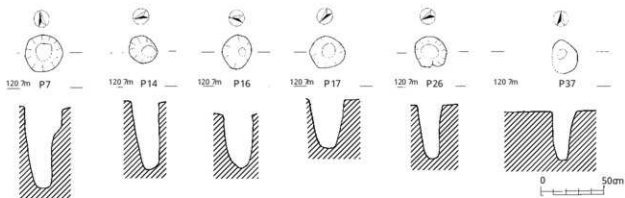
第17図 層出土遺物実測図・弥生〜古墳時代(2)



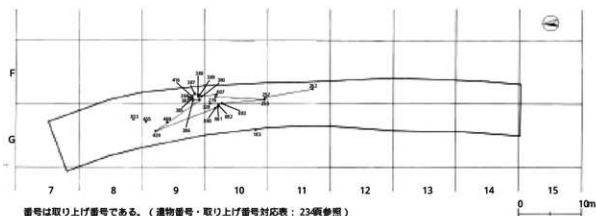
第17図 古代以降の遺構配置図



第17図 道跡実測図



第174図 ピット状遺構



番号は取り上げ番号である。(遺物番号・取り上げ番号対応表：23頁参照)

第175図 古代以降の遺物出土状況図

番号	区	平面形	長軸	短軸	深さ	番号	区	平面形	長軸	短軸	深さ
37	G-8	長丸円	28cm	24cm	43cm	14	F-11	円	25cm	24cm	59cm
38	G-8	円	31cm	29cm	27cm	26	F-11	歪円	27cm	25cm	47cm
30	F-11	楕円	60cm	40cm	41cm	23	F-11	楕円	24cm	20cm	23cm
36	F-11	円	32cm	30cm	52cm	19	F-11	歪円	26cm	21cm	26cm
35	F-11	楕円	31cm	28cm	54cm	32	G-11	楕円	27cm	23cm	43cm
18	F-11	楕円	31cm	22cm	40cm	24	G-11	長丸円	29cm	21cm	42cm
10	F-11	歪円	34cm	29cm	51cm	31	G-11	円	24cm	23cm	27cm
17	F-11	楕円	32cm	27cm	42cm	16	F-12	長丸円	29cm	26cm	47cm
34	F-11	楕円	34cm	26cm	33cm	21	G-12	円	25cm	25cm	35cm
7	F-11	円	33cm	33cm	70cm	13	G-12	歪円	22cm	18cm	41cm

第176表 堂園遺跡A地点ピット一覧表

2 遺物 (第176図)

(1) 墨書土器(980)

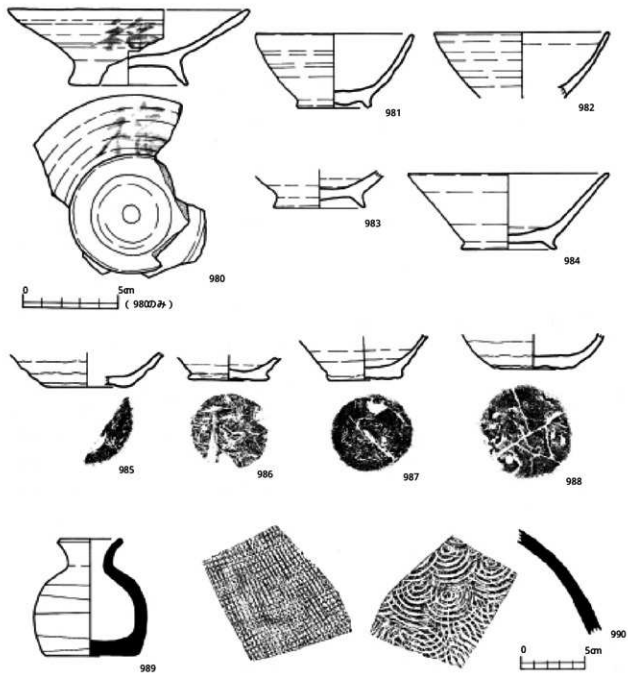
980は、外面に墨で「福」とも読み取れる文字が書かれた、内黒土師器の杯である。口径12.8cm、底径6.0cm、器高4.0cmである。内面は、丁寧に磨かれている。

(2) 土師器(981~988)

981は、輪高台をもつ碗である。口径12.4cm、底径5.6cm、器高5.3cmあり、内面に赤色の着色が残る。984は、口径15.2cm、底径7.1cm、器高6.0cmである。981と982・983は、内面に赤色の着色が残る。983は、輪高台を持つ底部で、982は、体部から口縁部にかけての小片であるが、982と同一個体の可能性もある。986と987は、高台は持たないが、底部に僅かの張り出しをもち、器形は底部の開き具合から碗に近い形が考えられる。987と986の底径は、それぞれ5.5cmと5.8cmであり、986の焼成は堅緻である。985と988は、高台をもたず、底部の開き具合から杯であると考えられる。いずれも底部の座り具合は安定せず、緻密さを感じない作りである。

(3) 須恵器 (989・990)

989は、口縁部が一部欠損しているが、完形に近い小型の壺である。肩部の張り出しが強く、底部までほぼ直行する。口径4.8cm、底径7.6cm、器高9.1cmである。990は、外面にこまかい格子目タタキが施されたものであり、内面には同心円当て具痕が残る。



第17図 古代以降出土遺物

第12表 土器観察表(1)

発掘No	遺物番号	期	出土区	層	形状		色相		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
第10層	1	1	B-7	H6	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、茶石などの細石	二条の団輪
	2	2	D-4	H	ヘラナデ	貝殻条痕	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの細石多	
	3	2	A-4	H9	ヘラナデ・貝殻条痕	貝殻条痕の後ヘラナデ	黒褐色	灰褐色	火山ガラス、石炭、灰白石などの細石	
	4	2	C-13	Ⅱd	縦貝殻条痕	浅い貝殻条痕	黒っぽい明茶褐色	灰がかった明茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石などの細石の多い粗砂	
	5	2	B-14	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、角閃石、茶石などの細石	
	7	2	B-6	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	黒褐色	黒褐色	火山ガラス、石炭などの細石	スス付着
	8	2	B-12	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	灰がかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	火山ガラス、白石などの細石	
	9	2	B-4	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの細石	
	9	2	B-12	Ⅱd	へう横ナデ	へう横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの細石の多い粗砂	
	10	2	B-12	Ⅱc	へう横ナデ	へう横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの細石の多い粗砂	
	11	2	C-12	Ⅱd	ヘラナデ	貝殻条痕	黒褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、青灰石などの細石	
	12	2	D-10-13	Ⅱbd	貝殻条痕	ヘラナデ	黄みがかる明茶褐色	黄みがかる明茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの細石	
	13	2	C-5	Ⅱb	縦貝殻条痕	横貝殻条痕	黒褐色	一部暗茶褐色	火山ガラス、白石、茶石等の細石多	
	14	2	C-11 C-6 B-5	Ⅱc Ⅱb Ⅱb	縦貝殻条痕	横貝殻条痕	黒褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄色などの細石	
第11層	15	2	C-20	Ⅱab	縦貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	茶褐色	火山ガラス、白石などの細石	
	16	2	D-22	Ⅱd	貝殻条痕の後へう横ナデ	貝殻条痕	黒褐色	黒褐色	火山ガラス、白石などの細石	
	17	2	C-11	Ⅱc	条痕の後へう横ナデ	貝殻条痕	黒褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの細石	
	18	2	A-12	Ⅱd	ヘラナデ	貝殻条痕	黒褐色	黒褐色	火山ガラス、白石などの細石	
	19	2	C-8-7 D-7	Ⅱa Ⅱb	ていねいなヘラナデ	へう横ナデ	暗茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、石炭、茶石、黄灰石などの細石	スス付着
	20	2	B-11 B-12	Ⅱd	縦貝殻条痕	貝殻条痕	黄みの暗茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの細石	スス付着
	21	2	C-11	Ⅱc	ヘラナデ	ヘラナデ	暗黄茶褐色	暗黄茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの細石の多い粗砂	スス付着
	22	2	B-12	Ⅱd	ヘラナデ	貝殻条痕の後ヘラナデ	黒褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石、角閃石などの細石	
	23	2	B-12	Ⅱd Ⅱc	ヘラナデ	貝殻条痕	黄褐色	黄褐色	火山ガラス、白石、茶石などの細石	
	24	2	A-12 B-13	Ⅱd Ⅱc	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石、石炭、茶石などの細石	
第12層	25	2	B-C-9-10-2	Ⅱa-d	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの細石	スス付着
	26	2	B-10 A-9	Ⅱd Ⅱd	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石などの砂質土	スス付着
	27	2	A-10	Ⅱd	縦貝殻条痕	横・縦貝殻条痕	黒褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの細石	
	28	2	B-17	Ⅱc	縦貝殻条痕	横貝殻条痕	黄みの明茶褐色	黄みの明茶褐色	白石、角閃石などの小石	スス付着
	29	2	B-10-12	Ⅱd	縦貝殻条痕	横貝殻条痕	茶黒褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの細石の多い粗砂	
第13層	30	2	A-B-7-8	Ⅱa-d	条痕後ナデ	条痕後ナデ	黄明茶褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石、茶石などの細石	スス付着
	31	2	B-10	Ⅱd	縦貝殻条痕	横貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの粗砂	
	32	2	B-5	Ⅱc	縦貝殻条痕	横貝殻条痕	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、角閃石、黄白石などの砂質土	スス付着
	33	2	A-8	H8	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、白石などの細石	
	34	2	A-10	Ⅱd	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石などの細石	
	35	2	B-12	Ⅱd	ヘラナデ	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、石炭などの細石	外に白粉
	36	2	C-13	Ⅱd	ヘラナデ	貝殻条痕	灰褐色	黒褐色	火山ガラス、黄白石、角閃石などの細石	
	37	2	B-5	H4	貝殻条痕	貝殻条痕	赤淡茶褐色	黒褐色	火山ガラス、青灰石、黄白石などの細石	
	38	3	A-3	Ⅱd	縄文	ヘラナデ	黒灰褐色	黒灰褐色	白石、石炭などの細石多い特異な粗砂	
	39	3	B-6	H5	ていねいなナデ	へう横ナデ	灰褐色	灰褐色	白石、石炭などの細石の多い特異な粗砂	
第14層	40	4	B-22	Ⅱd	粗いへう横ナデ	貝殻条痕、ヘラナデ	黄淡茶褐色	黄淡茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石、茶石などの細石	
	41	4	C-16	Ⅱd	ていねいなヘラナデ	ケズリ後へう横ナデ	黄み明茶褐色	黄み明茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石などの小石	
	42	4	B-5	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	灰淡茶褐色	灰淡茶褐色	火山ガラス、白石などの砂質土	スス付着
	43	4	D-17	Ⅱd	ナデ	へう横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの細石	網代あり
	44	5	C-15	Ⅱb	へう横ナデ	へう横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの細石	スス付着
	45	5	C-15	Ⅱb	へう横ナデ	へう横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの細石	スス付着
	46	5	C-10	Ⅱd Ⅱb	条痕後ヘラナデ	貝殻条痕	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石などの細石	指圧痕

第13表 土器観察表(2)

検出No	遺物番号	期	出土区	層	調整		色相		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
第14図	47	6	C-D-17-2	Ⅱa	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石など胎石の多い赤質土	
	48	6	D-7	Ⅱa	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	反黒褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	
	49	6	A-C	14-18	ヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英、白石などの胎石	
	50	6	A-13	H17	ヘラナデ	ヘラナデ	黒明茶褐色	赤明茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの胎石	
	51	7	D-7	Ⅱa	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	ス入付蓋
	52	8	C-16	Ⅱb	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの胎石	
	53	8	C-16	Ⅱd	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの胎石	ス入付蓋
	54	8	C-16	Ⅱd Ⅱb	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの胎石	
	55	8	4T	Ⅱ	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの胎石	
	56	9	C-17	Ⅱd	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	火山ガラス、黄白石、黄灰石などの胎石	
第15図	57	9	B-10	Ⅱ	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色(やや黒)	淡茶褐色	火山ガラス、白石などの胎石	
	58	9	B-14	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色(やや黒)	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、灰白石などの胎石	
	59	9	B-11	Ⅱd	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの胎石	
	60	10	B-11	Ⅱc	ヘラナデ	縄紋状/ウヘナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、灰白石、茶石などの胎石	ス入付蓋
	61	11	C-13	Ⅱc Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ/に近いナデ	暗灰褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石、石英などの胎石	ス入付蓋
	62	11	B-11	Ⅱd	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、灰青石、黄白石、茶石などの胎石	
	63	11	C-16	Ⅱb Ⅱd	貝殻条痕	貝殻条痕	紫明茶褐色	紫明茶褐色	火山ガラス、白石、角閃石などの胎石	
	64	11	B-15 C-14-15	Ⅱd Ⅱc, Ⅱd	ヘラ斜めケズリ	ヘラナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	火山ガラス、白石などの砂質質土	
	65	11	B-13	ⅡC	貝殻条痕	貝殻条痕の後ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、角閃石、白石などの胎石	
	66	11	B-10	Ⅱd	ヘラケズリ	貝殻条痕	黄みがかった淡灰褐色	黄みがかった淡灰褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	
第16図	67	11	C-16	Ⅱd	ヘラナデ	貝殻条痕	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの胎石	
	68	11	C-23	Ⅱd	ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、黄灰石などの胎石	
	69	11	A-9	Ⅱd	ヘラケズリ	ヘラケズリ	赤淡茶褐色	赤淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	
	70	11	B-10	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラケズリ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	
	71	11	B-13	Ⅱc	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	黄明茶褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	
	72	11	C-17	Ⅱd	ていねいなヘラナデ	ヘラケズリ	黄明茶褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石、灰青石などの胎石	ス入付蓋
	73	11	B-16 C-16	Ⅱd Ⅱb	ヘラナデ	ヘラナデ	暗茶褐色	反黒褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	
	74	11	C-16	Ⅱb Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	赤っぽい淡茶褐色	赤っぽい淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	ス入付蓋
	75	11	C-16	Ⅱb Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	明茶褐色と灰褐色	火山ガラス、灰白石、茶石、黄白石などの胎石	
	76	11	C-16-17	Ⅱbd	ヘラナデ(粗い)	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの胎石	
第17図	77	11	B-11	Ⅱd	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	赤淡茶褐色	赤淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの胎石	
	78	11	C-17	Ⅱb	ヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、角閃石などの胎石	
	79	11	B-13 AB, 13-15	Ⅱc Ⅱ	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、角閃石などの胎石	
	80	11	B-11	Ⅱbd	ヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	黄淡茶褐色	黄白石、石英、白石などの砂質土	ス入付蓋
	81	11	D-18	Ⅱb-d	ナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの胎石	
	82	11	A-3	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	反黄褐色	反黄褐色	火山ガラス、白石などの胎石	
	83	11	A-12 D-14	Ⅱa	ヘラナデ	ヘラナデ	反明茶褐色	反明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの胎石	ス入付蓋
	84	11	A-11 B-10	Ⅱc Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石、白石などの胎石	
	85	11	B-9-10	Ⅱod	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	火山ガラス、茶石、灰白石、白石などの胎石	
	86	11	C-16	Ⅱd	ヘラナデ	貝殻条痕の後の部分のナデ	反明茶褐色	反明茶褐色	火山ガラス、茶石、黄白石などの胎石の多い赤質土	
第18図	87	11	B-10	Ⅱc Ⅱd	貝殻条痕後粗いナデ	ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石などの胎石	
	88	11	B-17	Ⅱb	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石、灰白石などの胎石	
第19図	89	11	A-9	Ⅱd	ケズリ風ヘラナデ	ケズリ風ヘラナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石、角閃石などの胎石	

第14表 土器観察表(3)

標記No	遺物番号	類	出土区	層	調整				色相		胎土	備考
					外面		内面		外面	内面		
第19区	90	11	C-11-12	Ⅱd	へう様ナデ	へう様ナデ	黄明茶褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの礫石			
	91	11	C-16	Ⅱb Ⅱd	へうナデ	へうナデ部分のハケ目	黒褐色	淡茶褐色	火山ガラス、茶石、白石、角閃石などの礫石			
	92	11	A-10	H23	へうナデ	細い貝殻条痕	黄明茶褐色	黄明茶褐色	火山が、白石、石英、黄白石、茶石などの礫石			
	93	11	C-12	Ⅱd	へう様めナデ	へう様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、茶石、灰白石などの礫石の多い中質土			
第20区	94	11	C-17	Ⅱd	へう様ナデ	へう様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、灰青石、茶石などの礫石			
	95	11	C-16	Ⅱabd	へう様ナデ	へう様ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石などの礫石		スス付着	
	96	11	C-13-16	Ⅱbe	ていねいなへう様ナデ	細いナデ	黄明茶褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、黄白石、角閃石などの礫石			
	97	11	C-15	Ⅱc	細いへうナデ	へう様ナデ	明茶褐色	黄明茶褐色	石英、黄白石、茶石などの礫石			
第21区	98	11	C-12	Ⅱd	ていねいなへうナデ	貝殻条痕の後へう様ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの礫石			
	99	11	B-13	Ⅱc	へう様ナデ	へう様ナデ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	火山ガラス、黄白石、灰白石などの砂質土			
	100	11	A-9	Ⅱd	へうナデ	へうケズリ	赤茶褐色	赤茶褐色	火山ガラス、黄白石などの礫石			
	101	11	B-14	Ⅱb	へう様ナデ	へう様ナデ	黄みがかった淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの礫石			
	102	11	A-C 13-16	Ⅱ	ていねいなナデ	へうナデ、へうケズリ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、灰白石などの礫石			
	103	11	B-12	Ⅱc	へう様ナデ	へう様ナデ	黄褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの礫石		スス付着	
	104	11	C-15	Ⅱd	へう様ナデ	へう様ナデ	黄明茶褐色	黄明茶褐色	火山ガラス、石英、黄白石などの礫石			
	105	11	A-9	Ⅱd	へう様ナデ	へう様ナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、黄白石などの礫石		スス付着	
	106	11	C-17	Ⅱa-e	細いナデ、へうケズリ	貝殻条痕の後へうナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、角閃石などの礫石		スス付着	
	第22区	107	11	B-14	Ⅱd	ていねいなへう様ナデ	ていねいなへう様ナデ	黄っぽい灰褐色	黄っぽい灰褐色	火山ガラス、黄白石、茶石、青灰石などの礫石		
108		11	B-13	Ⅱc	ていねいなナデ	やや細いナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの礫石			
第23区	109	11	C-16	Ⅱd	へうナデ	細いへう様ナデ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石、茶石などの礫石		スス付着	
	110	11	B-11	Ⅱd	へう様ナデ	へう様ナデ	黄茶褐色	黄茶褐色	火山ガラス、白石などの礫石			
	111	11	5T	ⅡⅢ	ナデ、ケズリ	ていねいなへうナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、角閃石、茶石などの礫石			
	112	11	C-16	Ⅱb	ていねいなへうナデ	へう様ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラスなどの細砂質土			
	113	11	A-8	Ⅱc	ていねいなへう様ナデ	ていねいなへう様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの礫石			
	114	11	C-17	Ⅱc	へうナデ	へうケズリ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの礫石			
	115	11	C-12	H22	ていねいなへうナデ	へうナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの礫石			
	116	11	C-15	Ⅱc	へうナデ	へう様ナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、黄白石などの礫石			
	117	11	A-9	Ⅱd	へうナデ	へうナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、角閃石、黄白石などの礫石			
	第24区	118	11	C-15	Ⅱb-e	へうナデ	へうナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの礫石		
119		11	B-13	Ⅱc	ナデ		茶褐色	茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの礫石			
120		11	C-16	Ⅱd	ていねいなナデ	ていねいなナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの礫石			
121		11	A-15	Ⅱc	へう様ナデ	へうナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、角閃石などの礫石			
122		11	C-17	Ⅱa Ⅱb	へうナデ	ていねいな様へうナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石などの礫石			
123		11	B-11	Ⅱd	へうナデ	へうナデ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの礫石			
124		11	B-16	Ⅱd	ハケナデ、へうケズリ	貝殻条痕	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石、角閃石などの小石			
125		11	D-16	Ⅱc	へうナデ	へうナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石、白石などの小石			
126		11	C-16	Ⅱd	網代	へうナデ	淡茶褐色	黄褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの礫石			
127		11	B-14	Ⅱb	ていねいなへうナデ	ていねいなへうナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、灰白石、茶石などの小石			
128		11	B-15	Ⅱc	鬚骨	へうナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、角閃石、黄白石などの礫石			
129		11	D-7	Ⅱac	ケズリナデ	ナデ	黄っぽい明茶褐色	黄っぽい明茶褐色	火山ガラス、白石、石英などの礫石			
130		11	B-8	H7	へうナデ	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、白石、石英などの礫石			
131		11	D-17	Ⅱd	ていねいなナデ	貝殻条痕の後へうナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	火山ガラス、白石、角閃石などの礫石			
第25区	132	11	D-18	Ⅱbcd	へうナデ	へうナデ	淡茶褐色	黄褐色	火山ガラス、黄白石、白石、茶石などの礫石			
	133	11	D-18	Ⅱc	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕、ナデ	淡茶褐色	黄褐色	火山ガラス、石英、青灰石、黄白石などの礫石			
	134	12	D-18	Ⅱc	へう様ナデ	ケズリ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石、茶石などの礫石			
	135	12	B-17	Ⅱc	貝殻条痕	貝殻条痕、へうナデ	黄褐色	黄褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの礫石			
	136	12	A-7	Ⅱd	貝殻条痕	貝殻条痕	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの礫石			
	137	12	C-17	Ⅱc	貝殻条痕	貝殻条痕	黄灰褐色	黄灰褐色	火山ガラス、白石などの礫石			
	138	12	B-D 7-8	Ⅱ	ていねいなへうナデ	ていねいなへうナデ	黒褐色	黒褐色	火山ガラス、白石、茶石などの礫石			
139	13	C-D	Ⅱd	ケズリ、へう様ナデ	へう様ナデ	黒淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石などの礫石				

第15表 土器観察表(4)

標記No	遺物番号	期	出土区	層	観察				胎土	備考		
					外面		内面				色	
					外面	内面	外面	内面			外面	内面
第25区	140	13	D-18	Ⅱb Ⅱc	貝殻条痕、ヘラ様ナデ	貝殻条痕、ヘラ様ナデ	明茶褐色	黒褐色	火山ガラス、白石、茶石などの磁石			
	141	13	D-18	Ⅱc Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色	黒褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石			
	142	13	C-12	Ⅱa	貝殻条痕、ヘラナデ	貝殻条痕、ヘラナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石、石炭などの磁石			
	143	13	C-16	Ⅱd	ヘラ様ナデ	ヘラ様ナデ	黒褐色	暗茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石などの磁石			
	144	13	C-14	Ⅱc	ヘラナデ	ていねいなヘラ様ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石	スス付着		
	145	13	A-B-9	I・Ⅱd	ていねいなヘラ様ナデ	ていねいなヘラ様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、石炭などの磁石			
第26区	146	13	D-E-25	Ⅱd	ヘラナデ	ケズリ、ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石などの磁石			
	147	13	B-11	Ⅱd	貝殻条痕、ヘラナデ	貝殻条痕、ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石、白石、茶石などの磁石			
	148	13	B-13	Ⅱc Ⅱb	貝殻条痕	貝殻条痕	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	149	13	D-19	Ⅱb	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	灰がかった淡茶褐色	灰がかった淡茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの磁石			
	150	13	D-16	Ⅱc	貝殻条痕、ヘラナデ	貝殻条痕、ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石			
	151	13	B-D-0-18-19	Ⅱd	貝殻条痕	貝殻条痕、ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石	スス付着		
	152	13	D-25	Ⅱd	貝殻条痕、ヘラ様ナデ	貝殻条痕、ヘラ様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、茶石、黄白石などの磁石			
	153	13	D-17	Ⅱc Ⅱd	貝殻条痕後ヘラナデ	貝殻条痕後ヘラナデ	黄みがかった茶褐色	黄みがかった茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	154	13	D-21	Ⅱd	貝殻条痕後ナデ	ヘラ様ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石			
	155	13	C-14	Ⅱc	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、黄白石、茶石などの磁石			
第27区	156	13	D-18	Ⅱd	貝殻条痕	貝殻条痕	淡褐色	淡褐色	火山ガラス、黄白石、茶石、角閃石などの磁石			
	157	13	D-20	Ⅱa	ヘラナデ	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	158	13	A-9	Ⅱc	ヘラ様ナデ	ケズリ風ヘラ様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	159	13	B-9	Ⅱd	ヘラ様ナデ	ヘラ様ナデ	淡茶褐色	黄淡茶褐色	火山ガラス、角閃石、黄白石などの磁石			
	160	13	C-22-23	Ⅱd	指圧痕、ナデ、貝殻条痕	貝殻条痕の後ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石、黄白石、角閃石などの磁石			
	161	13	B-10	Ⅱd	ナデ	ていねいなヘラ様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石など金雲母の多い粗砂			
	162	13	C-12	Ⅱbod	ヘラ様ナデ	ヘラ様ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	163	13	C-12、16 B-15	Ⅱbod	粗いヘラ様ナデ	粗いヘラ様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	164	13	C-13	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	黄色っぽい明茶褐色	黄色っぽい明茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	165	13	A-13	Ⅱd	ヘラ様ナデ	ヘラ様ナデ	茶がかった黒灰色	茶がかった黒灰色	火山ガラス、白石などの磁石			
第28区	166	13	C-7	Ⅱa	ヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、角閃石、石英などの磁石			
	167	13	C-D7	Ⅱd	ヘラ様ナデ	ヘラ様ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石			
	168	13	D-17	Ⅱd	貝殻条痕	貝殻条痕後ナデ	明茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	169	13	5T	Ⅱ	ヘラナデ	粗いヘラナデ	茶褐色	灰褐色	火山ガラス、黄白石、白石などの磁石	土製品		
	170	14	B-12	Ⅱbod	ていねいな様ヘラナデ	ていねいな様ヘラナデ	黄褐色	黄褐色	火山ガラス、白石、灰白石、角閃石などの磁石			
	171	14	B-12	Ⅱc	ていねいな様ヘラナデ	ていねいな様ヘラナデ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	角閃石、白石などの磁石			
	172	15	B-8	Ⅱa	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	茶褐色	火山ガラス、白石などの磁石			
	173	16	D-7	Ⅱa	貝殻条痕	貝殻条痕	暗い黄茶褐色	暗い黄茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの磁石			
	174	16	D-7	Ⅱa	ヘラナデ	貝殻条痕	暗茶褐色	暗茶褐色	火山ガラス、白石など金雲母の多い粗砂			
	175	16	D-7	Ⅱa	ヘラナデ	ヘラケズリ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	黄白石、金雲母、石英などの磁石			
第29区	176	16	D-7	Ⅱa	ヘラ様ナデ	ヘラ様ナデ	黒褐色	黒褐色	火山ガラス、金雲母、白石などの磁石			
	177	16	D-7	Ⅱa	ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	黄白石、金雲母、石英などの磁石			
	178	16	D-7	Ⅱa	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	火山ガラス、白石、茶石などの磁石			
	179	16	D-7	Ⅱa	ヘラナデ	ヘラケズリ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	黄白石、金雲母など石英を含む磁石			
	180	17	A-5	H16	ヘラ様ナデ	ていねいなヘラ様ナデ	茶褐色	明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石			
	181	17	A-7	Ⅱd	黄っぽい明茶褐色	ヘラナデ	黄っぽい明茶褐色	黄っぽい明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石			
	182	17	B-10	Ⅱd	ヘラナデ	ヘラナデ	黄っぽい明茶褐色	黄っぽい明茶褐色	火山ガラス、黄白石などの磁石			

第16表 土器観察表(5)

母体No.	規格No.	出土区	層	遺物1	遺物2	調査(内)	調査(内)	色図(内)	色図(内)	胎土	取上No.	備考
第43区	336	D-3	SH-01	埴土1		細目のタテハケ目一ナナ	細目のタテハケ目一ナナ	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	9796図か	外: スス付
		D-3	SH-01	埴土3							1269図か	
	337	D-3	SH-01	埴土1		タテハケ目一ナナ	タテハケ目, ヨコハラナ	茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色	雲母, 角閃石, 砂鉄, 赤鉄	4650	
	338	D-4	SH-01	埴土1		タテハケ目一ナナ	細目のタテハケ目	茶褐色	暗茶褐色	角閃石, 輝石, 砂鉄	2530図か	
	339	D-4	SH-01	埴土1		タテハケ目一ナナ	太目のタテハケ目	茶褐色	黄白色	雲母, 輝石, 角閃石	3190	
	340	D-4	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色	石英, 雲母, 赤鉄	3212	
	341	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	ヨコハラナ	茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	石英, 雲母, 輝石	5813	外: スス付
	342	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色	輝石, 雲母, 磁鉄	12643	
	343	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色	暗褐色	石英, 雲母, 磁鉄	5813	外, 内: スス付
	344	D-3	SH-01	埴土2		ヨコハラナ	ヨコハラナ	暗褐色, 茶褐色, 黒褐色	暗褐色	雲母, 角閃石, 砂鉄	17206	外: スス付
第44区	345	D-3	SH-01	埴土1		細目のタテハケ目, ヨコ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 黒褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	4649図か	
		A-4	SH-08	埴土2								
	346	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗褐色	輝石, 黒輝石, 砂鉄, 赤鉄	3232図か	外: スス付
		D-3	SH-01	埴土3							1269図か	
	347	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色	暗褐色	雲母, 角閃石, 砂鉄	3223図か	外: スス付
	348	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 角閃石, 磁鉄, 赤鉄	3227図か	外: スス付
	349	D-18	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 黄褐色	輝石, 雲母, 砂鉄	13463	
		D-3									4649	
	350	D-4	SH-02	埴土2		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色	暗褐色	雲母, 角閃石, 砂鉄	12710	
	351	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 灰褐色	灰褐色, 暗茶褐色	角閃石, 赤鉄, 砂鉄	3228	
第50区	352	B-8	ブロッコ			タテハラナ	ヨコハラナ	暗褐色, 灰褐色	暗褐色	雲母, 輝石, 磁鉄	19823	
	353	D-4	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	茶褐色	暗茶褐色	角閃石, 石英, 赤鉄, 砂鉄	5821	内: スス付
	354	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 茶褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	4650図か	外: スス付
	355	D-3	SH-01	埴土1		細目のタテハケ目, ヨコ	タテハラナ	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 雲母, 磁鉄	12695	
	356	D-4	SH-01	埴土1		タテハラナ	太目のタテハケ目, 細目のタテハケ目	茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 黒褐色	輝石, 角閃石, 砂鉄, 赤鉄	2814図か	外, 内: スス付
	357	D-4	SH-01	埴土1		丁草なタテナ	タテハラナ	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 灰褐色	角閃石, 雲母, 磁鉄	3201	
	358	D-4	SH-01	埴土1		細目のタテハケ目, 粗目の	ヨコハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	角閃石, 雲母, 磁鉄	2821	
	359	D-3	SH-01	埴土1		タテナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗褐色	角閃石, 雲母, 磁鉄	4647図か	
	360	D-3	SH-01	埴土1		タテナ	タテナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 灰褐色	角閃石, 雲母, 磁鉄	3608	
	361	D-3	SH-01	埴土1		粗目のタテハケ目, タテ	タテ, ヨコ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	角閃石, 雲母, 砂鉄	7182	
第51区	362	D-3	SH-01	埴土2		ヨコハラナ	ヨコハラナ	暗褐色	暗褐色	角閃石, 雲母, 砂鉄	17204	内: スス付
	363	D-3	SH-01	埴土1		ヨコハラナ	ヨコハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 雲母, 磁鉄	9797図か	外: スス付
		D-3	SH-01	埴土2							13805	
	364	D-4	SH-01	埴土1		タテハラナ	ヨコハラナ	暗褐色, 黒褐色	暗褐色, 黒褐色	角閃石, 雲母, 磁鉄, 赤鉄	2940	外: スス付
	365	D-3	SH-01	埴土1		ヨコハラナ	ヨコハラナ	灰褐色, 黒褐色	灰褐色, 黒褐色	角閃石, 赤鉄	9792	
	366	D-3	SH-01	埴土2		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	角閃石, 輝石, 砂鉄, 赤鉄	12699図か	外: スス付
	367	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 灰褐色	角閃石, 輝石, 砂鉄	9794	外: スス付
	368	D-4	SH-01	埴土1		タテハラナ	ヨコハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 灰褐色	角閃石, 輝石, 雲母, 磁鉄	2218	外: スス付
		D-3	SH-01	埴土2							17189	
	369	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色	角閃石, 輝石, 砂鉄	4650図か	
第53区	370	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 灰褐色	暗褐色	角閃石, 輝石, 砂鉄	4650	
	371	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	丁草なタテナ, ヨコ	暗褐色, 黄褐色	暗褐色, 暗茶褐色	角閃石, 雲母, 砂鉄	3213図か	
	372	D-3	SH-01	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	黄褐色, 暗褐色	角閃石, 雲母, 砂鉄	3214図か	
		D-3	SH-01	埴土3							12699図か	
	373	B-4	SH-02	埴土2		太目のタテハケ目, ヨコ	細目のタテハケ目一ヨコ	暗褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	角閃石, 砂鉄, 赤鉄	4649図か	外: スス付
	374	B-4	SH-02	埴土2		ヨコハラナ	ヨコハラナ	暗褐色, 暗茶褐色, 黒褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	2986図か	外: スス付
	375	B-4	SH-02	埴土1		細目のタテハケ目一ナナ	タテナ	暗褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 磁鉄	3640図か	外: スス付
	376	B-4	SH-02	埴土1		タテハラナ	タテハラナ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	1807図か	
	377	B-4	SH-02	埴土1		太目のタテハケ目, ヨコ	タテハラナ	暗褐色, 黒褐色	暗褐色, 黒褐色	角閃石, 磁鉄, 赤鉄	18207図か	外: スス付
	378	D-3	SH-01	埴土1							17189	

第17表 土器観察表(6)

群	種別No	出土区	層	発見1	発見2	発見3	調査(内)	調査(内)	色層(内)	色層(内)	胎土	取上No	備考
第53区	278	B-4	III-02	埋土1			タテハケ目一ナゲ	太目のヨコハケ目	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 灰褐色	クローンモ, 砂, 赤粒	61142か	外: スス付着
	279	B-4	III-02	埋土1			太目のタテハケ目一ナゲ, ヨコ調	タテハラナゲ, ヨコ調	暗褐色, 茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	30932か	外: スス付着
	380	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調一ヨコハラナゲ	ヨコ調	茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	65452か 12720	
第54区	381	B-4	III-02	埋土1			タテハラナゲ, ヨコ調	タテナゲ, ヨコ調	茶褐色, 黒褐色	暗茶褐色, 暗赤褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	192872か	
	382	B-4	III-02	埋土1			タテナゲ, タテハラナゲ, ヨコ調	縦目ヨコハケ目, ヨコハラナゲ, ヨコ調	暗茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	192822か	外: スス付着
	383	B-4	III-02	埋土1			太目のタテハケ目一ナゲ, ヨコ調	太目のヨコハケ目, タテハラナゲ, ヨコ調	暗褐色, 暗茶褐色	黄白色, 暗褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	36642か	外: スス付着
	384	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目, ヨコ調	ヨコ調一タテハラナゲ, ヨコ調	暗褐色, 黒褐色	暗褐色, 暗茶褐色	クローンモ, 輝石	140052か	外: スス付着
	385	B-4	III-02	埋土1			太目のタテハケ目, タテハラナゲ, ヨコ調	縦目のタテハケ目一タテハラナゲ, ヨコ調	暗褐色, 黒褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	31264	外: スス付着
	386	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目一タテハラナゲ, ヨコ調	タテナゲ, ヨコ調	暗褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	206882か 36672か	外: スス付着
	387	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目一タテハラナゲ, ヨコ調	タテハラナゲ, ヨコハラナゲ	暗褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	180912か	外: スス付着
	388	B-4	III-02	埋土1			タテハラナゲ, ヨコ調	太目のタテハケ目, ヨコ調一ヨコハラナゲ	暗茶褐色, 黒褐色	黄白色, 暗褐色	クローンモ, 赤粒, 赤粒	74002か	外: スス付着
	389	B-4	III-02	埋土1			ヨコハケ目一ヨコハラナゲ, ヨコ調	ヨコ調一タテハラナゲ, ヨコハラナゲ	黒褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 黒褐色	赤丸石, 砂, 赤粒	22412	外: 全面スス付着
	390	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目, ヨコ調	太目のタテハケ目, ヨコ調	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	クローンモ, 輝石, 砂, 赤粒	21449	外: スス付着
第55区	281	B-4	III-02	埋土1			タテハラナゲ, ヨコハラナゲ, ヨコ調	ヨコ調, ヨコハラナゲ一ナゲ	茶褐色, 黒褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	18256	外: スス付着
	382	B-4	III-02	埋土1			タテナゲ一縦目のタテハケ目, ヨコ調	太目のタテハケ目, ヨコ調	暗茶褐色, 黒褐色	暗褐色, 暗茶褐色	赤丸石, 赤粒, 赤粒	19766	外: スス付着
	383	B-4	III-02	埋土1			タテナゲ, ヨコハケ目, ヨコ調	ヨコ調一ヨコハラナゲ, ヨコ調	黒褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 黒褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	234352か	外: 全面スス付着
	384	B-4	III-02	埋土1			太目のタテハケ目, ヨコ調	タテナゲ一縦目のヨコハケ目, ヨコ調	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗褐色	赤丸石, 砂, 赤粒	30932か	
	385	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目, ヨコ調	タテハラナゲ, 縦目ヨコハケ目	茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	36202か	外: スス付着
	386	B-4	III-02	埋土1			タテナゲ一ヨコハラナゲ, ヨコ調	タテナゲ一タテハラナゲ, ヨコ調	暗褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	182052か	
	387	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, タテハラナゲ	タテハラナゲ	茶褐色, 暗褐色	黒褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	65052か	内: スス付着
	388	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, タテナゲ一丁寧なタテナゲ	タテハラナゲ, 指紋凹痕	暗褐色, 暗赤褐色	暗茶褐色, 黒褐色	赤丸石, 輝石, 砂, 赤粒	187372か	内: スス付着
	389	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目一タテハラナゲ	ヨコハラナゲ, タテハラナゲ	黄褐色, 灰褐色	暗茶褐色, 黄白色	クローンモ, 輝石, 砂, 赤粒	65552か	
	400	B-4	III-02	埋土1			タテナゲ一タテハラナゲ	タテナゲ	茶褐色, 暗茶褐色	黒褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	22400	内: スス付着
第56区	401	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, タテハラナゲ	ヨコ調, タテナゲ	茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	37332か	
	402	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, タテハラナゲ	ヨコ調	暗茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 黒褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	363	内: スス付着
	403	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, タテハラナゲ	ヨコ調	暗褐色	暗褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	9617	
	404	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調	ヨコ調	暗褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	65772か	外: スス付着
	405	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, ヨコハラナゲ	ヨコ調, ヨコハラナゲ	暗褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 黒褐色	赤丸石, 輝石, 砂, 赤粒	18747	
	406	B-4	III-02	埋土1			タテハラナゲ, 丁寧なタテナゲ	丁寧なタテナゲ	暗茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 暗茶褐色	クローンモ, 輝石, 砂, 赤粒	312442か	
	407	B-4	III-06	埋土2			ヨコ調, タテナゲ	ヨコハケ目一ナゲ	暗茶褐色, 暗褐色	灰褐色, 暗茶褐色	赤丸石, 輝石, 砂, 赤粒	27272か 3740	
	408	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調一縦目のタテハケ目, タテハラナゲ	ヨコ調, タテハケ目	茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗赤褐色	輝石, 赤粒	18285	
	409	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, タテハラナゲ	ヨコ調	暗褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗褐色	クローンモ, 赤丸石, 輝石, 砂, 赤粒	22396	
	410	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調一タテハラナゲ	タテハラナゲ	暗茶褐色, 茶褐色	暗茶褐色, 茶褐色	赤丸石, 輝石, 砂, 赤粒	14024	内: スス付着
第57区	411	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, 縦目のタテハケ目	太目のタテハケ目一タテハラナゲ	茶褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	36342か	
	412	B-4	III-02	埋土1			ヨコ調, 縦目のタテハケ目, タテハラナゲ	縦目のタテハケ目一タテハラナゲ, ヨコハラナゲ	暗褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 黒褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	38152か	外: 内スス付着
	413	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目一ナゲ, 太目のタテハケ目	タテハラナゲ, ヨコハラナゲ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	36322か	
	414	B-4	III-02	埋土1			タテハラナゲ, ヨコ調	ヨコハラナゲ, タテハラナゲ	暗茶褐色, 暗赤褐色	暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	3603	
	415	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目	タテハラナゲ, ヨコハラナゲ	黄褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	37002か	
	416	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目一丁寧なタテナゲ	ヨコハラナゲ, ヨコ調	黄白色, 暗茶褐色	暗褐色, 黄白色	輝石, 赤丸石, 輝石, 赤粒	72772か	
	417	B-4	III-02	埋土1			太目のタテハケ目一タテナゲ, ヨコ調	ヨコ調一ヨコハラナゲ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	37242か	
	418	B-4	III-02	埋土1			太目のタテハケ目一タテナゲ, ヨコ調	タテナゲ一タテナゲ, 縦目ヨコハケ目	茶褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 赤粒, 赤粒	35002か	
	419	B-4	III-02	埋土1			太目のタテハケ目一ナゲ, ヨコ調	タテハラナゲ, ヨコ調	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 灰褐色	輝石, クローンモ, 砂, 赤粒	20252か	
	420	B-4	III-02	埋土1			縦目のタテハケ目一ヨコハラナゲ	タテハラナゲ, ヨコハラナゲ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 黄白色	輝石, 赤粒, 赤粒	18142か	
第58区	421	B-4	III-02	埋土1			太目のタテハケ目一丁寧なタテナゲ	タテハラナゲ, ヨコハラナゲ	暗褐色	黄白色	クローンモ, 輝石, 赤粒, 赤粒	72632か	

第18表 土器観察表(7)

群別No	発掘No	出土区	層	遺物1	遺物2	遺物3	調査(内)	調査(内)	色図(内)	色図(内)	取上No	備考	
第50区	422	C-4	3H-02	埴土1	タテ割一丁草なタナナジ、タテハラナジ	タナナジ、ヨコハラナジ	褐色、暗茶褐色	褐色、暗茶褐色	褐色、暗茶褐色	褐色、暗茶褐色	内四石、扉石、砂	68242枚	
	423	B-4	3H-02	埴土1	丁草なタナナジ、ヨコ割	ヨコ割一タテハラナジ	茶褐色、反褐色	茶褐色、反褐色	茶褐色、反褐色	茶褐色、反褐色	内四石、扉石、砂	65992枚	
	424	B-4	3H-02	埴土1	タテ割、横目のタテハラナジ	タナナジ、横割正	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	扉石、砂、赤鉄	65602枚	内内・スス付
	425	B-4	3H-02	埴土1	タテ割一丁草なタナナジ	タテハラナジ	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	内四石、扉石、砂	14012枚	
	426	B-4	3H-02	埴土1	太目のタテハラナジ	タテハラナジ	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	内四石、扉石、砂	36002枚	
	427	C-4	3H-02	埴土1	横目のタテハラナジ、太目のタテハラナジ	太目のタテハラナジ、横目のタテハラナジ	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	扉石、扉石、砂	69052枚	外・スス付
	428	C-4	3H-02	埴土2								12713	
	428	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ	タテハラナジ、横割正	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、扉石、砂	37082枚	
	429	B-4	3H-02	埴土1	太目のタテハラナジ	横割正、タテハラナジ	茶褐色、黒褐色	茶褐色、黒褐色	茶褐色、黒褐色	茶褐色、黒褐色	内四石、扉石、砂	21226	
	430	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ	タテハラナジ	暗茶褐色、黒褐色	暗茶褐色、黒褐色	暗茶褐色、黒褐色	暗茶褐色、黒褐色	扉石、砂、赤鉄	21241	
431	B-4	3H-02	埴土1	太目のタテハラナジ、ヨコハラナジ	ヨコハラナジ	暗褐色、黄褐色	暗褐色、黄褐色	暗褐色、黄褐色	暗褐色、黄褐色	扉石、砂、赤鉄	36472枚		
第51区	432	B-4	3H-02	埴土1	太目のタテハラナジ	タテハラナジ	黄褐色、暗褐色	黄褐色、暗褐色	黄褐色、暗褐色	黄褐色、暗褐色	内四石、扉石、砂	14024	
	433	B-4	3H-02	埴土1	太目のタテハラナジ	ヨコハラナジ、タテハラナジ	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、砂、赤鉄	36682枚	
	434	B-4	3H-02	埴土1	横目のタテハラナジ	ヨコ割一タテハラナジ	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、扉石	14024	
	435	B-4	3H-02	埴土1	タテ割一タテハラナジ	タテハラナジ	茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、砂、赤鉄	37422枚	外・スス付
	436	B-4	3H-02	埴土1	丁草なヨコナジ	ヨコハラナジ	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	扉石、扉石、赤鉄	4653	
	437	B-4	3H-02	埴土1	丁草なヨコナジ	ヨコハラナジ	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	扉石、扉石、赤鉄	37252枚	
	438	B-4	3H-02	埴土1	横目のタテハラナジ	太目のタテハラナジ	黄褐色、茶褐色	黄褐色、茶褐色	黄褐色、茶褐色	黄褐色、茶褐色	扉石、内四石、砂	36172枚	
	439	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ	ヨコ割、タテハラナジ	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	扉石、砂、赤鉄	21241	
	440	B-4	3H-02	埴土1	横目のタテハラナジ	ヨコ割、タテハラナジ	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、タテハラナジ	21234	外・スス付
	441	A-8	3H-06	埴土1	タテ割一丁草なタナナジ	タテハラナジ	茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、砂、赤鉄	9584	
第52区	442				タテ割一タテハラナジ	ヨコ割一タテハラナジ	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、扉石、砂	一	
	442	B-4	3H-02	埴土1	タテ割一丁草なタナナジ	タテハラナジ	茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、砂、赤鉄	140242枚	
	444	B-4	3H-02	埴土1	横目のタテハラナジ	タテハラナジ、ヨコ割	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、砂、赤鉄	20642枚	
	445	B-4	3H-02	埴土1	横割正、タテハラナジ	横割正、ナジ	茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	扉石、タテハラナジ	22428	
	446	B-4	3H-02	埴土1	タテ割一ナジ	ヨコハラナジ	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	内四石、砂、赤鉄	18127	
	447	B-4	3H-02	埴土1	横割正、タテハラナジ	横割正、ナジ	茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	タテハラナジ、扉石、砂	18739	
	448	B-4	3H-02	埴土1	ヨコ割	ヨコ割	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	内四石、砂	211192枚	
	449	B-4	3H-02	埴土1	ヨコ割一タテハラナジ	タテハラナジ	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	扉石、砂、赤鉄	22418	
	450	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ	タテハラナジ	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	扉石、砂、赤鉄	180722枚	外・スス付
	451	B-4	3H-02	埴土1	横目のタテハラナジ	タテハラナジ	暗茶褐色、黒褐色	暗茶褐色、黒褐色	暗茶褐色、黒褐色	暗茶褐色、黒褐色	扉石、砂、赤鉄	3739	
第53区	452	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ	丁草なタナナジ	暗茶褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	扉石、砂、赤鉄	66812枚	
	453	B-4	3H-02	埴土1	ヨコ割一タテハラナジ	タテハラナジ	茶褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	扉石、内四石、砂	34212枚	家内産アリ
	454	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ、ヨコ割	横割正、ヨコ割	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	暗茶褐色、茶褐色	扉石、扉石、砂	211312枚	
	455	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ	ヨコハラナジ	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	内四石、砂、赤鉄	6664	
	456	B-4	3H-02	埴土1	横目のタテハラナジ	ヨコ割	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	扉石、内四石、扉石	181202枚	
	457	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ	ヨコハラナジ	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	扉石、砂、赤鉄	20771	
	458	B-4	3H-02	埴土1	タテハラナジ	ヨコハラナジ	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	茶褐色、暗茶褐色	扉石、砂、赤鉄	37122枚	
	459	B-4	3H-02	埴土1	太目のタテハラナジ	ヨコハラナジ	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	内四石、扉石、砂	32722枚	
	460	B-4	3H-02	埴土1	丁草なタナナジ	タテハラナジ	茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	扉石、砂、赤鉄	73002枚	
	460	C-4	3H-02	埴土2								12718	
第54区	461	B-4	3H-03	埴土1	ヨコハラナジ	ヨコハラナジ	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	内四石、扉石、砂	7816	
	462	B-4	3H-03	埴土2	タテハラナジ	ヨコハラナジ	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗茶褐色	内四石、扉石、砂	25112枚	外・スス付
	463	B-4	3H-03	埴土1	タテハラナジ	ヨコハラナジ	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	内四石、扉石、砂	2569	外・スス付
	464	B-4	3H-03	埴土1	タテハラナジ	ヨコハラナジ	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	内四石、扉石、砂	7635	外・スス付
	465	B-4	3H-03	埴土1	タテハラナジ	ヨコハラナジ	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	内四石、砂、赤鉄	25122枚	
	466	A-4	3H-03	埴土1	タテハラナジ	タテハラナジ	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	内四石、扉石、砂	46622枚	
	467	B-4	3H-03	埴土1	横目のタテハラナジ	太目のヨコハラナジ	黄褐色、暗茶褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	暗茶褐色、暗褐色	扉石、扉石、砂	2571	外・スス付

第19表 土器観察表(8)

種別No	経緯No	出土状況	法種1	法種2	遺構3	遺構4	観察(外)	観察(内)	色図(外)	色図(内)	加工	取上No	備考
第12区	466	B-4	SH-02	埋土1			タテハナデ、ヨコハナデ	タテハナデ、ヨコハナデ	緑褐色、暗黄褐色	緑褐色、暗黄褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	15324	内・外:スス付着
	469	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ、ヨコハナデ	タテハナデ、ヨコハナデ	緑赤褐色、暗黄褐色	暗黄褐色、黒褐色	磨石、磨石、砂粒、赤粒	2595埋土か 2998	外:スス付着
	470	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	緑赤褐色、暗黄褐色	暗黄褐色、黒褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	2510埋土か	外:スス付着
	471	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ、ヨコハナデ	タテハナデ、ヨコハナデ	灰褐色、暗褐色	暗黄褐色、暗黄褐色	丸四石、磨石、赤粒、赤粒	7087埋土か	内:スス付着 口縁部ナシ
	472	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	暗黄褐色、暗赤褐色	黄白色	磨石、磨石、赤粒	10729 15328	外:スス付着
	473	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	ヨコハナデ	暗褐色、暗赤褐色	暗褐色、暗赤褐色	丸四石、磨石、砂粒	2535	外:スス付着
	474	B-4	SH-02	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色、暗赤褐色	暗褐色、暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	2582埋土か	
	475	B-4	SH-03	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色、暗赤褐色	暗黄褐色、暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	7034	
	476	B-4	SH-03	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色、黒褐色	暗褐色、黒褐色	磨石、磨石、赤粒	7076	内:スス付着
	477	B-4	SH-03	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色	暗黄褐色、暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	2595	
第13区	478	B-4	SH-03	埋土1			縦目のタテハナデ目、ヨコハナデ	縦目のヨコハナデ目、ヨコハナデ	茶褐色、暗赤褐色	茶褐色、暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	2515埋土か 15325埋土か	
	479	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	縦目、ヨコハナデ	暗赤褐色、暗赤褐色	暗黄褐色、灰褐色	磨石、磨石、赤粒、赤粒	15332	
	480	A-4	SH-03	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色	暗黄褐色、黒褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	4706	
	481	B-4	SH-03	埋土1			縦目のヨコハナデ目	縦目のヨコハナデ目	黒褐色	黒褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	2573	
	482	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	2758	
	483	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	暗黄褐色、暗赤褐色	暗褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	7024	
	484	A-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	暗黄褐色、暗赤褐色	黒褐色、暗赤褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	4702埋土か	
	485	B-4	SH-03	埋土1			縦目のタテハナデ目	縦目のヨコハナデ目	茶褐色、暗赤褐色	暗赤褐色、暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	3577	
	486	B-4	SH-03	埋土1			縦目のタテハナデ目、ヨコハナデ	縦目のタテハナデ目、ヨコハナデ	暗黄褐色、暗褐色	暗黄褐色、黄白色	磨石、丸四石、砂粒	7906 10727	
	487	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	灰褐色、暗黄褐色	暗褐色	磨石、磨石、赤粒	10680	
第14区	488	B-4	SH-03	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	暗褐色、暗黄褐色	暗褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	7026	
	489	B-4	SH-03	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色	暗黄褐色、暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	15340 10711	
	492	A-4	SH-04	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	暗褐色	黄白色	磨石、磨石、赤粒	5316	
	493	A-4	SH-04	埋土1			太目のタテハナデ目	太目のタテハナデ目	暗黄褐色	暗赤褐色、暗黄褐色	磨石、磨石、赤粒	11528埋土か 3119埋土か	
	494	A-4	SH-04	埋土1			太目のタテハナデ目、ヨコハナデ	太目のタテハナデ目、ヨコハナデ	暗黄褐色、暗赤褐色	暗黄褐色、暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	11528埋土か 12261	外:スス付着
	495	B-4	SH-02	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗赤褐色、暗褐色	暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	12862埋土か	
	496	B-4	SH-05	埋土1			太目のヨコハナデ目	太目のヨコハナデ目	暗赤褐色、暗赤褐色	暗褐色	磨石、磨石、赤粒、赤粒	12312	外:スス付着
	497	B-4	SH-02	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	茶褐色、暗赤褐色	暗褐色	磨石、磨石、赤粒	12666	
	498	B-4	SH-05	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	暗黄褐色、灰褐色	暗黄褐色、黒褐色	丸四石、磨石、赤粒、赤粒	4958	外:スス付着
	499						ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗褐色、暗黄褐色	暗褐色	丸四石、磨石、砂粒	一括	
第15区	500					ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	一括		
	501					縦目のタテハナデ目、ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色	暗黄褐色、暗褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	一括		
	502	B-4	SH-05	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	黒褐色、暗赤褐色	暗黄褐色、暗褐色	磨石、磨石、赤粒	2888埋土か	外:スス付着
	503	B-4	SH-05	埋土1			ヨコハナデ	ヨコハナデ	暗黄褐色、暗赤褐色	暗褐色、暗黄褐色	磨石、磨石、赤粒	12290	
	504	B-4	SH-05	埋土1			太目のタテハナデ目	太目のタテハナデ目	暗黄褐色、暗褐色	黄白色、暗黄褐色	磨石、磨石、赤粒	3044	
	505					タテハナデ	タテハナデ	暗褐色	暗赤褐色、暗褐色	磨石、磨石、赤粒、赤粒	29096		
	506	B-4	SH-05	埋土1			太目のタテハナデ目	縦目、ヨコハナデ	黄白色	黄白色	磨石、磨石、赤粒	2737	
	507	B-4	SH-05	埋土1			太目のタテハナデ目	縦目、ヨコハナデ	黄白色	暗黄褐色、黄白色	磨石、磨石、赤粒	12276	
	508	B-4	SH-04	埋土1			縦目のタテハナデ目	タテハナデ	暗黄褐色、黄白色	黒褐色、灰褐色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	12669	
	509	B-4	SH-05	埋土1			縦目のタテハナデ目	縦目のタテハナデ目	暗赤褐色	暗赤褐色	磨石、磨石、赤粒	3790埋土か	
第16区	510	B-4	SH-05	埋土1			丁重なヨコハナデ目	ヨコハナデ	暗赤褐色、暗赤褐色	黄褐色、黒褐色	磨石、磨石、赤粒	2211埋土か 9004埋土か	
	511	B-4	SH-05	埋土1			太目のタテハナデ目	タテハナデ	暗赤褐色、黄白色	黄白色、暗赤褐色	丸四石、磨石、赤粒	12281	
	512	B-14	SH-18	埋土1			縦目のタテハナデ目	縦目のタテハナデ目	茶褐色、暗赤褐色	黄白色、灰褐色	磨石、丸四石、砂粒	7056	
	513	B-4	SH-05	埋土1			タテハナデ	タテハナデ	暗黄褐色	暗黄褐色、黄白色	丸四石、磨石、砂粒、赤粒	12310	

第20表 土器観察表(9)

種別	種類別	出土区	層	遺物1	遺物2	遺物3	調査(内)	調査(内)	色類(内)	色類(内)	出土	出土	備考
第66図	514	B-6	遺物2				丁寧なタナナデ		暗褐色	黒褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	2734	
	515	B-6	遺物2				太目のタナハク目→タナヘラナデ	太目のタナハク目→タナヘラナデ	暗褐色、暗赤褐色	灰褐色、黒褐色	輝石、砂鉄、赤鉄、赤鉄	122912か	
	522	B-7	遺物2				ヨコヘラナデ、ヨコ調査	ヨコ調査、縦目のヨコハク目	暗褐色、黒褐色	暗赤褐色、暗褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	13082	外・スス付
第77図	523	B-7	遺物2				タナケズリー→タナヘラナデ	タナケズリー→タナヘラナデ	暗褐色、黒褐色	暗赤褐色、暗褐色	輝石、砂鉄	21712か	
	524	B-7	遺物2				タナケズリー→タナヘラナデ	ヨコケズリ、タナケズリ	茶褐色、黒褐色	茶褐色、黒褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	130082か	
	325	B-6	遺物2				ヨコ調査、縦目のタナハク目	縦目のヨコハク目、ヨコ調査	暗褐色、赤褐色、暗赤褐色	暗褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	28272か	
第140図	526	B-6	遺物2				ヨコ調査	ヨコ調査→ヨコヘラナデ	暗褐色	暗赤褐色	輝石、角閃石、赤鉄	29132か	
	527	B-6	遺物2				ヨコ調査	ヨコ調査→ヨコヘラナデ	暗褐色	暗赤褐色、暗褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	29142か	
	528	B-6	遺物2				タナヘラナデ、ヨコ調査	タナヘラナデ、ヨコ調査	黒褐色、暗赤褐色	黒褐色	角閃石、黒鉄、赤鉄	2621	
第141図	529	A-6	遺物1				太目のタナハク目→ナデ	縦目のタナハク目→タナヘラナデ	暗褐色、暗赤褐色	赤褐色、暗赤褐色	輝石、黒鉄、赤鉄	210	
	530	A-6	遺物2				タナ調査→丁寧なタナナデ	タナケズリー→ヨコヘラナデ	暗赤褐色、暗赤褐色	暗赤褐色、暗赤褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	30212か	
	531	A-6	遺物2				タナヘラナデ、ヨコ調査	タナヘラナデ	暗褐色、暗赤褐色	暗赤褐色、暗赤褐色	クロウン石、輝石、赤鉄	689 10625	内・スス付
第142図	532	A-6	遺物2				ヨコ調査	ヨコ調査	黄白色	黄白色	クロウン石、角閃石、赤鉄、赤鉄	2218か	
	533	A-6	遺物2				ヨコ調査→ヨコヘラナデ	ヨコ調査	黒褐色、暗赤褐色	黒褐色、暗赤褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	2714	
	534	A-6	遺物2				タナハク目→タナヘラナデ	ヨコヘラナデ、ヨコ調査	暗褐色	暗赤褐色、暗褐色	輝石、黒鉄、赤鉄	12262	
第143図	535	A-6	遺物2				タナヘラナデ	タナ調査→タナヘラナデ	茶褐色、黒褐色	茶褐色、黒褐色	角閃石、赤鉄	2132	
	536	A-6	遺物2				縦目のタナハク目、ヨコ調査	タナヘラナデ、ヨコ調査	暗褐色、茶褐色	暗褐色	角閃石、黒鉄、赤鉄	46502か	
	537	A-6	遺物2				太目のタナハク目→ナデ	ヨコヘラナデ	暗褐色、暗赤褐色	暗褐色、暗赤褐色、黒褐色	角閃石、黒鉄、赤鉄	215 21262か	
第144図	538	A-6	遺物2				タナヘラナデ、ヨコ調査	タナヘラナデ、ヨコ調査	暗赤褐色、暗赤褐色	暗褐色、暗赤褐色	角閃石、砂鉄	716	外・スス付
	539	A-6	遺物2				ヨコヘラナデ、縦目調査	ヨコ調査	暗赤褐色、暗赤褐色	暗褐色	角閃石、輝石、赤鉄	7716	
	541	A-4	遺物2				縦目のタナハク目→タナヘラナデ、ヨコ調査	タナヘラナデ、ヨコ調査	暗赤褐色、黒褐色	茶褐色、暗赤褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	22140	外・スス付
第177図	542	A-4	遺物1				丁寧なタナナデ、ヨコヘラナデ	ヨコ調査	暗赤褐色、黒褐色	茶褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	9626	
	543	A-4	遺物2				縦目のタナハク目→ナデ	タナヘラナデ	黒褐色	黒褐色、暗赤褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	4506	内・スス付
	544	A-4	遺物2				縦目のタナハク目→丁寧なタナナデ	縦目のタナハク目→丁寧なタナナデ	暗褐色、黒褐色	暗褐色、暗赤褐色	角閃石、黒鉄、赤鉄	40792か	
第178図	545	A-4	遺物2				ヨコ調査、縦目のタナハク目	縦目のヨコハク目→ヨコ調査	暗赤褐色、暗赤褐色	茶褐色、茶褐色	角閃石、輝石、赤鉄	22141	
	546	A-4	遺物2				縦目のタナハク目→丁寧なタナナデ	ヨコ調査→丁寧なタナナデ	暗赤褐色、黒褐色	茶褐色、暗赤褐色、暗褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	29642か	
	547	B-5	遺物2	埋納ピット			太目のタナハク目→ヨコヘラナデ	タナケズリー→タナヘラナデ	暗褐色、暗赤褐色	暗赤褐色、暗褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	22819	
第180図	548		遺物2				タナケズリー→タナヘラナデ	タナヘラナデ	暗褐色、暗赤褐色	暗赤褐色、暗赤褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	一層	
	549		遺物2				ヨコ調査	ヨコ調査→ヨコヘラナデ	茶褐色	茶褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	一層	
	550	A-4	遺物2				ヨコ調査	ヨコ調査、ヨコヘラナデ→ヨコヘラナデ	茶褐色	茶褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	40842か	
第181図	551		遺物2				ヨコ調査→ヨコヘラナデ	ヨコ調査、ヨコヘラナデ	茶褐色、暗赤褐色	茶褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	一層	
	552	A-4	遺物2				縦目のタナハク目	縦目のヨコハク目、縦目調査	暗赤褐色、暗赤褐色	暗褐色、暗赤褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	96002か 29772か	外・スス付
	553	A-4	遺物2				タナケズリー→縦目のタナハク目	ヨコ調査→ヨコヘラナデ	茶褐色、暗赤褐色	黄白色、暗赤褐色	輝石、砂鉄、赤鉄、赤鉄	22142	
第182図	554	A-4	遺物2				タナケズリー→タナヘラナデ	タナヘラナデ	暗褐色、黒褐色	黄白色、暗赤褐色	角閃石、黒鉄、赤鉄	75522か	
	555	A-4	遺物2				縦目のタナハク目、ヨコ調査	ヨコヘラナデ、ヨコハク目→ナデ	暗赤褐色、黒褐色	茶褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	7536	
	556	A-4	遺物2				ヨコ調査、縦目のタナハク目	ヨコ調査	暗赤褐色、暗褐色	暗赤褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	3172	
第183図	557	A-4	遺物2				ヨコ調査	ヨコ調査	暗褐色、暗赤褐色	暗赤褐色、暗赤褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	9613	
	558	A-4	遺物2				タナケズリー→タナヘラナデ	ヨコヘラナデ	暗褐色、暗赤褐色	暗褐色、暗赤褐色	輝石、赤鉄、赤鉄	5411	
	561	A-6	遺物2				タナケズリー、太目のタナハク目	ヨコ調査→ヨコヘラナデ、ヨコ調査	黒褐色、暗赤褐色	暗赤褐色、暗赤褐色	角閃石、輝石	12252か	外・スス付
第184図	562	A-6	遺物2				太目のタナハク目→タナヘラナデ	タナヘラナデ→ナデ、太目のヨコハク目	暗赤褐色、黒褐色	茶褐色、暗赤褐色	輝石、赤鉄	一層	外・スス付
	563	A-6	遺物2				タナヘラナデ、ヨコ調査	ヨコヘラナデ→タナヘラナデ	茶褐色、黒褐色	茶褐色、暗赤褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	9819 66742か	
	564	A-6	遺物2				ヨコ調査→タナヘラナデ	縦目調査、ヨコ調査	茶褐色、暗赤褐色	茶褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	6682	
第185図	565	A-4	遺物2				ヨコ調査	ヨコヘラナデ	暗赤褐色、暗赤褐色	灰褐色、暗赤褐色	クロウン石、角閃石、赤鉄	3678	
	566		遺物2				ヨコ調査、縦目調査	ヨコ調査→ナデ	暗赤褐色、暗褐色	暗褐色、暗赤褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	一層	
第186図	570	A-7	遺物2				タナケズリー、縦目のタナハク目→タナヘラナデ	タナナデ、ヨコ調査	暗赤褐色、黒褐色	黒褐色、暗赤褐色	輝石、砂鉄、赤鉄	802か 5413 28182か	

第21表 土器観察表 (10)

母体名	規模No	出土区	層	遺物1	遺物2	遺物3	調査(内)	調査(内)	色図(内)	色図(内)	出土	取上げ	備考
第17区	571	B-6	SH-12	礎土1			細目のタテハケ目→丁寧なタテナデ, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	緑茶褐色, 黒褐色	茶褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	5413	
	572	B-7	SH-12	礎土2			タテナデ→ヨコハケ目, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	緑茶褐色, 黒褐色	茶褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	12752	外: スス付着
	573	B-7	SH-12	礎土2			タテハラナデ, 細目のタテハケ目→ヨコ調査	ヨコ調査→タテハラナデ, ヨコ調査	緑茶褐色, 黒褐色	緑茶褐色, 黒褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤磁	5286	外: スス付着
	574	B-7	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目→タテハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ, 細目のヨコハケ目→ヨコ調査	緑茶褐色, 緑褐色	緑褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄	460528か	外: スス付着
	575	B-7	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目→タテハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ, 細目のヨコハケ目	緑茶褐色, 黒褐色	茶褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤磁	5297	外: スス付着
	576	B-6	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目→タテハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ, 細目のヨコハケ目	緑茶褐色, 黒褐色	緑褐色, 緑黄褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	5413	外: スス付着
	577	B-6	SH-12	礎土1			細目のタテハケ目→ヨコハラナデ, ヨコ調査	ヨコ調査→ヨコハラナデ, ヨコ調査	緑茶褐色, 緑黄褐色	茶褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	79 5413	緑刺土層
	578	B-7	SH-12	礎土2			タテハラナデ, ヨコ調査	細目のヨコハケ目, ヨコ調査	緑褐色, 茶褐色	緑茶褐色, 緑黄褐色	硝子, 角閃石, 赤鉄, 赤磁	527428か	外: スス付着
	579	B-7	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目→タテハラナデ, ヨコ調査	太目のタテハケ目→ヨコ調査, 細目のヨコハケ目	緑茶褐色, 黒褐色	緑褐色	角閃石, 輝石	12746	外: スス付着
	580	B-7	SH-12	礎土2			タテハラナデ, ヨコ調査	ヨコハラナデ→ヨコ調査, ヨコ調査	緑茶褐色, 黒褐色	緑褐色, 黒茶褐色	クロウモン, 輝石, 赤鉄	204528か	外: スス付着
第18区	581	B-6	SH-12	礎土1			細目のタテハケ目→タテハラナデ, ヨコ調査	細目のタテハケ目→タテハラナデ, 細目のヨコハケ目	緑褐色, 黒褐色	緑褐色, 緑赤褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	5413 382008か	外: スス付着
	582	B-6	SH-12	礎土2			タテハラナデ	タテハラナデ	茶褐色, 緑赤褐色	黒褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	5894 710828か	内: スス付着
	583	B-7	SH-12	礎土2			ヨコ調査, 太目のタテハケ目	太目のヨコハケ目→ナデ	緑黄褐色, 黒褐色	黒褐色, 緑黄褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	8128か 468282か	
	584	B-7	SH-12	礎土2			タテハラナデ→タテハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ→ヨコハラナデ	緑黄褐色, 灰褐色	緑黄褐色, 赤褐色	硝子, 砂鉄	379328か	
	585	B-7	SH-12	礎土2			ヨコ調査, 細目のタテハケ目→ヨコハラナデ	タテハラナデ	緑黄褐色	緑黄褐色, 緑赤褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	12751	
	586	B-7	SH-12	礎土2			ヨコ調査→タテハラナデ	タテハラナデ	緑黄褐色, 緑赤褐色	緑黄褐色, 黒褐色	角閃石, 砂鉄, 赤鉄	4692	
	587	B-7	SH-12	礎土2			細目正底, ヨコ調査	細目正底, ヨコ調査	緑黄褐色, 緑黄褐色	緑黄褐色, 緑赤褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	4699	
	588						ヨコハラナデ, タテハラナデ	ヨコ調査	黄褐色, 緑黄褐色	緑赤褐色, 緑黄褐色	角閃石, 輝石	一括	
	589	B-6	SH-12	礎土1			細目のタテハケ目→タテハラナデ, ヨコハラ目→ヨコ調査	ヨコ調査→タテハラナデ	黒褐色, 緑茶褐色	黒褐色, 緑茶褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	一括	
	590	B-7	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目, タテハラナデ	細目のヨコハケ目, タテハラナデ	緑黄褐色, 灰褐色	黒褐色, 灰褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	3914	
第19区	591	B-6	SH-12	礎土1			タテハラナデ, ヨコハラナデ	タテハラナデ, ヨコハラナデ	緑褐色	黄白色, 緑褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤磁	71 541328か 754828か	
	592	B-7	SH-12	礎土2			タテハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ→ナデ	緑褐色	緑褐色, 黄褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	5291	
	593	B-7	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目→丁寧なタテナデ	タテハラナデ→タテハラナデ	茶褐色, 黒褐色	茶褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	431828か 4653	
	594	B-7	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目→丁寧なタテナデ	タテハラナデ→タテハラナデ	茶褐色, 黒褐色	茶褐色	硝子, 砂鉄, 赤鉄	472828か 228328か	
	595	B-7	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目	ヨコ調査, 細目正底	緑黄褐色, 灰褐色	緑黄褐色, 緑褐色	硝子, 輝石, 砂鉄, 赤鉄	12256	
	596	B-6	SH-12	礎土1			太目のタテハケ目→タテハラナデ	タテハラナデ→タテハラナデ	茶褐色, 緑赤褐色	黄白色, 灰褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤磁	10928か 541328か 12770	
	597	B-7	SH-12	礎土2			細目のタテハケ目, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	緑黄褐色, 緑黄褐色	緑黄褐色, 黄白色	硝子, 炭素, 輝石, 赤鉄	431 4656	
	598	B-7	SH-12	礎土2			タテハラナデ→タテハラナデ	タテハラナデ	緑黄褐色, 緑黄褐色	黒褐色, 灰褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	一括	
	599	B-7	SH-12	礎土2			タテハラナデ, 細目のタテハケ目	タテハラナデ, 細目のヨコハケ目	赤褐色, 緑黄褐色	緑黄褐色, 緑褐色	硝子, クロウモン, 赤鉄, 赤磁	305528か	
	600	B-7	SH-12	礎土2			細目正底, タテハラナデ	ヨコハラナデ	茶褐色, 緑黄褐色	緑茶褐色, 黒褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	12269	
第20区	601	B-7	SH-12	礎土2			ヨコ調査	細目正底, タテハラナデ	緑褐色, 緑黄褐色	緑褐色, 緑黄褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	12742	
	602	B-7	SH-12	礎土2			タテハラナデ, タテハラナデ	太目のヨコハケ目, ヨコ調査	緑黄褐色, 緑黄褐色	黄褐色, 黄白色	硝子, 炭素, 角閃石, 砂鉄	390428か	
	603	B-7	SH-12	礎土1			タテハラナデ→ヨコハラナデ, タテハラナデ	タテハラナデ, ヨコ調査	緑褐色, 緑褐色	黄褐色, 緑褐色	硝子, 砂鉄	7737	
	604	B-8	SH-13	礎土1			細目のタテハケ目, ヨコ調査	ヨコ調査→ナデ	緑赤褐色, 黒褐色	緑黄褐色, 黒褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	一括	外: スス付着
	605	B-8	SH-13	礎土2			細目のタテハケ目, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	緑黄褐色, 黒褐色	緑茶褐色, 緑褐色	硝子, 輝石, 砂鉄, 赤鉄	17220 289528か	外: スス付着
	606	C-8	SH-13	礎土1			細目のタテハケ目, ヨコ調査	細目のタテハケ目, ヨコ調査	茶褐色, 緑茶褐色	緑茶褐色, 緑赤褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	4718 5678 11428	外: スス付着
	607	C-8	SH-13	礎土2			太目のタテハケ目, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	緑茶褐色, 緑褐色	茶褐色, 緑褐色	硝子, 炭素, 輝石, 赤鉄	3891	外: スス付着
	608	C-8	SH-13	礎土1			細目のヨコハケ目, 細目のタテハケ目	細目のヨコハケ目, ヨコ調査	緑黄褐色, 黒褐色	茶褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	17241	外: スス付着
	609	C-8	SH-13	礎土1			細目のヨコハケ目, 細目のタテハケ目	細目のヨコハケ目, ヨコ調査	緑黄褐色, 黒褐色	茶褐色	硝子, 輝石, 赤鉄	17241	外: スス付着
	610	C-8	SH-13	礎土1								172428か	

第22表 土器観察表 (11)

群別	坑番号	出土区	層	遺物1	遺物2	遺物3	観察(内)	観察(内)	色澤(内)	胎土	取上げ	備考
第53区	610	D-6	SH-13	埴土			ヨコ割製一ナデ	ヨコヘラナデ, タテヘラナデ	緑黄褐色, 緑赤褐色	緑赤褐色, 緑黄褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	2880
	611						ヨコ割製, タテヘラナデ	ヨコ割製一ナデ	茶褐色	茶褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	一層
	612	D-6	SH-13	埴土			タケヅリー一ナデ	タケヅリー一ナデ	暗黄褐色	暗褐色, 黒褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	17194
	613	D-6	SH-13	埴土			丁寧なナデ, 丁寧なヨコナデ	太目のタテハケ目, 太目のヨコハケ目	緑黄褐色, 緑赤褐色	灰褐色, 黄白色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	11130
	614						細目のタテハケ目, ヨコヘラナデ	タテヘラナデ, ヨコ割製	暗黄褐色, 暗赤褐色	暗黄褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄	一層
	615	D-6	SH-13	埴土			太目のタテハケ目	太目のタテハケ目一ナデ, タテヘラナデ, ヨコヘラナデ	暗赤褐色, 黒褐色	暗黄褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤鉄	17685
		D-9	溝4	埴土			太目のタテハケ目		暗赤褐色, 黒褐色	暗黄褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤鉄	11431
	616						タテヘラナデ	太目のヨコハケ目一太目のタテハケ目	暗黄褐色, 暗褐色	暗黄褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	一層
	617	D-6	SH-13	埴土			ヨコ割製一ナデ	ヨコ割製一ナデ	暗黄褐色, 暗赤褐色	暗黄褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	17853
	618						タテヘラナデ	タテヘラナデ	暗赤褐色, 黒褐色	茶褐色	輝石, 赤鉄	一層
619	D-6	SH-13	埴土			ヨコ割製, タテヘラナデ	ヨコヘラナデ	緑赤褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗黄褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	2886	
第54区	621						ヨコヘラナデ	細目のヨコハケ目	暗赤褐色	茶褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	一層
	622	D-9	溝				タケヅリー一ナデ	タテヘラナデ	暗黄褐色, 暗褐色	暗黄褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	13975ほか
	623	D-6	SH-15A	埴土			細目のタテハケ目一ナデ	細目のタテハケ目一ナデ	暗赤褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗黄褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	11565
	624	D-6	SH-15A	埴土			ヨコ割製, タテヘラナデ	ヨコ割製一ナデ	暗黄褐色, 暗赤褐色	暗黄褐色, 暗赤褐色, 黒褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	11667
第57区	625	D-6	SH-15	埴土			ヨコ割製, タテヘラナデ	ヨコ割製一ナデ	暗褐色, 暗黄褐色	暗褐色, 灰白色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	5022 11572
	626	D-6	SH-15	埴土			ヨコ割製, 細目のタテハケ目	ヨコ割製, ナデ	暗赤褐色, 黒褐色	暗赤褐色, 黒褐色	クロウンモ, 砂粒, 赤鉄	15689
	627	D-6	SH-15	埴土			ヨコ割製一ナデ	細目のヨコハケ目一丁寧なナデ	暗赤褐色, 黒褐色	黒褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	5990 11590
	628	D-6	SH-15	埴土			細目のタテハケ目	ナデ割製	赤褐色, 暗黄褐色	赤褐色, 暗黄褐色	輝石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	9766
	629	D-6	SH-15	埴土			ヨコ割製, タテヘラナデ	ヨコ割製	暗赤褐色, 暗赤褐色	暗赤褐色, 黒褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	5971
	630	D-6	SH-15	埴土			太目のタテハケ目, ヨコ割製	タテ割製一ナデ	暗赤褐色, 茶褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	11517 5548ほか
	631	D-6	SH-15A	埴土			タテ割製一ナデ	タテヘラナデ, ヨコヘラナデ, ヨコ割製	暗赤褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗褐色	クロウンモ, 輝石, 赤鉄	5261
	632						タケヅリー一ナデ	細目のヨコハケ目	暗赤褐色, 黒褐色	暗黄褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤鉄	一層
	633	D-6	SH-15	埴土			ヨコ割製一ナデ	ナデ割製一ナデ	暗赤褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	5941ほか
	634	D-6	SH-15	埴土			タテハケ目一ナデ	ヨコ割製一ナデ	暗赤褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	11722
第59区	636	A-5	SH-16	埴土			細目のタテハケ目, 細目のヨコハケ目	ヨコヘラナデ, 太目のヨコハケ目	黄褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗黄褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤鉄	20621 22480
	637	A-5	SH-16	埴土			タテヘラナデ, ヨコ割製	細目のヨコハケ目, ヨコ割製	暗黄褐色, 暗赤褐色	暗赤褐色, 黒褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤鉄	22025
	638						太目のタテハケ目一ヨコ割製	ナデ割製一ナデ	暗赤褐色, 黒褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	クロウンモ, 角閃石, 輝石, 赤鉄	28046
	639	A-5	SH-16	埴土			タケヅリー一ナデ	ナデ割製一ナデ	暗赤褐色, 黒褐色	暗黄褐色, 暗赤褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	20638ほか
	640	A-5	SH-16	埴土			タテ割製一ナデ	ヨコ割製, ヨコヘラナデ	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 赤鉄	21494
	641	A-5	SH-16	埴土			ヨコ割製一ナデ	ヨコヘラナデ, タテヘラナデ	茶褐色, 暗赤褐色	黒褐色	輝石, 小礫, 赤鉄	20405
	642	A-5	SH-16	埴土			太目のタテハケ目一ヨコ割製	太目のタテハケ目一ヨコ割製	赤褐色, 茶褐色	暗赤褐色, 黒褐色	輝石, 角閃石, 赤鉄	20639
	643	A-5	SH-16	埴土			ナデ, 胎土直産	ナデ, 胎土直産	暗赤褐色, 暗黄褐色	暗赤褐色, 黒褐色	輝石, 角閃石, 赤鉄	22169
	644	A-5	SH-16	埴土			ヨコ割製一ナデ	ヨコヘラナデ	黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄	20828
	645	A-5	SH-16	埴土			タテヘラナデ, 胎土直産	タテヘラナデ	暗褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗赤褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	20640
第101区	646	A-5	SH-16	埴土			タケヅリー, タテヘラナデ	細目のタテハケ目, ヨコヘラナデ	茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 黒褐色	角閃石, 輝石, 赤鉄, 赤鉄	22795
	647	A-5	SH-16	埴土			タテヘラナデ, 胎土直産	太目のタテハケ目, 太目のヨコハケ目	暗黄褐色, 暗赤褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	輝石, 角閃石, 輝石	21164ほか
	648	A-5	SH-16	埴土			ヨコヘラナデ, タテヘラナデ	太目のヨコヘラナデ, 太目のタテハケ目	暗褐色, 暗褐色	暗黄褐色, 赤褐色	輝石, 角閃石, 輝石	22077ほか 22494ほか
	650	A-13	SH-17	埴土			細目のタテハケ目一ナデ	ヨコ割製, タテヘラナデ	暗赤褐色, 暗黄褐色	暗赤褐色, 暗黄褐色	輝石, 角閃石, 輝石	11994
	651	A-12	SH-17	埴土			ヨコ割製一ナデ	ヨコ割製, ヨコヘラナデ	黄白色, 暗黄褐色	暗褐色, 暗黄褐色	輝石, 角閃石, 赤鉄, 赤鉄	11279
	652	A-13	SH-17	埴土			ヨコ割製, タテヘラナデ	ヨコ割製	茶褐色, 暗黄褐色	茶褐色, 暗黄褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	11300
	653	A-13	SH-17	埴土			細目のタテハケ目一ナデ	細目のタテハケ目一ナデ, ヨコ割製	茶褐色, 暗黄褐色	茶褐色, 暗黄褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	12593
	654	B-14	SH-18	埴土			細目のタテハケ目一ナデ	細目のタテハケ目, ヨコ割製一ナデ	暗黄褐色, 暗赤褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	7195
	655	B-14	SH-18	埴土			細目のタテハケ目一ナデ	タケヅリー一ナデ, ヨコ割製	暗黄褐色, 茶褐色	茶褐色, 暗赤褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	7213ほか 7153ほか
	656	B-14	SH-18	埴土			太目のタテハケ目, 太目のヨコハケ目	タテヘラナデ, 細目のヨコハケ目	暗黄褐色, 黒褐色	暗褐色, 暗赤褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	7162

第23表 土器観察表 (12)

群	種別No	種別	出土状況	層	遺物1	遺物2	観察(内)	観察(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	取上No	備考
第103区	656	B-14	Ⅱ-10	埋土1								7205	
	657	B-14	Ⅱ-10	埋土1	太目のタテハケ目→タテハラナデ, Ⅲコ調製	タテハラナデ, タテハラナデ, Ⅲコ調製	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	4672枚か 7185枚か	外: スス付着
	658	B-14	Ⅱ-10	埋土2	タテハラナデ→タテハラナデ	Ⅲコハラナデ, タテハラナデ	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 黒褐色	暗茶褐色, 黒褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	7185枚か	内: スス付着
	659	B-14	Ⅱ-10	埋土2	Ⅲコ調製, 細目のタテハケ目→Ⅲコ調製	Ⅲコ調製, タテハラナデ	茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 黒褐色	クロウソコ, 輝石, 磁粒, 赤鉄	7962	
	660	B-14	Ⅱ-10	埋土2	Ⅲコ調製→タテハラナデ	Ⅲコ調製→タテハラナデ	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 小礫, 赤鉄	10180枚か	内: スス付着
	661	B-14	Ⅱ-10	埋土1	Ⅲコ調製→Ⅲコハラナデ	Ⅲコ調製→タテハラナデ	茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	7185	
	662					Ⅲコ調製→ナデ	Ⅲコ調製→ナデ	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	一握	
	663	B-14	Ⅱ-10	埋土1	Ⅲコ調製, タテハラナデ	Ⅲコ調製	茶褐色, 暗茶褐色	茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 黒褐色	角閃石, 雲母, 砂粒, 赤鉄	7225	内: スス付着
	664	B-14	Ⅱ-10	埋土1	太目のタテハケ目→タテハラナデ	Ⅲコハラナデ, タテハラナデ, Ⅲコ調製	黄白色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	60113枚か	外: スス付着
	665	B-14	Ⅱ-10	埋土2	太目のタテハケ目, Ⅲコ調製	タテハラナデ, 細目のタテハラケ目→ナデ	暗茶褐色, 黄白色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	7205	外: スス付着
第104区	666	B-14	Ⅱ-10	埋土1	太目のⅢコハラケ目→タテハラナデ, Ⅲコ調製	タテハラナデ, Ⅲコナデ, Ⅲコ調製	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	60117枚か	
	667	B-14	Ⅱ-10	埋土1	細目のタテハケ目→タテハラナデ, Ⅲコ調製	太目のタテハケ目→Ⅲコナデ, Ⅲコ調製	暗茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	7147	外: スス付着
	668	B-14	Ⅱ-10	埋土1	細目のタテハケ目→タテハラナデ, Ⅲコ調製	Ⅲコナデ, Ⅲコ調製	茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	7178	外: スス付着
	669	B-14	Ⅱ-10	埋土1	細目のタテハケ目→Ⅲコナデ, Ⅲコ調製	太目のタテハケ目→Ⅲコナデ, Ⅲコ調製	暗茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	7164	外: スス付着
	670	B-14	Ⅱ-10	埋土2	細目のタテハケ目→Ⅲコナデ, Ⅲコ調製	太目のタテハケ目→Ⅲコナデ, Ⅲコ調製	暗茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	7850枚か	
	671	B-14	Ⅱ-10	埋土2	細目のタテハケ目→ナデ, 黒鉄片	ナデ, 黒鉄片	黄褐色, 暗褐色	黄白色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	19165枚か	
	672					太目のタテハケ目, Ⅲコ調製	タテハラナデ, Ⅲコハラナデ	暗褐色, 黄褐色	暗褐色	暗褐色	角閃石, 輝石, 小礫, 赤鉄	一握	
第105区	673	B-14	Ⅱ-10	埋土1	細目のタテハケ目→ナデ	タテハラナデ→Ⅲコ調製	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	7216	
	674	B-14	Ⅱ-10	埋土1	細目のタテハケ目, Ⅲコ調製	タテハラナデ→Ⅲコ調製	暗茶褐色, 暗褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	輝石, 小礫, 赤鉄	7220	
	675	B-14	Ⅱ-10	埋土1	Ⅲコハラナデ→丁草なタテナデ, Ⅲコ調製	Ⅲコハラナデ, タテハラナデ	茶褐色, 黄褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	7208	外: スス付着
	676	B-14	Ⅱ-10	埋土1	細目のタテハケ目→タテハラナデ, Ⅲコハラナデ	タテナデ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	7205	
	677	B-14	Ⅱ-10	埋土1	細目のタテハケ目→丁草なタテナデ	タテハラナデ, Ⅲコハラナデ	茶褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	7176枚か 7852枚か	
	678	B-14	Ⅱ-10	埋土2	細目のタテハケ目→ナデ	太目のⅢコハラケ目→ナデ, Ⅲコ調製	暗茶褐色, 暗褐色	黄白色, 暗茶褐色	黄褐色, 暗茶褐色	黄褐色, 暗茶褐色	クロウソコ, 角閃石, 輝石, 磁粒	10183枚か	
	679	B-8 B-14	Ⅱ-10 Ⅱ-10	埋土1 埋土2	細目のタテハケ目→タテハラナデ, Ⅲコハラナデ	タテハラナデ, Ⅲコ調製	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 角閃石, 砂粒, 赤鉄	3422 7185枚か	
	680	B-14	Ⅱ-10	埋土2	タテハラナデ→Ⅲコナデ	タテハラナデ, 黒鉄片	暗褐色, 暗茶褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	7207枚か 19178	
	681	B-14	Ⅱ-10	埋土1	タテナデ, 丁草なタテナデ, Ⅲコ調製	タテナデ, 黒鉄片	黄白色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	輝石, 雲母, 磁粒, 赤鉄	4020枚か 71942枚か	
	682	B-14	Ⅱ-10	埋土1	太目のタテハケ目, Ⅲコ調製	太目のタテハケ目, Ⅲコハラナデ	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	輝石, 小礫, 赤鉄	7165	
第106区	683	A-4 B-14	Ⅱ-10 Ⅱ-10	埋土2 埋土2	細目のタテハケ目→Ⅲコハラナデ, Ⅲコ調製	タテハラナデ→タテハラナデ	茶褐色, 黒褐色	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	1190 7192 10177	
	684	B-14	Ⅱ-10	埋土1	タテハラナデ→丁草なタテナデ	タテナデ	暗茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	7211	黒鉄片土
	685	C-13 C-13	Ⅱ-19 Ⅱ-19	埋土1 埋土2	太目のタテハケ目→ナデ, Ⅲコ調製	細目のⅢコハラケ目→ナデ, Ⅲコ調製	暗茶褐色, 黒褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	2400枚か 3076 5815枚か	外: スス付着
	686	C-13	Ⅱ-19	埋土2	タテハラナデ, Ⅲコ調製	Ⅲコハラナデ, Ⅲコ調製	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	5854	外: スス付着
	687	C-13	Ⅱ-19	埋土2	タテハラナデ, Ⅲコ調製	Ⅲコ調製	暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	5831	
	688	C-13	Ⅱ-19	埋土1	太目のタテハケ目, Ⅲコ調製	タテハラナデ, Ⅲコ調製	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗茶褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	60812枚か	外: スス付着
	689	C-13	Ⅱ-19	埋土2	細目のタテハケ目, タテハラナデ, Ⅲコ調製	タテハラナデ, Ⅲコ調製	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 砂粒, 赤鉄	10665	外: スス付着
	690	C-13	Ⅱ-19	埋土2	タテハラナデ→丁草なタテナデ, Ⅲコ調製	タテハラナデ, Ⅲコハラナデ	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	5812	内: スス付着
	691					タテハラナデ, Ⅲコ調製	タテハラナデ, Ⅲコ調製	暗茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	角閃石, 砂粒, 赤鉄	一握	外: スス付着
	692	C-13 C-13	Ⅱ-19 Ⅱ-19	埋土1 埋土2	タテハラナデ, Ⅲコ調製	タテハラナデ→タテハラナデ, Ⅲコ調製	暗茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	茶褐色, 暗褐色	角閃石, 輝石, 小礫, 赤鉄	10045	外: スス付着
第107区	693	C-13	Ⅱ-19	埋土1	タテハラナデ, Ⅲコハラナデ, Ⅲコ調製	タテハラナデ, Ⅲコハラナデ	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	暗褐色, 暗茶褐色	輝石, 砂粒, 赤鉄	8079枚か	
	694	C-13	Ⅱ-19	埋土2	Ⅲコ調製→タテハラナデ	Ⅲコ調製, Ⅲコハラナデ	茶褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	輝石, 磁粒, 赤鉄	4082	内: スス付着
	695	C-13	Ⅱ-19	埋土2	Ⅲコ調製→丁草なタテナデ, 細目のタテハケ目	丁草なタテナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	輝石, 磁粒, 赤鉄	5826	
	696	C-13	Ⅱ-19	埋土2	Ⅲコ調製, 黒鉄片	タテナデ	暗褐色, 暗茶褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	暗茶褐色, 暗褐色	輝石, 小礫, 赤鉄	10144	内: スス付着

第24表 土器観察表 (13)

群	種別	規格	出土区	層	直径(1)	直径(2)	口径(内)	口径(外)	色面(内)	色面(外)	胎土	取上No	備考
第100区	667	C-13	2H-19	埋土2			ヨコ割製	ヨコ割製	黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	10205号	
	668	C-13	2H-19	埋土2			ヨコ割製	ヨコ割製	黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	6064号	
	669	C-13	2H-19	埋土2			ヨコ割製, タテ割製	ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	5846	
	700	C-13	2H-19	埋土2			無紐直底, タテヘラナデ	タテヘラナデ	黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	7018	
	701	C-13	2H-19	埋土2			丁帯ナタナデ, ヨコ割製	縦目のタテハケ目, ヨコ割製	暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	7004号	
第109区	702	C-13	2H-19	埋土2			太目のタテハケ目→タテヘラナデ, ヨコヘラナデ	タテズリー→タテヘラナデ, ヨコヘラナデ	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	10046 10079号	
	703	C-13	2H-19	埋土2			縦目のタテハケ目→丁帯ナタナデ	ヨコヘラナデ, 無紐直底	黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8077号	
	704	C-13	2H-19	埋土2			タテヘラナデ, ヨコ割製	タテヘラナデ, ヨコ割製	黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色, 黒褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	2388 5780号	
	705	C-13	2H-19	埋土2			タテヘラナデ, ヨコ割製	縦目のヨコハケ目→タテヘラナデ, ヨコヘラナデ	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	6072号	
	706	C-13	2H-19	埋土2			縦目のタテハケ目→タテヘラナデ, ヨコ割製	タテヘラナデ, 縦目のヨコハケ目→ヨコヘラナデ	黄褐色, 黒褐色	黒褐色, 暗黄褐色	灰石, 黄褐色, 赤鉄	8084 7006	
	711	A-12	2H-20	埋土2			縦目のタテハケ目→タテヘラナデ	タテヘラナデ, ヨコハケ目	暗黄褐色, 黒褐色	暗黄褐色, 灰褐色	クローン毛, 灰石, 砂粒	11085	外: スス付
	712	A-11	2H-20	埋土2			太目のタテハケ目→タテヘラナデ, ヨコ割製	タテヘラナデ, ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8770号	外: スス付
713	A-11	2H-20	埋土2			縦目のタテハケ目, ナデ	縦目のタテハケ目→タテヘラナデ	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	クローン毛, 灰石, 砂粒, 赤鉄	7423		
第112区	714	A-12	2H-20	埋土2			タテヘラナデ	ヨコヘラナデ	暗褐色, 暗黄褐色	灰褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	8752号	
	715	A-11	2H-20	埋土2			タテズリー→ヨコ割製, ヨコヘラナデ	太目のヨコハケ目, ヨコヘラナデ	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒	7428号	
	716	A-12	2H-20	埋土2			ヨコ割製→タテヘラナデ	ヨコ割製, ヨコヘラナデ	暗赤褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗赤褐色	灰石, 砂粒	8973号	
	717	A-12	2H-20	埋土2			ヨコ割製	ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	11094	
	718	A-12	2H-20	埋土2			タテヘラナデ	ヨコヘラナデ	暗赤褐色, 黒褐色	黄褐色, 黒褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8983	
	719	A-11	2H-20	埋土2			ヨコ割製, タテヘラナデ	ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8758号	
	720	A-12	2H-20	埋土2			ヨコ割製, 無紐直底	ヨコ割製, ナデ	暗黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 黒褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8903	外: スス付
	721	A-12	2H-20	埋土2			縦目のタテハケ目→タテヘラナデ, ヨコ割製	ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗赤褐色, 黒褐色	クローン毛, 灰石, 砂粒, 赤鉄	8984	
	722	A-11	2H-20	埋土2			太目のタテハケ目	ヨコ割製, 縦目のタテハケ目	暗黄褐色, 暗褐色	暗赤褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	7433 11013	
	723	A-11	2H-20	埋土2			ヨコ割製, 太目のタテハケ目	ヨコ割製	暗黄褐色, 暗褐色	暗黄褐色, 暗赤褐色	黄褐色, 砂粒, 赤鉄	8609	
	724	A-12	2H-20	埋土2			ヨコ割製, 無紐直底	ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗赤褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 砂粒	8999号	外: スス付
	725	A-11	2H-20	埋土2			ヨコ割製	ヨコヘラナデ, ヨコ割製	暗黄褐色, 暗褐色	暗黄褐色, 暗赤褐色	クローン毛, 灰石, 赤鉄	12010	
第113区	726	A-11	2H-20	埋土2			タテヘラナデ, ヨコヘラナデ	ヨコヘラナデ, ヨコ割製	黄白色, 暗黄褐色	黄白色, 黒褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8731	
	727	A-11	2H-20	埋土2			縦目のヨコハケ目→タテヘラナデ, ヨコ割製		黄白色, 暗黄褐色	黄白色, 黒褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8731 11057号	
	728	A-11	2H-20	埋土2			縦目のタテハケ目→タテヘラナデ, ヨコ割製		黄白色, 暗黄褐色	黄白色, 黒褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8730号	
	729	A-11	2H-20	埋土2			縦目のタテハケ目→丁帯ナタナデ	タテヘラナデ, ヨコヘラナデ	黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8662号	
	730	A-11	2H-20	埋土2			タテハケ目→丁帯ナタナデ	ヨコヘラナデ, タテヘラナデ	暗赤褐色, 暗褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	7446	
	731	A-12	2H-20	埋土2			ヨコ割製, 無紐直底	無紐直底, ヨコ割製	黄褐色, 黒褐色	黄褐色, 黒褐色	黄褐色, 砂粒, 赤鉄	11372 8997号	
	732	A-12	2H-20	埋土2			無紐直底, ナデ	無紐直底, ナデ	黄褐色, 暗褐色	黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8997	
	733	A-12	2H-20	埋土2			ヨコ割製, 無紐直底	無紐直底, ヨコ割製	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 黒褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8994	
	734	A-11	2H-20	埋土2			無紐直底, タテヘラナデ	無紐直底, ナデ	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 暗褐色	クローン毛, 灰石	12786	
	735	A-11	2H-21	埋土2			タテヘラナデ, ヨコ割製	ヨコヘラナデ, ヨコ割製	黄褐色, 黒褐色	黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	14308号	外: スス付
736	A-11	2H-21	埋土2			縦目のタテハケ目→タテヘラナデ, ヨコ割製	タテヘラナデ, ヨコヘラナデ, ヨコ割製	黄褐色, 黒褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 黄褐色, 赤鉄	14067	外: スス付	
737	A-11	2H-21	埋土2			縦目のタテハケ目→ヨコ割製	タテヘラナデ, 縦目のヨコハケ目→ヨコ割製	暗赤褐色, 黒褐色	黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒	5603号	外: スス付	
第115区	738	A-11	2H-21	埋土2			縦長のタテハケ目→タテヘラナデ, ヨコ割製	ヨコヘラナデ	黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	8013 11008	
	739	A-11	2H-21	埋土2			ヨコ割製	ヨコ割製	暗赤褐色, 黒褐色	暗赤褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 砂粒, 赤鉄	5702	
	740	A-11	2H-21	埋土2			ヨコ割製, タテナデ	ヨコ割製→ヨコ割製	黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	10990	
	741	A-11	2H-21	埋土2			ヨコ割製, 縦長のタテハケ目	ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗赤褐色, 暗黄褐色	クローン毛, 灰石, 砂粒	7281	
	742	A-11	2H-21	埋土2			ヨコ割製, タテナデ	ヨコ割製, タテ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗赤褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	11011	
	743	A-11	2H-21	埋土2			無紐直底, ヨコ割製	ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	黄褐色, 暗赤褐色	黄褐色, 砂粒	9115	
	744	A-11	2H-21	埋土2			ヨコ割製, 無紐直底	ヨコ割製, 無紐直底	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	クローン毛, 灰石, 砂粒, 赤鉄	5711	
	745	A-11	2H-21	埋土2			タテヘラナデ, ヨコ割製	ヨコ割製→タテナデ	暗赤褐色, 黒褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒	8287	
	746	A-11	2H-21	埋土2			ヨコヘラナデ, ヨコ割製	ヨコ割製→タテナデ, ヨコ割製	暗黄褐色, 暗褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	灰石, 砂粒, 赤鉄	7402	
	747	A-11	2H-21	埋土2			タテハケ目→ヨコ割製, ヨコ割製	ヨコヘラナデ, ヨコ割製	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	クローン毛, 黄褐色, 赤鉄	8965号	
748	A-11	2H-21	埋土2			ヨコ割製, 縦長のタテハケ目→タテヘラナデ	ヨコ割製→タテヘラナデ	暗黄褐色, 暗黄褐色	暗黄褐色, 暗黄褐色	クローン毛, 黄褐色, 赤鉄	10998号		

第25表 土器観察表 (14)

探跡No.	発掘期	出土区	遺物1	遺物2	遺物3	調査(内)	調査(内)	色図(内)	色図(内)	出土	取上No	備考
第115区	749	A-11	SH-21	埴土2		細目のタテハク目→タテハラナデ	タテハラナデ, ヨコ調査	暗褐色, 黄白色	暗赤褐色, 黒褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	32002ほか 3721ほか	
	750	A-11	SH-21	埴土2		ヨコ調査→タテハラナデ	ヨコ調査	暗褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	角閃石, 輝鉄	10096	
第116区	751	A-11	SH-21	埴土2		細目のタテハク目→タテハラナデ, ヨコ調査	ヨコハラナデ, タテハラナデ	暗赤褐色, 暗赤褐色	暗赤褐色, 黒褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	14034ほか 3727ほか	
	752	C-12	SH-22	埴土3		タテハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	黄白色	黄白色	クローンモ, 輝石, 鐵石, 赤鉄	9527	
第118区	753	C-12	SH-22	埴土3		細目のタテハク目→タテハラナデ	タテハラナデ	茶褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	3240	
	754	C-12	SH-22	埴土3		用磁正成	用磁正成	茶褐色	茶褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	3214 3219	
第120区	755	C-12	SH-22	埴土1		ヨコ調査→タテハラナデ	ヨコハラナデ	赤褐色	暗赤褐色	角閃石, 砂鉄, 赤鉄	10017	外: スス付着
	756	A-10	SH-23	埴土1		ヨコ調査→ヨコハラナデ	ヨコ調査→タテハラナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	10043	
	757	A-10	SH-23	埴土1		太直のタテハク目	ヨコハラナデ	暗赤褐色, 黒褐色	暗赤褐色, 暗赤褐色	角閃石, 磁鉄, 砂鉄, 赤鉄	10649	
	758	A-10	SH-23	埴土1		太直のタテハク目	細目のヨコハク目→ヨコハラナデ	暗赤褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	10034	
	759	A-10	SH-23	埴土1		丁寧なタテナデ, ヨコ調査	タテ調査→ナデ	黒褐色, 暗褐色	ヨコ黄褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	10632	
	760	A-10	SH-23	埴土1		タテ調査, ヨコ調査	ヨコハラナデ	暗赤褐色, 黄白色	暗褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	10622ほか	
	761	A-10	SH-23	埴土1		丁寧なヨコナデ, ヨコ調査	用磁正成, ヨコハラナデ	暗赤褐色	黄白色, 灰褐色	角閃石, 磁鉄	一節	
	762	A-10	SH-24	埴土2		細目のタテハク目→ヨコハラナデ	細目のヨコハク目→タテハラナデ, ヨコハラナデ	茶褐色, 暗赤褐色	茶褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	11394	
	763	A-10	SH-24	埴土1		太直のタテハク目, ヨコ調査	太直のヨコハク目	暗赤褐色, 黄白色	灰褐色	角閃石, 輝石, 磁鉄, 赤鉄	14996	
	764	A-10	SH-24	埴土2		細目のタテハク目, 丁寧なタテナデ	細目のタテハク目, タテ調査	黒褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 磁鉄, 砂鉄, 赤鉄	3050	
第124区	765	E-20	SH-25	埴土2		タテハラナデ, ヨコ調査	丁寧なタテナデ, ヨコ調査	黒褐色, 黒褐色	黒褐色	角閃石, 輝石, 砂鉄, 赤鉄	13076	
	766	E-20	SH-25	埴土2		細目のタテハク目→丁寧なタテナデ	細目のタテハク目→タテハラナデ	茶褐色, 黒褐色	黒褐色, 暗赤褐色	輝石, 磁鉄, 輝鉄, 赤鉄	13426	内: スス付着
	767	E-20	SH-25	埴土1		細目のタテハク目→タテハラナデ	タテ調査, タテハラナデ	暗赤褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗赤褐色	角閃石, 砂鉄, 赤鉄	12962	外: スス付着
第129区	768	A-9	埴土2		ヨコハラナデ, 用磁正成	ヨコハラナデ, ヨコ調査	黄褐色, 暗赤褐色	暗赤褐色, 茶褐色	暗赤褐色, 暗赤褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	2649	
	769	A-9	埴土		タテナズリー→タテハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	黄褐色, 暗赤褐色	暗赤褐色, 暗赤褐色	輝石, 角閃石, 砂鉄, 赤鉄	14696		
	770	C-4	ビッド	埴土		細目のタテハク目, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	赤褐色, 黄褐色	赤褐色, 黄褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	11241	
	771	B-12	埴土		ヨコハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコ調査	茶褐色, 暗褐色	茶褐色	輝石, 角閃石, 輝鉄, 赤鉄	13915		
	772	B-12	埴土		細目のタテハク目, ヨコハラナデ	細目のタテハク目, ヨコ調査	茶褐色, 暗褐色	暗赤褐色, 茶褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	12252ほか		
第129区	773	C-17	埴土		太直のタテハク目→ナデ, ヨコ調査	太直のヨコハク目, タテハラナデ→用磁正成	暗赤褐色, 暗褐色	暗赤褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 砂鉄, 赤鉄	13407 11820ほか		
	774	B-13	埴土		ヨコ調査, タテハラナデ	ヨコハラナデ, タテハラナデ	暗赤褐色, 暗褐色	暗赤褐色, 黒褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	11824ほか	赤色顔料付	
	775	B-13	埴土		太直のタテハク目, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコハラナデ	赤褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 黒褐色	輝石, 角閃石, 輝鉄, 赤鉄	12498ほか	赤色顔料付	
第130区	776	C-14	埴土		タテハラナデ, ヨコ調査	タテハラナデ, ヨコハラナデ	茶褐色, 黒褐色	茶褐色, 暗赤褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	13352ほか		
	777	C-14	埴土		ヨコ調査, 細目のタテハク目	ヨコ調査, タテナデ	暗赤褐色, 暗赤褐色	茶褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	13241ほか		
	778	C-9	埴土		ヨコ調査	ヨコ調査	暗褐色, 黄白色	黄白色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	11256 13474ほか		
	779	C-9	埴土		ヨコ調査	ヨコナデ, ヨコ調査	暗褐色, 暗赤褐色	暗赤褐色, 赤褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	11170ほか 12468ほか		
	780	C-4	埴土		太直のタテハク目, タテハラナデ	ヨコ調査	黄褐色, 暗褐色	黄褐色, 暗赤褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	13760		
	781	C-9	埴土		ヨコ調査	ヨコ調査	暗赤褐色, 暗褐色	暗赤褐色, 暗赤褐色	輝石, 磁鉄, 砂鉄, 赤鉄	13001	内: スス付着	
	782	B-4	埴土		ヨコ調査, 細目のタテハク目	ヨコ調査	暗赤褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 角閃石, 輝鉄, クローンモ, 輝石, 砂鉄	13453		
	783	C-4	埴土		ヨコ調査	ヨコ調査	暗赤褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 角閃石, 輝鉄, 赤鉄	13480		
	784	C-8	埴土		太直のタテハク目, ヨコ調査	ヨコ調査, タテ調査	茶褐色, 暗赤褐色	暗赤褐色, 暗赤褐色	輝石, 角閃石, 砂鉄, 赤鉄	11121ほか 12002ほか		
	785	B-4	埴土		タテハラナデ, 丁寧なタテナデ	タテハラナデ, ヨコハラナデ	茶褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	14922 8669 11255		
第131区	786	C-10	埴土		タテナズリー→タテハラナデ	タテハラナデ, 細目のタテハク目	暗赤褐色, 暗褐色	暗褐色, 暗褐色	輝石, 角閃石, 輝鉄, 赤鉄	11254 12761ほか		
	787	C-4	埴土		細目のタテハク目→タテハラナデ	ヨコハラナデ, タテ調査	暗赤褐色, 茶褐色	茶褐色, 暗褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	11241		
	788	C-15	埴土		ヨコ調査, タテハラナデ	ヨコ調査, 用磁正成	暗褐色, 暗赤褐色	暗褐色, 暗赤褐色	輝石, 砂鉄, 赤鉄	14614		
	789	C-11	埴土		ヨコ調査	ヨコ調査	黄褐色, 黒褐色	黄褐色, 暗褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	14615	外: スス付着	
	791	B-5	埴土		細目のタテハク目, タテハラナデ, ヨコ調査	ヨコ調査, ヨコハラナデ	茶褐色, 暗赤褐色	暗赤褐色	輝石, 磁鉄, 赤鉄	20048	外: スス付着	

第27表 土器観察表 (16)

挿図	No	出土区	層	器種	部位	色調		器面調整		胎土	文様
						外面	内面	外面	内面		
165	947	G13	Ⅱ下		口唇部	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ		刻突文
	948	G11	Ⅱ下		口唇部	黒褐色	暗灰黄色	ヘラムミガキ	ミガキ		沈線文
	949	G9	Ⅱ下		口唇部	褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ		沈線文
	950	F9	Ⅱ		口唇部	暗灰黄色	にぶい黄色	ナデ	丁寧なナデ		
	958	F12	Ⅱ		口唇部	暗灰黄色	黒色	ナデ	ナデ		
	959	F18	Ⅱ		胴部	黒褐色	黒褐色	ナデ	ナデ		胴部に凸帯
170	961	G8	Ⅱ	壺	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ		
	962	G9	Ⅱ	壺	口縁部	にぶい黄褐色	褐色	横方向ハケ目	横方向ハケ目		
	963	F9	Ⅱ	壺	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	スス付着	指頭圧痕		
	964	G13	Ⅲ	壺	口縁～胴部	暗赤褐色	にぶい赤褐色	ハケ目、指頭圧痕	指頭圧痕		凸三条
	965	F11	Ⅱ		底部	褐色	黒褐色	丁寧なナデ	ナデ		
	966	G8	Ⅱ		脚部	赤	暗赤褐色	横ヘラムミガキ	ナデ		
	967	F9	Ⅱ	壺	口縁部	にぶい褐色	にぶい赤褐色	ヘラムミガキ	ヘラムミガキ		
	968	G13	Ⅲ	壺	口縁部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヘラムミガキ	ナデ、指頭圧痕		
	969	G8	Ⅱ		胴部	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヘラムミガキ	ナデ		凸三条
	970	F11	Ⅱ下		胴部	にぶい褐色	にぶい黄色	ナデ	ナデ		丹塗
171	971	F11	Ⅱ下		胴部	にぶい黄褐色	にぶい黄色	ナデ	ナデ		丹塗
	972	F11	Ⅱ下		底部	にぶい黄褐色	にぶい黄色	ナデ	ナデ		丹塗
	973	F9	Ⅱ	壺	口縁～胴部	浅黄色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ		
	974	G8	Ⅱ	壺	口縁～胴部	にぶい黄褐色	浅黄色	ハケ目、ナデ	ハケ目		
	975	F9	Ⅱ	壺	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目		
	976	F9	Ⅱ	壺	首～胴部	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目		
	977	G9	Ⅲ	壺	首～底部	褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ		刻目目凸帯
	978	F10	Ⅱ		底部	褐色	にぶい褐色	ハケ目	ナデ		
	979	G9	Ⅲ		胴部～底部	にぶい赤褐色	にぶい褐色	ヘラムミガキ	ナデ		
	176	980	F9	Ⅱ	土師器	完形	にぶい黄褐色	黒色	ロクロ		
981		F9	Ⅱ	土師器	完形	浅黄褐色	褐色	ロクロ			
982				土師器	口唇～胴部	にぶい褐色	褐色	ロクロ			
983				土師器	底部	褐色	褐色	ロクロ			
984		F9	Ⅱ	土師器	完形	にぶい黄褐色	浅黄褐色	ロクロ			
985		G10	Ⅱ	土師器	底部	浅黄褐色	浅黄色	ロクロ			
986		G9	Ⅲ	土師器	底部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ロクロ			
987		G9	Ⅲ	土師器	底部	褐色	浅黄色	ロクロ			
988				土師器	底部	浅黄褐色	浅黄色	ロクロ			
989		G8	Ⅲ	須恵器	完形	灰白色	灰白色	ロクロ			
990	F9	Ⅱ	須恵器	胴部	灰色	褐色	格子状叩き	同心円叩き			

堂園遺跡A地点 遺物番号・取り上げ番号対応表

挿図	遺物番号	取り上げ番号	挿図	遺物番号	取り上げ番号
165	947	232	171	973	317 319 335 338 340
	948	994		974	141 228 696～698 701 703 777
	949	618		975	336 343 546 561
	950	367		976	345～348 352 354 355 550 555 558 563 568
	951	953		977	488 507 508 510 514 520 523 525 627 624 627 628
167	952	946	978	448 896	
	953	188	979	499 500 501 604 609 613 620 621 812 858	
	954	356	980	741	
	955	233	981	383～385	
	956	195	982	一括	
	957	913	983	一括	
	958	住土8	984	252 253 262 278 386～390 395 416 439 880～883 887	
	959	住土4	985	183	
	960	住石2	986	455	
	961	781	987	496	
169	962	599 611	988	一括	
	963	442	989	833	
	964	92～94 123	990	328	
	965	20			
	966	134			
	967	357 615 一括			
	968	60			
	969	844 845			
	970	245			
	971	246			
170	972	268			

第28表 石器観察表(1)

採掘No	遺物No	出土区	層位	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	取上番号	備考
第30期	183	D-8	Ⅱc	石鏡	黒輝石	14	12	2.2	0.25	20689	-
	184	B-9	Ⅱd	石鏡	黒輝石	17	13	4.1	0.51	22582	-
	185	A-7	Ⅱd	石鏡	黒輝石	14	13	4.2	0.61	20719	-
	186	C-16	Ⅱd	石鏡	チャート	15	12	3.3	0.41	4892	-
	187	C-16	Ⅱd	石鏡	黒輝石	14	12	4.7	0.43	20698	-
	188	B-4	Ⅱd	石鏡	黒輝石	16	12	3.3	0.43	5138	-
	189	B-9	Ⅱd	石鏡	黒輝石	13	10	3.3	0.38	19627	-
	190	B-5	Ⅱd	石鏡	黒輝石	15	8	3.1	0.25	2108	-
	191	B-5	古遺I	石鏡	黒輝石	14	8	3	0.27	2047	-
	192	B-10	Ⅱd	石鏡	黒輝石	8	11	2.1	0.16	19250	-
	193	B-4	3号住居	石鏡	安山岩	15	8	1.5	0.2	13303	-
	194	C-16	Ⅱd	石鏡	黒輝石	14	12	3.3	0.36	4351	-
	195	A-8	Ⅱd	石鏡	黒輝石	16	10	3.3	0.34	13327	-
	196	A-13	17号住居	石鏡	黒輝石	15	13	2.9	0.39	6035	-
	197	B-12	Ⅱd	石鏡	黒輝石	15	12	2.7	0.36	16383	-
	198	B-10	Ⅱd	石鏡	黒輝石	15	14	2.1	0.27	16649	-
	199	C-6	Ⅱd	石鏡	黒輝石	15	14	2.2	0.34	17872	-
	200	A-14	Ⅱd	石鏡	黒輝石	13	12	3	0.29	15507	-
	201	B-16	Ⅱd	石鏡	鉄石莖	14	13	3.7	0.57	4259	-
	202	A-6	Ⅱd	石鏡	黒輝石	11	15	2.7	0.32	18436	-
	203	C-21	Ⅱb	石鏡	チャート	17	13	3.3	0.59	12836	-
204	B-13	Ⅱc	石鏡	安山岩	20	14	3.3	0.96	12806	-	
205	C-21	Ⅱb	石鏡	黒輝石	18	13	2.7	0.52	12837	-	
206	B-15	Ⅱd	石鏡	黒輝石	25	13	4.7	0.91	13889	黒石	
207	B-8	Ⅱa	石鏡	黒輝石	19	10	3.2	0.48	17004	-	
208	C-13	Ⅱa	石鏡	頁岩	19	19	5	3.3	2369	-	
209	B-5	Ⅱa	石鏡	黒輝石	17	15	3.6	0.52	1774	-	
210	D-11	攪乱	石鏡	黒輝石	20	17	3.8	0.68	→一括	-	
211	C-12	Ⅱa	石鏡	安山岩	19	17	2.9	0.57	7035	-	
212	B-5	Ⅱd	石鏡	安山岩	19	16	2.3	0.65	20028	-	
213	C-10	Ⅱd	石鏡	黒輝石	21	18	3.2	0.96	16772	-	
214	D-20	25号住居	石鏡	安山岩	21	20	5	3.1	0.97	12986	-
215	A-6	Ⅱd	石鏡	黒輝石	19	15	2.3	0.43	21602	-	
216	C-9	Ⅱa	石鏡	黒輝石	18	13	2.9	0.54	8463	-	
217	C-13	Ⅱa	石鏡	黒輝石	21	14	4	0.78	2429	-	
218	C-7	Ⅱa	石鏡	黒輝石	21	15	1.8	0.48	604	-	
219	A-7	Ⅱd	石鏡	黒輝石	19	16	2.4	0.44	18938	-	
220	D-10	Ⅱb	石鏡	チャート	21	14	3.6	0.82	14930	-	
221	A-6	Ⅱb	石鏡	黒輝石	18	14	2.7	0.44	10464	-	
222	B-5	Ⅱd	石鏡	黒輝石	18	12	2.2	0.4	19057	-	
223	A-7	攪乱	石鏡	黒輝石	18	13	3.1	0.65	→一括	-	
224	A-12	Ⅱc	石鏡	黒輝石	19	12	2.9	0.52	12807	-	
225	A-6	Ⅱb	石鏡	チャート	22	16	3.5	0.83	1855	-	
226	B-6	Ⅱb	石鏡	黒輝石	21	15	3.4	0.76	10512	-	
227	C-10	Ⅱc	石鏡	安山岩	21	14	2.2	0.64	15205	-	
228	D-19	Ⅱd	石鏡	鉄石莖	21	16	3.6	0.74	12592	-	
229	A-11	20号住居	石鏡	安山岩	22	14	4.1	0.86	9752	-	
230	D-16	Ⅱc	石鏡	黒輝石	20	13	3	0.51	13724	-	
231	C-8	Ⅱd	石鏡	チャート	22	14	5	0.81	17818	-	
232	B-9	Ⅱd	石鏡	黒輝石	17	13	3.7	0.47	22571	-	
233	A-9	Ⅱd	石鏡	安山岩	19	14	2.1	0.65	16119	-	
234	B-5	Ⅱd	石鏡	黒輝石	22	14	4.4	0.76	19986	-	
235	B-16	Ⅱd	石鏡	黒輝石	19	14	3.5	0.53	13906	-	
236	A-5	Ⅱd	石鏡	安山岩	23	20	2	1.12	22080	-	
237	B-5	2号住居	石鏡	黒輝石	23	16	4.3	1.12	20697	-	
238	C-15	Ⅱd	石鏡	黒輝石	23	15	4.6	1.15	13935	-	
239	B-10	9号住居	石鏡	黒輝石	18	16	3.6	0.61	16467	-	
240	A-3	Ⅱd	石鏡	黒輝石	20	12	4.2	0.67	22716	-	
241	A-4	9号住居	石鏡	黒輝石	17	14	3.6	0.61	3257	-	
242	C-12	Ⅱc	石鏡	黒輝石	17	9	3.5	0.42	14676	-	
243	D-23	Ⅱd	石鏡	黒輝石	19	8	2.7	0.26	11886	-	
244	B-8	Ⅱd	石鏡	黒輝石	20.5	10	2.6	0.29	17384	-	
245	B-12	Ⅱd	石鏡	安山岩	17	13	2.8	0.36	16381	-	
246	A-16	Ⅱd	石鏡	黒輝石	25	18	3.5	0.83	10353	-	
247	C-17	Ⅱd	石鏡	黒輝石	23	13	3	0.56	12136	-	
248	B-5	Ⅱd	石鏡	黒輝石	18	11	3.1	0.42	21394	-	
249	表探	-	石鏡	チャート	29	14	3	1.02	→一括	-	
250	B-13	Ⅱb	石鏡	安山岩	27	15	4.6	0.8	10364	-	
251	A-4	9号住居	石鏡	安山岩	30	21	2.9	1.22	4466	-	
252	C-13	Ⅳ	石鏡	黒輝石	25	13	2.9	0.66	2799	-	
253	B-6	5号住居	石鏡	黒輝石	19	15.5	2.9	0.65	2314	-	
254	C-12	Ⅱb	石鏡	安山岩	27	19.5	3.4	1.16	14732	-	
255	C-16	Ⅱd	石鏡	黒輝石	15	14	5.9	1.07	4273	-	
256	A-5	土坑9	石鏡	黒輝石	18.5	13	4.5	0.97	22862	-	
257	D-9	Ⅱb	石鏡	頁岩	23.5	16	3.9	1.23	29	-	
258	C-16	Ⅱd	石鏡	黒輝石	21	14	5.6	1.04	4268	-	
259	B-8	Ⅱd	石鏡	安山岩	26	22	3.7	1.59	17986	-	

第29表 石器観察表(2)

検体No	遺物No	出土区	層位	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	取上番号	備考
第33号	260	C-21	Ⅱb	石鐮	チャート	17	13	3.5	0.59	12836	-
	261	C-16	Ⅱd	石鐮	黒曜石	21	15	6.6	1.98	4956	-
	262	B-13	Ⅱc	石鐮	水晶	27	12	6.6	2.07	14823	-
	263	B-3	Ⅱd	石鐮	安山岩	37	15	7	3.31	1759	-
	264	B-12	Ⅱc	石匙	鉄石莖	40	30.5	10.5	8.35	11767	-
	265	A-5	Ⅱd	石匙	安山岩	42	23	6.1	4.95	20385	-
	266	B-5	Ⅱd	石匙	黒曜石	38	26	8.3	4.37	20027	-
	267	B-9	Ⅱd	石匙	黒曜石	32	20	7.2	2.89	16647	-
	268	B-10	Ⅱa	石匙	黒曜石	34	22	5.3	2.81	16648	-
	269	C-5	Ⅱd	石匙	黒曜石	35	20	6.6	3.07	17868	-
第34号	270	A-8	I	石匙	黒曜石	37.5	23	4.6	3.33	一括	-
	271	B-8	Ⅱd	石匙	黒曜石	39	27	9.1	5.93	17369	-
	272	A-13	17号住居	石匙	鉄石莖	41	32	9.9	6.81	11321	-
	273	D-3	Ⅱa	石匙	水晶	44	27	8.5	6.36	1741	-
	274	C-6	Ⅱa	石匙	黒曜石	27.5	23	7.7	3.5	1801	-
	275	A-6	Ⅱd	石匙	安山岩	56	28	7.4	9.02	22500	-
	276	C-10	Ⅱb	石匙	黒曜石	44	24	8.5	4.45	8346	-
	277	B-6	Ⅱd	石匙	黒曜石	51	24	9	5.71	18565	-
	278	B-3	Ⅱa	スクレイパー	安山岩	54.5	27	7.4	14	1775	-
	279	C-6	Ⅱa	スクレイパー	黒曜石	28	22	10	5.21	1042	-
第35号	280	B-12	Ⅱd	石槌	鉄石莖	34.5	21	8.9	6.24	16024	-
	281	A-13	Ⅱc	ピュアスエスローユ	黒曜石	24	13	7.5	2.5	11623	-
	282	D-22	Ⅱd	磨製石斧	頁岩	136	56	31.0	390	11888	-
	283	C-14	Ⅱc	磨製石斧	頁岩	126	53	21.4	220	12901	-
	284	A-4	Ⅱa	磨製石斧	安山岩	102	53	32.7	260	1881	-
	285	B-13	Ⅱc	磨製石斧	頁岩	153	56	36.6	455	14426	-
	286	D-18	Ⅱc	磨製石斧	安山岩	122	59	34	320	12363	-
	287	D-17	Ⅱd	磨製石斧	安山岩	150	57	14.1	160	13623/13655	-
	288	A-12	Ⅱd	磨製石斧	頁岩	191	67	38.3	705	15740	-
	289	A-9	Ⅱd	磨製石斧	頁岩	40	54	7.4	21	16728	-
第36号	290	B-9	Ⅱd	磨製石斧	安山岩	88	61	38.1	300	16641	-
	291	D-13	Ⅱc	磨製石斧	頁岩	98	63	41.3	320	14683	-
	292	A-10	Ⅱc	磨製石斧	頁岩	106	68	32.2	395	10670	-
	293	C-17	Ⅱb	磨製石斧	頁岩	42	85	19.1	95	12404	-
	294	B-15	Ⅱd	磨製石斧	頁岩	68	39	16.3	65	11692	-
	295	C-12	13号住居	磨製石斧	片岩	56	10	8.2	10	3882	-
	296	C-12	Ⅱd	打製石斧	安山岩	81	70	25.3	140	9952	-
	297	表様	I	打製石斧	安山岩	84	62	12.6	35	一括	-
	298	B-7	12号住居	石核	安山岩	101	113	39.6	510	12265	-
	299	C-15	Ⅱb	石核	輝石安山岩	62	71	30.8	165	10340	-
第37号	300	A-5	Ⅱb	石核	黒曜石	27	22	11.6	10	13443	-
	301	C-6	Ⅱb	石核	鉄石莖	30	19	6.9	3	5412	-
	302	B-12	Ⅱd	石核	黒曜石	27	24	18.5	8	15456	-
	303	B-10	Ⅱd	石核	黒曜石	37	52	28.3	41.5	16917	-
	304	A-8	Ⅱa	製片	チャート	60	40	13.2	25	862	-
	305	C-12	Ⅱd	製片	チャート	37	21	18.9	8	15019	-
	306	B-16	Ⅱd	製片	黒曜石	16	24	7.3	3	4976	-
	307	B-10	Ⅱd	製片	黒曜石	50	37	12.7	22.96	17996	-
	308	C-13	Ⅱc	製片	安山岩	47	66	9.9	40	14392	-
	309	A-11	Ⅱd	製片	水晶	29	17	8.3	4	15595	-
第38号	310	D-18	Ⅱd	製片	安山岩	74	55	11.8	39	12531	-
	311	C-3	1号住居	製片	チャート	33	27	9	10	17251	-
	312	C-10	Ⅱb	製片	チャート	50	37	12.9	23	14934	-
	313	D-17	Ⅱd	製片	鉄石莖	42	23	11	6.67	13412	-
	42-43	C-11	Ⅱc	複合資料	頁岩	167	116	70	610	13336	ほか
	315	B-3	Ⅱb	磨石	砂岩	57	65	27	140	1895	-
	316	B-12	Ⅱb	磨石	砂岩	60	52	33	160	9378	-
	317	A-6	Ⅱb	磨石	砂岩	116	100	65	1060	21621	-
	318	A-13	Ⅱd	磨石	安山岩	109	96	49	480	10361	-
	319	B-13	Ⅱc	磨石	安山岩	91	59	53	380	14793	-
第39号	320	C-16	Ⅲ	磨石	砂岩	97	51	71	470	9980	-
	321	B-4	Ⅱb	磨石	砂岩	103	75	43	480	6698	-
	322	C-20	Ⅲb	磨石	安山岩	99	107	51	810	33	-
	323	D-19	Ⅲa	磨石	花崗岩	103	86	41	558	-	-
	324	C-13	Ⅱc	磨石	安山岩	72	51	44	240	14235	-
	325	D-18	Ⅱd	磨石	砂岩	134	127	92	2080	12534	-
	326	D-9	Ⅱa	磨石	安山岩	98	82	40	350	9390	-
	327	D-15	Ⅱc	磨石	砂岩	119	80	53	760	12963	-
	328	A-13	Ⅱd	磨石	砂岩	96.5	37	31	150	15495	-
	第40号	329	B-4	3号住居	くぼみ石	砂岩	124	89	52	800	7619
330		B-15	Ⅱb	石皿	砂岩	196	138	69	2680	3580	-
331		B-8	Ⅱd	石皿	砂岩	135	130	59	1510	17057	-
332		C-9	Ⅱc	石皿	砂岩	81	55	38	240	13363	-
333		B-8	Ⅱc	石皿	砂岩	93	93	82	800	15318	-
334		A-7	Ⅱd	石皿	砂岩	53	73.5	39.5	180	19268	-
335		C-10	Ⅲb	砥石	砂岩	163	77	38	720	32	-

第30表 石器観察表 (3)

採掘No	掲載No	グリッド	層位	遺構L1	遺構L2	遺構L3	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上No	備考
第64図	490	A-4	II	-	-	-	磁石	頁岩	191	84	19	520	13307	-
	491	B-4	-	SH-03	-	埋土1	金床石	砂岩	284	148	38	3100	7623	-
	516	B-6	-	SH-05	-	埋土2	磁石	ホルンフェルス	115	36	48	238	13313	-
第69図	517	B-5	-	SH-05	-	埋土2	金床石	砂岩	180	251	55	3200	13316	-
	518	B-6	-	SH-05	-	埋土2	金床石	砂岩	180	251	101	7600	13315	-
	519	B-6	-	SH-06	-	埋土1	磁石	砂岩	120	92	33	480	12668	-
第70図	520	B-6	II	SH-05	-	-	磁石	砂岩	102	96	47	600	13312	-
	521	B-6	-	SH-05	-	埋土3	磁石	砂岩	159	149	75	2600	12293	-
	540	A-8	-	-	-	埋土2	磁石	ホルンフェルス	132	47	25	220	13281	-
第76図	559	A-4	-	SH-09	-	埋土1	磁石	ホルンフェルス	143	45	22	250	16321	-
	560	A-4	-	SH-09	-	埋土2	磁石	石英粗面岩	107	24	21	80	16290	-
第81図	567	C-7	-	SH-11	-	-	金床石	砂岩	308	209	100	10000	5160	-
	568	C-7	-	SH-11	-	床面2	金床石	砂岩	374	192	84	10300	5156	-
	569	C-7	-	SH-11	-	床面2	金床石	砂岩	391	225	108	17800	5151	-
第85図	604	B-7	-	SH-12	-	埋土2	金床石	砂岩	100	78	45	580	12264	-
第91図	620	C-8	-	SH-13	-	埋土2	磁石	砂岩	111	59	33	240	4410	-
第93図	635	D-8	-	SH-15	-	埋土2	磁石	石英粗面岩	64	61	7	25	5370	-
第99図	649	A-5	-	SH-16	-	埋土2	金床石	砂岩	170	73	40	800	22479	-
	707	C-13	-	SH-19	-	埋土2	磁石	砂岩	116	54	27	240	5764	-
	708	C-13	-	SH-19	-	埋土3	磁石	砂岩	93	48	29	160	10583	-
	709	C-13	-	SH-19	-	埋土2	磁石	砂岩	99	76	52	680	5843	-
第110図	710	C-13	-	SH-19	-	埋土2	磁石	砂岩	121	73	50	600	5851	-
	832	C-12	II	-	-	-	磨製石鏃	頁岩	43	17	4	-	6086	-
	833	A-6	-	SH-04	-	埋土2	磨製石鏃	ホルンフェルス	46	24	3	4	15365	-
	834	B-6	-	SH-05	-	埋土2	磨製石鏃	ホルンフェルス	53	30	5	8	2337	-
	835	A-6	-	SH-04	-	床直	磨製石鏃	ホルンフェルス	56	31	4	8	15304	-
	836	B-8	-	SH-07	-	埋土2	磨製石鏃	ホルンフェルス	25	28	6	7	2918	-
	837	C-13	II	-	-	-	石包丁	頁岩	16	22	3	2	2430	-
	838	A-9	II	-	-	-	打製石斧	頁岩	144	39	12	80	8118	-
	839	B-15	II	-	-	-	打製石斧	ホルンフェルス	60	39	8	20	14345	-
	840	B-6	-	SH-06	-	埋土3	打製石斧	ホルンフェルス	52	46	10	25	12673	-
	第144図	841	B-4	-	SH-03	-	埋土2	打製石斧	ホルンフェルス	98	43	10	46	10710
842		B-4	II	-	-	-	打製石斧	ホルンフェルス	95	57	11	77	1786	-
843		B-4	-	-	-	-	打製石斧	ホルンフェルス	139	56	18	123	10710	-
844		B-4	-	SH-03	-	埋土2	打製石斧	ホルンフェルス	102	51	12	72	15337	-
第145図	845	C-8	-	SH-13	-	埋土2	打製石斧	頁岩	115	79	12	87	17698	-
	845	C-8	-	SH-13	-	埋土2	打製石斧	頁岩	-	-	-	-	17811	-
第146図	846	B-10	II	-	-	-	礫器	ホルンフェルス	140	33	16	89	17560	-
	847	B-10	II	-	-	-	礫器	ホルンフェルス	170	40	14	142	16491	-
	848	A-11	-	SH-21	-	埋土1	石包丁	ホルンフェルス	51	98	8	38	9114	-
第147図	849	C-10	-	-	-	-	石包丁	ホルンフェルス	52	66	8	40	-	-
	850	C-10	-	溝4	-	埋土1	石包丁	ホルンフェルス	58	85	16	78	8609	-
	851	C-16	III	-	-	-	石包丁	ホルンフェルス	45	70	12	28	9977	-
	852	C-13	-	SH-19	-	埋土3	削器	ホルンフェルス	42	83	10	35	10574	-
第148図	853	-	-	溝4	-	埋土1	削器	ホルンフェルス	49	70	5	20	-	一括
	854	A-4	II	-	-	-	削器	ホルンフェルス	55	72	10	33	20430	-
	855	-	-	-	-	-	削器	ホルンフェルス	78	27	7	14	-	-
	856	C-3	II	-	-	-	削器	ホルンフェルス	52	46	6	17	4174	-
	857	-	-	-	-	-	削器	ホルンフェルス	28	51	6	9	-	一括
	858	C-17	II	-	-	-	削器	ホルンフェルス	103	61	12	77	12418	-
	859	B-4	II	-	-	-	二次加工剥片	ホルンフェルス	84	112	22	282	1794	-
第150図	860	B-4	II	-	-	-	削器	ホルンフェルス	200	134	38	535	14914	-
	861	B-8	II	-	-	-	礫器	ホルンフェルス	200	107	38	350	14914	-
	862	A-12	II	-	-	-	削器	ホルンフェルス	65	89	17	95	9483	-
第151図	863	C-23	II	-	-	-	微細剥離産剥片	ホルンフェルス	188	57	28	320	11863	-
	864	A-8	II	-	-	-	微細剥離産剥片	ホルンフェルス	50	52	13	26	1329	-
	865	D-17	II	-	-	-	微細剥離産剥片	ホルンフェルス	100	30	11	29	13621	-
第152図	866	D-17	II	-	-	-	微細剥離産剥片	ホルンフェルス	85	45	16	-	12591	-
	867	D-18	II	-	-	-	微細剥離産剥片	ホルンフェルス	72	73	18	84	12533	-
	868	D-18	II	-	-	-	微細剥離産剥片	ホルンフェルス	55	67	12	41	12095	-
	869	C-23	II	-	-	-	剥片	ホルンフェルス	60	61	15	68	11982	-
	870	C-13	-	SH-19	-	埋土2	剥片	ホルンフェルス	58	43	14	38	5782	-
第153図	871	A-6	II	-	-	-	剥片	ホルンフェルス	47	58	12	36	22083	-
	872	D-17	II	-	-	-	剥片	ホルンフェルス	53	84	14	82	13392	-
	873	B-8	II	-	-	-	剥片	ホルンフェルス	89	116	20	307	17393	-
第154図	874	C-11	II	-	-	-	剥片	ホルンフェルス	123	79	24	255	6260	-
	875	B-12	II	-	-	-	剥片	頁岩	79	110	14	124	12934	-
	876	B-10	II	-	-	-	剥片	ホルンフェルス	127	62	21	178	16503	-
第155図	877	B-9	II	-	-	-	剥片	ホルンフェルス	160	67	11	98	8285	-
	878	B-6	II	-	-	-	磁石	砂岩	89	74	25	140	18409	-
	879	A-12	II	-	-	-	磁石	ホルンフェルス	71	33	17	60	12804	-
	880	B-11	II	-	-	-	磁石	ホルンフェルス	118	41	47	325	14292	-
第156図	881	B-15	II	-	-	-	磁石	砂岩	112	74	58	480	10349	-
	882	D-18	II	-	-	-	磁石	砂岩	96	81	18	220	10429	-
	883	D-18	II	-	-	-	磁石	ホルンフェルス	133	46	53	420	12541	-
	884	B-6	II	-	-	-	磁石	砂岩	85	79	14	140	20198	-
	885	B-7	II	-	-	-	磁石	砂岩	223	174	90	4530	1973	-
	886	C-13	II	-	-	-	磁石	砂岩	113	74	25	340	14684	-
	887	A-12	-	SH-17	-	埋土1	磨石製品	磨石	53	58	26	12	12247	-

第31表 鉄製品・ガラス製品など観察表

挿図No	掲載No	グリッド	層位	遺構L1	遺構L2	遺構L3	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上No
第157図	888	C-12	-	SH-22	-	埋土2	-	44	24	2	3.80	10091
	889	B-7	-	SH-06	-	埋土2	-	16	57	3	3.06	2308
	890	A-7	II	-	-	-	-	28	18	2	1.85	125
	891	C-13	-	SH-19	-	埋土2	-	46	14	8	5.28	7013
	892	A-11	-	SH-02	-	埋土1	-	21	10	2	2.05	9134
	893	A-6	-	埋納ビット14	-	埋土	-	36	13	4	1.86	22749
	894	A-9	II	-	-	-	-	18	12	3	0.70	10386
	895	A-11	-	SH-20	-	埋土1	-	21	19	2	1.21	7900
	896	A-11	-	SH-20	-	埋土2	-	11	4	3	0.16	12017
	897	C-12	-	SH-22	-	埋土4	-	6	4	2	0.02	10599
第158図	898	A-11	-	SH-20	-	埋土2	-	7	4	2	0.05	12016
	899	A-6	-	SH-04	-	埋土3	-	4	4	3	0.06	12049
	900	A-8	-	SH-08	-	埋土2	-	5	6	5	0.20	2908
	901	A-6	-	SH-10	-	埋土3	-	3	3	2	0.01	12050
	902	C-8	-	SH-13	-	埋土3	-	4	4	2	0.03	17817
	903	D-8	-	SH-15	-	埋土2	-	8	8	6	0.39	5991
	904	A-5	-	SH-16	-	埋土2	-	3	3	2	0.02	22778
	905	A-5	-	SH-16	-	埋土2	-	3	4	4	0.07	22171
	906	A-11	-	SH-20	-	-	-	4	4	2	0.03	10671
	907	A-11	-	SH-20	-	埋土2	-	3	3	3	0.04	12048
	908	B-10	II	-	-	-	-	4	4	2	0.03	7804
909	-	-	-	-	-	-	6	6	6	0.25	-	

第32表 石器観察表(4)

挿図No	掲載No	グリッド	層位	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材
第166図	951	G-11	II	打製石鏃	18	18	3.5	0.8	頁岩
"	952	G-11	II	打製石鏃	26.5	19	4.5	1.4	頁岩
"	953	G-10	II下	打製石鏃	25	17	3	0.9	黒曜石
"	954	F-9	II	打製石鏃	24	17	2.6	0.8	チャート
"	955	G-14	II下	打製石鏃	14	14	4	0.6	黒曜石
"	956	G-9	II下	用途不明	39	22.5	11	7.8	黒曜石
"	957	F-11	II	打製石斧	126.5	80	16	166.2	頁岩
第169図	960	住居跡内		用途不明	120	70	15	111.6	頁岩

第Ⅵ章 調査のまとめ

第1節 縄文時代の堂園遺跡

台地から細長く延びた舌状の場にあるB地点には早期から晩期まで5千年以上にわたる生活の痕跡がみられるが、堅穴住居跡は検出されておらず、具体的な生活痕跡は土坑が5基と集石が1ヶ所あるのみである。遺物も各時期に万遍なく出土するのではなく、中期と後期の2時期に集中している。以下、いくつかの項をもうけ、まとめたい。

1 貝殻条痕尖底土器

外面を貝殻縁縁部で縦方向を主体に調整した尖底土器がまとまって出土している。内面も貝殻条痕で調整したものが多いが、こちらは横方向が多い。外面には刻目突帯の付くもの、三角突帯の付くもの、無文のものがある。このようにこの土器は器形・大きさ・文様など多様であり、こまかく分類すればいくつかに分けられる可能性もあるが、調整痕などがほぼ同じであることから、ここではこれらを同一時期の同一型式であるとみたい。

本遺跡のものを今一度整理すると次のようになる。①口縁部は直に立ち上がるものもあるが、内反するものが多く、キャリパー状となるものもある。波状口縁のものが多い。②口縁付近の外面は無文のものもあるが、突帯の付くものが多い。突帯には三角突帯のものと刻目突帯のもの、突帯の上下にヘラ押しのあるものなどがある。一条から四条のものまであり、横方向のもの、縦方向のもの、鋸歯状のもの、波状のものなどがある。③底部は丸底に近いものもあるが、ほとんど尖底である。④器面調整は内外とも貝殻条痕で、一部の内面に条痕のあとをヘラでナデたものがある。外面は主として縦方向、内面は横方向である。

このような土器については東相幸氏や相美伊久雄氏などによる分類案がある。従来、前期後半から中期前半の土器は曾知式土器・深浦式土器・春日式土器の編年がされているが、本遺跡出土の土器は深浦式土器に含まれる。相美氏は深浦式土器を日本山式・深浦1式・深浦2式に細分し、これらを前期末から中期初葉に位置づけた。さらに最近このうち条痕文のものをa類～d類に分類し、a類を上水流タイプ、b類を野久尾式と呼んでいる。当遺跡の資料はこのうち「外面に縦位の貝殻条痕を施し、口縁部に横位の突帯を巡らせるもの」とした上水流タイプにもっとも近い。なお、東氏はこれらの土器を深浦式土器と分けて、条痕文尖底土器と呼んでいる。本遺跡のものは東氏が条痕文尖底土器と呼んだものと同じ類である。先の特徴からして尖底であることから深浦式土器の中にも含まれるものの、相交弧文が見られないこと、口縁内面に文様をもたないことなどからして、相美氏は「上水流タイプは深浦式石峰・鞍谷段階や船元Ⅱ式と併行関係にあり」としているが、鞍谷遺跡出土のものよりやや新しいものと思われる。これが地域性なのか、時期差なのかについては今後検討されるべき課題といえる。ただ、船元Ⅱ式土器も出土していることから中期初葉に位置づけられることは確かであろう。

2 有文土器と無文土器

南九州の縄文土器は後期末葉以降を除き、ほとんどが文様を有している。それは全体に貝殻条痕がみられたり、部分的にヘラ凹線文、貝殻押圧文、突帯文、あるいは縄文などが施されたりするが、この有文土器に無文土器がまざることはあまりない。河川貞徳氏は型式論が成り立たないということを記する際に多くの報告書が無文土器を無視していると批判したことがあるが、この批判は必ずしも当を得ていない。一概に無視しているのではなく、十迫遺跡や草野貝塚など後期の遺跡では無文土器もそれぞれ扱われている。

当遺跡でも指宿式土器や市来式土器に無文土器が共存している。これらの無文土器は完形品もあつ

て、その全形がわかるが、器形が有文土器と全く同じというわけではない。例えば、163は底部こそ同じ形態をしているものの、器形はまっすぐ伸びる形をしており、くびれて外反する緑帯文とはなっていない。胎土・色調だけは同一である。指宿式土器は凹線文が特徴的な土器であるが、これにも無文土器がある。111~113がそうであるが、これは凹線部が内反し、四か所に突起があるなど有文土器と同様の器形をしているため無文であるが、指宿式土器とわかるのである。

無文土器の場合、完形品あるいは凹線部、特徴ある胴部などでなければ、型式名のはっきりしないことが多い。また、完形品であっても163などのように本来の形と異なっている場合は、色調・胎土・焼成具合などに特徴的なものがないと区別しにくいことがある。無文のものこそ、土器片ひとつひとつの観察を十分に行う必要があろう。

3 中期末～後期中葉の土器

ここでは阿高式土器から市来式土器まで連続して各種型式の土器が出上している。4類から16類までの土器がこれで、ピークとなるのは11類の指宿式土器と13類の市来式土器である。4類から10類までは中期末から後期初葉の土器と思われるが、これらは少量ずつの出上で、この地はこの時期、キャンプサイト的な場であった可能性が高い。ただ、この台地の他の場所にこの頃の本拠地がある可能性もある。

指宿式土器と松山式土器との違いは大きい。ここではその数量差が大きいためにこれがどうつながっているのかは大きな問題である。指宿式土器にはいろいろな文様がある。指宿式土器と松山式土器との間にどの様な型式がはいってくるのか、指宿式土器の文様の違いは時期差なのか、個体差なのか、今後に残された課題である。海岸に近いのか遠いのかの位置的なものが指宿式土器と市来式土器の分布に大いに関係があるということは古くからいわれてきたが、山間部に位置することで凝縮土器が少ないのは大きな特徴であり、これは福田Ⅱ式土器など他地域の土器が全く出ていないという事とも関連するのかもしれない。

市来式土器は緑帯部に文様が集中したものが主体であり、松山式土器に後続すると思われる139~145のような緑帯の短い土器もある。市来式土器の中では新しいとされる頸部にまで文様が施される土器は多くないが、丸尾式土器も存在していることから細々ではあるが、キャンプ的なムラは存在していたのかもしれない。市来式土器の流れ、居住地の場所など残された課題も多い。これは、谷向かいの鳴野原遺跡、あるいは背後の宮ノ上遺跡にある後期のムラと関連をもっているであろう。今後の調査を待ちたい。

(参考文献)

- 東 和幸 1991 | 鹿兒島県における縄文中期の様相 | 『南九州縄文通信』 №5 南九州縄文研究会
相美 伊久雄 1998 『まとめ一縄文時代・土器』 『上水流通跡』 | 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 | 9
相美 伊久雄 2000 『深浦式系土器の再検討』 | 『人類学研究』 12 人類史研究会
相美 伊久雄 2006 | 奈良文土器と縄文土器

— 南九州における縄文時代前期末～中期前葉土器群の再整理 | 『大河』 第8号

(池畑耕)

第2節 弥生時代終末～古墳時代初頭の堂園遺跡

弥生時代終末から古墳時代初頭の上坑墓が数多く発見された堂園遺跡A地点から、南に約500m離れた地点にある堂園遺跡B地点では、ほぼ同時期の堅穴住居跡や埴輪土器ピットなど多数の遺構と、多くの土器・石器のほか、調査時では県内初となるガラス製や水晶製の小玉の出土や、堅穴住居跡内での鉄製品や鉄屑の出土がみられるなど、数多くの点で注目すべき遺跡であった。そのうち、特記する点を指摘し、まとめとする。

1 遺構

(1) 堅穴住居跡

堂園遺跡B地点では、平面プランが方形を呈する竪穴住居跡が25軒検出された。その住居構造は多種多様であった。住居構造のうち、柱穴配置、張り出し構造、出入口について考察する。

ア 柱穴配置

竪穴住居跡では、主柱が2本柱構造の竪穴住居跡と、4本柱構造の竪穴住居跡が検出された。主柱本数の違いに、張り出し構造の有無と、中央竪穴部の有無を加味して、タイプ別に分けると、2本柱構造のものには、(ア)張り出し構造も、中央竪穴部もないもの(SH-05,SH-11,SH-17,SH-22)、(イ)張り出し構造も、中央竪穴部もあるもの(SH-09)、(ウ)張り出し構造はあり、中央竪穴部のないもの(SH-06,SII-07,SII-20)があり、4本柱構造のものには、(エ)張り出し構造はなく、中央竪穴部はあるもの(SH-13,SH-14,SH-21)、(オ)張り出し構造も、中央竪穴部もないもの(SH-08)、(カ)張り出し構造も、中央竪穴部もあるもの(SII-12)、(キ)張り出し構造はあり、中央竪穴部のないもの(SII-03,SII-18)がある。また、(ク)2本柱構造のものとも、4本柱構造のものとも判断がつかず、張り出し構造のないもの(SH-01,SH-02,SH-19,SH-23)、(ケ)2本柱構造のものとも、4本柱構造のものとも判断がつかず、張り出し構造も、中央竪穴部もあるもの(SII-16)、(コ)全体形の不明なもの(SII-04,SII-10,SII-15,SII-24,SII-25)の、あわせて10分類できる。

さて、堂園遺跡B地点がある薩摩半島西部地域における弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居類型の変異については、中摩浩太郎氏の論考に詳しい(中摩1995)。中摩氏は、(1)集落の一般構成員の家屋に対応する、2本柱型のうち、平面プランが方形の竪穴住居跡(ⅠBa型)は、中津野期を同期とし、正方形平面形へと変化すること、(2)大型の竪穴住居に対応する、4本柱型のうち張り出しをもつ竪穴住居跡(ⅡBβ型)や、2本柱で竪穴側壁にも柱が配され、間仕切り造槽のある竪穴住居跡(ⅡAk型・ⅡBk型)は、中津野期を最終段階として消滅したこと、(3)大型の竪穴住居に対応する、4本柱型で平面プランが方形の竪穴住居跡(ⅡBa型)は、中津野期に薩摩半島西部に波及することの3点を指摘した。そこで、堂園遺跡B地点での分類と、中摩氏の分類を対応させると、ⅠBa型が(ア)に、ⅡBk型が(ウ)に、ⅡBβ型が(オ)に、ⅡBβ型が(キ)にあたる。

特に、堂園遺跡B地点では、中央竪穴部やベッド状造構が全体の約1/4にあたる6軒の竪穴住居跡が検出され、主に4本柱構造のものであることは、竪穴住居の大型化を考えると注目できる。

当該期のベッド状造構や中央竪穴部のある竪穴住居跡は、熊本県球磨郡錦町夏女遺跡や、熊本県阿蘇市(旧阿蘇郡阿蘇町)下山西遺跡などで検出されている。出土土器の流通も含め、中九州との関係を考える上で重要である。

さらに、主柱の位置に注目すると、2本柱構造のものには、(ア)主柱が中央にあり、2方向の壁面近くに支柱があるもの(SH-06,SH-07,SH-08,SH-11,SH-22)、(イ)主柱が中央にあり、4方向の壁面近くに支柱があるもの(SII-20)、(ウ)主柱が中央にあり、壁面近くに壁面帯のあるもの(SII-17)、(エ)主柱が壁面近くにあるもの(SH-05)、の4タイプがある。また、4本柱構造のものは、(カ)中央竪穴部の4隅にあるもの(SII-12,SII-13,SII-14)、(キ)主柱が中央にあり、4方向の壁面近くに支柱のあるもの(SH-18,SH-21)の2タイプがある。

このようにみると、堂園遺跡B地点での最大の特徴は、竪穴住居跡の平面構造が多様多様なことである。この様相は、階層差の想定よりも、上層構造選択の自由度の高さの象徴と考えられる。

イ 張り出し構造

張り出し構造のある竪穴住居跡は、25軒のうち8軒(SII-02, SII-03, SII-07, SII-09, SII-12, SII-15, SH-16, SH-18)を数えた。そのうち、SH-15及びSH-16は全体形状が不明である。そこで、6軒について、主柱の配置と張り出し部を含めた住居構造との関係は、次の2タイプに分類できる。

(ア)張り出し部を含めると、主柱が中央に配置されず、張り出し部は建築当初には想定されない施設と判断できるもの(SH-02, SH-03, SH-12)である。長辺が100cm程度の小規模なものが多い。

(イ)張り出し部を含めると、主柱が中央に配置され、張り出し部は建築当初から想定された施設

と判断できるもの(SH-07, SH-09, SH-18)である。長辺が140cm以上の広いものが多く、複数の張り出し部のある場合には、1張り残し部分がある」と認識できるものである。

上記の2タイプは、2本柱構造にも、4本柱構造にも当てはまり、その場に応じて増築する場合と、張り出し構造の外側に壁面の存在を想定できる場合や、張り出し構造の精梁を前提に建築された場合が指摘できる。ただし、張り出し部の面積の不揃さは、張り出し部の構築は主にその場に応じて行われたことを想定させる。

さらに、SH-09でみられる張り出し構造は、弥生時代中期後半～中期末を中心に、主に宮崎県南部から大隅半島の堅穴住居跡で採用される構造に類似するものである。この時期に薩摩半島南部にも拡がること、万之瀬川下流域の南さつま市金峰町(旧日置郡金峰町)下堀遺跡跡で判明している。この住居構造が、薩摩半島南部で、弥生時代終末～古墳時代初頭にも採用されることが明らかになった点は重要である。今後の課題としては、(1)継続して採用された構造なのか、(2)この地域に一般的な構造なのか、(3)大隅半島などとの関係性が考えられるのかどうか、など重要である。

ウ 出入口

出入口と推定できる構造は、25軒のうち4軒(SH-09, SH-11, SH-12, SH-20)で検出された。9号堅穴住居跡では南西壁際に、11号堅穴住居跡では北東壁際に、12号堅穴住居跡では南西側のベッド状遺構上に2基のピットが想定できた。さらに、20号堅穴住居跡では、階段状張り出し1基が検出され、注目できる。

(2) 埋納土器ピット

弥生時代終末～古墳時代初頭の埋納土器ピットは、下堀遺跡や夏女遺跡で検出されている。復元するとほぼ完形になる土器が、折りたたまれた状態で発見されるなど、検出状況が類似しており、同様の儀礼的行事によるものと考えられる。

(参考文献)

熊本県教育委員会 1987「下山西遺跡」『熊本県文化財調査報告』88

熊本県教育委員会 1993「夏女遺跡」『熊本県文化財調査報告』128

中摩浩太郎 1999「南部九州古墳時代の堅穴住居類型の変異に関する一考察」『人類史研究』11 人類史研究会

金峰町教育委員会 2005「下堀遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』20

2 遺物

(1) 土器

ア 中津野式土器

笠岡遺跡B地点出土の土器は、従来、中津野式土器に分類される土器が大半である。注目できるのは、作居埋土中に、中津野式土器から東原式土器への過渡期と考えられる土器群の出土も認められることと、器種のうち高坏が欠落していたことである。

過渡期の指標としては、木田道輝氏の考察(木田 2005)に詳しい。

まず、甕形土器の特徴について、(1)口縁部の立ち上がりが強くなり、(2)内側の稜線が鈍くなり、(3)頸部の厚みが先端部と変わらなくなり、(4)「カキアゲ口縁」が認められ、(5)胴下半部にケズリ痕がみられること、を指摘する。

次に、甕形土器の特徴について、(1)口縁部が頸部から直接外反し、(2)頸部の縮まりが強く長胴化し、(3)胴部内帯が低く刻みが雑になり、(4)胴部内帯の始点と終点が一致せず上下にずれるものがみられ、(5)胴下半部にケズリ痕がみられ、(6)底部が丸底化していくこと、を指摘する。

笠岡遺跡B地点出土の甕形土器では、主体となる土器は、口縁部が「く」の字状に長めに外反し、口縁部内外面と胴部の境界には明瞭な稜線が観察でき、口縁部内外面の調整がヨコ調整のみの土器で、

従来、中津野式土器に分類されるものである。対して、東原式土器の指標の一つである、いわゆるカキアゲ口縁がみられるのは、561・562など少量である。

特に、甕形土器には、口縁部内面と胴部とでハケメ調整やヘラナデ調整を方向を違えて強く行い、境界に明瞭な稜線を形成するという中津野式土器の一つの指標を持ちながら、口縁部の外反度合いが弱い土器が多いのが特徴的である。また、これらの土器の多くは、口縁部外面と胴部の境界に、ヘラナデ調整や指頭押し調整、あるいは胴部上端から口縁下部まで掻き上げ調整などが施され、稜線は不明瞭な点も挙げられる。さらに、胴部下半ではヘラナデ調整が難しくなり、ケズリ痕が残る。

また、3種類の形態が認められた底部には、傾向として、黒髪式土器などの古い時期から出現するといわれる脚台内が平坦な形態のものや、東原式土器などの新しい時期の要素とされている立ち上がり強い形態や、底部内面に突起がつく形態のものもみられた。さらに、径の小さな平底の立ち上がり部分に中空の輪状の脚台を付ける成形技法が明瞭に観察できた。

一方、堂園遺跡B地点出土の壺形土器では、胴部は長胴化するものの、口縁部が頸部から直接外反するものや、胴部凸帯の始点と終点が上下にずれるものや、胴下半部にケズリ痕が残るものは少なかった。また、底部は非常に小さい平底を呈し、丸底形態の土器は少なかった。

以上の様相は、甕形土器では本田氏の指摘する過渡期の土器群の様相に合致するものの、個々の差の大きいことが指摘できる。また、壺形土器は中津野式土器の範疇であり、過渡期の様相にはあまり合致しない特徴がある。

この、堂園遺跡B地点での様相は、豊富な種類ととらえ「堂園タイプ」として過渡期の一時期を設定できるとも考えられるが、薩摩半島における当該期の資料は現在増加中であり、地域性を加味した上で、検討が必要である。

イ 免田式土器及び類似する土器

814・815(包含層出土)の重弧文を施す壺形土器は免田式土器の範疇に入る。

一方、類似する模倣土器の範疇に入るものには、436・437(SH-02)の多条突帯を施すものや、510・511(SH-05)の長頸の壺形土器が挙げられる。さらに、432(SH-02)や773(埋前ピット5号)などの胴部が球形に張る壺形土器は、胴下半部や、頸部から口縁部の形状が、免田式土器と酷似するものの、胴部の張る程度が緩やかな点で異なり、模倣土器の一種である。

九州中部に分布圏のある免田式土器の範疇に入る土器だけでなく、多種類の模倣土器が薩摩半島南部の万之瀬川上流域にある堂園遺跡B地点から出土したことは、免田式土器を扱う入びととの強い関係を指摘でき、当時の社会状況を考える上で重要である。

(参考文献)

本田道輝 2005「第X章 考察 下堀遺跡の検討」『下堀遺跡』「金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書」20
中村直子 1987「成川式土器再考」『龐大考古』6

(八木澤一郎)

(2) 石器

古墳時代の石器としては、磨製石鏃、打製石斧、石庭丁およびこれに類する削器等を抽出したが、ここでは特に、石庭丁およびこれに類する削器類について若干触れておきたい。

本遺跡の石庭丁は、研磨が部分的ないしほとんど施されないものが多い。また削器としたものの中には、石鏃的な機能が想定されるもの(855)や横刃形石器の範疇で捉えられるもの(853,854,856,857)がある。また剥片及び微細剥離痕剥片としたもの一部にも、剥片の頭部と端部を折断的に整形加工する一帯が存在する。853等からこれらは石庭丁または横刃形石器の素材剥片とみられ、一部には縁辺に微細剥離痕が観察される。横刃形石器の範疇で捉えられるものを含め、これらの剥片にみられる微細剥離痕の位置などから、これらの一部には石庭丁を代替あるいは補充する使用法が想定され、注意が必要である。

石廬丁については、弥生時代後期に石廬丁が増加することが知られている(本田 1992)。また、石廬丁・磨製石鏃と石製土掘具については、古墳時代まで残ることが指摘されている(東 1998)。

本遺跡の石廬丁は、定型・管理的な性格が強い加工は省略され、横刃形石器やその他の削器類についても同様の傾向がみられる。取掘具における石器から金属器への転換過程を検討することはできないが、石器から金属器への移行段階、あるいは金属器移行後の石器の利用相を示す可能性が高く、鉄器の普及と石器利用の終焉過程を考える上で、興味深い資料である。

(参考文献)

本田 道輝 1992 「鹿児島県下の弥生時代の石器と金属器出土遺跡地名表」

〔南九州における原始・古代文化の諸様相における総合的研究〕

堂込 秀人 2006 「鹿児島県の石器からみた弥生時代の様相」『考古論集』

東 和幸 1998 「九州」『考古学ジャーナル』433

(馬龍亮造)

(3) 鍛冶関連遺物

堂園遺跡B地点では、堅穴住居跡内から、鉄製品や鉄製工具、及び鍛冶関連遺物と考えられる三角形鉄片、棒状鉄片、微小鉄片や、また鉄床石や鎚石、砥石と考えられる石製加工具や、堅穴住居跡内の多量の炭化物や、固結した焼土の検出を確認した。これらの一連の遺構・遺物がセットで発見されたことは、鉄片を用いた最終加工を住居内で行っていたことを明瞭に示す、県内初の確認事例である。この事例は、当該期の鉄器(最終加工)の生産が、大隅半島基部地域だけでなく、薩摩半島南部でも日常的なことを明らかにしたことで重要である。

特に、鉄床石や鎚石は、当初、石器加工具としての台石及び砥石に分類していたもので、村上恭通氏の教示により、鍛冶関連遺物への分類が可能となったものである。今後、黄変化や赤変化のある台石や砥石、黒色化のある砥石などには、十分な注意が必要である。この分野においては、遺物の見直しにより、類例の急速な増加が見込まれる可能性がある。

(参考文献)

(財)高知県文化財埋蔵文化財センター 2004 「西分増井遺跡Ⅱ」『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』83

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 「上水流通跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』121

(4) ガラス製・水晶製小玉

ガラス製・水晶製小玉は、県内初の事例である。13点中、12点は堅穴住居跡内での出土である。ガラス製小玉は4号堅穴住居跡、8号堅穴住居跡、10号堅穴住居跡、13号堅穴住居跡、15号堅穴住居跡、16号堅穴住居跡、20号堅穴住居跡から出土し、水晶製小玉は5号堅穴住居跡から出土した。16号堅穴住居跡と20号堅穴住居跡では2点出土し、他は1点ずつであり、総堅穴住居跡数25軒中8軒から出土した。小玉の出土堅穴住居跡と非出土堅穴住居跡の構造上の比較では、ガラス製・水晶製小玉は、ムラの中での階層性に基づく威信材とは言えない。しかし、1軒当たりの出土点数が1ないし2点である状況は、小玉が貴重品として扱われたと考えられる。

当該期の西日本では、現在、九州南部では知られず、北部九州、もしくは瀬戸内地方での鑄型やガラス滓の出土が知られている。その中で、時期が若干下る籠門式土器の段階において、堂園遺跡B地点の所在する旧川辺町内にある答石遺跡では、玉砥石の出土があり、今後注意を要する。

(参考文献)

南九州市教育委員会 2008 「答石遺跡」『南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書』1

(八木澤一郎)



D-23·24区·東壁土層断面



A·B·E区·北壁土層断面



D·24区·北壁土層断面



A·D·22区·北壁土層断面



C·D·22区·北壁土層断面



©46区11d層のロケットA検出状況



©46区11d層のロケットB検出状況



B46区11d層のロケットC検出状況



©46区11d層のロケットD検出状況



A46区11d層のロケットE検出状況



B46区11d層のロケットF検出状況



A-B46区11d層のブロック検出状況



B46区11d層のブロック検出状況





C-7区IIa層:中野式石器出土状況



C-12区IIa層:燧石錐, 832, 出土状況



A-11区IIb層:燧石製品出土状況



C-15区IIa層:石器出土状況



C-12区IIa層:燧石製品(大)出土状況



A-10区IIa層:燧石製品(小)出土状況



C-40区IIa層:燧石(小)出土状況



B-12区IIa層:燧石(小)出土状況







C-4区SH01出土状况



C-4区SH101出土状况



C-4区SH02出土状况(局部)



B-4区SH02出土状况



B-4区SH03炭化物出土状况



A-B-4区(SH08)在层门遗址出土的坑(北70°)



B-C区(SH05)在层门遗址出土的坑(北70°)



A-4-5区,SH09柱基6有真漆虫状况



A-5-6区,SH001柱基64有漆虫存在状况



A-5-6区,SH04柱基周围挖出状况(无漆虫)



A-6区,SH04柱基断面状况



B-5-6区,SH05北壁断面状况



B-6区,SH05南侧坑状况(无漆虫)



B-7区,SH06柱基状况



B-7区,SH06柱基断面状况



B7区(SH06)住屋構造柱出状(西方向)



B8区(SH07)住屋構造柱出状(西方向)



A·8区·SH082孔一次土质状况



A·8区·SH082孔二次土质状况



A·8区·SH08柱底结构出土状况(排外)



A·3·4区·SH09西壁南側断面状况



A·4区·SH06梁柱基面状况



A-3-4区SH09遗址出土状况



A-3-4区SH09遗址2号制品出土状况



A-3-4区SH09遗址出土状况



A-3-4区SH09遗址出土状况



A-B6-4区SH09遗址发掘出土状况



A-6區SH10西壁斷面狀況



A-6區SH10鐵製品出土狀況



A-6區SH10紅層填塗料出土狀況(俯方)



B-6區SH10溝穴外壁面出土狀況



G-6區SH10坑內坑底出土狀況(俯方)



A-B6-7區SH10坑內土層出土狀況



A-B6-7區SH10坑內土層狀況(側方)



A·B·6·7区·SH12遗址基址断面状况



B·6·7区·SH12遗址台付钵形土器出土状况



B·6区·SH12遗址台付钵形土器出土状况



C·5区·SH12遗址柱础基址横切面出土状况



C-D-8区SH13生活面完整状况(西北向)



C-D-8区SH10完整状况(西北向)



C-6区SH14断面(北-南)状况



C-D-6区SH14完整状况(西北向)



D-B-9区SH15西侧南北-1剖面西侧断面状况



D-B-9区SH15生活面出土状况



D-B-9区SH15生活面完整出土状况(西北向)



A-5区,SH16二次生活面様出状況(東から)



A-5区,SH16西壁北側断面状況



A-5区,SH16二次生活面様出状況(南から)



A-5区,SH16S-3子ノ刃土器出土状況



A-5区,SH16S-14状況



A-12-13区,SH17北壁東側断面状況



A-12-13区,SH17北壁東側断面出土状況



A02-16区, S077在层内出土铁板(局部)



B-4区, S018在层内出土铁板(局部)





A·01·02区SH20区土坑内出土的陶器



A·01·02区SH20区土坑内出土的陶器



A·01·02区SH20区土坑内出土的陶器



A·01·02区SH20区土坑内出土的陶器



A-11区,SH21床土面土器集中出土状況



A-11区,SH21埋土2敷化物集中出土状況



A-11区,SH22台座土器集中出土状況(南方向)



A-12区,SH22埋土30土器集中出土状況



A-12区,SH22埋土30土器集中出土状況





A10区SH23住居構造様出状況(横方向)



A10区SH24住居構造様出状況(横方向)



B10区SH25住居構造様出状況(横方向)





B-13区埋纳土器残片03局部状况



B-14区埋纳土器残片05局部状况



C-14区埋纳土器残片06下部半截状况



C-14区埋纳土器残片06完整状况



B-9区埋纳土器残片07局部状况



B-13区埋纳土器残片08完整及局部状况



C-11区埋纳土器残片08局部状况



C-11区埋纳土器残片08断面状况



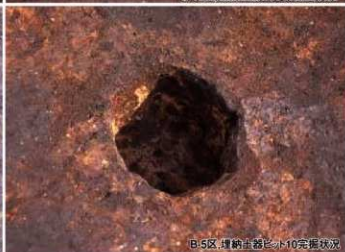
C-15区, 埴輪土器鉢小09埋出状況



C-15区, 埴輪土器鉢小09断面状況



B-5区, 埴輪土器鉢小10検出状況



B-5区, 埴輪土器鉢小10完掘状況



A-11区, 埴輪土器鉢小12平載状況



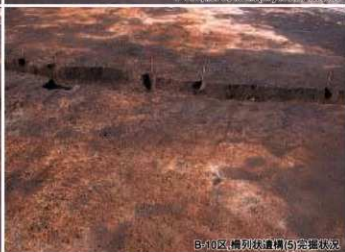
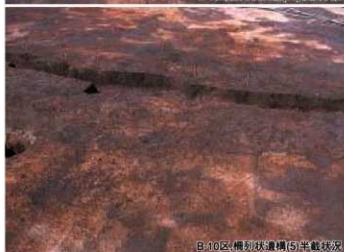
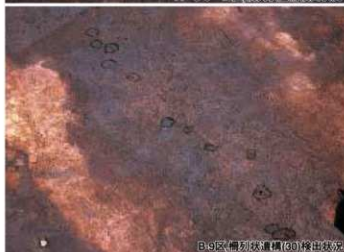
A-11区, 埴輪土器鉢小12完掘状況



C-8区, 埴輪土器鉢小16検出状況

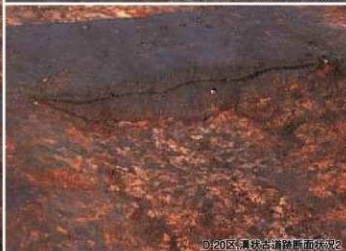


C-8区, 埴輪土器鉢小16断面状況











C·D:21区,不定形残北面1楼出状况(南边)



C·D:21区,不定形残北面断面状况



C·D:21区,不定形残北面1楼掘状况



C·D:21区,不定形残北面1下部楼出状况



D:22区,不定形残北面2楼出状况

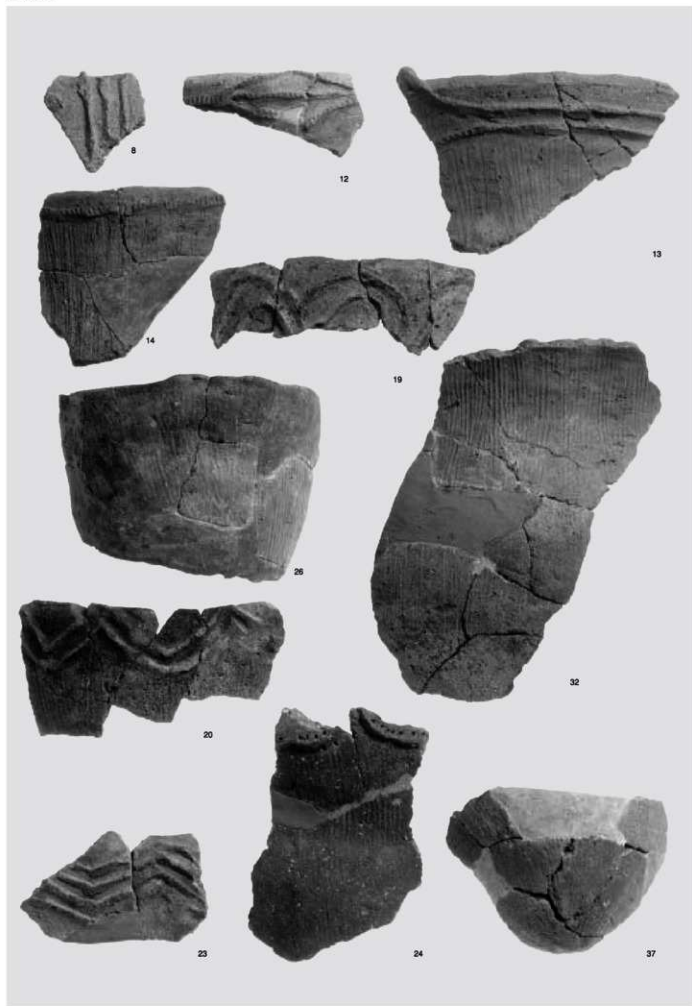


C·D:21,22区,不定形残北面2楼掘状况



D:22区,不定形残北面2下部楼出状况







64



62



69



66



71



106





135



146



151



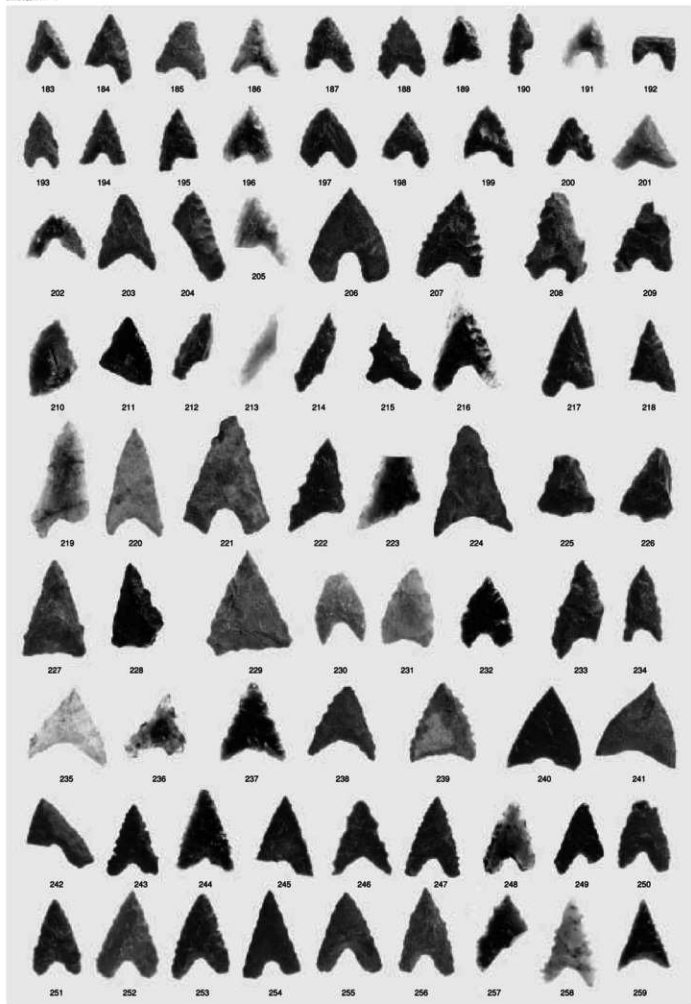
160

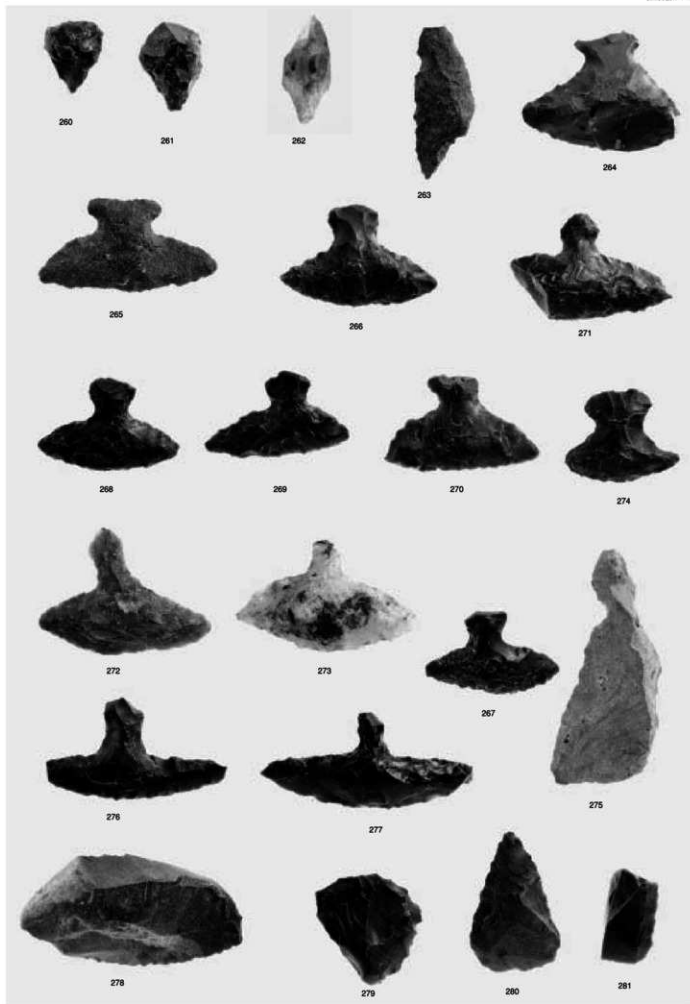


147



153







346
(SH01)



345
(SH01)



348
(SH01)



354
(SH01)



336
(SH01)



356
(SH01)

395
(SH02)386
(SH02)379
(SH02)387
(SH02)383
(SH02)413
(SH02)



416
(SH02)



444
(SH02)



415
(SH02)



433
(SH02)



432
(SH02)



438
(SH02)



489
(SH43)



541
(SH09)



478
(SH43)



563
(SH10)



657
(SH16)



679
(SH18)





693
(SH19)



712
(SH20)



685
(SH19)



773
(埋藏)



703
(SH19)



817





833



835



834



836



838



842



841



844



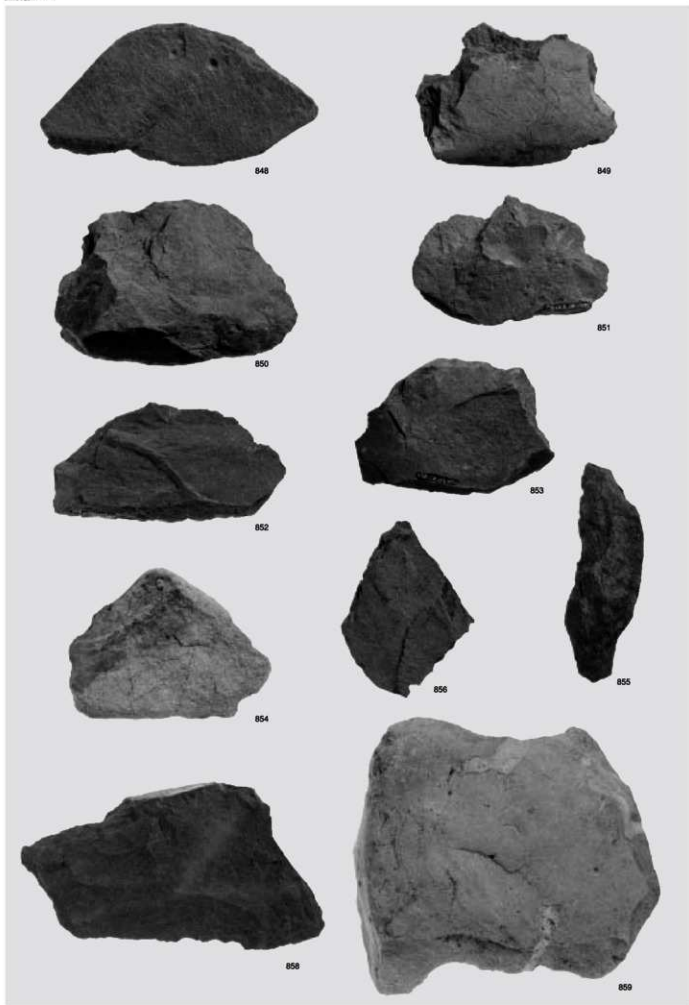
845

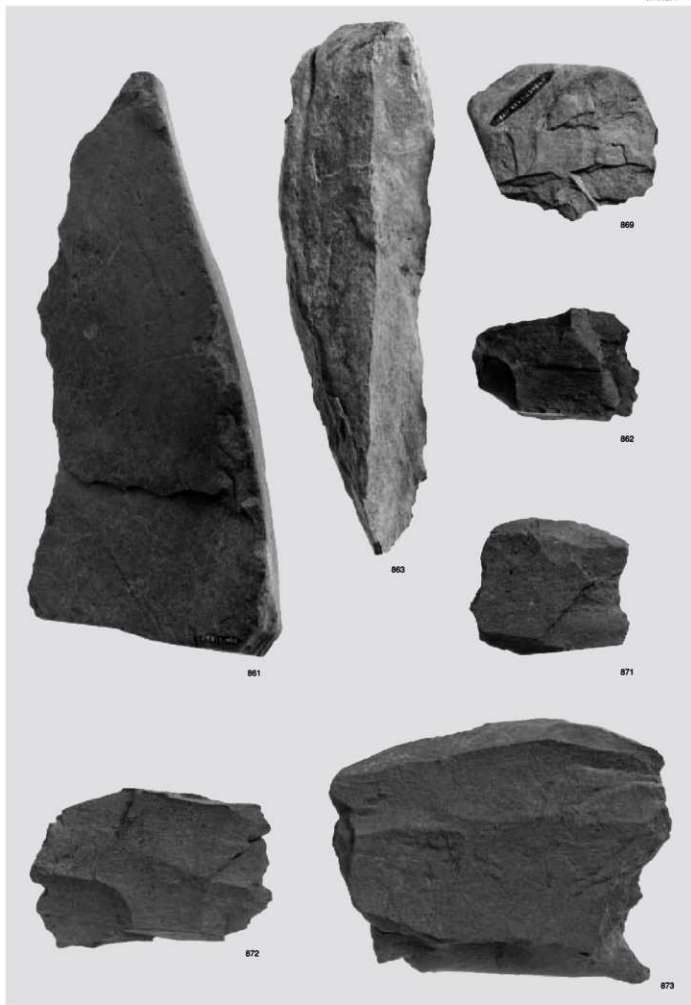


846



847



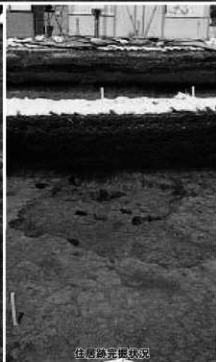




廣查風景



住居跡瓦甎状況



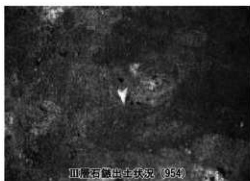
住居跡瓦甎状況



古道跡及砂山層遺物出土状況



古道断面



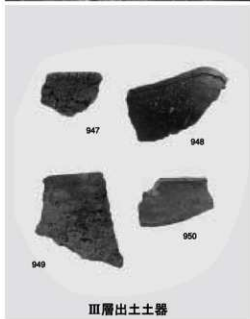
III層石鏃出土狀況 954



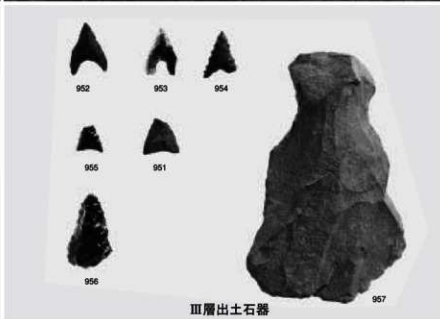
III層石器出土狀況



III層石器出土狀況



III層出土石器



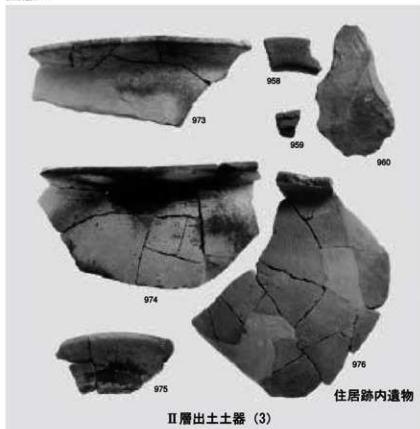
III層出土石器



II層出土石器 (1)

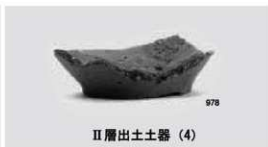


II層出土石器 (2)



II層出土土器 (3)

住居跡内遺物



II層出土土器 (4)



II層出土土器 (5)



II層出土土器 (6)



墨書土器



土師器 (1)



土師器 (2)



須恵器



古代~中世以降の遺物



鹿児島県